

---

# 四季と魔法ノ書

れたす

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

四季と魔法ノ書

### 【Nコード】

N4058J

### 【作者名】

れたす

### 【あらすじ】

高校の図書室で、たまたま面白そうな本を見つけた相模千春。その本を見つけたときから、彼女の人生は240度ほど変わっていく。

女主人公な、ファンタジー最強ものです。

( 某掲示板や某動画などがそのうち話に出てきます。それらに嫌悪感がある方は、ブラウザバックをお願い致します )

## プロローグ

私は、楽しそうなことや、面白そうなものが大好きだ。

新しい何かや変わり種と呼ばれるようなものに、とても興味がある。

新商品や変わった味のお菓子や飲み物が（美味しいかどうかは別として）大好きだし、他にもマイナーな漫画や深夜番組、隠れた名作ゲームを良く好む。

それは私の性質で、性分だ。

……だけど今は、そんな自分に心から「自重」という言葉を送ってやりたい。

お弁当を食べ終わった昼休み。友達と机を囲みながら雑談していた私は、ふと思いついて、あ、と声を上げた。

「どしたの、ちい？」

向かいに座っていた友人の奈津なつが、首を傾げて私に問う。

「ちい」とは私　相模千春さがみ ちはるのあだ名だ。

ただしこう呼ぶのは奈津だけだ。

彼女は少し茶色がかった髪を肩甲骨辺りまで伸ばし、黒縁の眼鏡をかけている、私の親友兼悪友だ。

小学校からの仲である彼女とは、なんと小学1年から高校1年の今まで、ずっとクラスが同じという快挙を成し遂げている。

私は彼女に苦笑を向けながら答える。

「ん、古文のために借りた本、返さなきゃと思って」

「ああ、三谷先生のだよね？ 難しくはなかったけど、面倒だったよね」

そう言ったのは私の右側に座っていた亜紀<sup>あき</sup>。

ベリーショート黒髪が良く似合う彼女とは、中学からの仲。

見た目のボーイッシュさに反して、編み物や料理、手芸が得意というギャップ萌え（？）の塊のような人間だ。

あと、今日は家の用事とかで休んでいる冬香<sup>ふゆか</sup>を含めた四人で、私達は良くつるんでいた。

偶然にも四季が揃ったからなのか、私達はかなり結束が強い。

そのため私達は、大抵四人でグループを作り学校生活を過ごしていた。

「二人は本返したの？」

「そもそも私は借りてない。課題は、ほら、……ネットでちょちょいと、ね？」

そう答えたのは奈津。

それっていいんだろうか、と思わなくもないが、苦手な国語を得意分野であるパソコンで補った……ということなら、いいのかもしれない。

「私は終わってから、すぐに返したから  
亜紀の言葉に、そっか、と肩を竦める。」

「じゃあ一人寂しく返しに行つてきますかねーっ」と

「おー、行つてらっしやい」

「次は現社だから、遅れても大丈夫だよ？」

そう私を送り出す二人に、私は口を尖らせる。やはりどちらも着いてきてくれる気はないらしい。

別に着いてきてほしいわけではないが、「一緒に行こうか？」くらいは聞いてほしいものである。

全く、友達がいない奴らだ……なんて思つてみたり。

「さてと」

鞆から本を取り出し、机の上の携帯を回収してから、教室を後にする。

図書室は昼休みの間と放課後の五時までしか開いていない。少しの時間とはいえ、放課後まで学校に拘束されるなんてごめんなので、昼休みの間に返してしまわなくては。

本を左手で持ちながら、図書室までの廊下を早歩きで進んだ。

場所は変わって図書室。

課題のために借りていた本を返してから、私は滅多に来ることの

ない図書室を昼休みの終わりまで探検することにした。この機会を逃せば、次は半年後とかになりそうだ。

以前は課題のための図書を探すことに集中していたので、どこに何の分野があるか殆ど把握していない。だからこの探索は、何となくわくわくした。

といつても、所詮高校の図書室だ。市立の図書館のように広くはないから、その冒険もすぐ終わってしまうのだが。

と、図書室の一角にラノベコーナーを見つけた私は、これ幸いとその本棚に近付いた。

高校の図書室にラノベがあるのは、何となく不思議な気もしたが、学生が読みたいのは難しい資料よりこういう本だろう、と思い直す。本のリクエスト制度で、誰かがリクエストしたのだろう。

「……おっ、こんなマイナーなラノベが学校の図書室にあるとは」  
目に付いた一冊の古びた文庫本を本棚から抜き出して、剣を持った青年の描かれた表紙を見つめる。

それは、10年ほど前の何とか賞の大賞作品だった。

以前、古本屋でたまたま見つけて購入したそれは、バーチャルリアリティを利用したゲームが死を伴うゲーム。デスゲームになってしまった、という今では有りがちな設定の小説だ。

だけど、その当時では、きっと珍しく斬新な設定だったのだと思う。だからこそその大賞なのだろうから。

「……でも後味がちょっと悪いんだよなあ」

デスゲームに後味のいいものがあるかどうかは知らないが。

私はそんなことを思い返してから、その本を戻そうと視線を本棚に向ける。

瞬間、私はそこに釘付けになった。

「あれ？」

一冊抜けた隙間から、奥に押し込まれた、一冊の真っ白な本を見つけたのだ。

私は首を傾げながら、ラノベを一例ごっそりと抜き取り、その本を取り出す。

「なんだろ、この本。真っ白だ……」

表紙も裏表紙も真っ白なその本は、異様だった。背表紙をよくよく見れば、掠れているがタイトルが書いてある。

指で一文字ずつなぞり、私はそれを読み上げた。

「なになに……魔法ノ、書？」

私はそのタイトルに思わず停止した。

魔法とか……やばい、超面白そうだ。かなり読みたい。何が書いてあるんだろう。すごく気になる。エターナルフォースブリザードとか書いてたらどうしよう。

それとも、魔女についての考察とかだったりして。

にやにやする顔とワクワクする心を抑えて、再びその本を見る。そこではたと気付いた。

「……でもこれ、図書管理のシール貼ってないなあ」  
図書室の本には必ず貼ってある、管理番号の書いたシールがどこにもなかった。

貼り忘れなのか、それとも誰かの忘れ物か。

……でもそれなら、あんな奥には無いだろう、普通。

「どうしよう、図書委員の人に聞いてみようかな……」

そう思った瞬間、無情にも予鈴が鳴ってしまう。放課後にもう一度来て図書委員に聞いてみようかな。でも、もしかしたら誰かの私物で、借りられないかもしれないし。

私はどうしようか考えて、よし、と決める。

こっそり持って行って、次の授業をさぼって読もう。どうせ次は現社だ。それで、放課後に返しに来よう。それならいいよね。誰にも迷惑かけないし。いや、本当は良くないけど、でも今すぐ読みたい。

興味>>越えられない壁>>道德である。

私はきよろきよろと辺りを見回して、誰もいないことを確認してから、制服のブレザーの中に隠す。そしてお腹の辺りを押さえながら、私はそそくさと図書室を去った。



特別教室棟の階段。そもそもあまり使われない家庭科室や理科室の奥にある、さらに滅多に使われることのない階段である。私はそこに陣取って腰掛け、『魔法ノ書』というところでも胡散臭いタイトルの本を開いた。

そこには、ぼつんとこんな一文が書いてあった。

『この本を読んだ者には、魔法の力が与えられる。  
その覚悟があるのなら、このまま読み進めるがいい。』

「へー。……魔法の力、ねえ？ ……もしかしてこれ、小説か何かなのかなあ？ で、これが序文、みたいな」  
私は子供のようになくなくしながら、次のページを開く。  
そこには「この本」についての説明があった。

『この書を所持したものは、魔法を使用することが出来る。  
所有権が誰にもおかれていない状態で、書を用いて魔法を使用したもの所有者となり、その者が死ぬか権利を譲渡するまで所有者は変わらない。また、所有権を捨てることは出来ない。  
所有権が誰かにある場合は、その者以外はこの書で魔法を使うことが出来ず、他の者が見ても白紙に見える。  
所有者が死ぬと、魔法ノ書は異世界に転移する。』

「……ふむふむ、なるほど？ なんか、漫画とかゲームでありがち

だよね」

私は小さく頷きながら、またページをめくる。

次は、「基本属性」についてらしい。

基本属性とは、火・水・地・風の四つで、世界を構成する最も基本的な要素のことらしい。

“火は闘争を司り、治癒を司る水と反目する”など、それぞれの特徴も軽くまとめられてあり、やっぱりゲームによくありそうな設定だなと思いつつ、次々と捲って軽く眺める。

行間が大きく取られているせいか、空白が多く、あまり情報量は多くない。

ところどころ沢山の情報が書いてあると思えば、魔法の効果や制限の説明だったりして、読んでもあまり意味のない項目ばかりだ。

私は、更にぱらぱらと読み進める。

その後には派生属性、特殊属性などについての説明などがあつた。

最後まで軽く眺め終わったが、あまりこの本の概要がつかめない。小説ではないようだし、もしかしたら何かのゲームの攻略本とか、設定資料集なのかもしれない。それだったら、あの白だけの表紙も頷ける。恐らく、作中の重要な書物を象っているのだろう。

図書館にあつたのは、先生に没収されないよう、誰かが隠していたのに違いない。

なら、早く戻しておかなくては、持ち主がかわいそうだ。

「……んー、サボってまで見る内容じゃなかったかな？」  
確かに面白かったけど、どこかで見たようなものばかりだった。

「でも、こんな魔法が使えたら楽しそうだなあ……例えば、これとか」

ぺらぺらと本を捲る。

そして、私が一番使ってみたいと思った、世界を越えるための魔法が書かれたページを探し出した。

「繋がり鏡」という名前のそれは、特殊属性の内の一つ、次元属性魔法の一種で、異世界に行くことができるという。

「んーっと、呪文は……『我求む、更なる魔法を。我願う、更なる力を。我望む、異なる世界を。繋がり鏡よ、我が言霊をもってそれを成せ』！」

私は呪文を唱えるが、やはり発動するわけがない。

真面目に唱えたことが恥ずかしくて、私は照れ笑い交じりに誤魔化すように口を開く。

「……なんちゃって。こんな簡単な呪文なんかで、魔法使えたら苦労し……な、……え？」

室内だというのに手元の本がぺらぺらと風に煽られ、私はハッと顔を上げる。

すぐ目の前に、私の身長と同じくらいの大きさの鏡があった。

「……え？ ……ええええ！？」

授業中ですしと静まる廊下に、私の驚きの声が響く。思ったより

大きい声が出たことにびっくりして肩を揺らし、両手で口を押さえた。

流石に一般教室棟までは聞こえないと思うが、万が一のこともある。静かにしなくては。

私は自分を落ち着かせるように胸に手を当て、一度、深呼吸した。

「……うん、おち、落ち着いた……」

だが、それにしても。

「……ま、魔法、出来ちゃった……？」

私は戦々恐々と手に持った『魔法ノ書』に視線を落とす。  
「どうやら、この魔法の書は、本物……らしい。この現象がCGとかドッキリでない限り。」

「……ど、どうしよう、い、異世界だよ？ 行っちゃおう？」

小さく声を出して自分に問いかける。思った以上に動揺した声に、逆に思考が冷えた。

異世界、異世界だ。異世界ってことは異なる世界だから、地球以外のどこかに繋がっている。

……うん、すっごく楽しそうだ！

「よし、行っちゃおうと！ またこの鏡出せば戻ってこれるだろうし！」

楽天的にも程がある言葉を呟いて、私はその鏡面に触れる。鏡面はまるで水のようにたゆたい、私を誘った。私は呼吸を整え、意を決して、一步を踏み出す。

私は眩い光に包まれ、そして、異世界に。

この時の私は、浮かれていた。

初めての魔法に。初めての異世界に。

そんな「楽しそうなものたち」に、私が惹かれないはずがないから。

……ほんと、そんな自分に心から「自重」という言葉を送ってやりたい。

まあ、自重してたら魔法に出会えなかったかもしれないから、「もうちょっと慎重になれ」くらいでもいいけど。

とりあえず、言いたいことは。

「繋がり」の鏡」について記されたページを、もっとよく読め、ということだ。

「繋がりの鏡」をくぐれば、そこは深い森の中だった。私はどきどきと弾む胸を押さえながら、辺りを見回す。少しの間、周りを警戒したが、どうやら何もいないようだ。

それを確認した私は……

「ちょ、マジで異世界来ちゃったー！ 超やばい何これ楽しーッ！」  
思いつ切り叫ぶことにした。

「すごいすごい！ 私すごい、この本すごい！ いやっほーう！  
ひゃっほーう！」

その場で小躍りしながら、私は興奮を全身で表す。ああ、正月とお盆と誕生日と学校の長期休みと学級閉鎖がいつぺんに来たみたいだ！

私はしばらく一人騒いでいたが、数分ほどでようやく落ち着く。上気した呼吸で一息ついてから、その辺りの木陰に座った。そこでふと、上靴のままだということに気付く。

「……まあ、すぐ帰るしいつか」  
帰ったら雑巾か何かで拭こうっと。

さて。

「……魔法、使ってみよう！」

私は明るい声でにやつきながら、ぺら、と魔法ノ書の表紙を捲る。

『この本を読んだ者には、魔法の力が与えられる。  
その覚悟があるのなら、このまま読み進めるがいい。』

以前見たときには、小説の序文としか思えなかったその一説。今は、何だかその文字が輝いて見える。

「魔法の力が、私に……ああ、もうっ、嬉しすぎる！」  
止まらないにやにやをもう抑える気にもなれず、早速ページをめくり、基本属性について、今度はじっくり熟読することにした。

少し驚いたのだが、最初軽く読んだ時より行間が詰まり、文量が増えていた。

これは恐らく、最初に書いてあった「所有権」の関係だと思う。私が「繋がり」の鏡」を使用したことで所有権を得たのだろう。

『火は闘争を、水は治癒を、土は安定を、風は変化をそれぞれ司る。  
火と水は相反しあい、土と風は相反しあう。』

「まあ、この辺は良くあるよね」

最初読んだときも思ったが、どこかのゲームや漫画に良くありそう  
うだ。

そんなことを思いながら、次の項に進む。

『詠唱によつて発動させる魔法を詠唱魔法という。』

詠唱は、短縮することも出来れば、破棄することも出来る。

また、精霊と契約し発動させる魔法を精霊魔法という。

この世界の火の主精はフエゴ、水の主精はジュビア、風の主精は  
シエロ、土の主精はビーダである。』

「……この世界の？ ってことは、他の世界に行けば、もしかして  
この文章書き換わるのかな？ …… まあ既にこつそりと変化して  
るし、そうなんだろうな」

地球にいたときはどうだったか考えたが、思い出せなかった。も  
しかしたら書いていかなかっただけかもしれないけれど。

基本四属性全ての説明のあとには、火や水など、それぞれの属性  
についての説明が続く。

ちなみに魔法にはそれぞれ難易度があり、私の魔法使いとしての  
実力 つまりはレベルみたいなものだろう。これからはそう読も  
う が上がらないと、呪文を唱えても失敗するらしい。私のレベ  
ルが上がれば使えるようになるようだ。何だかゲームみたい。

私はふんふんと読みながら、魔法を試してみることにした。

「えっと、まずは無難に火からやってみようかな。えっと、これは  
小さな爆発を起こす魔法、か……」



魔法名はフレイムで、有する魔力により最大威力が変わるらしい。これもまた有りがちだとは思うが、自分で使えるとなれば話は別だ。立ち上がり、本を片手にノリノリで台詞を口にする。

「『火よ、その猛き身で敵を滅せよ』！」

一瞬、指を向けた先に小さな光が散った。その次の瞬間、爆音が空気を揺らす。私はあまりの音にその場にひっくり返ってしまう。

感じる熱風に恐る恐る瞼を持ち上げれば、森はもの見事に火事だった。

「ひやああああ！ ちょ、火事っ、やばっ！ とにかく、水、水！

水の魔法うつつー！」

私は急いで起き上がり、本のページを捲る。とにかく水だ、と、水のページにある一番上の魔法を私は唱えた。

「『水よ、その清廉なる身を癒しに変え、傷を癒せ』！」

きらきら、と辺りに水色の光が舞う。だが、火が消える様子はない。

「……ってこれ明らかに回復魔法だ！ 違う、水だけどこれ違う！ 本物の水出す魔法どれ！？」

私は指でなぞり、水を生み出す魔法を探す。その間にも、火は燃え広がり、ぱちぱちと小さくはぜる音が聞こえてきた。

私はそれに更に焦りながら、ようやく目当ての魔法を探し出す。

「『水よ、その清廉なる身を我の前に示せ』！」  
その呪文と共に、私の目の前に浮かび上がったのは、それだけで  
良くある25メートルプールが満杯になりそうな、巨大すぎる水塊  
だった。

「……うっわあ……」

私は思わず呻いた。

だが呆けている暇などない、と我に返り、それを操ってみる。ど  
うやら頭で考えたとおりに動くようなので、それで火を消していっ  
た。

まだ細かい操作は慣れないため辺りを水浸しにしながら、一分ほ  
どで燃え広がった火は全て消し止めた。

だが、約20メートル四方は、ここで焼き畑農業でもやるのかと  
いった有様で。

「あっちゃー……悪いことしちゃったなあ……」  
眉を寄せながらそう呟いた。

「うーん、魔法でどうにかならないかな。探してみよう」

私は水浸しの地に座る気になれず、立ったまま魔法ノ書をめくる。  
基本属性ではどうにもならなそうなので、派生属性の項をめくる。

『派生属性は、停止を司る氷、激動を司る雷、創造を司る光、破壊  
を司る闇の四種類ある。』

火と風を極めることで雷、水と風を極めることで氷、火と土を極

めることで光、水と土を極めることで闇を使用することが出来るようになる。』

「……つまり、レベルを上げてそれぞれの魔法を全て使えるようにならなきゃ、これらの魔法を使えないってことかな？　じゃあ次だね」

次は特殊属性である。繋がり鏡はこの中の次元属性の魔法だったな、とふと思いついた。

『特殊属性は、無・時・次元・星である。』

これらは、それぞれが個別に何かを司るわけではなく、四つ全てで世界を司っている。』

「ふむふむ、なるほど。上位属性みたいなものか。……時魔法とかどうだろう。一時間前にこの森を戻す魔法とか無いかな」

そう思って、時の属性について読んでみる。

過去に行ったり未来に行ったりすることは出来ないが、過去や未来を見たり、無生物に限り別時間から持つてくる事が出来るようだ。

また、蘇生などは時属性に含まれるらしい。水属性では回復が限度だとか。ただ、死んでいなければ大抵は何とかなるようだ。

「とりあえず、この辺りに蘇生魔法をかけてみよう  
焼けてしまった方を向き、私は呪文を唱える。」

「『絶えず流れる時の雫よ、その力をもって』……私が焼いてしまった木々を元に戻して」

前半は呪文なのだが、後半は何がしたいかを自分の言葉で言わなくてはならない。なので、酷く呪文がちぐはぐだ。ちよつと恥ずかしい。

が、恥ずかしいだけの効果はあった。白の光が舞ったかと思うと木々は先程までの姿を取り戻していた。効果はばつぐんだ！ とうやつだろう。違うか。

「ちよつと周囲に焦げてる部分が残ってるけど、このくらいなら……いいよね？」

私は自分を納得させるように呟く。

それにしても、魔法ってすごいな。燃えた森を戻せるなんて。燃やしたのは私だけだ。

「でも、森があのままにならなくてよかったー」

それにしても、あれのどこが「小さな爆発」なんだろう。それは余のメラだ、とかいっておこうかな。

あの威力がデフォなのか、私にそれだけの魔力があるのか、それともこの本の装備性能が凄いのか。たぶん一番最後だろう。

「……あ、そろそろ学校に戻らなきゃいけないかも」

ポケットの中から携帯を取り出せば、時計はもうそろそろ午後の授業が終わりそうな時間だった。午後をさぼってしまったから、友人たちも少しは心配しているだろう。図書室ですごく面白そうな本を見つけてつい、とでも言えば納得してもらえるだろうけど。

「じゃあ、戻らなきゃ。鏡、鏡ーっ」と

次元属性の項を見ながら、二度目になる呪文を唱える。

「我求む、更なる魔法を。我願う、更なる力を。我望む、異なる世界を。繋がり鏡よ、我の言霊をもってそれを成せ！」  
これである鏡が……あれ？

「……出てこない？」

私は目を見開き、もしかしたら呪文を間違ったのかもしれないと、もう一度、一言一句間違えないように唱えてみる。

が、結果は同じ。

「……どうということ？」

私は焦りながら、繋がり鏡の説明をよく読んでみる。

### 『繋がり鏡』

この魔法は異世界への道を作る魔法である。

鏡を通った時点で、翻訳魔法がかかるようになっていく。

(異世界という概念についての説明が続くため中略)

しかし、上巻と下巻が別々の位置にある場合、“魔法ノ書の下巻がある世界”にしか道は繋がらない。』

「え？ ……ええ！？ ……げ、下巻！？」

私は本を閉じ、背表紙に書かれた掠れたタイトルを良く良く見てみる。 ……あ、本当だ、魔法ノ書の文字の下に、「上」って書いてある。そっか、これって二巻組みだったんだ。じゃあ他にも使える魔法はあるんだな ……じゃなくて！

「ちょ、おま、下巻ってなにさ！？ 詐欺！ 詐欺だってこれ！ 帰れないじゃん！」

涙目で、本にあたる。悪いのは、魔法の説明を良く読まずノリノリでこの世界に来た私だとわかっていても、何かに八つ当たりしたかったのだ。

しばらく地団駄を踏んで、ようやくその事態を受け入れた私は、深い深い溜息を吐く。

「この世界で、下巻を探さなきゃ ……それも一刻も早く」  
「じゃないと帰れない。友達からすれば、図書室に本を返しに行つたと思つたら行方不明だ。しかも外靴や鞆は残っているので、サボりで帰つたとも思われなから ……考えられるのは誘拐か？ って、帰ってから何て説明すれば！？」

「 ……それも考えなきゃいけないのか ……どうしよう、ホント」  
肩を落とし、ままならない現実に、また一つ溜息を吐いた。

魔法ノ書の下巻を探すにあたり、私はこの本をしっかりと読むことにした。

最初ぱらぱらと捲った時より、明らかに増えている情報を得るためだ。

先程消火した水で辺りはびしょびしょになっていたため、少し移動してから濡れていない場所に座り込み、本を開く。

ちゃんと本を読んでみれば、どうやら思ったとおり、文量が増えたのは所有権を得たお陰でこの本から取り出せる情報量が増えたせいらしい。

これ以上この本の情報量を増やすには、私自身のレベルを上げればよいようだ。

魔法を成功させるか、魔物などを倒すことでレベルは上昇していくらしい。

それと、この本は望む形に変化させることが出来る。

なので私は、これを輪にして手首に着けることにした。

プレスレットなった魔法ノ書は、光沢のある白色をしている。

「ふむふむ……とりあえずこの本と魔法については、わかった……かな。しっかりと覚えてるわけじゃないけど。うる覚えでもいいじゃない。……それよりも、そろそろ日も暮れるし、泊まること探さなきゃ」

いざとなれば、次元属性魔法で結界を張って、土属性魔法で地下洞窟とか作るけど、出来るなら野宿は避けたい。

それにお腹も減ったから、野生動物なんかさばけないし、野草の種類もわからない私としては、人の居るところに行きたいものだ。

……魔法をあれだけ使えるのに、死因が餓死って嫌すぎるもんなあ。

「とりあえず、地図を作る魔法あったよね。それやってみよう」  
魔法ノ書を元の形に戻してから、無属性魔法についての項目を探して読む。目当てはその内の一つ、導きのしるべという魔法だ。

「えっと……『無から有を、無から世界を、無から全てを創造したように、我に導きを与えたまえ』！」

ひらひらと、上から一枚のA3ほどの大きさの紙が降ってくる。私はそれを手にして、あー、と落胆の声をあげた。

「……地図は地図でも、世界地図かあ……」

それは四つの大陸が書かれた、地図だった。中心に大きな大陸があり、その周囲を囲むように三つの小さな大陸がある。小さな、と言っても中心の大陸の3分の1くらいの大きさはあるだろうか。

……私、どの大陸にいるのかな？

「……あ、そうだよ。そもそも地図だけあっても、ここがどこかわからないから意味無いじゃん。方角もわからないし」

私は一つ溜息を吐いて、魔法の方向性を変えることにする。

出てきた地図は小さく折りたたんで制服のポケットにしまった。



「じゃあ、これだな……」風よ、その自由な身を翼に変え、我を運べ！」

ふわり、と足が地を離れる。これはウイングロードという魔法で、30分の間、自由に空を飛ぶことが出来るようになる魔法だ。

呪文には翼とあるが、別に生えなかった。ちよつと残念。

本をブレスレットに変化させてから、私は空を飛んで森を抜け、鳥が飛ぶような高い位置から辺りを見回してみる。

すると、この森の一方は地平線の彼方まで続いていたが、もう一方ならばすぐに外に抜けることが出来そうだ。ただし上から見た感想であつて、歩けば結構かかるだろう。

また、森から抜けたすぐ近くに、壁に囲まれた大きい街があつた。私はそこを目指して飛ぼうかと一瞬思ったが、高度が高すぎてかなり寒いので高度を落とすことにする。私は木の上すれすれの高さで、その街目掛け、飛んでいった。

「……さて」  
見つけた街から少し離れた場所に降り立った私は、どうしようかと考える。

たぶんこの制服は、この世界では異質に映るだろう。かと言って、着替えはないが。そして金もないが。

……よし。

「私の一族の民族衣装と主張しよう」  
そう言っておけば、それ以上何かを言われることもあるまい。

私は、街に向かって歩く。3分ほどそうすれば、街の入り口が見えてきた。

門には鎧を着た30代くらいの男がいた。その、剣を持った黒髪の男は、恐らく兵士か門番なのだろう。

門の前には、何台かの荷馬車と、商人のような恰好の男と、それを囲むように数人の護衛たちが並んでいる。商人たちは、門番と何かやり取りをした後、からからと馬車と共に中に入っていた。

……うーん、もしかしなくても旅券とか必要になるかな？

わからないが、とりあえず行ってみようと思う。

もし旅券的なものが必要そうなら、“盗賊に襲われて武器や、このプレスレット以外の持ち物を全て盗られてしまい、私は命からがら逃げ出した”ということにしよう。

私はうんと一つ頷き覚悟を決め、門の方へと向かった。

ちょうど私の前に街に入ろうとした冒険者らしき二人組みがいたため、私は彼らの後ろに続く。

しかし彼らは、門番らしき男に止められることも話しかけられることもなく、普通に通過していた。

どうやら荷馬車などの大型荷物でなければ、旅券は必要ないらし

い。

私はホツとして彼らの後に続いたのだが。

「待て」

止められました。ばつちり止められました。

私は動揺をなるべく表に出さないようにしながら、厳つい男の聲に答える。

「はい、なんでしょうか？」

「ギルドカードを出せ」

「ギ、ギルドカード？」

な、何だろう、それ。私はよくわからない固有名詞に首を傾げた。

「……ギルドカードを知らないのか？」

疑惑にまみれたその声に、私はドギマギしながらはい、と頷く。

男は懐から小さな水晶を取り出し私にかざすが、その水晶に変化はない。

そこでようやく納得したのだろう。彼は再び口を開いた。

「……一体、今までどんな生活をしてきたんだ。王都や町、小さな村にだって必ずギルドがあるはずだというのに」

ギルドとは恐らく、ゲームや漫画にあるような寄せられた依頼を

冒険者に紹介する、といった施設だろう。ギルドカードが具体的に何かはわからないが、恐らくギルドで貰える旅券みたいなものだと思う。

そして彼の言葉では、ギルドは小さな村にもある有名な施設のようだ。ギルドカードについて知らない、と言ってしまった以上、先程考えた盗賊うんぬんの言い訳は変更するべきだろう。

私は頭をフル回転させながら、新しい言い訳を考えながら口を開いた。

「……あ、えっと……今までずっと、その森の奥で暮らしてきました。おばあちゃんと一緒に。でも先日、おばあちゃんが死んじゃって、だから……」

……この言い訳はアリですか？

「メルカの森で……そうか。悪いことを聞いたな」

どうやらアリだったようです。

私は一人でほっとしながら、男が続けた話に耳を傾ける。

「ギルドとは、様々な仕事を紹介している施設のことです。ギルドカードは各街や村のギルドで発行される身分証明書、のようなものだ。誰でも2歳になれば貰うようになってる」

どうやらギルドは職業安定所のほかに、市役所みたいな役割も担っているらしい。

登録が2歳なのは、それまでに死ぬ赤子がある程度いるから、だろっか。

街の様子を見るに、それほど文明が発展しているようにも見えないし、その可能性は高い。

魔法はあるのかもしれないが、全員が全員使えるわけでもないだろう。

「そのカードには、犯罪歴なども記載されるため、通行証としても使用される。先程の水晶は、人にかざすことでギルドに登録されている情報を少しだけ引き出すことの出来るマジックアイテムだ。反応しなければ登録されていない、ということになる」

なるほど。それなら犯罪者がどの誰かわからない、なんてことはないし、死体の身元もすぐに判明するだろう。かなりいいシステムだと思う。

プライバシーの問題はあるが、この世界にはそんな言葉すらありそうもない。

「……あれ、でもさっき、私の前にいた人たちは何も出してませんでしたよね?」

「ん? ああ、あいつらか。あいつらは俺の知り合いでな」

「あ、そういうことでしたか」

知り合いなら確かに顔パスでもおかしくない。

「落ち着いてからでいいから、ギルドに行ってみるといい。カード

を発行してもらえらるう」

「あ、今からでも発行してもらえらるんですか？ 私、16ですけど」  
私は疑問に思い、聞いてみる。

身分証明書というか、性質的に戸籍に近そうなので、今から作る  
ことが出来るのか疑問に思ったからだ。

「じゅっ……！？ いや、いや……こほん。お前のように、赤子の頃  
から人里に関わらず過ごしてきたものも、数は少ないがいる。他に  
も……捨て子が犯罪組織に拾われ、暗殺者として育て上げられるこ  
ともある」

何で最初どもったんだらう。東洋人は童顔に見られるって言われ  
るけど、だからか。

それにしても、ちゃんと登録出来そうで良かった。下巻を探すに  
あたって、街に入れないのは凄く困る。

「あの、色々説明してくださってありがとうございました」

「いや、これも私の義務みたいなものだ。それと、今まで人里から  
離れた生活をしていたのなら、お金についてもわからないだらう。  
とりあえず……ほら」

そう言って彼が差し出したのは、銅、銀、金の丸い硬貨三枚だっ  
た。

銅貨は五円玉くらいの大きさ、銀貨はそれより一回り、金貨はも  
う一回りほど大きい。

「……えつと？」

「街ではこれを使って買い物するんだ。左から順に銅貨が1クラン、  
銀貨が100クラン、金貨が1000クランだ。だが、大抵は銅貨

や銀貨などと呼ばれるな。この他に金貨1000枚分の価値を持つ白金貨もあるが……まあ滅多にお目にかかれるものじゃない」

硬貨の種類は、4種類。ただし良く使われるのは3種類だけ、と白金貨は、とんでもない価値の硬貨のようだが、お札ではなく金貨1000枚ともなればかなりかさばるし、必要な硬貨なのだろう。

私はなるほど、と相槌を打って続きを促した。

「物価はそうだな……銅貨1枚で掌サイズの果物が一つ買えるくらいだ。あとは、俺の一日の食事代が、銀貨1枚と少しくらいか。酒を含めれば2枚は行くな」

なら、1クラン＝10円くらいだろうか。つまり白金貨は1000万円……途方も無いな。

眩暈のする金額に、心中で小さく溜息を吐いた。

「……しかも遅い。これから何か依頼を受けるのは難しいだろう。これをやる。今日は宿に泊まり、明日ギルドに行ってみるといい」

そう言っただけで彼が差し出したのは、2枚の金貨だった。

「……え、い、いいんですか!？」

「無期限無利息で貸すだけだ。しばらく稼いで、もし余裕が出来たら、返してくれ」

「は、はい！ありがとうございます！」

つまりそれは、八割は返ってこないことがわかっていて、それでも困っているだろう私に良くしてくれようとしたということだろう。

その融通の利かない言い方がとてもカッコいいです。これが巷で良く聞くクーデレですね。感動しました。やっぱりクーデレではないかもしれませんが。でも惚れました。年の差なんか関係ないです。

「あの、お名前を教えてください。絶対にお金、返しに来ますから！」

「私の名か？ 私はアルバートだ」

「アルバートさん！ 本当にありがとうございます！ このご恩は決して忘れません！」

私は深くお辞儀をして、門から街へと入る。

アルバートさんは一瞬心配そうにちらりと私を見たが、すぐに自分の役目である門の警備に意識を戻したようだった。

ああ、そんなところもかっこいいです、アルバートさん。

私は初めて遭遇したクーデレ（？）に心臓をどきどきさせながら、この街の宿を探す。

「……あ」

そんな私が、肝心の自分が名乗っていないことに気付いたのは、貰った金貨で宿の部屋を借りた後だった。



「んっ……ふわ、あ、あー……」

異世界での初めての朝。

昨日は疲れていたために食事を取ってすぐに寝てしまったので、今日は服を買うところからはじめなくては。ギルドでの登録はその後になる。

「それにしても、ギルドかあ……」

依頼つて魔物退治とかもあるかな。あつたら楽に稼げそうなんだけど。生き物を殺すことに抵抗がないわけではないが、魔法は殺す感触が残らないし、必要であれば出来るだろう。

……あ、そもそもこの世界に魔法ってあるんだろうか。下巻のある世界だから勝手に剣と魔法のファンタジーな世界だと思いついていたけど、私の持つ上巻が地球にあつたくらいだからな。

でもアルバートさんは、マジックアイテムとか言ってたっけ。なら、魔法はあるのかな。

しかし、魔法＝失われた古代の技術だなんて認識されている可能性だつてある。そんな中で、ほんぽんと魔法を使つわけにはいかないだろう。

「ちゃんと確認しなきゃ」

ギルドでやんわりと聞いてみよう。それで、いくつか依頼を受けてお金を稼いで、生活を安定させよう。下巻の情報はそれからだ。

一刻も早く元の世界に戻りたいが、手掛かりすらない今、ただ我武者羅になるのは下策だ。……アルバートさんに早くお金も返した

いし。魔法の練習も、いづらか生活が安定してからだな。

色々と考えていたら、くう、とお腹が鳴る。

「……よし、まずは顔洗って朝ごはんだー」

どこにいても朝の栄養摂取は大事なのです。

空腹を満たした私は、宿を出て街を歩く。ちなみに宿の料金は一泊朝晩食事つきで銀貨4枚だったので、とりあえず二泊することを伝えてある。よって今の手持ちは金貨1枚に銀貨2枚だ。

「さて、服はどこに売ってるかな？」

店や露天が並ぶ活気付いた市場の人ごみの中で、衣料品が売ってそうな場所を探し歩く。その辺りを歩く人たちの髪は、黒や茶の他にも赤や青など様々な色をしており、ここはやはり異世界なのだと少しニヤニヤした。

また、お祭りのような賑わいや、どこからか香ってくる美味しそうな臭いに、私の「面白そうセンサー」が大いに刺激され、さつきからわくわくしっぱなしだ。満腹になるまで朝食も食べたというのに、食欲もなんだか湧いてきた。

だが、とりあえず服だけは買ってしまわないと、どうにもこの恰好は目立つので、市場を回るのは後にする。苦渋の決断だった。好奇心く今にも壊れそうな壁く理性である。いつ不等号が逆転するか。

市場の売り物は食べ物やアクセサリなどが多く、服や雑貨など

は見当たらない。もう少し先の方に衣料品店はあるのか、それともこの通りにはないのか。

そう思いながらしばらく歩いてみる。剣や鎧、薬草や怪しい液体など様々なものが売っているが、やはり衣料品を売っているらしき店は見当たらない。そうこうしている内に、とうとう市場の端まで来てしまった。

そこでふと、懐かしい香りを感じる。これは……ソース？

「こんなところでソース？ ……なんだろう？」

そう思って辺りを見回せば、その匂いの発生源は、何か食べ物を売っている屋台だと気付いた。そこでは、バンドナで髪をまとめた恰幅のいいおばちゃんが、細長いお好み焼きのようなものを売っている。ただし、そのお好み焼きらしき食べ物には、見慣れた黒っぽいソースではなく白いソースがかかっていたが。

「ほづら、美味しいパニシユだよ！ 一つ銅貨25枚！」

「……パニシユ？」

あの細いお好み焼きらしき食べ物はパニシユというらしい。うん、ちょっと食べてみたい。

よし、衣料品店について聞くついでに買ってみよう。

……あくまで買うのはついでだよ？ うん。

「すみません、それ一つ……あ、いや、二つください」

二つにしたのは、少しでもお釣りを減らすためだ。二つ以上は手に持てそうに無い。かといって、釣りはいらねえぜ、なんて格好いいことは今の私には到底言えそうにないし。

「あいよー！」

彼女は満面の笑みを浮かべる。

銀貨を一枚渡せば、おばちゃんがパニシユを二つ包んでくれた。私は受け取ったパニシユを左手に持ち、銅貨50枚のお釣りは何とポケットに突っ込んだ。わかっていたが、ポケットの中がすごくじやらじやらである。銅貨で膨らんだポケットを摩りながら、彼女に問いかける。

「あの、すみません。服ってどこに売ってますか？」

「ん？ 服だつて？ ははは！ 確かにアンタ変てこな恰好しているもんねえ！」

余計なお世話だ。

「この街に何軒か防具屋はあるけど……ここから一番近いのは、この先の十字路を左に曲がってすぐの所かねえ」

なるほど、服は防具屋にあるのか。衣料品店を想像していたから、鎧が置いている店はスルーしていた。でも確かに、ゲームでも「布の服」とか売ってるもんね。

「わかりました、ありがとうございます」

「いいつてことさ、毎度あり！ また来なよ！」

彼女は私に手を振って見送ってくれる。私はぺこ、と頭を下げて教えてもらった道を進む。

ずけずけと言ってくる部分もあったが、彼女はとても輝いていた。笑顔の眩しい、生き生きとした素敵なおばさんだった。この世界の人は、みんなあんな風に生氣に満ちているのだろうか。

ぱく、と手に持ったパニシユを一口。

「あ、美味しい」

パニシユは、やっぱりお好み焼きみたいな味だった。白い色のソースは、普通にソースの味がした。何となく元の世界を思い出せる味で嬉しい。宿で食べたご飯は美味しかったけど、懐かしい味はしなかったから。

「……またあの店に買いに行こうと」

私はそう呟いてから、黙々と手に持ったパニシユを平らげた。もう一個食べる余裕は無いので、帰ってから食べよう。

防具屋に入った私は、ソースの匂いを撒き散らしながら、服を見ていく。先程から店員さんや他の客の視線が痛い気はするが、こればかりはどうしようもない。だが、早々に服を選ぶことは出来る。

とりあえず動きやすそうな薄い青のチュニックとその下に着る白のカットソー、それから桃色のワンピースを選ぶ。どちらも街中を歩く女の子たちの服装を参考にした。

それと、下着だ。ショーツはそれらしきものがあつたが、ブラはなかった。薄手のカットシャツを何着か買った。ブラが無いのはちょっと心もとない。今つけてるのを大事に使おう。

他には、カバンも売っていたので、物を入れるための肩掛けカバンも選ぶ。私が選んだのは、丈夫そうな革のカバンだ。ティルツタという魔物の革らしい。

それらに、合わせて金貨1枚と銅貨50枚を支払い、銀貨2枚をおつりとして受け取った。本当は銀貨8枚と銅貨60枚がお代だつ

たのだが、店員さんにオマケしてもらった。

他にも、上靴のまま歩き回るのもどうかと思ったので靴も買おうかと思っただが、サンダルかブーツしか売っていなかった。試しにどちらも履いてみたが、上靴である今の靴のほうが明らかに歩きやすいため、今回は見送ることにする。

「ありがとうございましたー」

店でチュニツクに着替えた私は、店員の声を背に外に出る。手に持っていたパニシユと、脱いだ制服、それに購入したワンピースは丁寧に畳んでカバンに押し込んであった。

そういえば次元魔法の中に、亜空間を作る魔法があったはずだ。あとでその魔法をかけて、入り口をこのバッグに繋げておこう。それで四次元バッグの誕生だ。

「さて、次はギルドだね」

既に、防具屋の店員にギルドの位置は聞いている。私は教えてもらった場所を目指し、ふらふらと蛇のような歩みで向かった。……つまり、いつの間にか不等号は、好奇心>木っ端微塵に壊された壁>理性になっていたということだ。ま、服も買ったし、少しくらいはいいよね？

ギルドの前に到着したのは、太陽が頭の真上を少し過ぎた頃だった。携帯をカバンの中でこっそりと見れば、2時を回っている。宿を出た時は、9時少し前だったはずなので、結構な時間楽しんでしまったようだ。

ギルドに入った私は、ざっと中を見回す。昼を過ぎているからか、あまり人は多くない。四つのカウンターがあり、それぞれ左からいかつい茶髪のオッサン、ひよろりとした緑髪の眼鏡の人、その次は誰もいなくて、一番右はとても美人な青い髪のお姉さんが受付をしている。私はもちろん、一番右のカウンターを選んだ。

「すみません」

「はい、なんででしょうか？」

「あの、ギルドカードの登録したいんです」

私の言葉に、お姉さんは一瞬絶句し、すぐに取り繕って笑顔を見せてくる。やはりこの年でギルドに登録する人は、かなり稀なのだろう。

私はほんの少し戸惑った様子の彼女に、自分の“設定”を伝える。

「えっと……私、ずっと森の奥でおばあちゃんと二人暮らししていたんです。でも、先日おばあちゃんが死んじゃったので……。だから、街というものに初めて来たんです」

「なるほど、そうでしたか。辛いことをお話させてしまって申し訳ありません」

「いえ、大丈夫です」

彼女の申し訳なさそうな表情に、笑顔で返す。彼女はその笑顔に気を取り直した様子で、顔を引き締めた。

「その様子ですと、門番の方にギルドやギルドカードについて聞いていると思いますが、もう一度説明させていただきます」

「はい、よろしくおねがいします」

私がそう頭を下げると、彼女は小さく微笑んでから説明し始める。

「ギルドには様々な依頼が寄せられます。草刈から魔物退治まで、

その依頼は千差万別です。それに伴い、報酬額も大きく変わります。依頼はランクDからSまでにそれぞれ分けられ、自分の持つランクまでしか依頼は受けられません。また、職業によって受けられる依頼は当然変わってきます」

そりゃそうだろう。屈強な歴戦の戦士に草刈を頼んだり、一般市民に魔物退治を頼んだりするわけがない。

「それと、パーティーを結成　つまりは何人か一緒に依頼を受けることにした場合は、メンバーのランク平均値の依頼までが受けられます。この場合も、メンバーの職業によって依頼が受けられるかどうか決まります」

パーティーか。今の私には関係のない話だな。

「登録者のギルドランクは、依頼をある程度達成することで徐々に上がっていきます」

「ある程度、ですか？　何回って決まっているわけじゃなくて？」

「はい。依頼によって得られるポイントが違いますし、パーティーを作っていたかどうかでもポイントが変わってきます。ですので、何回達成すれば、という決まった数字は無いんです」

確かに草刈と魔物退治では危険度が違うし、その扱いも変わってくる。個人かパーティーかでも、当然違うだろう。でも、貰えるポイントが違うだけならば、地道にいけば草刈だけでギルドランクSとかなる人もいるのかもしれない。いたら面白いな。

「また、ギルドは朝の9時から夜の9時まで開いています」

そう言っただけで彼女は壁にかけられている時計を視線で示す。その視線を辿って壁時計を見れば、地球で良く見慣れたアナログ時計だった。短針は2の辺りを指し示している。どういうわけか、時間の流れは地球と同じようである。



「次はギルドカードについて説明いたします……」

ギルドカードについては、アルバートさんが教えてくれた以上に目新しい情報はなかった。強いて言うなら、カードの再発行には金貨1枚がかかりますのでくれぐれも失くさないように、くらいか。アルバートさん、流石です。その完璧な仕事に痺れます憧れます。

「では、ギルドに登録しますので、お名前を教えてください」

「チハルです。えっと、チハル〓サガミです」

「チハル〓サガミさん、ですね。職業はなんでしょうか？」

「職業……」

職業を言え、と言われても首を捻ってしまふ。あっちの世界なら学生と即答するが、この世界でそれはないだろうし……魔法使いでいいのだろうか？ でも、この世界に魔法があるかわからない。

私が困り果てていると、彼女がはっと気付いたように、補足してくれる。森の奥で過ごしていたという世間知らず設定は、思った以上に効力を発揮していた。

「そうですね……もし剣に自信があれば剣士、もし魔法が使えるのなら魔法使い、もし細工が得意なら細工師、大工になりたいのであれば大工……特に思いつかなければ無しで大丈夫です。職業の変更はいつでも出来ますので」

「どうやら魔法は一般的らしい。私は彼女の台詞に安心して、彼女に伝えた。」

「あ、そうですね。じゃあ魔法使いをお願いします」

「魔法使いですね。属性は何でしょうか？」

属性なんて聞かれるのか。もしかしたらこの世界では、いくつもの属性をばんばんと使えるわけではないのかもしれない。そうではないのかもしれないが、今のところ過小評価される分には困らないし、

属性一つだけを言っておこう。

「えっと、水です」

水にしたのは回復魔法が使えるからだ。そんなことあるかどうかはわからないが、実力が出せない場面で治療の手段があるのは心強い。水属性魔法は攻撃力が低めだが、皆無なわけではない。何とかなるだろう。

……というか巨大な水塊を呼んで敵にぶつければ終わりそうだが。

「簡単な魔法でいいので、この場で使ってみて頂けますか？」

「あ、はい……『水よ、その清廉なる身を癒しに変え、傷を癒せ』」  
水属性の一種、回復魔法のヒールを唱える。きらきらと水色の光が舞い、私とお姉さんにそれぞれ吸い込まれていった。彼女はそれを確認すると、小さく頷く。

「はい、結構です。……では、この水晶に手を当ててください」

「はい」

示された水晶に手を当てれば、その水晶の中にぼんやりとした鈍い光が現れる。その光は私が置いた手の方へと近付き、そして吸い込まれるように消えていく。少し驚いたが、お姉さんが何も言わないので、たぶん害はないのだろう。

それから少しして、私の手の辺りから水晶にその光が戻っていく。

「はい、これで登録は終わりです。手を離しても大丈夫ですよ」

「あ、はい」

良く判らないが、これで大丈夫らしい。

そして、水晶の中のぼんやりとした鈍い光は、やがてゆらゆらとした少し明るめの光に変化する。それは水晶の中から外に出て、や

がて長方形の形を取った。

「……おー」

長方形のそれは、私に近付き、そして手に納まるほどの大きさの一枚のカードへと変化する。

私はそれを手に取ってみた。しかし白紙だった。思わず首を傾げてしまう。

「オープン、と言ってみてください」

「え？ お、オープン！」

お姉さんに続いて言ってみれば、ぼう、とカードに文字が浮き上がる。私は思わず、おお、と感嘆の声を上げた。

「クローズと言つか、本人の手を離れて少しすると、文字は自動的に消えます」

「……なるほど」

他の人が勝手に見れないようになっていたのか。凄いな。

さて、じゃあ早速カードを見てみよう。まずは表。

『チハルⅡサガミ ランクD

魔法使い 水属性

出身 シルヴァニアの街』

シルヴァニアというのは、この街の名前だ。

出身は別にこの街ではないんだけど……恐らく、初めての登録がここ、という意味で捉えていいはずだ。

よし、次は裏だ。

『備考 なし』

こっちは特に特記することもないな。

そういえば、犯罪歴うんぬんって言ってたけど、それは備考欄に書かれるのだろうか。

とても気になるが、私は書かれたくないし、書かれた人にもあまり会いたくない。

私がカードに目を向けていると、お姉さんが口を開く。

「これでギルドへの登録は終わりです。何か質問はありますか？」

「な……あ、いや、そうだ。依頼って一度にいくつまで受けられま  
すか？」

「無制限です。ただし、依頼を引き受けすぎて、それらを達成でき  
なくなれば、それなりのペナルティがありますのでお気をつけ下さ  
い。他には？」

「えっと……うん、ないです。あの、早速依頼を受けたいんですけ  
ど、魔物退治系のもはありますか？」

「Dランクの討伐依頼ですね、少しお待ちください」

そう言って、カウンター下をごそごそと探るお姉さん。

「まずはこれを」

そう言って差し出したのは、手に納まるサイズの一冊の本だ。結  
構厚めのそれは、まるで元の世界にあった旅行用のポケットガイド  
ブックみたいだ。中をぱらぱらとめくれば、様々な魔物の絵が描い  
てあった。

「その本は、魔物退治を受ける方に、金貨1枚でお配りしているものです。それぞれの魔物の特徴、討伐証拠部位や換金可能部位などは、全てこの本にまとめてあります。必ずしも購入する必要はありませんが、どうなさりますか？」

あ、無料じゃないんですね。

まあそう都合のいい話はありませんよね。

「えっと、あの、金貨1枚も手持ちに無いんですけど……」

「それでしたら、依頼を終えた後にでもお支払いいただければ、結構です。記録しておきますので」

「あ、そうですね。じゃあ、いただきます」

「はい、ありがとうございます」

金貨1枚くらいなら、すぐに稼げそうだし、一冊購入することにした。持っていた本は、そのままカバンにしまう。

「では、次はこれをどうぞ」

差し出された紙を右手で受け取り、それに目を通す。そこには幾つかの依頼が書いてあった。しかし、Dランクであるからか、その数は少ない。

「じゃあ、これとこれ、あと……これを引き受けます」

私はその中の、「期限：無制限」となっている依頼を三つ引き受けた。これなら時間経過で依頼を失敗することもないし、ちょうどいい。

「はい、登録が終わりました。では、頑張ってくださいね」

依頼書に書かれている地名について聞いてから、私はその紙を折ってカバンにしまった。

「はい！」

私はぺここと頭を下げ、ギルドをあとにする。  
よし、初依頼だ。頑張るぞー！

『魔物討伐』

対象：ウルフ

リスナ街道の近くにいるウルフを12体以上倒すこと。

討伐の証拠部位は尻尾。一体につき一本ずつ回収すること。

期限：無期限

報酬：銀貨4枚（討伐数により変化、3体で銀貨1枚）

魔物討伐

対象：ゴブリン

リスナ街道の近くにいるゴブリンを20体以上倒すこと。

討伐の証拠部位は左右の長い牙。一体につき二本ずつを回収すること。

期限：無制限

報酬：銀貨4枚（討伐数により変化、5体で銀貨1枚）

素材回収

対象：エスカルーナ

メルカの森にいるエスカルーナの殻を5個以上回収すること。

殻は原型を残したものを以外は受理しない。傷は可。勿論、ないほうが好ましい。

期限：無期限

報酬：銀貨10枚（回収数により変化、1個で銀貨2枚）』

今回受けた、魔物の討伐依頼はこの三つだ。魔物は繁殖力が強く、

放っておくとすぐに増えてしまったため、ギルドから定期的に討伐依頼を出しているらしい。

また、素材回収依頼は厳密に言うところではないが、殻を回収するためには魔物を倒さなくてはいけないため、結局は同じことだろう。

ありがちな名前のウルフやゴブリンは、それぞれ50センチほどの狼型の魔物と、40センチほどの二足歩行の小獣人型の魔物だ。

また、エスカルーナとは30センチほどのカタツムリ型の魔物。色は青らしく、実際に見たわけではないが、描かれてある絵の時点でちょっと気持ち悪い。

リスナ街道はシルヴァニアと王都ディルティアを結ぶ街道のことで、メルカの森は私が繋がり鏡でやってきた森のことだ。

一度宿の部屋に戻ってきた私は、ベッドに腰掛けながら依頼書を見て思案する。

「うーん、どっちに行こうかなー」

魔法で魔物を倒す練習もしたので、最初は街道より森に行つた方が、目立たなくていい気がする。が、初めての魔物が巨大カタツムリなのは、正直気持ち悪そうで抵抗を覚える。まだウルフとゴブリンの方がましだ。

しばらく考えて、結局先に森に行くことにした。森に行くには、昨日アルバートさんがいた門を通るからだ。

そう決めた私は、依頼書を折って、一度備え付けのテーブルの上に置く。



「よし。あとは、行く前に四次元バッグを作ってた」と

魔法ノ書を元の姿に戻し、次元魔法の項目をめくる。

私がおおうと思っっているのは、空なる世界、という魔法。カバンの中身を外に出してから、私はそれを唱えた。

「『世界より隔絶された歪みよ、我が力を持つて顕現せよ』！」

これは、どこにでもあるようなちよつとした力場の歪みを魔力で故意に広め、亜空間を作るための魔法だ。亜空間はこの世界にも属さず、ただ何もない場所が広がっている小さな世界のこと。今回は肩掛けカバンの中に亜空間を構築した形になる。

また、亜空間には、物を入れるのはもちろん、人が入ることも出来るため、今度からレベル上げも兼ねた魔法の練習はこの中でやろうと思う。火事はもうごめんだ。

「よし、これで大丈夫。荷物を放り込んで……っ」と

と言っても服が二着と携帯、それにギルドで手渡された物くらいだ。市場で買ったパニシユは、存在を忘れて中で腐敗させそうなので、部屋に置いておくことにした。

ここ、シルヴァニアの街には北西と南東にそれぞれ門がある。ただし方角は、太陽が昇ってくる方向を東として、勝手に私がそう呼んでいるだけである。もしかしたら太陽は西から昇っているかもしれないし、そもそも方角という概念がないかもしれない。あつたとしても、それが東西南北とは限らない。

「この世界の常識なんて、私にはちつともわからないのだ。今でさえ仮定に仮定を重ねて綱渡りをしているのだから。」

まあ、それはいいとして。

「アルバートさん！」

南東門の付近にアルバートさんの姿を見つけた私は、手を振って彼に近寄る。

「ん？ お、昨日のか。ギルド登録はしてきたのか？」

「はい！」

肩掛けカバンに手を突っ込み、ギルドカードを取り出す。ちなみに、亜空間から物を取り出すには、取り出したいものを考えるだけでいい。どこその四次元ポケットより遥かに高性能だ。

「えっと……オープンッ！ ほら、見てください、ちゃんと登録してきました！」

「ふむ、チハルというのか。いい名前だな」

「……あ！ そういえば、名前教えてませんでしたよね、すみません」

ぺこ、と頭を下げれば、彼はいや、と手でそれを制した。

「……良かったな、チハル」

ぼん、と彼が頭に手を乗せてくる。私は破顔して、はい、と頷いた。

「……隊長、ナンパですか……？」

そんな声に振り向くと、そこには短い赤髪の人がいた。中世的な顔つきと声をしているので男にも女にも見えるが、たぶん女だろう。彼もアルバートさんと同じように鎧を着ている。

「ナンパとは何だ、ナンパとは。……チハル、すまないが、まだ仕事なのでこれで失礼する」

「あ、いえ。お仕事を邪魔してしまつてすみません。私も今から魔物退治に行つてきます！」

「そうか、気をつけるんだぞ」

「はい！」

彼にぶんぶんと手を振つて、私は門から外に出る。よし、まずはエスカルーナの殻集めだ。

「『水よ、その清廉なる身で敵を貫け』！」

その呪文と共に、長い針のような形状の水がいくつも現れ、離れた位置にいる大きな青いカタツムリ……いや、エスカルーナの、殻に守られていない部分が串刺しにされる。エスカルーナは青い血を垂れ流し、痛みから逃れようとうごうご身体を動かすが、やがて息絶えたのか動かなくなつた。

「よし、これで5個目つと」

エスカルーナの死骸に近付き、15センチほどの大きさの殻を引っ張る。めり、という音と共にそれは外れた。その殻を、水で洗つてからカバンに放り込み、ふうと一息つく。ちなみに水は、魔法で出したものだ。

頭の中で「少なめにー！」と念じながら水を出してみたら少量の水が出たので、魔法の制御つてこうするのか、と勝手に思っている。

「はあ……倒すのより、探す方が大変だよ……」

小さくぼやく。

ウルフやゴブリンと違い、エスカルーナは群れで生活しないため、  
一体探すのにも時間がかかるのだ。

最初に見つけたエスカルーナには、暗記していた数少ない呪文  
コールウォーターで水を出してみたのだが、大量の水で押しつぶ  
したせいで、殻をぐちゃぐちゃにってしまった。だが、その失敗の  
おかげで、魔物を初めて倒したことに嫌悪感は感じなかった。

というより、水でぐちゃぐちゃに潰れたエスカルーナだった青い  
物体にドン引きし、それどころじゃなかった、と言うべきか。魔物  
の気持ち悪さが、逆に良い作用をもたらしたらしい。

二匹目は、水属性の攻撃魔法を、と思い、魔法ノ書を見ながらウ  
ォーターカッターという魔法を使ってみた。手元から高圧の水を噴  
出し、敵を両断する魔法だ。そうしたら威力が強すぎたのか、すっ  
ぱりと殻ごと切ってしまった。

三匹目は、威力を弱めて、と同じ魔法を使ってみたのだが、そう  
すると、殻は両断はされなかったものの、砕けてしまった。

四匹目から少し考え、今のように水の針 ウォーターニードル  
で倒すことを思いついたので事なきを得たが、三匹も無駄にしてし  
まった。

そのせいで、五個集め終えた今、既に辺りは薄暗くなっている。

「……………うーん、明日からどうしようかな」

1体探すのに時間はかかるが、殻1個で銀貨2枚は旨い。群れで  
暮らすウルフやゴブリンを探すのは楽だし、簡単に倒せるだろうが、  
多数を相手取るのは今の私では少しきつい。

魔物に対する自動防御の魔法はある　　というか今現在も一応かけている　　が、連続した攻撃をずっと防御できるほど強力ではない。そのため、囲まれたら正直面倒なことになる。魔法ノ書に頼りきりという現状では、暗記している魔法で対処し切れなくなった場合、死に直結しかねないのだから。まあ囲まれる前に叩くが。

時間がかかるが安全な今の方法で稼ぐか、時間はかからないが少しの危険を伴うウルフやゴブリン退治に行くか。

どうしようかと、その場でしばし考える。

……うーん。

やっぱり、安全な方がいいだろう。まだ異世界生活2日目なのだし。

「ま、どっちにしろ、今日はもうそろそろ終わりにしなきゃいけないけどね」

これ以上のエスカルーナ探しは明日にして、日が完全に暮れる前に帰ろう。

そう決めて、街への一步を踏み出した瞬間。

「……か、……けてっ……！」  
「……え？」

子供の声が聞こえた。

私は瞠目して、声の聞こえた方を見る。そこで私が見たのは、10匹以上のエスカルーナに追いかけられ、息も絶え絶えに必死な形相で逃げている7、8歳くらいの淡い色の金髪をした少年だった。

エスカルーナは群れで過ごさないし、積極的に人を襲わない。移動速度も、遅めだ。だから、本来ならばあまり脅威ではない。だが実は、凄く力の強い魔物らしい、と本には書いてあった。

だから、あれだけの数に追いかけられたら、私でも逃げる。というかどこからあんなに引き連れてきたんだろう、あの子。逆に感心する。

いや、そんなこと考えている場合ではなかった。エスカルーナの足は遅いが、それは大人と比べた場合。既に息の切れている子供の足では逃げ切れないだろう。

私はすぐに駆け出し、呪文を紡いだ。

「『貫け』！」

私が使ったのは、短縮詠唱したウォーターニードル。短縮詠唱魔法は、一言で魔法が発動させることが出来るが、魔力を通常より多く使う上、難易度が上がる。それに加え、威力も下がってしまうという、緊急時の魔法だ。

だが、この魔法の目的は、あの少年がこちらに来るまでの時間稼

ぎだ。短縮詠唱魔法では、先程のように串刺しにして敵を倒すことは出来ないが、牽制には十分。

「早くこつちに！」

「えっ！？ は、はいっ！」

少年は必死な形相を僅かに安堵に染め、こちらへやってくる。その間も、私は魔法でエスカルーナたちを牽制した。

「手を貸して！」

「え、ええ！？」

「いいから！」

差し出された手を握って、私はまた、魔法を短縮詠唱する。

「『運べ』！」

それは、以前使用した空を飛ぶための魔法。この魔法の及ぶ範囲は、私自身と私が手で触れているものまでだ。なので、重いものの運搬にも応用が出来たりする。亜空間に放り込んでしまえば重さなんて関係ないが。

私と少年は、エスカルーナの届かないところまで浮き上がる。

「わっ！」

「暴れないで！」

少年はいきなり浮き上がったことに驚き、身じろぐ。私は即座に彼の腰辺りに腕を回し、その動きを抑え込んだ。

「あいつら倒したら下ろすから、じっとしててね」

「は、はい」

彼が落ち着いたことを確認し、私はウォーターニードルを詠唱する。こんな状況だというのに強い魔法を使わないのは、ちゃっかり

後で殻を回収しようと思っているからだ。

「『水よ、その清廉なる身で敵を貫け』!」

私が出せる最大数をイメージし具現化、それをエスカルーナへと飛ばす。魔物たちはことごとく串刺しになり、先程のように次々と息絶えていった。

……よし、これで金貨2枚はゲット。

周りに他の魔物がいないことを確認してから、私は少年と共に地に下りた。

「大丈夫?」

「あつ、ありがとございました!」

彼は慌てて私から離れ、ぺこりと頭を下げてる。私はどういたしまして、と彼の感謝の言葉を受け取った。

「ところで、何であんなことになったの? こんなところで武器も持たずにいるのも変だし、そもそもエスカルーナって群れを作らないはずなのに」

「あ、えっ……その、あの……」

街の子供が冒険しに来て魔物に遭遇、それから逃げ惑っていたらいつの間にか、みたいな答えを期待していたのだが、それにしても彼の反応がおかしい。私は眉を潜め、彼に問いかけた。

「……もしかして、言いたくないことだったり?」

「えっと……いえ、大丈夫です。命の恩人の貴方には、聞いてほしいです」

「そう? なら聞くよ」

「はい。少し長くなりますが、いいですか?」



「うん」

あ、そういえば、さっきは緊急事態だったから、普通に二つの属性を使ってしまった。少年に事情を聞くついでに、口止めもしておこうよ。

ちやつかりとエスカルーナの殻を集めてから、少年と二人で地面に座る。殻はそのまま、まとめて地面に置いてあった。カバンにしまうのは、彼から情報を収集してからにする。

カバンのことをマジックアイテムだと誤魔化せるようであればそのまま持って帰るし、場合によっては明日取りに来ることも考えよう。

「えっと……どこから説明したらいいんでしょう？」

「ねえ、その前にお名前教えてよ？ 私はチハルって言っただ」

「あ、はい。僕はクオと言います」

クオくんは礼儀正しく、ペこりと頭を下げてる。そんな彼に私も何だか畏まってしまって、同じように頭を下げた。

「……じゃあまずは、何で僕がこの森にいたか、からですね」

クオくんが見た目の年齢よりも大人びた口調で、事情を説明しはじめた。

しかしそれは、私にとって驚愕の事実だった。

「僕は、この森の奥で、おじいちゃんと一緒に暮らしていたんです。でも、先日おじいちゃんは亡くなりました」

「……そ、そっか。お悔やみ申し上げます……」

……何かどこかで聞いたような話キター。

私はそんな運命の悪戯に、思わず心中で苦笑してしまう。

しかし彼は、そんな私に気付いた様子もなく、神妙な雰囲気です。私も、頭の中を燻る雑念を追い払って、真剣に耳を傾けた。

「……おじいちゃんは、魔法使いでした。しかも、光属性の魔法を使うことが出来る、数少ない魔法使いの内の一人です」

少ないのか、光属性。派生属性は私もまだ使えない、というか試したことすらないが。

基本属性の魔法を、一度全部試してから、と思っていたから。

「そんなおじいちゃんが、何故僕と一緒に森の奥に住んでいたかという……その、僕の体質のせいなんです」

「クオくん、体質？」

「はい。……その、僕は……魔物を引き寄せてしまう体質、みたいで」

「魔物を？ ……ああ、なるほど」

だから先程、あの数のエスカルーナを引き連れていたのか。納得した。

「だから僕は、光属性である結界魔法を使えるおじいちゃんと一緒に、森の奥で過ごしていたんです。街に居たら、魔法が切れた時に危ないですから」

あれ？ 魔物を寄せないための結界魔法って光属性なのか。

魔法ノ書では、次元属性の項にあったはずだけど。

「へー、そうだったんだ……」

「あの……、えっと、それだけですか……?」

「え? じゃ、じゃあ……大変だったね……ってこんな軽く言っているかどうか、わからないけど……」

「そ、そうじゃなくなつて……!」

「え!?! えっ!?! ほ、他に何を言ったらいいの!?!」

それ以上にどんな感想を持つべきなんだろうか。私が首を傾げていると、彼がいきなりその青い瞳からぼろぼろと涙を零し始めた。私はその涙に、物凄く狼狽する。

「えええ!?! ちょっとクオくん、いきなりどうしたの!?!」

「……村のみんなはこんな体質の僕を、悪魔と呼びました。みんなの怖い顔と、石を投げられたことしか覚えていません。……そんなある日、両親は僕を村から連れ出して、おじいちゃんに預けました。僕は、捨てられたも同然で……いえ、間違いなく捨てられたんですよね」

彼は涙ながらに、吐き出すように言った。

……そうか。私は、魔物のいない世界から来たから、魔物の脅威がいまいちピンとこない。なんといつても出会った魔物は、まだ力タツムリだけだし、しかも簡単に倒せる。

でも本当なら、魔物は恐れられるべきで、そんな魔物を引き寄せる子供なんて捨てられてもおかしくないのだろう。それこそ、本人が「捨てられた」と思うくらいには。

でも私は、違うと思う。捨てられてなんか、いないと思う。

本当に邪魔で、両親が彼を捨てたというのなら、彼が言うように

おじいさんなんかには預けられず、野に捨てられただろう。魔物を引き寄せる体質なら、身を守る手段のない彼は、すぐに死んでしまっただろうから。

そうしなかったのは、クオくんに生きてほしかったから。その場所　おじいさんのいる場所のなら、生きられると両親が思ったからだ。

私は、そう思う。

……それは私の勝手な妄想で、もしかしたら本当に厄介払いのもりだったかもしれないけど、私はそう思いたい。

彼は、哀しそうに眉を歪めて、続ける。

「おじいちゃんと過ごした日々は本当に楽しかったけど……おじいちゃんでも、結界魔法は1日しかもたないから、毎日毎日おじいちゃんは僕に魔法をかけてくれて……大変だったろうって思います。僕のせいで、おじいちゃんは、こんな森で過ごすしかなくて……僕は、不幸しか呼ばないんです」

クオくんは、そう言って俯く。その姿は弱々しくて、見ていてこっちが苦しくなるほど。

……それにしても、私から事情を聞いておいてなんだが、へビーだ。

というか、魔物に追いかけていたっていう話から、ここまでへビーな話になるとは思わなかった。

……でも、聞いちゃったもんなあ。ここまで聞いて、彼を放って

おけるわけがない。

私はいつか、この世界を去る。それでも、今の彼を一人にしてはおけない。一人にしておいては、いけないと思う。いや、違うな。彼を一人にするのは……私が嫌なんだ。

私はいつか、この世界から居なくなってしまうけど。その時は、魔物の居ない別世界に連れて行けばいい。地球は、戸籍の問題があるから、ちよつと難しいだろうけれど。

「ねえ、クオくん」

「……はい」

「クオくんが良ければ、一緒に来る？」

「えっ？」

彼は、ぱつと顔を上げる。ぼかんとした表情に、私は微笑んで彼の頭を撫でる。もう一方の手で、頬に残る涙の跡を拭いた。

「い、いいんですか？ でも僕は、魔物を……」

「……えっと、私の事情も話せば長いんだけどね、まあ魔法使いなんだ。で、たぶん結界魔法も使えるからさ」

「ええ、でも、さつきは水と風の魔法を使ってみましたよね……？」

それで光もつてことは……え、チハルさん、3色魔法使いなんですか!？」

「いや、結界であつて、光つていうわけじゃ……って、何それ？」

さ、3色魔法使い？

なんか新しい用語が出てきたぞ。

「あー……私この国に来たばかりだから、そういう固有名詞がわからないんだよね。もしかして、使える属性の数が3つってこと？」  
「あ、はい、そういうことです」

「……えっと、光は使えないから私は2色なんだけど、3色って珍しいの？」

「珍しい、ですね。2色でもあまりいませんから」

ふむ、なるほど。でも、3色で驚かれるってことは、今の時点で6色魔法使いで、でも本当は12色だ、とか言ったら頭おかしいと思われるか、距離を置かれるな、確実に。よかった、ギルドでは水属性ってことにしておいて。

……あれ？ でも確か光って、火と土をマスターした上じゃないと使えないんじゃないかな？ クオクンの口振りだと、火と土は関係ないようだけど。

さっきも、結界魔法が光って聞いて、おかしいなとは思ってたが……  
……どういうことだろう？

もしかしたら魔法ノ書って、この本独自の法則を持っているのだろうか。それだったら、この世界の常識と色々違うのも頷ける。結界魔法の属性が変わってくるのもわかる。

よし、こうなったら、この世界の魔法について良く知ってそうなクオクんに色々聞いてみようっと。

「ねえねえ、私、魔法について全然知らないんだ。だからクオくん、色々聞かせてよ」

「に、2色なのに……あ、いえ、えっと、わかりました。でも、僕

も基本的なことしかわかりませんよ？ …… 光属性じゃない結界魔法のことも、初めて知りましたし」

「あ、いや、私の魔法は、色々変わってるから気にしなくていいよ」「か、変わってる？ …… あ、いや、えっと…… わかりました。じやあまらずは、何から知りたいですか？」

「うーん、そうだなー ……」

こうして、クオくんによる魔法基礎講座が始まったのだった。

まず、この世界における魔法の属性は「火・水・風・土・光・闇」の六つ。

しかし、光と闇は殆ど使い手がおらず、大抵の魔法使いは火・水・風・土の内のどれか一つの属性しか使えない。光や闇が使える魔法使いは、大抵国に抱えられ、クオ君のおじいさんも、若い頃は王直属の魔法使いだったらしい。

1色は基準、2色は貴重、3色は稀少、4色は規格外と言われている。それ以上は、御伽噺の中の存在だそうだ。

ちなみに、1色は基準とか普通とか言われているが、それは魔法使いの中での普通である。魔法をえるようになるのは、全人口の1割もいないらしいので、1色でも使えた時点でエリート様なのだ。

また、私の使っていた空を飛ぶ魔法は、人一倍魔法に詳しいおじいさんから、聞いたことがないとのこと。一応、呪文と効果から風属性だということはわかったが、それだけ。むしろ、あの魔法はどこで、なんて聞かれて私が焦ったくらいだ。私の故郷の秘匿魔法



だから、とかなんとか言って適当に誤魔化したが。

いずれ全部終わったときには、異世界から来たということや、魔法ノ書のことも含めて、ちゃんと説明しようと思う。

それと、ウォーターニードルは同じような魔法があるらしい。この世界では、呪文は人によって違うらしいので、こちらは特には聞かれなかった。

あと、マジックアイテムというのは、文字通り魔法の力が込められているアイテムのこと。

ギルドに登録した時に使用したあの水晶もマジックアイテムの一種で、王城にあるという水晶の本体に情報が送信されるのだという。送信された情報は、リアルタイムで同期され、他の街の水晶でも情報が引き出せるようになる。

これは古代遺産の一つで、どうやって数十万人もの情報を保持し、数多の水晶との同期をしているかは全くわかっていないが、数代前の王様の時代の冒険者がとある遺跡で発見し、使用するようになったらしい。

なので私のカバンのことを、何でも入るマジックアイテムなのだと言ったら、クオくんはかなり驚きながらも信じていた。マジックアイテムの効果は、“何でもアリ”という意識があるらしい。

……と、ここまで説明してもらっておいてなんなのだが、同じ境遇だということに對外的にはなっているのに、この知識量の差には泣けてくるものがある。

実際は全然違う……というかむしろそんな言い訳してごめんと、クオくんに心から謝りたい気持ちで一杯だけど。

「そういえば、クオくんは魔法使えないの？」

「僕は使えません。おじいちゃんいわく、魔力はあるらしいのですが、ファーストスペルが発動しませんでしたので」

「ファーストスペル？」

「はい。どの属性にも属さない基礎中の基礎の魔法で、それが発動するかどうかで魔法を使う素質があるかどうかがわかるんです」

「へー。ちなみに呪文は？」

「『我は示す、力の形を』だったはずです」

「ふうん。わかった、ありがとう」

あとでこっさりやってみよう。この場でやって、出来ても出来なくても、またマズイことになりそうだ。

「……あ、そうそう。私さ、水属性の魔法使いつてことになってるんだよね。だから、風属性が使えるってのは内緒ね？」

「……えっと、わかりました」

彼は些か不満そうな表情でこくと頷く。その表情は、どうしてそうしているのかわからない、という顔だった。確かに、普通より貴重な2色を隠すなんて、彼からすれば不思議に違いないだろう。

だが、時として力は、厄介ごとと面倒ごとと人災を一気に引き連れてやってくるものなのだ。

「……さて、これからどうしようかな？」

小さく呟く。完全に日が暮れていて、辺りはもう暗い。明かりと言えば空に上る青い満月の光だけ。

早く街に戻るべきだが、彼が魔物を引き寄せる体質だという以上、このままシルヴァニアに戻ってはいけない。そんなことをすれば、街に被害がいく可能性があるし、それでまた彼には辛い思いをさせ

てしまう。

なら、結界魔法をかければいいのだが、この魔法は一度も試したことがなく、呪文も覚えていないため、クオクンに使う前に、どこかで試さなくちゃいけない。

しかし、あまり人の前で、魔法ノ書は出したくなかった。

『所有権が誰にもおかれていない状態で、書を用いて魔法を使用したもの所有者となり、その者が死ぬか権利を譲渡するまで所有者は変わらない。また、所有権を捨てることは出来ない。』

『所有者が死ぬと、魔法ノ書は異世界に転移する。』

……だって、この二文からして、捕らえられて所有権を譲渡するまで拷問されるフラグがびんびんなんだもの。魔法ノ書さえあれば反撃は可能だが、取り上げられたらただの人だ。

白紙に見えるとは書いてあったけれど、魔法ノ書の言い伝えや伝説が全くないとは限らない。

だから、魔法ノ書が上下巻共に揃って、いつでもこの世界から脱出できるようにしてからでなければ、誰にも教えたくないし、教えられない。慎重すぎるかもしれないが、用心するに越したことはないのだ。

「……ねえクオクン、ちょっとこの辺りで待ってほしいんだけど、大丈夫？」

「え、どうしてですか？」

「さつきもちよつと言ったけど、私、まだ結界魔法って使ったことがないんだ。使えるとは思っただけど不安だから、ちよつと街で調べてこようと思って」

「あ、そういうことでしたか。わかりました、大丈夫です」  
クオくんは不安そうな目をしながら頷く。

その視線に、身を切られるような思いがした。

本当に申し訳ないが、こればかりは妥協したくない。

「大丈夫、絶対30分以内には戻ってくるから」

「はい、わかりました……！」

「……えつと、木の上なら、魔物も襲ってこないよね。不安だから自動防御の魔法もかけておこうつと」

私はそう言っつてクオくんを飛行魔法で高い木の上まで連れて行き、枝の上に座らせる。ついでに自動防御の魔法もかけておいた。クオくんが不安そうに顔を歪めていたので、お姉さんを信頼しなさい、ともう一度頭を撫でておいた。

本当にごめんね、クオくん。そりゃあこんなに暗いんだし、不安に決まってるよね。なるべく早く戻ってきます。

私はクオくんに手を振って別れを告げてから、少し離れた場所まで飛んで移動し、そのままうんうんと唸って考えた。

「んー……」

さて。結界魔法を使えると言っつておきながら、レベルが足りなかつたらどうしよう。ちゃんと発動したらいいが、出来なかつた場合が問題だ。

結界を使えるようになるまで亜空間で待っててもらおう、というの  
も考えはしたが、あれは明らかにこの世界の常識からは逸脱してい  
る魔法だ。何でも入るマジックアイテムは納得できても、全く別の  
世界である亜空間を作る魔法というのは納得できないに違いない。

彼に魔法ノ書について全部説明してしまえば問題ないが、それは  
前述したとおり、出来ればしたくない。クオくんを信頼していない  
わけではないし、すごくいい子だとは思うが、噂というものはどこ  
から漏れるかわからないから。

「……ま、出来なかつた時のことは、その時考えよう」  
私はそう決めて、カバンを高い木の枝に引っ掛ける。  
そしてその入り口に、足から体を突っ込んだ。

踏み込んだ亜空間の中は、黒のリノリウムのような材質の床と真っ白な空がどこまでも広がる不思議な世界だった。

無彩色な世界は、どこか無機質な冷たさと僅かな恐怖心を私に伝えてくる。

「おー……凄いなー……」

少し歩いてみるが、どうにも足音が不思議だ。どこにも音が反射しないからなのか、耳がおかしくなりそう。

ふと振り返ってみれば、空中に亀裂があり、そこから外の世界の青い月が見える。ちなみにカバンの中に入れておいた物たちは、少し離れたところで一箇所に固まっていた。どういう仕組みなんだか。

「と、感心してる場合じゃなかった。早く魔法試して帰らなきゃ。

時間の流れは外と一緒になんだし」

魔法ノ書を元の姿に戻し、次元属性についての項目を開いてみる。

さて、結界魔法は使えるかな、と。

「よし、これだな。……えっと、『魔を隔てし結界よ、我に次元の加護を』！」

キーン、という音が耳に響き、透明な壁が私を囲む。それはすぐに掻き消えた。どうやら成功のようだ。

私はほっと一息つく。

「あー、良かったー……。出来なかったらどうしようかと思ったよ……」

最悪の場合、似非コールドスリープ（魔法で眠らせて亜空間にIN）している間に急ピッチでレベル上げとかちよつと考えてたので、成功してよかった。本当に良かった。

「あと、時属性の中に、補助効果の時間を引き伸ばす魔法もあったから、それも覚えて……。あとはー……」

ペらペらと魔法ノ書をめくり、クオ君に使えそうな魔法をそこからいくつかピックアップしていく。

そこから1つだけ選んで呪文を頭に叩き込み、私はよし、と頷いた。

「戻ろう。クオくんも待つてるだろうし」

魔法で空を飛び、空中の裂け目から外に飛び出す。それだけで世界は彩りを取り戻し、私はどこかホッとした。

枝に引っ掛けておいたカバンを肩に戻し、そのまま飛んでクオくんの所に戻った。

「ただいま、クオくん！」

「おっ、お帰りなさい……！」

「わっ！……そんな勢いよく抱きつかれたら落ちちゃうよ？」

枝の上のクオくんは腕を伸ばせば、彼は私の腕の中に飛び込んで

くる。そして私の首に腕を回し、ぎゅ、と抱きついてきた。  
私は抱きつかれた衝撃で落ちそうになりながらも、そんな彼の背に腕を回す。

「あ、ご、ごめんなさい！」

「ま、不安にさせたのはこっちだし、いいよ。ごめんね、遅くなっ  
て」

背をゆっくりと撫でれば、彼はようやく安心したように体から力を抜いた。

私は彼を抱いたまま、何とか無事に着地する。だが彼は離そうとせず、ぎゅ、と私に引っ付いたまま。

「クオくん？」

「……僕、もしかしたら、また捨てられたかもって思ったんです。  
木の上に置いていかれて、あの場所だったら僕は自力で降りられな  
いし……このまま墜ちて死ぬか、餓死するしかないのかな、と……  
思ってた……」

「えっ……そんなことしないよ!？」

彼の言葉に、私は思わず大声で反論してしまう。彼はそんな私の  
声にびく、と肩を揺らす。

「あ、ごめん……驚かせて」

「い、いえ……僕が、悪いので……」

彼は小さくか細い声で、そう口にした。

まさか、そんなことを思われていたなんて、思いもしなかった。  
でも、よくよく考えてみれば、彼からすればそう思うのも当然か



もしれない。

両親からも捨てられた（と思い込んでいる？）彼が、初めて会った人に良くされたって、信じられるわけがないのだ。

「……えっと、ごめんね、クオくん。不安にさせちゃったね」

「いえ……僕こそ……ごめんなさい。本当に、ごめんなさい……！」

彼の頭をぼんぼんと撫でる。彼はぎゅうと私に抱きついたまま、小さく嗚咽を漏らし始めた。

「さて！ じゃあ早速結界魔法をかけましょう！」

クオくんが落ち着いた頃、私はそう提案する。結界魔法の他にも一つ魔法を使うつもりだが、それはまだ言わない。サプライズイベントってやつだ。

「はい、よろしくおねがいます」

少しだけ目元を赤くした彼は、そう言って頭を下げてくる。私は、合点承知！ と明るいい声でうそぶいた。彼は「がってんしょうち？」と、よくわかっていないようだったけど。

「じゃあ、行くね？ 『魔を隔てし結界よ、彼の者に次元の加護を』」

『たゆたう時間よ、流転する世界よ、加護を受けし者に祝福を』！  
彼の周囲に、透明な結界が張られ、すぐに何も無かったかのよう  
に掻き消える。効果延長の魔法もかけたし、長くなりますように、  
と念じながら魔法をかけたので、少しは長持ちするはずだ。

「どう？」

「……はい、大丈夫だと思います。でも、光属性じゃないのに、い  
つもおじいちゃんがかけてくれた魔法と同じ感覚だ……」

彼は嬉しそうに笑う。

予想だけど、おじいさんが死んでから、彼が安心して過ごせた時  
間は無かったのだと思う。光は珍しいとのことだから、他に結界魔  
法を使える人は、彼の周りには居なかっただろう。

そもそも、利益無しに魔法をかけてくれるお人よしなんか、そう  
そう居ないはずだ。

「そういえば、魔法の効果が無くなったら自分でわかるの？」

「はい、わかります。……感覚なので、説明は難しいんですけど」

「そうなんだ。じゃあ、そうなたらすぐに教えてね」

「わかりました」

彼は真剣な表情で頷く。

「じゃあ、次の魔法だね」

「……え？ 次の魔法？」

きよとん、と彼が首を傾げる。私は、にい、と笑った。

「ま、とりあえず説明するより、やってみよう？」

「あ、はい」

「んじゃ、手を貸して」

彼の手を取って、私の手と合わせる。彼には魔力があるということなので、それを利用してもらおうと思ったのだ。

「『この世界に住まう者よ、我らの力と声、そして心に応じ、使い魔となれ』！」

それは、星属性の一種の魔法で、使い魔を召喚し、契約するため  
の魔法だ。

ちなみに星属性は、星といつか、世界規模の魔法が多い。

勿論、文字通り星を降らせる魔法もあるが、世界の分身を使い魔として召喚したり、世界の理をちよこつと変えたりするという、危険なものばかりだ。どれも強すぎて、絶対使いたくない。そもそも私のレベルじゃ使えないだろうが。

どうであれ、魔法の力を得るのに「覚悟」が必要なのも、領ける魔法ばかりなのだ。

「……さて、何が出るかなつと……」

今回は、世界の分身とかじゃなく、普通の使い魔を召喚する魔法だ。この世界に住まう者たちの中から、術者の魔力に応じた力を持つ使い魔を召喚する。それだけの魔法。

クオくんはきつと、誰かとの関わりに飢えているのだと思った。

村にいられなくなって、一緒に住んでいたおじいちゃんも死んで私なら、寂しくて寂しくて、泣いてしまうと思う。

だからその分、使い魔がいれば寂しくないかな、と思ったのだ。

やがて、ぼん、という音と共に、何かが私達の目の前に現れる。それは、バレーボールくらいのサイズのもふもふとした白い毛玉だった。毛足は長く、そういう種類　アンゴラだったかな？　のうさぎにも見える。

「あの、あれ何ですか？」

「……も、もふもふ？」

「もふもふって何です？」

「……さあ？」

「さあって……」

二人でそのもふもふに恐る恐る近付く。すると一歩踏み出した瞬間、そのもふもふはもぞり、と動いた。

「わっ、動いた」

「動きましたね……というより、さっきの魔法は何だったんですか？」

「使い魔を召喚する魔法、なんだけど……。正直、あのもふもふは予想外だった」

私とクオくんは魔力を使ったから、私達二人の力を合わせたものに相応しい使い魔のはずなのだ。

でも出てきたのはもふもふ。どこから見てももふもふ。輝かんばかりの毛艶の白いもふもふ。

……謎のもふもふ……うん、面白そうだ！

「よし、触ってみよーっと」

「……大丈夫なんですか？」

「大丈夫だつて大丈夫だつて！」

近付いて触ってみる。

……何これ、すつごい触り心地いいんだけど。

確かにこれは、癒し系的な意味で私達に相応しいかもしれない。ほら、心の傷を癒すために、ペットセラピーとかあるじゃないか。

「クオくん、これすつごい気持ちいいよー！」

「そうなんですか？」

「クオくんも撫でてみなよー？」

はい、とクオくんにもふもふを差し出す。クオくんが恐る恐る手を伸ばした瞬間。

「……こら、そんなにべたべたと触るでない」

そんな声が聞こえた。

「はえ？」

しわがれたような声に、私はきょとんとして辺りを見回す。が、何かいるわけでもなさそうだ。

ということは……え？

「……今の声、このもふもふ、から？」

まさかと思いなながらも、もふもふに視線を落とすと、そのもふもふは急にくわつと目を開いた。その丸い金色に、私はびくつと肩を揺らす。毛がもふもふと生えているせいで、どこが目なのかわからなかったからだ。

「もふもふもふもふ言うでない。わしにはフェンリルという、ちゃんとした名前があるのじゃ」

「……フェ、フェンリル……」

似合わない、それはあまりにも似合わないよ、もふもふさん。

クオくんも、ちょっと変な笑いを浮かべている。きっと、私と同じことを考えているに違いなかった。

「もふも……あ、いや、えっと、フェンリル。出てきてくれたってことは、私達の使い魔になってくれるんですね？」

「そういうことじゃな。二人とも、これから宜しく頼むぞ」

「あ、えっと、うん……宜しく、フェンリル」

「よろしく、おねがいます、フェンリルさん……？」

似合わない。やっぱり似合わない。

見た目はもふもふでつぶらな丸い金の瞳で触り心地も凄くよくて可愛いのに、その実、老婆のようなしわがれた声に、しかも名前がフェンリル。

なんだかなー、と私は思わざるをえないわけです。

あの後クオくんに聞いたら、使い魔という概念はこの世界にないそうさ。

なので、私達の魔力で召喚した、友達みたいなものだっておいた。

本来なら召喚者を守ったりする役目もあるのだが、どう考えてもこのもふもふにそんなことは出来そうもない。

友達だと言ったせいなのか、クオくんは初めて見るといって喋る生物に、臆することもなく、好意的に接していた。

私と手を繋いで歩きながら、もう片方の手でフェンリルを撫でたり抱き締めては、その度に、わしをもふもふするでない、こら聞いておるのか、おい、なんて言われていた。

フェンリルもその台詞とは裏腹に、声色は明るかったから、そんなに嫌がってはいないのだろう。

さすがに本気で嫌がっていたら、クオくんもやめるだろう。

私は、そんな彼らをずっとにやにやししながら見ていた。だって微笑ましすぎるのだ、彼らのやり取りは。

「……あ、そういえばクオくん、ギルドの登録はしてあるんだよね？ カードは？」

「登録はしてあるはずですが、どこかに行ってしまいました。村を出たときには、持っていたはずなんですけどね」

「そっか。じゃあ街で再発行してもらおうね」

そんな会話を間に挟みながら、私達は街に向かう。

「あ、フェンリル。もう少しで街だから、街の中では喋らないで又イグルミのフリね。何か伝えたい時は心話でよろしく」

「わかっておるわい」

フェンリルは私達二人の魔力とリンクしているため、お互いにテレパシーのようなもの 心話で会話できる。

が、あくまで私 フェンリル、クオくん フェンリル間の繋がりがあただけなので、私とクオくんが会話するには、フェンリルにいちいち伝えてもらう必要があった。が、何にせよもしもの時の連絡手段があるのは正直ありがたい。

「あ、門が見えてきた。アルバートさん、まだいるかな」

「アルバートさんって誰ですか？」

クオくんの問いに、何と答えようか迷う。

さすがに借金してる相手だとは、事実とはいえ、言いたくない。少し考えて、私はこう答えた。

「んー……クーデレ系ナイスミドルな私の恩人さん、かな？」

クーデレかどうかは、未だに謎だが。

今思えば、デレってほどデレてない気がする。



クオくんは私の言葉に何を思ったのか、「くうでれけーないすみ  
どる……」とぶつぶつ呟いていた。

あの、そんな単語覚えなくていいからね……？

「あれ？」

しばらくの時間歩き、ようやく私達は街へと辿り着く。

が、残念ながら、入り口にアルバートさんはいなかった。代わりに門を守っていたのは、初めて見る兵士の人だ。手には槍を持ち、キツとした視線で門の外を威圧している。

「あの、アルバートさんはいないんですか？」

「ん？ 隊長の知り合いか？ 隊長は昼番だからな、今頃酒場にもいるんじゃないか？ ……何か用事だったか？」

「あ、いえ。会えるかな、と少し思っていただけですから」  
残念だなと呟き、肩を落とす。別に何を話すわけでもないが、顔くらいは見たかった。

「何か伝えておくか？」

「いえ、大丈夫です。お気遣いありがとうございます」  
小さく会釈すれば、気にするな、と男がそれを制した。

「あ、そうだ。ここ通りたいんですけど、クオくん、カード失くしちゃったんです。どうしたらいいですか？」

「そうか、ちょっと待ってくれ」

問いかければ、男はごそごそと腰に付いていた皮袋を探る。出てきたのは見覚えのある水晶だった。

「あの、その水晶つてアルバートさんも持ってましたけど、門番全員に配布されてるんですか？」

「いや、交代の時に渡すようにしてるんだ。高価だからな、全員に行き渡りはしない」

「あ、そうなんですか」

私の問いに答えながら男は、水晶をクオくんにかざす。

それは私のときとは違い、ぼんやりとした光を発していた。

「クオ・リーナス、出身はイーデイの村、か。確かロットンハイムの方の村だな。犯罪歴もないみたいだな……よし、通っていいぞ」

「あ、はい」

クオくんがぺこ、と頭を下げる。

私もその人にギルドカードを見せ、門番の横を通り過ぎた。

門が見えなくなるくらいまで歩いてから、そこで立ち止まる。

「さて、と。宿に行く前に、ギルドに行つていい？ お金が無いと宿に泊まれないからさ」

もう夜も遅いので本当なら宿に直行したかったが、クオくんが宿に泊まるためのお金がない。仕方がないがギルドに向かうことにした。

さっき携帯をチラ見したら午後8時半だったので、まだぎりぎり開いているはずだ。

「あ……ご迷惑をかけてしまい、すみません」

「気にしないの。そんなに気になるなら一緒の部屋で寝る？ そし

たら多少はお金も節約できるし」

「えっ！ 一緒でもいいんですか？」

彼は勢い良く食いついてきた。

……本当は、「冗談のつもりだったのだが。

でも、彼が嬉しそうならそれでいいや。

「じゃ、一緒に寝よっか」

「はい！」

まだ彼は子供だ。はっきりと年齢は聞いていないが、まだまだ誰かと一緒に寝たい年頃だろう。

しばらくは、彼の母親役をやってもいい。

(そしたらフェンリルは父親だね)

(……いきなり何じゃ)

(あ、でもそしたら、私とフェンリルが夫婦になっちゃう。もふもふが夫なのはやだなー)

(だから何なんじゃ！)

そんな心話漫才が繰り広げられるのだった。

「あ、そだ。クオくん、これ持つてくれる？」

人通りが無いことを確認してから、カバンの中から殻を取り出し、クオくんが伸ばした腕の上に積み上げていく。殻の厚さは1つ10センチほど。

「このまま持つて行くんですか？」

「マジックアイテムって貴重なんでしょう？ だったら、あんまりこのカバンがそうだって知られない方がいいかなって思って」

「ああ、それはそうですね」

5つ積んだところでクオくんが限界のようだったので、そこでやめておく。

それから一旦立ち止まり、地面に積み上げた8個の殻を持ち上げる。

ちなみに、最終的に回収できたのは18個。あと5個はとてもじゃないが持ち切れないので、次の機会に持ち越すことにする。

視界が塞がれた中、ふらふらとしながら、ギルドへの道歩く。

人通りは少なかったのだが、すれ違う少数の人たちがぎょっとしたように私達を凝視してきて、恥ずかしかった。

「すみませーん」

「はい……って、わっ！ すごいですね……！」

ギルドにいたのは、お昼に私に色々と説明してくれたお姉さんだけだった。どうやらもうそろそろ閉まるらしい。

「エスカルーナの殻集め、やってきましたー」

どん、とカウンターの上に置く。クオくんも同じように置いた。

「……わあ、よくそこまで集めましたね。殻はかさばるし割れやすいし、エスカルーナはあまり見つからないしで、Dランクの中でも鬼門扱いなんですよ、この依頼。ですので、チハルさんがこれだけ集めてきてくださって、とても有り難いです」

「へー、そうだったんですか」

確かに、普通だったら大変だろう。

実際、私もクオくと会わなければ、今日は5個で限界だった。持ち運びも、魔法があるからこそなせる業だ。

「持ちきれなくて、五個宿に置いてきちゃったんですけど、それも持ってきた方がいいですか？」

「あら、本当ですか？ ええ、持って来ていただけると嬉しいです。今日はもうそろそろ業務終了時間ですので、明日お願いいたします」

「わかりました。あと、クオくんがカードを失くしちゃって再発行したいんですけど、それも明日の方がいいですか？」

「ええ、そうですね。……これが報奨金です。ご確認ください」  
そう言って布袋を手渡される。中を見ると、金貨が2枚と、銀貨が6枚入っていた。

たった半日魔物を追い掛け回しただけにしては、結構ウマーな稼ぎだと思う。

「ありがとうございます。あ、本代って今払ってもいいですか？」

「大丈夫ですよ」

「じゃあ、はい、一枚つと」

「はい、ありがとうございます」

お姉さんがぺこりと頭を下げてくる。私は彼女に手を振って、ギルドを去った。

「じゃあクオくん、宿に行こっか」

「はい」

手を繋いで、のんびりと夜道を歩く。何となくだけど、このシチュエーションに胸がほんわかした。親子ってというか、仲のいい姉弟って感じ。

宿についた私たちは、早速クオくんが泊まることを伝えた。ダブルの部屋が余っている、とのことだったので、部屋をそこに移す。

部屋を移してから宿の人に、「これ置いてありましたよ」とすっかり忘れていたパニシユを差し出され、宿の人にも売ってくれたあのおばさんにも申し訳なくなった。

クオくんと二人の夕食も食べ終わり、私は食後にも関わらずパニシユを黙々と食べる。当たり前だがすっかり冷めていて、昼ほどの美味しさは感じなかった。

しかも夕食の後だ。段々と食べるのが億劫になってくる。しかし、食品添加剤なんて無い世界なので、さっさと食べきらなくては。

「……そういやフェンリルって、何か食べなくていいの？」

「お主らの魔力で生きておるからの。食べる必要はないぞ」

「食べる必要はないってことは、一応は食べられるんだ。……これ食べる？」

「……いただくかの」

はい、と大きめに干切って差し出すと、毛玉がぱくんと私の指に

食いついてくる。

ふむ、そこがフェンリルの口か。

「美味しい？」

「まあまあじゃな」

「その割には随分食いついてるね？」

「……ふんっ」

恥ずかしそうにフェンリルがそっぽを向く。そのまま、ベッドの上にぴよん、と飛び乗った。

……どうやって今ジャンプしたんだろう？ 足なんか無さそうなのに。

そもそも何の生物かもわからないので、謎は深まるばかりである。

残ったパニシユを口に詰め込み、少し喉につっかかりながら全て食べ終えた。

「さて、クオくん。ちょっと遅くなっちゃったけど、私の方の事情とこれからを簡単に説明するね？」

「あ！ はい！」

ベッドの上が気に入ったのか、フェンリルがごろごろとその上で転がっている。それをじっと見ていたクオくんは、いきなり話を向けられて、少し驚いたようにこちらを向いた。

「私は、あるものを探してるの。どこにあるかはわからないけど、絶対に探さなくちゃいけないんだ。そのために、今はとりあえずお金稼ぎをしている段階。だから、ギルドで積極的に依頼を受けようと思ってるし、お金が溜まったらあちこち飛び回ろうと思ってる。



だから、クオくと、ずっと一緒にいるわけにはいかないと思う。  
それで……クオくんは明日からどうする？ 何かやりたいこと、ある？」

私の問いに、クオくんはしばし考え、口を開いた。

「僕は……僕は、チハルさんの手伝いがしたいです。でも、僕は弱いから、足手まといにしかありません。だから、これから強くなるために、武器を買ってほしいです。魔法を使えない僕でも、チハルさんを守れるように。お金は後で返しますから。……駄目でしょうか？」

その言葉に、じーんと来た。ああもう、可愛いなあこんちくしよ  
うめ。

「武器の値段がわからないから何とも言えないけど……とりあえず、明日一緒に見に行ってみようか」

「はい！」

「……ああもうっ！ いい子だね、クオくんはー！」

頭を撫でる。彼は一瞬肩を揺らしたが、すぐに気持ち良さそうに  
瞼を閉じた。

(……シヨタコン、とか言ったかの)

(もふもふ、うるさい)

クオくんは、ベッドに入ってすぐに寝てしまった。疲れていたの  
だろう。私の腕に引っ付きながら、すうすうと寝息を立てている。

……それにしても。異世界生活二日目で子持ちになるとは。

本当なら、ちょっととお金稼いで、亜空間で魔法の練習して、あち  
こち飛び回って情報を集めて……そうしてすぐに帰るつもりだっ  
ただけ。

クオくんは可愛いし健気だし、とてもいい子だ。

だから、一緒に行こうって言ったことに後悔はない。

けど心の奥底で、ほんの少し、面倒だって思っている自分がある。  
早く帰りたいのについて、訴えている自分がある。

……最低だな、私。

(……ねえ、フェンリル、まだ起きてる?)

(なんじゃ?)

(あの、さ……)

不意に、そこで言葉が詰まる。

一体私は、フェンリルに何を言いたかったのだろう。

愚痴だろうか？ それは、何についての？ 誰についての？

私は、誤魔化すように息を吐く。

(……クオくん、いい子だよな)

(そうじゃな)

ベッドのすぐ横のサイドテーブルの上にいたフェンリルは、ぴよんと私のすぐ傍に飛んできた。私はそれを目で追う。

(あまり悩むな、チハルよ)

もふ、と私の頬に自らの体を押し当ててくる。

あんまりもふもふされたくないとか言ってるくせに……自分からもふってるじゃないか、もう。

……でも、気持ちいいな。

(お主は、やりたいようにやればいいんじゃない)

(……うん)

(お主の探し物も、意外と近くにあるかもしれないの)

(そうなら、いいね)

目を閉じる。

そうすれば脳裏に、元の世界にいるみんなの顔が浮かんできて、胸が痛くなった。

そして翌朝。

昨晚のセンチメンタルな自分を思い出して、無性に恥ずかしかったのは内緒。

夜って、どうしてかネガティブになるよね。

にこにこ朝食を頬張るクオくんを正面に見ていると、私は昨日どうしてあんなこと思ってしまったのかと、こっそり苦笑してしま

う。

早く帰りたい？ だったら早く帰ればいいじゃない！

クオくんと一緒に面倒だ？ むしろ私の存在が一番の面倒ごとだ！

クオくんが居たって居なくなたってやることは変わらない。

ちょっと必要なお金が多くなって、ちょっと一人になる時間が減って、ちょっと魔法の練習がし辛くなるだけだ。

そんなの全然どうってことない。むしろ彼と出会えたお陰で、私は寂しい思いをしなくて済む。フェンリルとだって、クオくんが居たからこそ会えた。彼が居なければ、召喚という発想も無かったのだから。

「クオくん、口元についてるよ」

指で拭ってあげると、彼は恥ずかしそうに、ありがとございませ、と笑った。

(シヨタコン再び……かのう?)

(違いますー、子供好きなんですー)

(……そうか、ならもう何も言わぬ)

(……あれ？ 何でそんな引くの？ あの、ちょっと、何で私から離れるの？ ねえ、何でクオくんを守るような位置に陣取るの!?)

朝、宿で食事を取り終えた私たちは、早速武器屋に向かうことにする。

ちなみにフェンリルは、宿でお留守番だ。

流石に“ヌイグルミ”を抱えたまま、武器なんて見に行けば変だからだ。

「クオくん、どんな武器がいいの？」

武器屋の中には様々な武器が並べられており、わくわくしてしまう。

現代日本で見ることの出来る、こういった武器らしきものなんて包丁やナイフくらいだし、イミテーションだっただけ見ることは稀だ。

興奮しない方がおかしい。

私はきつと使うこともなく異世界生活を終わると思つので、今のうちに目に焼き付けておこう。

「……ええと、これがいい感じ、でしょうか？」

そう言つて彼が手に取つたのは、刃渡り50センチほどの鉄で出来た片手剣だ。

大人が持てば片手剣だが、クオくんが持つと明らかに両手剣である。

彼が鞘から抜き、その場で少し振ってみるが、見るからに剣に振り回されていて、危なかつしい。

「……後で軽くする魔法をかけてあげるよ」

「えっと、お願いします……」

風属性は変化を司る属性だ。

だから、姿を変えたり、物の性質を変える魔法がある。それで重量を軽くすれば、だいぶ扱いやすくなるだろう。

ただ、軽くする＝威力が落ちる、の等式が当たり前に成り立つため、その内元の重さでも振れるようにならないといけないが。

あと、永続的に効果が続くわけではないので、物の性質を変えた上で、武器屋に売り込みがっばがっば、とかは出来ない。やってもいいが完全に詐欺だろう。

異世界だとしても、あまり人様に後ろめたいことはしたくない。

「ええと、買えるかな？ ……あ、銀貨5枚だつて。意外と安い」

高めの服 この鉄剣というのは、相場としてどうなんだろう、と思う。

武器つてもっと高いイメージがついていたのだけれど。

この剣の品質が悪く特別に安いのかとも考えたが、回りの片手剣を見ても同じような値段だ。

でも、ここは魔物が出る世界だし、その分武器も多く出回っているはず。これくらいで当然なのだろうか？

どこか釈然としないものを感じながら、会計を済ました。

「はい、クオくん」

「ありがとうございます！」  
嬉しそうな表情で、剣を受け取るクオくん。  
腰につけるためのベルトも一緒に購入したので、早速、腰の左側に取り付けていた。

……ああ、子供剣士って感じが実に可愛らしい。

「次はギルドだね」

「はい！」

二人横並びでギルドに向かう。その途中、人気がなくなったタイミングで殻を外に出しておいた。今日は五個しかないので持ちやすい。

ギルドに入ると、今日もカウンターには、いつもの青いお姉さんがいた。

が、今日はどこか様子がおかしく見える。

彼女はこちらに気付くと、私たちを手招きした。

「……どうしたんですか？」

「ええと、チハルさんはメルカの森から来られたんですね？」

「……そう、ですけど？」

唐突な言葉に、首を傾げる。

「メルカの森の木が明らかに火事とは違う、不自然な形で焦げていたんです。ここ一週間以内のことだと思うのですが、何かご存知ないですか？」

「思わず、顔が引き攣った。」



それが犯人です、とも言えず。

「し、知りません」

「僕も判らないです」

「……そうですね。何かわかりましたら、私までお願いしますね？」  
とりあえず誤魔化しておいた。

お姉さんは気を取り直すように一度咳払いをし、表情を引き締める。

「さて、今日はどういったご用件ですか？」

「とりあえず、これ持ってきました。あと、クオクんのカードを再発行してほしい」

「はい、承りました」

持ちつぱなしだった殻を、どん、とカウンターのの上に置くと、彼女はそれを確認してから以前の水晶をカウンター下から取り出す。

「では、こちらに手を」

「あ、はい」

クオくんが言われるままに水晶に手を乗せる。以前のやり取りの後、水晶からはカードが吐き出された。

「はい、これで終わりです」

「えっと、ありがとうございます！」

カードを手に、彼が礼儀正しくお礼する。私も一緒に頭を下げた。

「ねえ、クオくん、見せて見せてー」

後ろから、クオくんのカード……略してクオカードを覗き込む。彼がオープン、と言うと、白紙だったそれに情報が表示された。

『クオ＝リーナス ランクD

職業 なし

出身 イーディの村』

「あ、職業が“なし”になってる……。クオくん、このままでいい？」

「えっと……変えられるんですか？」

「大丈夫ですよね？」

カードから顔を上げ、お姉さんに問いかける。

「ええ、大丈夫です。ギルドランクは職業を別のものに変えたりセツトされますので、もし依頼を受けるつもりがあるのなら、早めに変えたほうがいいでしょう」

「え、そうなんですか!？」

初耳だった。

じゃあ、水の魔法使い 水風の二色魔法使いに変更したら、ランクは戻ってしまうのだろうか。

「ええ。たとえば市民が戦士に転職したとして、市民のときの実績が役に立つかと言えば、立たないですよね？ ですから、ランクがリセットされるようになってるんです。ただ、例えば魔法が使えることが発覚して、剣士が魔法剣士になった場合などは、元の実績

が役に立つと判断されるので、特例としてリセットされません」

「へー」

ならば、もし魔法使いの属性を変更しても、ランクは元のまま、と考えてよいだろう。

少し安心した。

「じゃあ、クオくん、剣士にしてもらおう?」

「えっと、お願いします!」

「はい、承りました」

剣士には魔法と違い適正が必要ないからか、私の時のように実技を求められることもなく、手続きは進む。

ついでに昨日受けた依頼を、二人パーティで受けることに変更できないか、と聞くと可能らしいので、そうしてもらった。

「じゃあ行こうか?」

「はい!」

私たちは、のんびりと歩いて街道に向かった。

数メートル距離をあけ、私達と相對するのは、茂みから単身で飛び出してきた、狼みたいな黒い毛色の魔物。名はウルフ。

その魔物は低い唸り声を上げ、毛を逆立てて私達を威嚇してくる。首の裏がちりちりするような、妙な感覚。エスカルーナの時には

無かったそれを感じて、私はごくりと唾を飲んだ。  
もしかして、これって殺意とか殺気とか、そういう類のものなの  
だろうか。

私の二歩ほど前で、クオくんは緊張感に満ちた表情を浮かべ、剣  
を構えながらウルフに対峙する。

一瞬の、まるで時間が止まったような錯覚の後。

1人と1匹が、動いた。

「……はあっ！」

剣が上から下に振り下ろされる。が、それはウルフの毛を掠った  
だけ。左に避けたウルフは、クオくん目掛け飛び掛った。

が、弾き飛ばされたのはクオくんではなく、ウルフ。  
街を出てすぐにかけておいた、自動防御魔法の効果だ。

「えいつ！ えいつ！」

掛け声と共に、横に振り、袈裟懸けに振るが、全くその剣筋は致  
命傷になりえない上、隙だらけだ。

剣を持ったのが今日なのだから、仕方がないだろう。

何度かウルフがクオくんに突っ込んで弾かれたのを見て、この  
辺りが潮時だなと思い、口を開いた。

「『水よ、その清廉なる身で敵を切り裂け』」

高圧の水が、ウルフの首を撥ねる。首のあった場所から勢いよく赤い血が噴き出すと、魔物はそのままばったりと倒れた。

「……うーん……」

エスカルーナと違い、ウルフは元居た世界の狼に、とても似た魔物だ。そのため、かなり嫌な気分になり眉を顰めたが、まだ感触が残らないだけまし、と自分に言い聞かせる。

それにクオくんは、全然平然としている。育った環境が違うとは言え、その姿勢は見習わなくては。

出しっぱなしだった水を操作して、ウルフの尻尾を切り取る。それを拾い、カバンの中にばいと放り入れた。

「クオくん、お疲れ様？」

「チハルさん……全然、駄目でした……」

ぜえぜえと肩を上下させ、彼は地面にへたりこむ。

素振りすらやったことがないのに、いきなり魔物と戦うのは無謀すぎる。

が、私は剣など教えることが出来ず、教えてもらえるような人にも心当たりがないのだから仕方がない。唯一あるとすればアルバートさんだが、隊長である彼にそんな暇はないだろう。

そのため、クオくと要相談の上、いきなり実戦に突っ込んでみたのだが、まだまだ先は長そうだ。

「まあ、これからだよ。今日は剣に慣れることから始めよう？」

「はいっ……ご迷惑をおかけしますが、宜しく願います……！」

「じゃあ、もう一回魔法をかけて……」風よ、その自由な身で我らを守護せよ」

ひゅん、と風が舞い、私達を暖かく包み込む。  
まだ魔法の効果は切れていないが、一応だ。

「じゃあ、次を探そうっか？」

「はい！」

クオくと、次の獲物を探す。

ウルフ退治のノルマクリアまで、あと11体。

その後夜までに、何度も休憩を挟みながら、ウルフ24体、ゴブリン30体を討伐できた。

が、これでやっと銀貨14枚分だ。

やっぱり殻回収の方が楽しし効率がいいよなあ、と口に出さず心中でぼやく。

時間をかけた甲斐あって、クオくんも段々と剣に慣れてきたのが唯一の救いか。

「もうそろそろ暗いし、帰ろっか」

「そうですね」

すっかり暗くなった空を、ふと見上げる。そういえばこの世界の

月って、青いんだっただ、と改めて思った。

青い月なんて、幻想的だけど。一体どうして青いのだろう、と考えると、途端に奇妙なものに思えてしまう。

そもそも私達の世界の月が黄色っぽく見えるのは、太陽から放出される光のうち、黄色の光を最も反射するかららしい。

もしかしたら光線の種類が違ったりするのかもしれないが、太陽は見た限り私達の世界のものと殆ど同じに見える。朝方や夕方は赤くなるし、日中は白い。

なら、あの月はどうして青いんだ？

考えているだけではわからないので、隣を歩くクオくんに聞いてみた。

「ねえ、クオくん？ 何で月って青いんだらうね？」

「え？ ……どうしてかはわかりませんが…でも、こんなおとぎ話がありますよ？」

彼はそう言っただ、こんな話をしてくれた。

『この世界には、朝と昼と夕と夜の、四人の女神様がいました。』

朝と昼と夕の女神はとても豪華で美しく、太陽の神は大層その三人を愛しておられました。

そのため、朝と夕には赤い右目で、昼には白い左目で、太陽の神が毎日皆を見守っているのです。

しかし夜の女神はとても素朴でお優しい方でしたので、華美を好む太陽の神に、愛されることはありませんでした。

ある日、夜の女神は涙し、嘆きました。

「私一人が嫌われるだけならば構わない。でも、私のせいでみんなのための導が無いなんて……！ 私はなんと言ってみんなに謝ればいいの？」

その慈しみの心に惹かれた月の神が、彼女にこう告げました。

「ならば私が導となろう。そのかわり、私をお前の隣に居させてくれないか？ お前の心の色は、とても美しく、心地良いのだ」と。

夜の女神は、それを受け入れ、彼らは共に過ごすようになりました。

そしてその日から、月の神の青い右目が、毎夜皆を見守っているのです。

……月の神の左目ですか？

彼の金色の左目は、愛しい彼女だけに向けられているので、残念ながら私たちが見ることは出来ません。

もしも夜に金の月が浮かんだならば、もしかしたらその時は、月の神と夜の女神が喧嘩なんてしているのかもしれないね。』

「へー……面白いね」

「そうですね。僕もこの話は好きです」

おとぎ話というか、神話みたいな話だと思う。

結局青い理由はわからないが、面白い話が聞けたので、それでよしよし。

それによくよく考えてみたら、あちらの物理法則がこちらの世界



にも当てはまるなんて道理はどこにもないのだ。考えるだけ無駄というやつだ。

しかし、金色の月が喧嘩の色なのだとしたら、私の世界の神と女神は毎日喧嘩していることになるな、と少し笑ってしまった。

仲良くなるのは新月の時くらいかな。

そう考えて、ふと、今浮かんでいる月が満月だということに気付く。

そして、昨日も満月だったなと思い出した。

クオくんの話では、“神様は私たちを毎日見守っている”とのことなので、この世界では月の満ち欠けがないのかもしれない。

月って満ち欠けするよね？ とは流石に聞けないので、またその内確かめてみよう。

「……よし」

とある考え事をしていた私は、結論をまとめ、そう呟く。  
立ち上がり、そして一言。

「クオくん、ちょっとトイレ行ってくるねー」

彼の返事を待たず、私はトイレに駆け込んだ。  
ここからは（ある意味で）スピード勝負だ。

魔法ノ書を元の形に戻し、水属性、風属性、もしくは特殊属性の  
中から使えそうな魔法を探す。少しでも琴線に引っかけた魔法は、  
呪文を指でなぞって声に出す。

「……ええと、……清廉なる身を力に変え……」

何とか呪文を頭に叩き込まんと、私は繰り返し復唱した。

……え、何をしているかって？

新しい呪文を覚えているのだ。トイレで。

一人きりでゆっくり安心して過ごせる場所。そう考えた時、一番  
最初に浮かんだのが、情けないことにトイレだった。

これじゃあ、水魔法使いならぬ、水洗魔法使いだよ……などと考  
えたら無性に哀しくなったので、思考を停止させたが。

幸い、呪文は簡単なものが多いし、基本属性ならその呪文に規則  
性もある。一つ覚えるのに時間はそれほどかからなかった。

短時間で4つほど頭に叩き込み、魔法ノ書をブレスレットに戻す。  
そして何食わぬ顔でトイレから戻った。

「ただいまー」

そして、審判の時を待つ。

「お帰りなさい。あ、そろそろ夕食に行きませんか？」

……どうやらセーフのようだ。

「うん、そっだねー」

笑いながら、内心ホツとする。

これで、「遅かったですね？ 大ですか？」とか「お腹壊したん  
ですか？」とか言われた日には、乙女心が傷ついて立ち直れない自  
信があった。これからも時間に気をつけることを誓いながら、クオ  
クんと共に宿の食堂へ向かった。

ギルドで新しい依頼を受け、私たちはまた街の外に繰り出す。  
クリアさん　青い髪のお姉さんの名前だ。ずっと聞くのを忘れていたのだが、ようやく教えてもらった　に、随分ハイペースで依頼をお受けになるんですね、なんて感謝(?)された。

通常は、そうそう毎日、魔物退治には繰り出さならしい。  
毎日は疲労が溜まるし、戦闘職である以上、その疲労で出来た少しの際が命取りになるからだ。

だが、クオくんはともかく、私は殆ど疲れを感じていない。  
魔物を倒すのに、突っ立ってただ口を動かし、魔法を連発しているだけだからだ。

動くのは、魔物を探す時のみだ。

クオくんには、疲れていたら街で休んでいいんだよ、と言ったものの、ついて来ると言って譲らなかつた。

私がいるので怪我は殆どしないだろうが、一日くらいは小休止の日を設けた方がいいよな、と思う。

ちなみに、今日受けた依頼は3つだ。

依頼の内容を再確認した私たちは、街道から少し逸れたところを散策することにする。

そしてその時、悲劇は起こった。

「……あれ？」

「……あ」

不意に何かが無くなるような、そんな妙な感覚に声を上げれば、クオくんもほぼ同時に声を上げる。

「もしかして……」

「チハルさん……ごめんなさい」

「……あー、やっぱり？」

強張った顔のクオくんに、この感覚の正体を悟る。彼の結界魔法が、切れたのだ。

魔法をかけなおそう。

そう思った瞬間に、がさりと茂みが動く。

そして間を置かず、何体もの魔物が飛び出してきた。

「ああもっつ！ クオくん、とりあえず倒しちやおう！」

「はい！」

私たちは即座に臨戦態勢を取る。

結果的に言うと、それは大きな間違いだった。

「こ、れで……終わりッ！」

そして、それから約20分。

次から次へと、どこからこんなに湧いて来たんだお前ら、という魔物の群れを倒し続けていた私たち。

ようやく訪れた平穩に、へとへとになって地面に座る。

辺りはすでに、魔物の死骸で地面が見えないほどだ。倒した数は200を恐らく越えるだろう。

クオくんは結界を張ろうと思っても、その前に魔物が次から次へとやってきて、集中できなかった。結界魔法……というより特殊属性の魔法は、基本属性よりも遥かに高い集中力を必要とするためだ。なので、どうすることも出来ずに、今に至る。

「はあ、……チハ、ル……さん、ご、め……なさ……はあ、はあ……」

「……いや、……しょうが、ない……気に、しない、で……」  
二人して酷く息を切らしながら、その言葉を交わす。

クオくんには自分の身を守ることだけを考えてもらっていたし、私はただ口を動かし呪文を言っていただけだ。

でも、数が数なので、喉の疲労が半端ない。ああ、本当に疲れた。

「……とりあえず、結界、かけるね？ ……」  
『魔を隔てし結界よ、彼の者に次元の加護を』

ようやく使うことの出来た結界魔法に、私は安堵の息をつき、そのままその場に横になる。辺りは魔物の死骸で汚れていたが、もうそんなことどうでも良かった。今は体力回復を優先しなくては。

しばらくぐったりと横になっていれば、息も落ち着いてくる。

「……でも、指定の魔物も全部いたし、今日はもうこれで依頼も終わり……だね」

「そう、ですね……早く帰りましょう……」

よいしょ、と起き上がった私は、クオくんも手伝ってもらいながら、その辺りに散らばった死骸から部位を回収する。

依頼を受けていない魔物の死骸も当然あったので、一緒に回収しておく。

換金出来るかどうかはわからないが、放置は勿体無い気がしたのだ。

「……帰ろっか」

「……はい」

今日はもう昼食食べて、宿に帰って、ゆっくりしよう。

ギルドへの報告は明日だ、明日。

肩を落としながら、私たちは街へ戻った。

街に戻り、昼食に選んだ店で、私は驚愕の真実を知った。

「……え、これ、魔物……?」

ちょっと変わった味がするな、と思ったその肉が、なんと魔物の肉だったのだ。

「……あのさ、もしかして、宿でも魔物の肉って、出てた？」

「えっと……知らなかったんですか？」

クオくんは平然と言われ、泣きたくなった。

よくよく聞いてみたら、家畜の肉は非常に高価で、殆ど庶民の口には入らないらしい。

魔物は、この世界では常食されているのだという。それは、当然のことだろう。

が、そうとわかっていても、正直抵抗感は拭えない。

だって、襲ってきた熊を撃退して、そのまま熊鍋にするようなもんだよ？

しかも、まだ熊なら見た目がわかっているからいいけど、エスカルーナみたいな見てて気持ち悪い魔物の肉だったりしたら……。

ぶる、と生理的なもので、身体が震える。

結局その後、その料理をそれ以上食べる気にはなれず、残してしまった。

「……夕食のときは、何の肉とか、何の野菜とか、絶対気にしないようにしよう」

私はそう決意する。



所詮、慣れだとは思っけど。  
きつとすぐ、気にしないようにはなると思っけど。

しがない一般高校生の私には、刺激が強すぎでした。

「……うげっ」

クオくんがトイレに行っている間に、ごちゃごちゃになった亜空間の中の荷物を整理していた私は、突然鳴り響いた甲高い機械音に、眉を顰める。

ああ、とうとう携帯電話のバッテリーがお逝きになってしまった。

そもそもこちらに来た時点で電池の残りが二個しかなかったので、触っていなかったとしても限度がある。

それはわかっていたが、携帯は弄っているだけで元の世界を思い出せる唯一の物だったので、寂しさが胸を占めた。

が、しんみりしていたとしても、どうにかなるわけではない。

雷属性が使えるれば何とかなるかもしれないが、使えないのだから話にならない。

……ああ、今日は厄日だ。

溜息を吐いて、ただの金属の塊となったそれを、他の物たちと一緒にカバンに放り込む。

クオくんが戻ってくるまでの少しの時間、私は不貞寝することにした。

次の日。

今日は何事もなく、数々の依頼を短時間で終わることが出来た私たちは、今日は一日、休日にすることにした。

この街には図書館があるとのことだったので、後でそこも行きたくない、と考えつつ、まずはアルバートさんのところに行くことにした。

“数々の依頼”というのは、昨日倒した依頼外の魔物の部位を、そのまま流用したためだ。

依頼を受け、外に出て証拠部位を取り出してから、すぐにギルドに戻る、という裏技？ 荒業？ で200体を越える魔物の殆どを換金してもらうことが出来た。

それをした時、少し、クリアさんの表情が引き攣っていた気がする。が、ただの気のせいだろう、気のせい。

「アルバートさん！」

門に居たアルバートさんがフリーになったのを見計らい、私は彼をテンション高めに呼ぶ。こちらに気付いた彼は、小さな微笑で迎えてくれた。

「おお、チハルじゃないか。久しぶりだな。……ん、そっちの子はどうしたんだ？」

「クオくんはえっと……私の友達です！」

「そうか」  
私の言葉に、アルバートさんがほんの少し目尻を下げる。  
きつと、私に友達が出来たことを、喜んでくれているのだろう。

だって私は、森の奥で暮らしていたということになっているのだから。

……その内、アルバートさんに、嘘をついたことをちゃんと謝りたいな。いつになるかは、わからないけど。

「クオ、というのか。……これからもチハルをよろしくな」  
まるで私の父親みたいなことを言う彼に、私の胸がほっこりする。きつと、心から私を心配しているが故の台詞なのだろう。

「いえ、僕の方こそチハルさんには良くしていただいて……！」

「そうか」  
それを聞いたアルバートさんが、優しくクオくんの頭を撫でる。  
クオくんは一瞬驚いたように肩を揺らしたが、彼の手に身を委ねるように力を抜いた。そして嬉しそうに緩む頬。

うんうん、わかる。彼の手って魔性の手だよね！（とても語弊のある言い方）

「そういえば、今日はどうしたんだ？」

「あ、そうでした。これ、返しに来たんです」

カバンから二枚の金貨を取り出すと、彼は驚いたように口を開く。

「……無理に返そうとしている、わけじゃないみたいだな」

「はい。依頼を沢山受けて、魔物を倒しまくりましたから！　ね、クオくん？」

「でも、殆どチハルさんが倒してましたけどね？」

「クオくんも頑張ってたよ！」  
それはお世辞ではなく事実である。

誰にも手解きを受けていないというのに、一対一ならば、この辺りに出る大抵の魔物を相手出来るようになったのだから。

私からすれば、凄いの一言に尽きる。きっと彼には、剣の才能があるのだろう。

「でも……」

「どちらも頑張った、でいいだろう？」

アルバートさんの言葉に、クオくんが少し戸惑って、やがて頷く。彼は照れたように笑っていた。

そこに、以前もアルバートさんと一緒に門番をしていた、赤い髪の人が出てくる。

そしてまたしても一言。

「隊長……そろそろナンパから戻ってきてください」

「……だから何を言っているんだ、お前は」

肩を竦めるアルバートさんに、赤髪の人がほんの僅かに表情を変える。

そのなんとも言いがたい微妙な変化に、何かが私の勘に引っ掛かった。

一体何だろう？

が、その正体を掴む前に、アルバートさんが口を開く。引っ掛かりはすぐに霧散してしまった。

「チハル、クオ。私は職務に戻る。では、またな」

「はい、また！」

「えっと、さようなら！」

二人でその背を見送る。

「……あれが「くうでれけーないすみどる」なんですね！」

「……いや、え、うん」

ああ、クオくんに変な単語を植えつけてしまった。

私はごめんと、心の中で合掌した。

この世界での生活も、ようやく一週間を過ぎた。色々あったが、ほどほどに順応してきたはずだ。

魔法も、今までのを数えると、全部で25種類くらいは暗記した。ビバ(?)・トイレ魔法。

それと昨日、クオくんと一緒にギルドランクがCになった。本来ならば、もっとランクアップには時間がかかるものらしい。

だが、短期間で数多くの依頼をこなしたため、異例のスピード出世なのだ。クリアさんには教えてもらった。

「先日、初心者用である魔物討伐依頼の殆どを掻っ攫っていったDランクキラーのお二人に、ギルドが特別措置を与えたんですね」と、にこにこ顔で嫌味(?)を言われて、ちよっとへこんだりもした。

「ねえ、クオくん。王都行き依頼、受けていい?」  
依頼書を見ながら、横にいるクオくんに問いかける。

Cランクに上がったので、他の街への運搬依頼を受けられるようになったためだ。

ランク上昇により、荷物を預かって運ぶための最低限の実績と信頼を得たから、というのが理由らしい。

魔法ノ書について、この街の図書館で調べてみたりしたのだが、一つも有力な情報はない。

これ以上情報を集めるには、王都にでも行くしかないかな、と考えていたところだったので、この依頼は渡りに船だった。

「僕はチハルさんの行くところなら、どこにでもついていきます」「そう？　じゃあ、これとこれにしようか」

一覽から王都行きのを二つ選び、引き受けることにした。

からからから。荷馬車が揺れ、車輪が鳴る。

私達がギルドで引き受けたのは、一通の手紙を届ける依頼と、この馬車の護衛依頼だ。

護衛依頼は私とクオクンの他に、二人が一緒に受けている。

その二人は、私たちと同じように、荷馬車の中で荷物に紛れて座り、各々何かやっていた。

眼鏡をかけた神経質そうなお兄さんは、手元の杖に巻かれた長い布を巻き直しているし、もう一人の茶けた色のローブを深くかぶって顔をすっかり隠し、ただ黙って座っている。

「……全く、何なんだ……」

魔法使いらしきお兄さんが、忌々しげに小さく呟く。

その視線は、私を辿り、クオくんを辿り、そして最後にローブの人に向けられた。

……まあ、わからなくはない。

私とクオくんはまだ子供だし、ローブの人は男なのか女なのかすらわからないのだ。

ギルドで剣士だということは聞いたが……それだけでは先行きが不安になるのだろう。

でも、今現在、この依頼を受けている以上、受けるだけの实力はあるということだ。

見た目は関係ない。

それが理解できないあのお兄さんは……何というか、探偵漫画とかで一番最初に死にそうな人だな、とそんな感想を持った。

(フェンリル、クオくんに身体痛くないか聞いて?)

王都までは馬車で約半日。

そして既に一時間は同じ姿勢なため、身体が少し強張ってきている。

(全く、わしを何だと思ってるんじゃないか………大丈夫じゃと)

(そっか、ならいいけど)

ふう、と一息つく。

そして、少し途方にくれはじめた。



段々と暇になってきたのだ。

最初の頃は初めての馬車にはしゃいでいたのだが、流石にこれ以上は、テンションを持続できそうにない。

これで私一人であれば魔法ノ書を読むのだが、今は他に人がいる。私は少し考えて、カバンの中から、ギルドで購入した魔物の本を取り出した。

各魔物の特徴や討伐証明部位についてだけでなく、絵も描いてあるため、見ていて動物図鑑のようで非常に面白いのだ。

「あ、チハルさん、僕の方も下さい」

「ん、わかった」

どうやらクオくんも暇だったらしい。

お金に余裕が出来てから彼のために購入した分もカバンから取り出し、手渡した。

しばらくそれを読んでいると、不意に馬が嘶き、馬車が急停止する。

何かと思い視線を上げると、既にロープの人は立ち上がり、馬車を出るところだった。

私とクオくんも本を投げ出し、慌ててそれを追いかける。

外に出ると、周りを沢山のゴブリンが取り囲んでいた。

「こんなに……いつの間に!?!」

「いきなり現れたんだ! すまねえ、頼む!」

御者をやっていた男が、叫ぶように言った。  
彼は顔を恐怖で強張らせ、急いで馬車の中に引っ込む。

私はそれを全て聞く前に、魔法を唱えた。

「『水よ、その清廉なる身で敵を切り裂け』！」  
手元から噴き出す高圧の水が敵を襲い、荷馬車に近付いたゴブリンの首と胴が、すぱっと鮮やかに離れ、赤い血が水に混じり舞う。  
私は既に見慣れてしまったそれに目もくれず、次の魔法を唱え始めた。

クオくんは腰の剣を抜き、どうにか身を守っている。  
この多数対少数の状況では上出来だろう。

ローブの人は、どこから出したのか、細いレイピアのような剣で次々と急所を突き、まるで踊るかのように魔物を倒していた。

「『水よ、その清廉なる身を力に変え、全てを貫け』！」  
今度は4本の水の槍が現れ、それが敵目掛けて飛んでいく。  
水の槍はゴブリンを次々と貫き、一本あたり5体ほどを倒したところで掻き消えた。

そこでようやく、遅くやってきた眼鏡の人の魔法が発動する。  
どうやら彼は土の魔法使いらしく、残り少ない残党は小さな石に押し潰されていた。

「……これで全部かな？」

「そうみたい、ですね……」

私とクオクンの言葉に、ローブの人がさつと突剣をしまう。眼鏡の男の人はどこか悔しそうに顔を歪めながら、馬車に戻っていった。あんな奴ら使えない、と思っていたはずの私やローブの人に、殆どの敵を倒されてしまったからだろう。

眼鏡の人が馬車に戻ったからか、それと入れ違いになるように御者の男が出てきた。

ローブの人は、御者に近付く。

「聞きたいのだが」

ローブの人は、初めて口を開く。その声は、なんと若い女のものだった。

話しかけられた御者は弾かれたように、ローブの人に向き直る。

「いきなりとは、どういう状況だったのだ？」

「何と言いますか……軍のようだった、とでも言えばいいのでしょうか。妙に整った動きでした。いつもは、あんな風に出てこないんで、焦ってしまいました」

「……なるほど。わかった、ありがとう」

それだけ言って、彼女は馬車に戻っていった。

私とクオくんは、ぽかんと彼女の背を見送る。

「女の人だったんだ……てっきり、男の人かと」

「僕もそう思ってた」

それだけ先程の戦いは鮮やかだったのだ。

さすがファンタジーな世界。女性も強かなものだ。

「お二人さん、そろそろ出発したいんだが、いいかね？」

「あ、ごめんなさい！ 今乗ります！」

急かされ、クオクんと馬車に乗り込む。

つい視線が、彼女に向かってしまいが、当の本人は全く意に介した様子も無く、先程までと同じようにじっと座っていた。

あれから他の魔物に出会うこともなく、私達は王都デイルティアに辿り着いた。

御者の人が、数人いる門番の内の一人と会話するのを横目に、私は初めての王都に感動していた。

溢れんばかりの人、人、人。シルヴァニアも賑わっていたけど、さすが王都だ。その数倍はこちらの方が盛況だった。

しばらくして御者の人がこちらに戻ってくる。

「皆さん、ありがとうございました。これが終了証明書……」  
そして彼が手渡そうとした、一枚の紙を受け取るうとした瞬間。  
地面が揺れた。

「何だ!？」

周囲が一気に沸き立つ。

私たちも状況を把握しようとするが、何の変化も見当たらない。

何事かと辺りがざわめく中、こんな叫びが聞こえた。

「魔物だ！ 魔物が防壁を壊して王都に……！」

そして、また聞こえる地響き。

隣のクオくと同時に顔を見合わせて、こく、と頷きあつ。

先程のように、既に先行していたローブの女性の後ろをつき、騒ぎの大きい方へと私たちも向かった。

「っ！」

そして辿り着いたその場所は、凄まじい有様だった。

魔物の侵入を防ぐ石の壁が無残にも破壊され、恐らくそれを止めようとしたのだろう数人の兵士が血を流しながら倒れている。腕は曲がってはいけない方向に折れ曲がり、真っ青な顔でぐったりとしていた。

ローブの女性は倒れている兵たちには目もくれず、その穴から王都へと進入していった。

私はそれを視界の端で見送りながら、倒れている兵士に駆け寄り、声を掛ける。

「今、治療します！ 『水よ、その清廉なる身を癒しに変え、傷を癒せ』！」

ばあ、と広範囲に光が舞う。その水色の光は傷を負った兵士達に

吸い込まれ、傷を治す。

が、流れた血が戻るわけではない。兵士たちの顔は青いままだ。

だが、痛みが無くなり楽になったのだろう、先程よりは表情が緩んでいる。

「大丈夫ですか？ まだ痛いところはありますか？」

「……いいえ、大丈夫です……ありがとうございます。私達のことはもう良いので、魔物をお願いします……！」

他よりも軽症だった一人の兵士にそう言われ、一瞬戸惑う。

だが、このまま放っておいては、もっと死傷者が増えてしまうだろう。

蘇生魔法はあるが、人に試したことはない。木はちゃんと直ったが、人が本当に蘇生できるとは限らないのだ。

「……わかりました。クオくん、行こう！」

「はい！」

兵士を置いて、私達は王都の中に進入する。人々は既にどこかに避難したのか、その一帯の賑わいは既に失われていた。

だが、遠くからは悲鳴のような声が聞こえ続けている。

「急ごう！」

私達は、悲鳴の聞こえる方向を目指し、石造りの道を走り抜けた。

あれからまた三度ほど聞こえた地響き。

それをどうすることも出来ず、すっかり人通りの失われた道を走る。

そして私たちが辿り着いたのは、噴水……だったものがある広場だった。噴水は既に破壊され、辺りが水びたしになっている。

そこではローブの女性と、鉄の金棒を持った2メートルほどの巨人族の魔物が一騎打ちしていた。魔物が金棒を振り回し、ローブの人がそれを紙一重で避ける。

「確か、あの魔物は……」

「……ハイオークです！」

クオクンの言葉に、小さく頷く。

そう、あの魔物は本に載っていた。

討伐依頼であればAランクになる魔物で、その強大な力と硬い肌、そしてその巨体に似合わない素早さのせいで、歴戦の戦士でも手こずる相手だ。

事実、あの細い突剣で戦うローブのお姉さんは、苦戦しているように見える。相手の攻撃は当たらないが、彼女の攻撃も相手に通らないのだ。このままでは、彼女がやられてしまう。

そんなハイオークの弱点は……体中で唯一皮膚の薄い眉間！

それ以上何か考えるよりも先に、反射的に口から詠唱が紡がれた。

「『風よ、その自由な身を戒めとし、敵を拘束せよ！』」  
つむじ風が、ハイオークの四肢に纏わりつく。ハイオークはその戒めから逃れようと、腕がずたずたになることも厭わず、激しく身を擦った。

が、彼女がその隙を逃さない。

「ハアツ！」

彼女はまるで重力を感じさせない動きで跳躍し、手にしていた突剣でハイオークの眉間を真っ直ぐに貫いた。そしてすぐに剣を抜き、彼女はそこから飛び退る。

その直後、一度大きくびくんと痙攣したそいつは、ぐらりと前方に倒れ伏した。

「……すごい！」

「……っ」

隙を作れば、彼女なら何とかしてくれると思ったけれど、まさか一撃とは。この人、明らかにランクを受けるような実力じゃない。

クオくんも目を見開き、食い入るように彼女を見ていた。

「助かった、礼を言う」

「いえ、そんなことは……」

「だが、ここで喋っている暇はないな。私はもう行くぞ！」

「あ、私たちも行きます！ クオくん！」

「はい！」



三人で王都を走る。途中で魔物に襲われるが、ほとんどは彼女の剣で屠られた。私も魔法で応戦するが、彼女の剣のスピードには敵わない。

しばらくそうやって敵を倒していくが、魔物は次から次へとやってくる。彼女はうんざりと、そして吐き出すように悪態を吐いた。

「……どれだけの数が入り込んでいるんだ！ これではキリが無い！」

「外の壁に穴が開いているから、そこからまた入り込んでるんでしよう、ね！ っと！」

水の槍を操作して、私が相對していた内の一匹をしとめる。

「ちっ………！ 結界はどうしたと言っただ！」

「結界？ あの防壁とは別にあるんですか？」

その言葉に、首を傾げる。

彼女は剣を魔物に突き刺しながら、早口で説明してくれた。

「あの防壁は人間用だ！ 魔物は城にある結界石の力に阻まれて、入れないはずなんだ！」

「なるほど」

じゃあ、何らかの原因で、結界石がその力を発揮できない状態に陥っているのだろう。

盗まれたか、壊されたか、何らかの原因で力を失くしたか。

どれにしても、結界をどうにかしなければ、この状況は変わらない、ということだ。

「チハルさん、どうにかなりませんか……!？」

「ん、やってみる」

クオクンの言葉に、小さく頷く。力はなるべく隠匿しておきたいものの、既にクオくんにも見せているのだから、許容範囲内だろう。

「ロープのお姉さん、10秒でいいですから私に魔物を近づけないよう、守ってください!」

「何をするつもりだ!？」

その問いには答えず、私は集中する。

クオくんを使う時のような小規模なものではなく、この王都全域を包むような、そんなイメージ。持続性を高めるイメージじゃなく、広い範囲に広げるイメージを持って……よし、行ける!

129

「『魔を隔てし結界よ、我らに次元の加護を』 『たゆたう時間よ、流転する世界よ、加護を受けし地に祝福を』!」

私を中心として、結界がぐんぐんと広がっていく。

でも、まだ、まだまだ……もっと広げて……ここ!

キーン、と音がする。それは今までにないような遠い感覚で、私の耳に届いた。

「……はあ、しんどい……」

今まで使ったことのないほどの規模だからだろう。頭がふらふらし、ぐらりと身体が傾ぐ。

魔法ノ書があつてこれだ。普通に使おうとしたら、一体どうなる

んだらうと恐ろしくなる。

ふう、と大きく息を吐いて、倒れるようにその場に座り込んだ。

「ご苦労様でした」

クオくんがそう言って労ってくれる。

……ああ、癒されるよチハルお姉さんは。

と、癒してくれそうにない剣幕で、ローブの女性が私に詰め寄ってくる。

「な、何だ、今は……!?」

「この王都全体に結界を張りました。これ以上、魔物は入ってこれません。ただ、最高でも半日しか持ちませんので、早く魔物が侵入してきた原因を突き止めなきゃいけません」

クオくんにかけた結界魔法の有効時間が約三日だったので、これだけの広大な結界だと保つてもそれくらいだろう。

「あ、既に入っている魔物はどうしようもないので、倒してきてください。私はしばらく動けませんので」

「くっ……聞きたいことは山ほどあるが……また後で聞きに来る！ここに居ろよ！」

ローブのお姉さんはぎりど歯噛みし、悔しそうな声色で言う。

だが今はこの状況を何とかするべく、たった一本の突剣で魔物を殲滅しながら走っていった。

いやあ、やっぱり彼女はすごいな。

「フェンリル、疲れたー、もふもふしてー」

「……仕方がないのう」

クオクンの肩の上に陣取っていたフェンリルは、ぴよんと私の手に飛び乗ってくる。私はそれをもふもふと抱き締めた。ああ、やっぱり癒される。

しばらくそうしていると、クオくんが深刻な表情で話しかけてきた。

「……あの、チハルさん」

「クオくん、どうした？」

「僕のせい……なんででしょうか？」

そんないきなりの言葉に、私はきょとんとしてしまう。

「ええと、僕のせいって何が？」

「……この襲撃です！」

彼の顔を見れば、その顔は僅かに青ざめていて。真剣にそう思っているらしいことが伺い知れた。

「いやいや、ちょっと待って、クオくんどうしてそんな結論が……」

「だって、本当なら境界石っていうもので守られているんでしょう！？」

「……きつと僕がここに来たから、効果が無くなっちゃったんですー！」

確かに、そう言われればそう取れるかもしれない。私達の到着と同時に、王都が襲撃されたから。

タイミングが悪すぎただけなのだろうが、特別な体質を持つ本人からすれば深刻に受け取ってしまうのだろう。

私は、首を横に振る。

「……それは無いと思う」

「でも……！」

「大体、まだ王都に入っても居なかったでしょ？ それに、本当にクオクンのせいだとしても、襲撃が早すぎるよ」

そうやって諭すように言った私は、彼の腕を引いて隣に座らせる。

「だから、そんな風に自分を責めないの。絶対クオクンのせいじゃないから」

「……はい」

不承不承という風に、彼が頷く。まだ納得は出来ないが、私の言葉に否定は出来ない、そんなところだろう。

彼は、俯いて唇を噛み締めていた。

……うーん、どうにも根が深いな。仕方がないんだろうけど。

「……さて、と。これ以上休んでるのも申し訳ないし、私たちも魔物を倒しに行こうか。まだ、残ってるかどうかはわからないけど」「ここは王都だ。兵士や冒険者も沢山いるだろうから、私が行かなくても、殆どの魔物は倒されていると思う。が、ここでじっとして

いるのも、少し心苦しい。

あの女性には待ってると言われたけど、私は「はい」と答えていない。

それに再び彼女に会ったら、私の魔法についてあれこれ聞かれそうだろうから、正直あまり会いたくはない。

私たちは連れ立って、門の方に戻ることにした。

結局、私達が門に辿り着いた時には、どうやら侵入した魔物は全て倒された後のようだった。

死者は奇跡的にゼロ。

負傷者は兵士や市民にいくらか出たらしいが、既に治療を受けているそうだ。

今は残党が残っていないか、兵士達が死骸の回収や被害状況の確認を兼ねて、街中を見回っているらしい。

だが、物陰に隠れて人間をやりすぎず、なんて知能は魔物にはない。

そのため、残党はいないだろう、という緩んだ雰囲気は周囲には漂っている。辺りの賑わいも段々と元に戻っているようだ。

「……でも、馬車を襲った魔物たちは、妙に整った動きだったって

言ってたよね。それって、そういう行動をするだけの知能があるってことでしょう?」

「そんな魔物がそうそういるとは思いませんけど……」  
クオクンの言葉に、うーんと唸る。

こういう場合、何かしらの影響で魔物が知恵をつけ始めてるとか、誰かに操られるとか、そういう展開になる気がする。ゲームや漫画では、良くある話だ。

「まあ、これから注意するようにしようね。戦術を立てて襲い掛かってくる魔物とかも出てくるかもしれない」

今はまだ無秩序に襲ってくるから、対処するのは楽だ。

しかし、もしそれが連携を組んで、前から後ろから翻弄されるようになる、私たち二人では倒すのがかなり大変になるだろう。

そんなことにならないよう祈っておこうと思った。

「……そういえば終了証明書、貰ってなかったっけ。御者のおじさんも居ないし……どうしたらいいんだろう?」

「ギルドで聞いてみればどうでしょう?」

「……そうだね、そうしようか」

私達は、門番の人にギルドの位置を聞いて、その場所に向かうことにした。

結果的に、それは致命的な判断ミスだった。

……何故かと言えば。

「……やはり来たな」

ギルドで、彼女が待ち受けていたのだ。ローブで顔は隠れているせに、怒気がびんびんと伝わってくる。そんな彼女に、内心で苦笑を浮かべるしかなかった。

私たちは、一緒に依頼を受けたのだ。あの場から消えた私たちに、ここで張っていれば会えると思ったのだろう。そしてそれは大正解である。時間置けばよかったな、と思っても、もう遅い。

「話がしたい。付き合え」

「……その前に、護衛依頼についてどうすればいいか聞いてきますので、ちよつと待って下さい」

「ああ、そういえば先程の御者からこれを預かったぞ」  
彼女が取り出したのは、依頼の終了証明書だった。私は小さく礼を言いながらそれを受け取るうとしたのだが。

「これは、話が終わった後に渡す。だから付き合え」  
うわ、卑怯。

これは何としても話を聞かなくてはならないパターンだ。つまりは強制イベントである。

私は小さく溜息を吐いて、クオくんに話しかけた。



「クオくん、私はちょっと話してくるね。クオくんは、お手紙届けてきてくれる？」

「あ、わかりました」

カバンから取り出した一通の手紙と終了証明書を彼に手渡す。

手紙や荷物を届ける場合、届けた相手の人にサインを書いて貰うことで終了証明になるのだ。

(クオくんを宜しくね、フェンリル)

(うむ、わかった)

フェンリルにそう伝えてから、彼に手を振って見送った。

「……さて、どこで話しますか？」

「近くに酒場がある。そこに行こう」

そう言っただけで彼女はくるりと踵を返す。

未成年なんだけども、とか思いながら、私はその背を追いかけていった。

「奥に行こう」

「はい」

まだ昼だというのに、顔を赤くした男たちがガヤガヤとたむろする酒場。

そんな中を、彼女は堂々とすり抜け、奥へと進む。

カウンターの前を通る時、店の人に何か頼んでいたが、私は遠慮した。

二人掛けの小さなテーブルに陣取った彼女は、椅子に腰掛ける。

そこに店員さんが酒らしき赤い液体の入ったコップを持ってきてテーブルの上に置いた。

ワインだろうか？

それを見送ってから、彼女は初めて顔を隠していたローブを取った。

そんな彼女の素顔に、思わず息を吞んでしまう。

出てきたのは、目が離せなくなるほどの美人さんだったのだ。

長く輝いた銀糸は上の方で一本にまとめており、肌はまるで白磁のよう。

翡翠のような瞳に、切れ長な瞼。僅かに頬に乗る赤が彫刻のような美しさに、一滴の生気を与えている。

思わず、フォトシヨ加工かと疑うほどの美しさだった。

彼女は喉を潤すためか、飲み物を呷ってから口を開く。

「……自己紹介が遅れたな。私は、ルナフィリアだ。ルナとでもフィリアとでも、好きに呼べ」

「私はチハルです。ではルナさん、と呼びますね」

そこで、一瞬気まずい静寂が訪れる。微妙な空気を払拭するよう、ルナさんが一度咳払いした。

「……まずはチハル、先程は助かった。ありがとう」

「あ、い、いえ……」

いきなり謝礼から入られて、驚きに口が回らなくなる。

あの結界魔法について切り出されるのだろうと思っていたので、不意をつかれたのだ。

しかし、この話し合いが、これだけで終わるはずが無い。私は覚悟して、次の言葉を待つ。

緊張で空気が張り詰める中、彼女が口を開いた。

「そこでだ。お礼に、お前を私の近衛に任命しようと思うのだ」

え？ ……えっ!?

……あの、一体全体、どういう理論展開ですかルナさん。

待ち構えていたはずの内容から大きく逸れた言葉に、私は思わず

絶句してしまった。

疑問だけが脳内で飛び交い、ポカーンと彼女を凝視してしまう。その視線に、彼女はハツとして言った。

「ああ、名前だけではわからないか。私のフルネームは、ルナフィリア＝ジュビア＝ミルアーナという」

「えーと……」

ミルアーナ、という聞き覚えのある単語を、頭の引き出しから検索する。

ええと、ええと……そうだ。ミルアーナはこの国の、な、まえ……？

「……え、もしかして……王族ですか？」

それに肯定するように頷いて、彼女は続けた。

「私はこの国の、第二王女だ」

よりにもよって、王女ですか。

やっぱり強大な力というものは、厄介ごとしか連れてこないのだと確信した。

私は、一度深呼吸して、自分を落ち着かせる。そして、答えを伝えるべく、口を開いた。

「……謹んでお断りさせていただきます」

「なっ、何故だ!？」

がたん、と椅子が大きく鳴った。

愕然とした表情で勢い良く立ち上がったルナさんに、周囲の視線が集まる。

ルナさんがハツとしたように、ほんの少し表情を緩め、静かに座った。

視線が私たちから逸れたあと、彼女が悄然とした様子で呟く。

「……何故だ。これほどの名誉の、何が不満なのだ……？」

無然とした表情に、彼女が本気でそう思っていることを悟る。

恐らく、傲慢とか、尊大とかじゃなく、本気で彼女はそう考えているのだ。

これは、育ちや感覚の違いとしか言いようがないだろう。

事実、王女としての誇りを持ち、本気で国のことを考えているのである。彼女の近衛になるのは、この国に住み、この国を守ろうと考えている人たちからすれば、大きな名誉だろう。

だが、私にとって、この国はどうでもいい存在だ。

悪感情も好感情もなく、つまりは関心がない。

流石に、目の前で人が死にそうになっていたら、手が届く限りは助けたいと思う。

だから先程の襲撃で、王都を守ったけど、心情的にはこの国がどうなるうと私には関係ないのだ。

「私は、国仕えするつもりは全くありません。探し物をしています

ので、ここに留まることもありませんし。だから、それは受けられません。」「ごめんなさい」

ぺこり、と頭を下げる。

彼女は信じられない、といった様相で唇を噛み締めていたが、やがて諦めたように溜息を吐いた。

「……そう、か。ならせめて、その探し物を教えてくれ。出来る限りは協力したい」

「わかりました、ありがとうございます」

「3色の魔法使いが、何を探しているのか……個人的にも気になるしな」

そう言われて、そういえば彼女には水も風も見せていたな、と思いついた。

「あ、ルナさん、違います。あの結界は、光属性じゃないんです」

「……何だと？」

彼女が目を丸くする。

「あれは、何の属性にも属さない魔法なんです。つまり、魔法の才を見るためのファーストスペルと同じですね。……無色、とでも言えばいいんでしょうか？ 属性が無いので、あれだけの規模の結界が張れたんです」

考えておいた言い訳を口にすると、彼女は見るからに戸惑った様子を見せた。

「だが、それで、あんな……私は魔法についてそこまで詳しくない

が、しかし今までチハルの言うような無色の魔法など……」

「でも、光属性の魔法が使えないのは事実ですよ？」

これは今のところ嘘ではない。

納得しきれていないのか、彼女は不服そうな表情をしていた。

「まあ、私が2色か3色かについてはともかく。今回の襲撃、何が原因だったかわかりましたか？」

「あ、ああ……結界石が何者かに壊されていたそう。誰が何の目的でそれを行ったのかは不明らしい」

「結界石の予備は？」

「ないな。今、城にいる光属性の魔法使いたちが、必死に新しい結界石を作っているところだ」

てつきりどこかから発掘されたマジックアイテムとかだと思っただけで、どうやら城の魔法使いたちの作品であるらしい。

結界の力を何かに込め、持続性を高めているのだろう。

魔法の効果を何かに込めるといふ試みは面白い。あとで試してみようと思う。

「それにはどれくらいかかりますか？」

私の問いに、彼女は少し考える素振りを見せる。

「そうだな……早くても3日はかかるだろう」

「それまで結界は維持していた方がいいですか？」

「結界石が直るまで、多くの兵士が都には配備されることになっている。だから必要はない。だが、出来るならば被害を防ぐため、維持していてくれるとありがたいのだが……？」

彼女のどこか遠慮がちな声に、どうやら先程はにべもなく断りすぎたようだ、と反省する。

なるべく柔らかい声色を出すようにと考えながら、私は頷いて言った。

「わかりました。そうしますね。結界石が完成したら教えてください」

「ならば、チハルの宿を聞いていいか？」

「あ、まだ決まっていないんです。……ルナさん、安くてご飯の美味しい宿、知りませんか？」

私の問いに、ふっと彼女が微笑む。

「そうだな。私のおススメの宿を教えてやる。ついでに結界石が直るまでの代金は、私が払おう」

「あ、本当ですか？ ありがとうございます。クオくんの方もお願いしますね」

「あの少年だな？ もちろんわかっている」

彼女は、くい、と残っていた飲み物を全て呷り、テーブルの上に銀貨を一枚置く。

立ち上がりローブをかぶりなおした彼女について、私も酒場を後にした。

宿に向かう途中、不意に思い出したのか、ルナさんが口を開く。



「ところで、チハル」

「何ですか？」

「先程言っていた、探し物とはなんなんだ？」

「あ、そういえばそうでしたね。ええと……本なんです。魔力がこもった本」

もしかしたら形を変えているかもしれないが、そうになると探しようがないので本ということにしておく。

私が魔法ノ書を見つけたときは本のままだったし、たぶん本の形をしているだろう。

「ふむ……本か。タイトルはわかっているのか？」

「タイトルは……わかりません。ただ、強い魔力がこもっているとしか」

具体的な名称を言うかどうか迷って、結局言わないことにする。

もし、下巻を探している「上巻の持ち主、なんてことになったら目も当てられない。

あくまでも魔力の籠った本を探していたら下巻を見つけた、ということにしたい。」

「そうか、わかった。城の魔法使いたちに聞いてみよう。それと、宝物庫の中も見てみる」

「宜しく願います」

もしも宝物庫の中にあつたら、結構困った事態になりそうだ。

譲渡して貰えるかどうか。たぶん難しいだろう。

その時は、このカバンをマジックアイテムとして献上して、ご機

嫌取りをしよう。

それでも駄目なら、盗むしかない……が、それは最終手段だ。

「あ、そうだ。ルナさん、もう一つお願いがあるんですけど、いいですか？」

「何だ？」

「私のこと、誰にも言わないで欲しいんです。私のことっていうか、私が2色つてこととか、変な結界魔法が使えるとか」

「む……確約は出来ないが、出来るだけ秘密にしよう」

彼女がそう言って頷く。私は一先ずは安心だと、ホッと息を吐いた。彼女がそう言う以上、どうしようもない時以外は秘密にしてくれるだろう。

国なんか目をつけられたら、行動制限がかかるどころか、クオくんを人質にされて何を求められるかわかったものじゃない。

しかもこれでも、実力……というか魔法ノ書の存在を隠しているのだ。

本の存在を気取られたら、以前思ったように拷問されてあとはポイだ。

ああおそろしやおそろしや。

……それなら王女である彼女に本の搜索を頼むな、という話だが、今のところ手掛かりが全く無いのだ。使えるものは何でも使わなければ。

匙加減が難しいが、まだその加減は間違っていない、と信じたい。

「チハルさーん！」

なんて思っていたら、ちょうど前方からクオくんが走ってきた。

宿に案内してもらったことを、フェンリルを通して伝えてあったからだ。

「クオくん、手紙は？」

「ちゃんと届けてきました！ これ、サインしてもらった証明書です！」

「ん、ありがとう。お疲れ様」

ほんぽんと頭を撫で、その紙を受け取る。彼は嬉しそうに頬を緩ませた。

そんな彼を微笑ましげに見下ろすルナさん。

「少年、私の名はルナフィリアだ。ルナとでもフィリアとでも、好きに呼んでくれ」

「あ、僕はクオです、宜しくお願いします」

「ああ、宜しく頼む。……ところでクオ。良く私達の居場所がわかったな？」

「チハルさんに、魔法で教えてもらったんです」

あらかじめ伝えておいた言い訳を、クオくんは口にする。

その言葉に、ルナさんは驚いた表情を作った。

「チハルの魔法はそんなことも出来るのか？」

「あ、はい。風属性の魔法の一つで、遠くにいる人に私の声を伝えられるんです」

この話自体は嘘だが、事実、そんな魔法が風属性にあったりする。ただし、話したい相手にマーキングが必要だし、一方的にしか言葉を伝えられないので、いざという緊急時には全く使えないが。

あ、でも待てよ？ この魔法を物に込めることが出来たら、簡易通信機になるかな？

これもあとでやってみようっと。

「そうか。チハルは何でもできる、凄い魔法使いなのだ……」

何でもというわけではない。魔法ノ書に書いてあるものしか使えないのだから。

ただ、魔法ノ書に記されている魔法が豊富なだけである。

でも、魔法ノ書にある魔法って、どう考えても戦闘に偏っている気がするのよ、ただの気のせいだろうか？

戦闘用じゃないように思える地図作成魔法や前述の遠隔通信魔法も、考え方によっては戦争のような、大規模な戦闘行為に使えそう  
だ。

もっと生活に使う魔法とか、あっていいと思うんだ。洗濯魔法とかさ。

……心から欲しいよ洗濯魔法。

「……なあ、チハル？」

「何ですか？」

「もしも……もしもだ。いつか私が力を必要とした時、チハルの力を貸してくれないか？」

ルナさんが、どこか不安そうに言う。

何だか彼女に似つかわしくない表情だと思いながら、私は笑顔で答えた。

「そうですね。もし、その時に連絡が取れたなら、否とは言わないと思います」

何だかんだで、私は彼女のことを結構気に入っているのだ。  
卑怯だ、とか、どういう理論展開なんだ、とか色々思ったけど、それはそれとして。

「そうか……ありがとう」

ルナさんが、小さく微笑む。

その薄い笑みは、彼女の美貌をよりいっそう際立たせ、女の私でもちよっとどきどきした。

宿をルナさんに案内してもらった後、彼女に護衛依頼の終了証明書を貰う。

結界石についてか、探し物についてわかった時にまた来る、と言  
い残し、彼女は去っていった。恐らく城に帰るのだろう。

「それにしてもいい宿だ……はあ」

ちなみに彼女が案内してくれたのは、一晩当たり、二人で金貨3枚もかかる宿だ。

安くって言ったのに！ 言ったのに！

……ルナさんにとっては、安いのだろう。

結界石が直つたら、宿を変えようと思う。節約第一だ。ちなみに今の所持金は、金貨10枚＋端数、というところ。これでも一週間で頑張った方だ。

「あ、クオくん。ルナさんに聞いたんだけど、結界石ね、誰かに壊されてたんだって。だから、クオくんのせいじゃないよ」

「そ、そうですか……」

どこかホツとしたようにクオくんが笑う。フェンリルは慰めているのか、それとも良かったなどとも言いたいのか、彼の肩から頭の上に飛び乗り、ぽふぽふと飛び跳ねていた。

何だあの可愛い生き物。

「……そういえば、何で彼女、シルヴァニアなんか居たんだろう？」

ふと、思い出して呟く。

馬車の護衛依頼を受けていた、ということは、シルヴァニアに滞在していたということだ。

王女である彼女が、一体何の用で？

「ルナさんがって、どうしてですか？」

不思議そうにクオくんが問いかけてくる。

そういえば彼女が王女だということを、クオくんは知らないんだ。ルナさんも名前だけを紹介していたし、あまり身分について

は話題に出したくないのだろう。

どうやって誤魔化そうか考えているうちに、更に彼が続ける。

「……でも確かに、Ｃランクっていう腕じゃありませんでしたよね。何でＣランクの護衛任務なんて受けてたんでしょう？」

「あ、それはたぶん、Ｃランクがどうこうっていうより、王都行き  
の依頼を探しただけだと思うよ？」

「ああ、なるほど。……それにしても、凄かったですよね。僕も、  
あんな風に強くなりたいなあ……」

憧れの宿った瞳で、彼が呟く。彼の左手は無意識にか、腰の剣の  
柄を握っていた。

その仕草に、彼ももう一端の剣士なんだな、と実感する。

剣を握った期間なんて関係ない。焦がれて、憧れて、強さを求め  
て。そうやって、少しずつ成長していくのだろう。

……ああ、何だか、眩しいなあ。

「クオくんなら、きっとなれるよ」

「……はい！」

目を細め、彼の笑顔を見やる。

今度ルナさんに会った時、剣の稽古が出来る場所について聞いて  
みよう。

「うーん」

私は一人、唸っていた。

魔法を物に込めるといふ試みを始めて30分。見事に私は挫折していた。

いや、魔法を物に込めること自体は成功した。

したのだが、魔法の効力が弱体化しすぎて使えたものじゃないのだ。

100の力を入れようとすると、10しか入らず、その10も少し時間が経つと1未満にまで減ってしまう。

「やっぱり素材かなあ……」

魔法を込める対象物に選んだのは、その辺に落ちていた小石。それではこの結果も仕方がないかもしれない。

やっぱり宝石とかがいいのかなあ、でもそんな宝石買うお金なんか無いもんなあ、なんて思いながらテーブルの上に散らばった小石を、ちよんちよんとつついた。

「光魔法が使えればなあ……」

光は創造を司る属性。

そのため光属性魔法の一つに、想像したものを創造する魔法があるのだ。洒落みたのだが。

さすがに複雑な機械などは、私自身の想像が及ばないため作るこ



とが出来ないが、単純なものなら作ることが出来るようになる。

椅子の上で、ぐーっと両腕を伸ばし、身体をほぐす。

ばき、ばき、と背骨が鳴った。

「んー……あ、そうだ。宝石じゃなくて、金属とかどうだろう。銅貨は……何となく安っぽいし、銀貨で一度やってみようかな」  
金貨じゃない辺り、貧乏根性が染み付いている私だった。

「とりあえず……、声を届ける魔法で試してみよう」

前に一度ルナさんに説明したそれは、マーケティングした相手に声を伝える魔法だ。

マーケティング情報は5人まで保持可能で、それ以上は上書き保存となる。

だから、この魔法を物に込め、会話したいもの同士で持っている  
と、携帯電話のような役割を果たしてくれる、はずだ。「はず」なのは、まだ実際に試せていないからであり、こうなればいいなあ、  
という私の勝手な希望だからである。

まだこの魔法は呪文を覚えていなかったので、クオクンのいない  
内に、と魔法ノ書を元の姿に戻した。

「……『風よ、その自由な身で我の声を届けよ』」  
ページを見ながら、手に持っていた2枚の銀貨に、魔法を込めて  
みる。

「……お？」

小石に魔法を込めたときよりは、手応えがあった。

100の力を込めて、入ったのは60くらい、だろうか。

これから時間を置いてどうなるか調べてみないとわからないが、今の時点では意外といい感じだ。

「これでお互いにマーキングして、っと……どうだろう？　ちょっと試してみたいな」

魔法ノ書を腕に戻し、何となく手持ち無沙汰になった私は、きん、きん、と魔法をこめた銀貨をぶつけ合う。

クオくん早く戻ってこないかな、と扉に目を向けてから少しして、ようやく彼が戻ってきた。

「チハルさん。次、お風呂いいですよ」

「あ、クオくん、お帰り。待ってたよー」

ほかほか状態のクオくんが部屋に入ってくる。

ちなみにフェンリルは、しとつとした状態で、彼の頭の上に乗っていた。

この宿には、一泊が高いこともあってか、部屋に小さなお風呂が備え付けられている。

今までは水浴びか、お湯を貰って身体を拭くくらいだったので、久しぶりのお風呂は楽しみだ。

が、それよりも新しい試みを実験する方が楽しそうだったので、先にクオくんに入ってもらっていたのだ。

ほかほかな彼を手招きし銀貨を一枚差し出すと、首を傾げながらも素直にそれを受け取る。

「えっと、それに向かって『コール・チハル』って言ってくれる？  
あ、私がトイレに入ってからね？」

「……………？ わかりました」  
銀貨を持って、部屋のトイレに籠る。すると、手の中の銀貨が一瞬、白く光った。

…………… 第一段階は成功つと。次は肝心の第二段階だ。  
私は意を決して、そのコインに小さな声で話しかけた。

「…………… もしもし、クオくん聞こえる？」  
『…………… え！？ チハルさん、の声！？ あれ、何で銀貨から！？』  
銀貨からクオくんの驚いたような声が聞こえてくる。  
どうやら成功のようだ。私は笑顔のままトイレを出た。

「と、いうことで。コイン型簡易通信機が、出来ました！」  
「す、凄いです……………！」  
クオくんが私に歩み寄り、キラキラとした瞳で私の両手を取る。  
そこまで純粋に感心されるとこそばゆいものがあるが、悪い感じはしない。

「まだ完成じゃなくて、これから魔力の減衰の経過とかも見なきゃいけないだけだね。他にも、回数とか、時間とか、距離とか……………  
とにかく調べることはいっぱいだよ」

「それでも凄いです！」

「ありがとう」

彼の尊敬が籠った視線に、背中がそわそわする。

そういえばカバンは私が作ったと言っていないかったから、私が魔法で便利アイテムを作ったところを見せたのは初めてだ。ならこの熱のこもった視線も頷けるか、と一人納得した。

私は誤魔化すように笑って、クオくんの手から銀貨を返してもらった。

そのまま逃げるようにお風呂へ向かった。

そんなこんなで、この宿に泊まること三日。

朝起きて王都に結界を張ることから一日が始まり、朝食を食べた後はクオくとギルドに行き討伐依頼をこなし、依頼を終えた後はすぐに王都へ戻りもう一度結界を張ってから、私は魔法のテスト兼修行、クオくんは剣の素振り、そして夕食を食べて風呂に入って寝る。

そんなルーチンワークが出来上がりつつあった頃。

「チハル様、お帰りなさいませ。ルナフィリア様から伝言を預かっています。以前の店に4時に来てほしい、だそうです」

そんな伝言が舞い込んできた。

「あ、はい、わかりました。ありがとうございます」  
伝えてくれた宿の従業員にお礼を言い、ちらりと視線を柱にある時計に移す。

まだ4時まで余裕はある。今からゆっくり行けばちょうどいい頃合だろう。

「クオくんは、宿に居てくれる？ もし私が遅くなったら、ご飯は先に食べていいからね」

「はい、わかりました」

頷く彼をその場に返し、私は外に出る。

結界石の完成にはまだ少し早いはずだから、彼女の用件は魔法ノ書についてかな、なんて希望的観測を呟き、のんびりと歩いて酒場に向かった。

酒場に入ると、見慣れたローブが入り口の辺りで立っていた。  
私を見るなり、軽く手を上げ私を招きよせる。

「こんにちは、ルナさん」

「一昨日ぶりだな、チハル。とりあえず奥へ行こう」

「はい」

頷き、彼女の後をついていく。またしても彼女は何か頼んでいた

が、私はやはり遠慮しておいた。あまり、お酒は好きじゃないのだ。というか飲んだことがないのだけだ。

以前と同じテーブルにつき、店員が今回は透明な飲み物を持ってきたところで、ルナさんがローブを取る。今日は何のお酒かな、なんて考えていた私は、すぐに彼女の潜めた声に意識を引き戻された。

「城の魔法使いたちの寝ずの作業のお陰で、今日、結界石が完成した」

「あ、本当ですか？」

最低でも三日かかると聞いていたので、よっぽど魔法使いたちは頑張ったんだな、と思う。

内心で、ご苦労様です、と今頃ぶっ倒れているであろう魔法使いたちに労いの言葉を送った。

「チハルのお陰で助かった。謝礼などは出せないが、心から感謝していることは知っておいてほしい」

「あ、謝礼とかはいらないですよ。好きでやったことですし」

むしろ国から謝礼が、となるほうが私にとっては困るのだ。

それに、あの宿のお金を出してもらったことだけで満足だったり。

「……そして、もう一つ。お前の探し物についてだが」

彼女の深刻そうな顔に、私は結果を予想し、肩を落とす。

まあ、見つかるとは思ってなかったが、これで手掛かりがまたゼロになるかと思うと、溜息を吐くしかない。

「やっぱり、駄目でしたか……」

「いや、一応、情報らしきものはあった」

「え！？ 本当ですか！」

予想とは裏腹な言葉に、思わず頓狂な声を出してしまつた。

が、その明るいニュースとは裏腹な暗い表情を浮かべる彼女に、それがどうやら思わしくない情報らしいことを悟つた。

「……それで？」

「その前に、今回の事件の話をしたい」

いきなり飛んだ話題に、私は訝しげに思つて眉を寄せる。が、無駄な話をするとは思えないので、黙つて聞くことにした。

「私はここ一月、とある地下組織について調べていた。その組織は、メルティカ王家に強い敵対心を持っている者たちの集まりだ。今回の魔物による王都襲撃も、恐らくはそいつらの作戦行動の一部だろうと私たちは考えている」

あれ？ 何か話に暗雲が立ち込めてきたような？

「……あの、その話って、一般市民は知りませんか？」

「知るわけがないな」

「……もしかして、国家機密じゃありません？」

「そう言われると、そうなるな」

……ガッデム！

事も無げに言われて、私はその場に沈没した。

いやいや、何でそんなのに巻き込まんじやってくれてるんだろっ  
ナさんったらもう……！

「……チハル、どうした？」

テーブルにいきなり突っ伏した私に、彼女が心配そうに声を掛けてくる。

だがもう私のライフはもうゼロである。

「……すみません、どつと疲れたのでこのまま聞かせてください」

「ん？ あ、ああ、よくわからないがわかった。……それで、私はその地下組織を調べていたのだが、どうやらその組織が魔物を操っているらしくてな」

「……それで？」

「その、魔物を操るためのマジックアイテムが、どうやら本の形をしているらしいのだ」

がばつと、身体を起こす。

「本当ですか……！？」

「確証はない。が、諜報員からそういう話が上がっているらしいと聞いた」

「そう、ですか」

その情報が正しいとは限らない。限らないが、今のところ手掛かりはそれしかない。ならばそれに食いつくしかないだろう。

それに、魔物を操るなんて非常識な力を持っているというのなら、



魔法ノ書である可能性だつて高いはずだ。

「……で、それを私に言うってことは」

「ああ、チハルが思っている通りだ。もう潜伏先はほぼ全て突き止めてある。その内の一つを、私が落とすことになった」

つまり、その潜伏先の一つを壊滅するのを手伝え、その代わりにその本が私の探し物だった場合は、報酬としてお前にくれてやるから、ということだろう。

「……お話は理解できました。でも、一つ聞いていいですか？」

「何だ？」

「どうして私を誘ったんですか？ 確かに2色魔法使いですけど、城にはもつと強い魔法使いがいるんじゃないですか？」

私の言葉に、彼女は苦虫を噛み潰したような顔をする。どうやらあまり聞かれたくない話だつたらしい。

「……情けない話なのだがな。元々、誰が味方で、誰が敵かわからない状況だったのだ。だから私が動くことになった。貴族の方は、大体目星がついたのだが……そこに、今回の事件だ。通常、結界石のある場所に行けるのは、私達のような王族か、城抱えの光属性の魔法使いたちだけなんだ。……恐らく、その中にいるのだろうな、組織の人間が」

うわあ、としか言いようのない状態である。第二とはいえ、王女が動かなきゃいけないって、相当深刻な状況だろう。

まあ、そういう方面はとんとわからない私には口が出せないの上の人たちに任せるしかないわけだが。

「だから正直なところ、チハルの方が信頼できるんだ」

「この間会ったばかりですよ？」

「一緒に王都を守っただろう？」

「……そういう作戦かもしれませんよ？ 信頼させて内側からパクリ、みたいなの」

「私の姿を見ても、名前を聞いても、何の反応も示さなかったお前が何を言う。大体、あんな結界張れる奴が、そんな作戦に任命されるか、ばかもの」

苦笑気味に言われ、それもそうだと納得してしまった。

そんな稀有な魔法が使えるのであれば、違う役割に回されるだろう。

「動かせる兵士たちは、他の場所にある潜伏先を潰すことになっている。だから私たちは、少数精鋭で向かうことになったんだ」

「私たち」ということは、私以外にも誰か彼女に同行する者がいるのだろう。ただ、それでは余りにも心もとないから、私を誘ったということだ。

「お受けしたいのですが、……一つ、お願いしていいですか？」

「何だ？」

「クオくんのことです」

「ああ、それは任せてくれ。城で面倒を見よう」

私はそれに、ホッと息を吐いた。

彼の結界については、次元属性にテレポートの魔法があったりするるので心配していない。

が、彼を一人でここに残すことは心配だった。

厳密にはフェンリルがいるので一人と一匹だが、心配なことには変わりがない。

「……あ、そうだ。もし良ければなんですけど、城で面倒見るついでに、誰か、クオくんに剣の稽古をつけてもらえませんか？」

「ん？ ……そうだな。どうもまだ拙いようだし、この機会に学ぶのもいいだろう。話は通しておく」

「ありがとうございます！」

私は、使えるものは、どんどん使う主義である。どんなチャンスも逃さず、食いつくのが重要だ。

ただ、やりすぎると眉を潜められるので、相手の機嫌の見極めは大事だが。

「じゃあ、引き受けたいと思います」

「そうか、良かった。明日の昼、宿に迎えをやる。城に来てくれ」  
本当のことを言うと、あまり城とかには関わりたくないのだけど、こうなれば仕方がないだろう。

「はい、わかりました」

私はそう言って了承した。

それにしても、思ったより急な出発になってしまうようだ。

その魔物を操るといふ本が、魔法ノ書だったらいいんだけど。

私は期待と不安が複雑に混じりあった息を、長く長く、吐き出した。

ルナさんも一息ついて、しばらく放置していたために水滴のついたグラスを呷る。

「……なあ、チハル？」

「何ですか？」

「少なくとも私は、王族として誇りのある行動をしてきたつもりだ。そして私の家族も、誇りのある行動をしてきたはずだ。……だといふのに、このざまだ。何が、間違っていたんだらうな」

悔しそうに、そして苦しそうに吐き出す彼女に、私はなんと返しているか、わからなかった。

でも、一つだけ、言えることがある。

「……貴族とかは知りませんが、私はシルヴァニアで、色々な人を見てきました。そしてその人たちはみんないい人で、とても輝いた表情をしていました」

アルバートさんや、クリアさん、屋台のおばちゃんに、宿の人。他にも、私は色々な人と関わってきた。彼らは、みんないい顔をしていたと思う。元の世界にはなかった、輝きを持っていたと思う。

「それって、ルナさんたちが誇りある行動をしてきたお陰で守られてきたものだと思いますよ。もし国が荒れていたら、そんな顔、出ないはずですからね」

「……そうか。それも、そうだな。ありがとう、チハル」  
「いえいえ」

彼女の表情が少し緩んだ気がして、私は少し安堵した。

「……あ、そうだ。クオくんに事情を説明する時、ルナさんの身分  
って言っていていいですか？」

「ん？ クオに言っただけでなかったか？」

「……あ、隠してたわけじゃないんですか？」

思わず微妙な笑みを浮かべてしまう。

「敢えて名前だけで自己紹介したのかと思ったのだが、杞憂だった  
ようだ。」

「じゃあ教えちゃいますよ？」

「好きにしろ」

「好きにします。さて、私はそろそろ帰りますね。クオくんに説明  
したいですし」

「そうか。私はもう少し飲んでいくつもりだ」

言いながら、彼女はグラスを持ち上げ、僅かに傾ける。

「わかりました。じゃあ、また明日」

「ああ、明日な」

私達は、お互いに小さく手を振って別れた。

「ただいま」

「チハルさん、お帰りなさい」

部屋に戻った私を、クオくんが出迎えてくれる。

私は肩にかけていたカバンをおろしてから、ぼふんとベッドにうつ伏せにダイブした。

しばらくの間、ごろごろー、と柔らかい布団に癒されていたのだが、クオくんのじつとした視線を感じ、急に恥ずかしくなって起き上がった。

「ルナさん、何の用だったんですか？」

「ん、境界石が完成しましたーってのとね、あと、私の探し物の情報が見つかったんだ」

「本当ですか！？ 良かったですね！」

彼が自分のことのように喜んでくれる。

私もありがとう、と笑顔で応えた。

「……でもね、ちょっと危ない橋を渡ることになりそうだから、今回はクオくんにはフェンリルと一緒に留守番してほしいんだ」  
私の言葉に、クオくんは少し暗い表情をして、すぐにそれを取り繕うように笑う。

その、僅かだけ彼の心情を映し出す変化に、私は胸が痛くなっ

きつと、足手まといだから、とか考えているのだろう。

確かに実力的には、今はまだ剣を握ってばかりだからしょうがないけれど、それ以外の部分で、私は彼にたくさん助けられてきたのに。

でも、今それを言ったところで、彼は信じないし、余計に気を遣わせてしまっただろう。だから私は、それ以上このことについては言わなかった。

空気を変えようと、私は説明を続ける。

「で、その間クオくんは、ルナさんに頼んで城で預かってもらうことにしたから」

「……え？ お城で、ですか？ ルナさんに頼んで……って、え？」

「ルナさんって王女様らしいよ？」

「えええ！？」

彼の喉から、悲鳴にも似た声が上がる。

驚愕に彩られた表情に、そりゃあ驚くよなあ、と他人事みたいに思った。

大体、普通の王女様は、あんな風に剣とか使えないだろう。

「あと、誰かにクオくんの稽古を、ってルナさんに頼んでおいたから、頑張って剣の腕を磨いてきてね」

「あ、はい……！」

彼は一瞬驚いたが、すぐに嬉しそうに頷く。

きつと、彼にとって、いい経験になるだろう。

「そうそう。私がない時の結界だけど、テレポートの魔法があるんだよね、実は」

「てれぽーと？」

彼がつかない口調で言っつて首を傾げる。

恐らくだが、テレポートという概念がこの世界にはないのだろう。ならば口であれこれ説明するより、実演した方が早い。

投げ出していたカバンから銀貨を一枚取り出し、転移の際の目印となるように魔力を込める。

必ず目印が必要なわけではないが、初めてなので一応万全を期しておく。

ちなみにこの魔力込めのノウハウは、魔法を込める実験の過程で生まれた副産物だ。

「……クオくん、見ててね？ まず、この銀貨をここに置きます」

「は、はい……？」

銀貨を、辺りに何も無い床の上に置く。

クオくんは疑問符を頭に浮かべるが、私は説明せずに次の段階へ進む。

「そして私は部屋を出ます」

「え？ え？」

疑問符を頭の上に乱舞させるクオくんをその場に置き、私はいつものように、トイレにこもった。

そして、魔法を使用する。



「『踏み入れしは、次元の裂け目。我が願うは、愛しき姿』」  
魔力を込めたコインを思いながら呪文を唱えれば、瞬きした次の瞬間には、目の前にクオくんがいた。  
どうやら成功のようだ。

「ち、チハルさん……!？」

「と、まあ、レポートつていうのは、こつこつと」

「……っ! ……! ? ……っ、えっ……、あー……」

私が笑いかけると、彼は面白いくらいに狼狽する。

「……チハルさんつて、何でもアリなんですな……」

「今更じゃな」

なにやら葛藤した結論がそれらしい。

フェンリルの笑い声をバツクに、クオくんが疲れたような笑みを浮かべた。

「……もう僕、チハルさんは何かが根本的に違うんだって思っておきます」

それだったら、いちいち驚いて疲れませんか。

投げ遣りに呟いたクオくんは、心からごめんと言いたくなった。

でもここまで悟ってしまったのなら、その内伝えるであろう、私が異世界から来たということもすんなり受け入れてくれそうだ。

「……ごほんつ。ということ、クオくんにはこの銀貨を持ってもらいます。で、レポートする前にはフェンリルを通して教えるから、周りに何も無い場所に置いてね」  
そうしないと、\*おおつと\*とかいう状態になりかねない。  
つまりは、「かべのなかにいる」だ。

「わかりました」

彼は頷き、銀貨を受け取る。

その表情はどこか達観して見えた。

そして、翌日。

ルナさんに迎えを寄越すと聞いていたので、今日はギルドにも向かわずのんびりと宿で過ごす。

余りにも暇だったので、銀貨でレポート魔法や結界魔法が使えないかを試してみたりもした。

しかし、色々とやってみたのだが、銀貨ではそれらの魔法を発動することが出来なかった。

ちなみに、100の魔法をこめようとした時に、どれくらいまでその物質に入るのかを魔導率、100の魔法がこもった時に、どれくらいの量までそれを保持し続けていられるのかを魔蓄率、とそれぞれ呼ぶことにしている。

今までの実験で、魔導率は鉄<銀<銅<金、魔蓄率は鉄||銅<銀<金だということが判明している。鉄はクオクンの剣を少し借りて試したものだ。

お金に余裕が出来たら、もしくは光属性の魔法が使えるようになつたら、宝石類も試したい。

閑話休題。

真昼を少し過ぎた頃、一人の男が宿を訪ねてきた。

綺麗に伸びた姿勢とはきはきした声に、恐らく兵士なのではないだろうか、と推測する。

「チハル様にクオ様、ですね？ 私はルナフィリア様の使いの者です。お迎えに上がりました」

「あ、はい、ご丁寧にありがとうございます」  
「では行きましょうか」

彼が先行して歩き出し、私たちもそのあとをついて行く。フェンリルはクオくんの腕の中だ。

人ごみの中歩く私たちは、何度かその姿を見失いそうになっただけれど、その度に男は歩く速度を落としてくれた。

そんな、人に気を遣い慣れている様子に、国というのは教育が行き届いている場所なんだな、とぼんやり思った。

「……おおー」

辿り着いた王城に、私は酷く興奮してしまふ。

遠くから何度か見たことはあったが、近寄りたくなくて一度も来たことがなかったのだ。

でも、いざ来てみると、すぐくうずくずする。探検したいと全身の細胞が訴えてくる。

が、そんな暇あるわけがなく。

客間らしき一室に、真つ直ぐ私達は案内された。

「こちらでお待ち下さい。ルナフィリア様をお呼びしてきます」

「はい、宜しく願います」

そう言つて男が去つてから、クオくと二人で革張りのソファに座る。身体が沈むような感触に、あ、これ高いな、と確信した。

よくよく辺りを見てみれば、床には金糸で刺繍された赤絨毯がしかれており、見るからに高級そうであった。

かけられている絵も、私にはよくわからないが名のある画家のものなのだと思う。

この部屋にあるものだけで、きっと途方もない金額になるのだろう。

そう思った途端、何だか眩暈がした。

「待たせたな、チハル……ってどうした？」

ちようど入ってきた彼女が、項垂れている私を見て疑問に満ちた声を上げる。貧乏人の気持ちなんて金持ちにはわかんねーよペツ、と、心の内で思ったような気がしなくもない。

私は気を取り直し顔をあげ、彼女を視界に入れる。彼女はいつもの地味なローブ姿でなく、白く輝く軽鎧をつけていた。

その鎧は彼女の銀髪に良く似合い、まるで女神か天使か、はたまた戦乙女か、といった様相だ。

「えっと……ルナさん、ですか？」

隣のクオくんが、震えた声で言う。

ふと、クオくんと会うときのルナさんは、いつもローブ姿だったことを思い出した。

「どうした、クオ。何故そんな顔をしている？」

「……クオくんに素顔見せたの、初めてですからね。いつもルナさん、ローブ着てましたし」

「む、そうだったか。ならば、この姿では初めまして、だな。改めて宜しく頼むぞ、クオ」

「は、はいっ……！」

彼の赤く染まる頬に、まさか惚れたか？ と邪推してしまう。

限りなく茨の道だが、第二王女だし、可能性が全くないわけじゃないかもしれないので頑張れ。

そもそも惚れた腫れたの話ではなく、ただ単にルナさんの容姿に見とれただけかもしれないが。

私だってそうだったのだから。

「ではチハル、行こうか。クオはメイドに案内させる。少しここで待っていてくれ」

「あ、はい、わかりました」

「じゃあね、クオくん。何かあったら……」

フェンリルを指差す。クオくんは了解したのか、小さく頷いていた。

（フェンリルも、またね）

（気をつけるんじゃないぞ）

（ありがとう）

手を振って、クオくんにお別れを言う。そしてルナさんの後を歩いて、城の中を進んでいった。

そうして連れられたのは、城の一室だった。

誰かとすれ違ったたびに、誰だあの町娘は、という視線を向けられ、非常に居心地が悪かったので、部屋に入れたのは嬉しい。

客間のような煌びやかさはないその場所は、どうやら誰かの執務室らしい。たぶんルナさんのだろう。

一面には本棚が並んでおり、大きな執務机の上には紙の束がどんと積まれている。

「さて、チハル。まずは、これを」

引き出しから取り出された一枚の紙を渡される。

それに軽く目を通すと、今回のことについて書いてあった。

今回の任務で、一気に組織を壊滅させるつもりらしく、同時進行で事を起こすらしい。そうしなければ一箇所潰した時点で情報が漏れ、潜伏先を変えられてしまうからだろう。

それぞれ、第一王子はペルテストの街、第二王子は港町シーナ、第三王子はここ王都デルティア、そして第二王女であるルナさんがシルヴァニアの街が割り当てられていた。

第一王女が載っていないのは、恐らく武芸に恵まれていないのだろうと思った。というより、ルナさんが恵まれすぎている、と言った方がいい気がする。

それより、私達が行くのはシルヴァニアか。思ったより近い。クオくんを城に預ける必要もなかったか。まあ、今更だが。

作戦内容は、組織の人間の捕獲、または殺害。ただし、幹部だけは必ず捕まえるように、とのことだ。

ちなみに私は、敵を無力化するだけに留めるつもりだ。人殺しは、きっと私には出来ない。殺そうと考えれば考えるだけ、私は動揺するに決まってる。

それくらいなら、容赦なく意識を刈り取って先に進んだほうがいだろう。魔法万歳。

「それを読んだら、すぐに出発するぞ。同行者は私たちのほかに2

名だ」

「わかってましたけど……少ないですね」

「信頼できる人員のほとんどが、他の街に回されているんだ。シルヴァニアより、他の場所の規模の方が大きいからな。だから、チハルには期待している」

「出来るだけ頑張ります」

大規模な戦闘は、剣士よりも魔法使いの方が適している。

ちまちまと剣で薙ぐよりは、魔法でばーんと攻撃した方が遥かに効率が良いのだから。

彼女はそれを期待しているのだろう。

了承の意を込め、頷いた。

「なら、行くか」

そう言って立ち上がったルナさんは、すぐ近くにかけてあった、いつものローブをまとい、本棚に手を掛ける。

まさか、と思った瞬間、彼女が一冊の本を引き抜いた。

その途端、ががが、と本棚が動き、道が現れる。

「私専用の抜け道だ。外に繋がっている。待ち合わせ場所までの近道だから使っぞ」

……この人、どこまで国家機密を私にばらすつもりなんだろう。

真正面から私を近衛に誘ったら断られたために、搦め手で来ているようにしか思えない。

そんなことまで知ったんだ、消されなくなかったら私に仕えるゴルーア、みたいな展開を狙っているとしたか思えない。



でも知り合って少ししか経ってないけど、彼女はそんな性格じゃないだろう。

だから実際は、私を信じているがための行動なのだと思います。

……ただのうっかりさんじゃないよね？ 考えなしとかじゃないよね？ 違うよね？

ルナさんが我が道を……いやいや、その抜け道に行く。

私も引き攣った笑顔を浮かべながら、彼女の後をついていった。

ちなみに隠し通路は、右に行ったり左に行ったり上に行ったり下に行ったりで、まるで迷路のようだった。どうやら、王都に張り巡らされた地下通路に繋がっていたらしいです。

どうして、こんなにあからさまに敵視されてるんだろ。険悪なオーラを垂れ流し、私を睨みつける男に、そんな疑問が浮かんで消える。

ルナさんと向かった待ち合わせ場所にいたのは、冒険者に扮した二人の男だった。

「宜しくお願ひします、チハルさん」

「あ、はい、宜しくお願ひします」

一人は、おかつぱな青の髪の人。

穏やかな表情を浮かべる彼の名前はヴィトで、この国の騎士団の副団長らしい。

「……お前か、チハルと言うのは」

「……はい、そうですけど」

もう一人は、短い金髪の人。

キツとした目と敵意むき出しな表情で、さっきから私を睨みつけてくる彼の名はグレイ。こちらは、第二王女近衛隊の隊長だそうだ。

「どうしたんだ、グレイ？」

「何でもないです、ルナフィリア様。早く馬車に乗って出発しましょう」

ルナさんの問いかけに、態度を一変させる彼。ヴィトさんはそれ

を見て、しょうがないなあ、と言わんばかりの微妙な苦笑いを浮かべていた。

ええと、つまりは、嫉妬なのだろうか？ ルナさんが私と一緒に来たから？

良く判らないが、そう思っておこう。

そう考えていた方が、原因が全くわからないよりは精神的に楽だ。

すぐ傍に用意してあった馬車に、ルナさんが一番最初に乗る。馬車は王族が乗るものとは思えないほどに質素なものだったが、大々的な行動でない以上、これくらいの方がいいのだろう。

ヴィトさんは御者の位置に座る。そして私が乗ろうと馬車に足をかけたとき、ぼそりとグレイさんの声があった。

「ルナフィリア様の申し出を断つたらしいな」

その言葉に、私は顔を強張らせる。

恐らく、近衛についてのことを言っているのだろう。ルナさんが、この男に伝えたに違いない。

そして、悟った。

……ルナさんじゃないですか、この視線の原因！

これから任務を共にする人間に、どうしてそれを話してしまったのか。

近衛を断ったような人間に、近衛が……しかも隊長が、いい感情

を持つわけがないというのに。

ルナさんはうつかりだな！ このうつかりハチベエめ！

はあ、と重い溜息を吐く。

この任務が終わるまで、針のむしろに座り続けるしかないのだろ  
う。

これからの心労を思うと、私は憂鬱になった。

「チハル、乗らないのか？」

「あ、いえ、今乗ります」

彼女に言われ、我に返った私は、かけていた足に力を込め馬車に  
乗り込む。

最後に 그레이さんが乗り込み、馬車の入り口が閉じられた。

席の位置は、右奥がルナさん、私はその隣、 그레이さんがルナさ  
んの向かい側だ。

「そうだ、チハル。この馬車に結界を張ってくれないか？」

「あ、そうですね。わかりました。『魔を隔てし結界よ、我らに次  
元の加護を』」

私は頷き、魔物避けの結界を張る。

すると、向かいの 그레이さんが瞠目して、ルナさんに、問いかけ  
た。

「……彼女は光属性の魔法使いなのですか？」

「違うらしいぞ。属性なしの結界らしい」  
「……そんな魔法、聞いたことがありますね」  
本人そっちのけの会話に、段々とむなしくなってくる。  
ルナさんはともかく、グレイさんは明らかに私を無視しているから尚更だ。

(フェンリルううううー！)

(っ！ な、なんじゃ、いきなりどうしたんじゃ!?)

心話で絶叫してみたら、不意をつかれたフェンリルが素っ頓狂な声を上げる。

私はそんなフェンリルにフォローも入れず、こう続けた。

(一人って、こんなに辛いことだったんだね……)

(……わしはクオ坊の無言の視線が辛いがのう)

どうやら現実でも同じような声を上げてしまったらしい。

恨みがましい声に、えへ、ごめん、と軽い調子で謝っておいた。

シルヴァニアへと向かう馬車の中では、妙に張り詰めた空気が漂っていた。

ちりちりと、まるで魔物と相対しているかのような殺気に、がりがりと精神が削られ、疲弊してしまう。

「……チハル、顔色が悪いが大丈夫か？」

「あー……大丈夫です」

が、それを気付けないルナさん。

というより、彼女が気付かないように殺気をコントロールしているに違いない。見るからにルナさん命なグレイさんなら、それくらいやっていそつだ。

結界で殺気を阻害できないだろうか。

途方もない考えだが、心から試してみたくなるから困る。

それとも、こつそり魔法で馬車の中の人間を眠らそうか？

出来なくはないが、そんなことをすれば、今まで以上に不信感を植え付けることになりかねない。

じゃあルナさんと何かお話……したら更に視線が痛くなりますよねーですよねー。

いいよ、こうなったらフェンリルとお話するから！

(ねえねえ、フェンリルー、今暇ー？)

(残念じゃが、クオ坊と話しておるので暇じゃないわい)

……何という四面楚歌！

そんな風に現実逃避と泣き言を重ねながらも、なんとか半日耐えた私は、シルヴァニアに到着した時、叫び出しそうなくらい嬉しかった。

「チハルはヴィトと一緒に行って、宿を取っておいてくれ。私はグレイと一緒に下調べに行ってくる」

「あ、はい、わかりました」

ルナさんの言葉に、ようやくあの視線から逃れられる、とホッと表情を緩める。その瞬間、またしてもグレイさんに睨まれた気がしたけど、気のせいだと思っておいた。精神衛生上。

彼らの背を見送り、姿が見えなくなったところで、私は一つ安堵の息を吐いた。

「チハルさん、大変でしたね……」

ヴィトさんが心から、といった様相で、労わってくれる。

げんなりとしていた私はそれだけで少し癒されたが、今まで放置されていた身としては、文句の一つや二つや三つほどは言いたくなるわけで。

彼に、少しきつめの口調で言ってみる。

「ヴィトさん、あれ、何とかならないんですか？」

「……すみません」

困った表情を浮かべて、謝罪を口にするヴィトさん。どうやら、どうにもならないらしい。

つまるところグレイさんは、筋金入りの“ルナさん馬鹿”らしかった。

そして、それにまるで気付く様子のないルナさんは筋金入りの鈍

感、と。

ある意味ピツタリな主従である。

「任務の時には、私情は挟まない人間ですので……」  
そんな時にまで私情を挟まれたら困る。

後ろから刺されないか気にしながら戦うのは、絶対にごめんだ。

「チハルさんの良心に頼る形になってしまい、本当に申し訳ないのですが、もう少しの間だけ耐えてください。お願いします」

「まあ……ルナさんの申し出を、一も二も無く、断ってしまった私が悪い……ってわけでもないと思いますが、波風立てるのも好きじゃないんで、そうします」

「……ご迷惑をおかけしますが、宜しくお願いします」  
心底申し訳なさそうに頭を下げるヴィトさんの姿が、まるでどこぞのサラリーマンのように煤けて見えて。苦勞してるんだなあ、とちょっと同情心が湧いた。

「そろそろ行きましようか」

「はい」

ヴィトさんがそう言って歩き出す。私も彼の横についていった。宿に向かう間、ふと疑問を感じた私は、彼に質問する。

「ところで、ヴィトさんって、 그레이さんと仲がいいんですか？  
フォローの仕方が、妙に板について見えたんですけど」

後半に、彼は微笑を引き攣らせた。凶星だな。



「……ええ、私たちは幼馴染で、共に騎士団を目指した仲でした」  
「へえ……」

「ですが……ある日、一瞬でしたが、ルナフィリア様を拝見する機会があつたんです。それからグレイは道を踏み外……いえ、彼女の近衛になることを目指すようになりました」

途中まで本音が駄々漏れていた気がするが、スルーしておいた。

彼にとっては、一緒に夢を語っていたはずなのに、気付いたら裏切られていたようなものだ。それくらい言う権利が、彼にはあるだろう。

「ルナフィリア様は、確かに素晴らしい方です。グレイア王からはその巧みな剣技を、后であるメルカート様からは、その類稀なる美貌を受け継いでおられます」

確かに、ルナさんは強く美しい。憧れる者は、多いだろう。

激しくうつかりさんなところを除けば、完璧な人だと私も思う。

「それは事実なのですが……グレイは少し、行きすぎ、と言ったら良いのでしょうか？ ……ああ、本人には内緒ですよ？」

少しじゃなく、盛大に行きすぎだと思う。

むしろ時代の最先端を生きすぎて逝きました、って感じ。

そうじゃなかったら、私みたいな少女（と自分で言うのもなんだが）を、あんな風に威圧しないだろう。

「……ヴィトさんも、今までも苦労したんでしょうね」

「……はい、しました。どうしてもか、彼を止めるのはいつも私なんです」

「……悲惨ですね」

「……ええ」

哀愁漂う空気に、お互い溜息を吐く。

物悲しい気持ちになったが、ちようどよく宿に辿り着いたお陰で、そのネガティブなオーラもいくらか払拭された。

ちなみに宿は、以前この街に居たとき泊まっていた場所より、2つ程グレードが上の場所だった。ブルジョワめ。

「部屋は三室取りでしょうか。ルナフィリア様、チハルさん、私とグレイ、の部屋割りです」

「ええ、そうしましょう」

その提案に即答する。

その部屋割りなら、グレイさんを無闇に刺激することもないだろう。

ルナさんには、どうしても私とチハルの部屋を分けたのだ？ と聞かれそうだが、適当に誤魔化すことで意見が一致した。

「……ヴィトさん、私は先に部屋で休んでいますね。もう疲れました」  
主に精神的に、とは心の中で。

「ええ、そうしてください。ルナフィリア様がお帰りになられたら、お呼びしますので」

「はい、お願いします。じゃあ」

軽く手を振って、自分に割り当てられた部屋に入る。  
そして蝶が花に誘われるように、私はカバンを下ろす余裕もなく  
ベッドへと直行した。

「……………ん、ふあ……………」

目が覚めて、私はぼんやりとしたまま起き上がる。辺りは薄暗く、  
どうやらもう夜のような。腰を捻って鳴らし、何となくすっきりし  
たところで、月明かりを頼りにランプを灯した。

部屋の中を照らす光にホツとしながら、服が乱れていないかチエ  
ックする。どうやら大丈夫らしいことを確認してから、ふと呟いた。

「……………起こされなかったってことは、まだルナさんたち、帰ってき  
てないってことだね」

なら、今後のために魔法を確認しておこう。役に立ちそうな魔法  
は一応一通り覚えていたが、一度も使ったことがないものもある。  
呪文を間違って覚えていたら今回ばかりは洒落にならないし、ま  
ず発動するかどうかも確認していないというのはまずいだろう。

そう考えた私は、魔法ノ書を元の形に戻し、一つ一つ確認しなが  
ら読み、試していった。

さて、30分ほどそうしていただろうか。扉を二、三度打ち付け  
る音がした。

「はい」

「ヴィトさんだろうと予想をつけて扉を開く。ノックの主はやはり彼だった。」

「起きておられましたか」

「さつき起きたんですけどね」

「そうでしたか。では、ルナフィリア様の元へ向かいましょうか。紹介したい方も居ますし」

「あ、はい」

「紹介したい？ 誰だろう、と首を傾げながら彼の後について歩く。ルナさんの部屋に行くのかな、と思っていたのだが、着いたのはヴィトさんたちに割り当てられた部屋だった。」

「……あ、宿の部屋とは言え、あの人がルナさんの部屋に他の人を入れるわけが無かった」

「ハッと思いついて思わず呟くと、ヴィトさんが苦笑する。どうやら私の言葉は、満点大正解のようだ。」

「ヴィトさんがノブに手を掛け、扉を開く。」

「だが、部屋の中に居たのは、予想外な人だった。」

「あ、アルバートさん！？」

「魔法使いとは、チハルのことだったのか……」

「どうやらあちらも私がいることは知らなかったらしく、彼にしては珍しい、驚きの滲んだ声を上げている。」

「む？ チハルはアルバートと知り合いだったのか？」

「知り合いというか、恩人なんです。その、色々ありまして。……それより、どうしてアルバートさんが？」

「やはりこの人数では、心もとないからな。 그레이が、この街に信頼できる人間がいる、というのであたってみたんだ」

ええとつまり、 그레이さんとアルバートさんは、知り合い？

一体どんな知り合いなのか気になったが、聞ける雰囲気ではなかった。ここでは口をつぐむことにした。あとでアルバートさんの方に聞こう。

そんな私たちの会話を黙って聞いていたアルバートさんが、不意に口を開いた。

「……チハルは水属性ではなかったか？」

その言葉に、私のことを水属性の魔法使いだと伝えていたことを思い出す。

「ならば、この任務には向かないのではないのか？」

水は治療魔法が中心で、攻撃には向かないとされている。

が、魔法ノ書クオリティのお陰で、水で木とか鉄とか両断できるので、そんな常識はすっかり忘れていた。

しかし、それを言っても、実際に見ない限り信じてもらえないだろうし、私も今更2色を隠すつもりはない。

「えっと、私、風属性も使えるんです。風には、拘束魔法や催眠魔法もあるので、大丈夫です。お役に立てると思います」

「そうか、それは頼もしいな。安心して背中を任せられる」  
彼のそんな言葉に嬉しくなって、私ははにかんだ。

「だが、ならどうしてギルドカードには水、と？」

「あ、ギルド登録の時は、水だと言ったらそのまま流されて、それ一つで登録されてしまったんです。まあ、その時は属性にこだわっているほど余裕ありませんでしたし」  
という言い訳を、即興で作ってみる。

安易な誤魔化しだと我ながら思ったのだが、アルバートさんはそんなに信じたようだった。

安易に信じすぎな気もしたが、きっと私の“事情”を知っているためだろう。嘘だけだ。

「さて、じゃあ任務について話し合おうぞ」

ルナさんの言葉に、この場にいる者たちの顔が引き締まる。

そしてそれを確認した彼女は、王女に相応しい風格で話を進めていった。

組織の人間が根城にしているのは、とある一軒の家屋だという。表から見れば普通の家なのだが、地下に隠し部屋があり、この街の下水道に繋がる抜け道があるらしい。

どうやって調べたのかと思ったが、どうやら諜報部隊からの情報らしかった。

……すごいな、この国の諜報部隊。

さてさて、作戦内容は至極単純だ。  
ルナさんにグレイさん、そして私が表から突入。

それと同時に、アルバートさんとヴィトさんが地下から攻めて混乱させ、逃げ道を防ぎながら敵を一網打尽にする。  
たったそれだけである。

個々の能力が高いからこそ出来る作戦だ。

「この作戦は、タイミングが重要だ。チハル、確か遠くに声を届ける魔法があるんだっただな？」

「はい、あります」

「突入時にそれを使って、ヴィトかアルバートに声を届けてくれ」

「……あー、それなんですけど、ちょっといいですか？」

私が発言を求めると、グレイさんだけは微妙に睨みつけてきたが、他の面々は促すような視線を送ってくる。

私は頷いて、カバンから二枚の銀貨を取り出した。

それらは、魔力の減衰の過程を見た上で、使用するのに問題ないと判断した、コイン型簡易通信機・完結篇、である。何が完結なのかは、自分でもわからない。語感が全てだ。

「その銀貨がどうしたのだ？」

「えっと、こつちを持って『コール・チハル』って言ってください」

「……？ 『コール・チハル』？」

私の持っている方の銀貨が、一瞬輝く。

それを確認した私は、声を投げかけた。

「ルナさん」

『ルナさん』

言葉が、二重音声となって耳に届く。

瞬間、周りの人間が硬直した。

「な、どうなっている!？」

『な、どうなっている!？』

特に驚いた様子のルナさんが、声を荒げる。

「声を届ける魔法を、銀貨に入れてみたんです」

『声を届ける魔法を、銀貨に入れてみたんです』

小さい声で銀貨に話しかけると、同じように響めた声がルナさん



のほづの銀貨からあがる。またしてもルナさんは目を丸くし、食い入るように手の中の銀貨を見つめていた。

二重音声がそろそろ鬱陶しくなってきたので、通信を切る。

「銀貨を持った同士で会話が出来るんです。ただ、一枚の銀貨で5人までしか相手を登録できないので、少し使い勝手は悪いですが」  
「いや、それでも……こんなマジックアイテムが作れるものなのか……」

心底驚いた、という様子でルナさんが言う。他の面々も感心した様子でいたので、何だか気恥ずかしくなった。

「……と、いうことで、それはルナさんに預けます。で、こちらはヴィトさんに渡します。……あ、その前に発動時の言葉を変えましょう。それぞれコールのあとに名前で相手に届くようにしますので、ルナさんちよつと貸してください」

「あ、ああ……」

どこかまだ呆けた表情の彼女から銀貨を受け取り、二枚の銀貨に魔力を込めて呼びかけの言葉を変更する。

うん、これでよし、と。

「はい、これで大丈夫です。はい、ルナさん。こっちはヴィトさんに」

「ありがとう、チハル」

「ええ、確かに受け取りました」

二人が銀貨を私の手から受け取り、まるで貴重品を扱うような慎

重さで懐にしまう。そこまでするものじゃないのになあ、と思いつつも、気持ちはわかるので何も言わずにおいた。

「……ところでチハル、これはお前が作ったんだよな？」

「えっと、そうですね？」

「何故、銀貨なんだ？」

「ああ……」

私は苦笑して答える。

「本当は宝石とかで試したかったんですけど、お金がなかったんです」

「それで本当のお金で試したのか」

「……最初は試すだけのつもりだったんですけどね、存外に上手くいったので、つい」

「国法で複製や鑄潰すのは禁止されているが、原形のまままで使うのはアリだ。というより、原形のまま、貨幣以外の用途が考えられなかったただけだが。……だが、あまり推奨はしないぞ」

「あははは……」

空笑いで誤魔化しておいた。

「なあ、チハル。この騒動が終わったら、このマジックアイテムをまた作ってくれないか？ 勿論報酬は払う」

「……えっと、いいですよ？」

この騒動が終わった時、まだ私がこの世界にいるかどうかかわからないけれど。

一応了承しておいた。

「……さて、話が逸れたな。続けるぞ」  
そう言って彼女は、わき道に逸れまくった話題を引っ張り戻す。

「作戦の実行は、明日の真昼」

「……え、昼ですか？」

こういって作戦って、夜に遂行されるイメージがあるけど。

「夜は暗い分、余計に警戒されているからな。場合にもよるが、住民に被害が及ばないような作戦の時は、逆に昼の方がいいんだ。不意もつける」

「なるほど」

私はその説明に納得し、頷く。

まあ、彼女が言うなら間違い無いのだろう。

「さて、他に質問はないか？」

彼女が見回すが、他に質問は上がらなかった。

「じゃあ、今日はもう休み、各自、明日に備えること」

各々が各々の言葉で、了承を伝える。

それを受けたルナさんは、満足げに頷いた。

話し合いを終えたあと、ルナさんと二人で宿で夕食を取った私は部屋に戻る。

ちなみに男たちは酒場に向かったらしい。

グレイさんまで一緒に行ったのは意外だったが、アルバートさんと知り合いと言っていたので、その関係だろう。

することも思いつかなかった私は、そのまま服を脱いでベッドにもぐりこんだ。

「……………ふう」

ベッドの中で天井を見上げ、一息つく。

異世界生活初日以来の一人きりに、少しの孤独感を覚えた。しかも初日は、疲れていてすぐに寝てしまったため、実質初めてと言ってもいい。

何だか、寂しい。

やっぱりクオくんを抱き枕にしつつされつつ、そんな夜がいいなあ。

クオくんのところに戻ったら、ぎゅーって抱き締めて寝よう。

ちょうど、そんなことを思っていた時だった。

(チハル、起きておるか?)

(あ、フェンリルー。起きてたよー)

睡眠を妨害しないように潜めた声に、私はのんびりと返す。  
するとフェンリルはホツとしたように続けた。

（そうか、良かったわい。クオ坊が不安そうなので。チハルさんの迷惑になりますから、なんて言って連絡は頑なに拒否していたのじゃが、明らかに寂しそうじゃな。ただの老婆心じゃ）

（あ、そうなんだ）

何だかその言葉に、無性に嬉しくなった。私がいなくて、彼も寂しく思ってくれているのか。

彼にしてきたことは余計なお節介じゃない、と思っていいいのか、今のところは。

（うーん……クオくん通信コイン渡せば良かったね。フェンリル越しに連絡取れるからーって、持たせなかったけど……やっぱ直接お話したいよね）

（そうじゃな……）

（よし！）

がば、っと起き上がる。

（フェンリル、テレポート用の銀貨を床に置いて？）

（ん、来るつもりじゃな？ わかった、こっそり置いておく）

服を着てから、三枚の銀貨をカバンから取り出す。

その内二枚は通信用の魔法が施してあるもので、残りの一枚は普通の銀貨だ。

その一枚に魔力を込め、目印として床に置く。これで帰りもばっちりだ。ただ、ルナさんが尋ねてきたりする可能性もあるので、早

めに帰ってこなくてはいけないが。

(チハル、いいぞ)

(はいよー)

「『踏み入れしは、次元の裂け目。我が願うは、愛しき姿』！」

目を閉じ、そして再び開けた時には、辺りの光景は一変していた。

まず気付いたのは、とても明るいこと。

ちらりと上を見れば、まるで大きな電球のようなものがぶらさがっていた。電気があるとは思えないので、恐らくマジックアイテムだろう。

調度品も、宿のものとは格が違う。宿のものもそこそこ高価そうではあったが。

「ち、チハルさん!？」

「やつほー。フェンリルからタレコミがあつたので来てみたよー」

「……こら、クオ坊に言うでない!」

はいはいツンデレ乙、なんて内心で嘯きながら、驚きの余り呆けているクオくん付近に近づき、その身体を抱き締めた。

ああ、やつぱり、人肌って安心するなあ。正直、このままベッドイン(not18禁)して、朝までじっくり熟睡したい。

が、そんなことも言ってもらえないので、しばらく経った後そつと彼から離れた。

「元気でた？」

「……はい！」

「なら良かった」

彼は恥ずかしそうに笑う。私も小さく微笑んだ。

「たぶん、明後日の夜には帰ってこれる、と思う」

「早いですね？」

「うん、意外と近くて」

まさか、組織の潜伏先がシルヴァニアにあるとは思わなかったわけ。

「そうでしたか。じゃあ、待ってますね」

「うん、待ってて。……あと、これ。暇があったらお話ししようね」  
作っておいた通信用銀貨を彼に渡す。何故かその瞬間、彼が干切れんばかりに尻尾を振るところを幻視した。

ふと、そろそろレポートの目印なのか、通信用なのか、はたまた普通の硬貨なのかわからなくなりそうだ、と思う。何か対策しなくては。

私は大体の感覚でわかるけど。

「……さて、じゃあもう帰るね？ クオくんの顔を見られたから、私も元氣100倍になれたし！」

「もしそうなら、僕も嬉しいです」  
可愛いことを言う彼の頭を撫で、魔法を使つて戻る。  
そして目を開けた時、私はクオくんに会う前以上の閑寂感を感じた。

「……いやいや、明後日には帰れるんだし、そんな深刻になるなよ、自分」

異世界に来て、より人恋しさを感じるようになった気がする。  
こんな寂しさとか、今まで感じたことも無かつたのにな。

「もう十日、か……」

あつちでは、行方不明とか、誘拐とか、家出とか、神隠しとか言われているのだろう。

元の世界に戻ったら、まず家に帰ろう。そして両親に、全部、言おう。魔法のことも、異世界のことも、全部。

頭がおかしくなった？ とか言われるだろうが、実際に魔法を見せれば信じるだろう。

幸い、両親はいい意味で普通の小市民だ。娘を実験体にしてお金を受け取るような非道でもないし、娘の力を悪用して世界征服を企むような外道でもない。

「……つと、とりあえずもう今日は寝よう。これで明日、コンディションがぼろぼろだったら笑えないもん」

ベッドに潜り込み、目を閉じる。色々と考えて寝れないかも、なんて思ったがそんなこともなく。



私はすぐに眠ってしまった。

そして、次の日。

太陽がもう少しで真上に行く、という時間帯。

私たちは、物陰からある家屋を見つめていた。

その家屋は、思った以上に小規模で、本当に普通の家だった。私には、生活感溢れる、ただの民家にしか見えない。

「……本当にここなんですか？」

一緒にいたグレイさんから、ルナフィリア様の言葉を疑うのか！という視線を感じたが、それを口にしなかつただけマシだろう。

グイトさんの、「任務の時には、私情は挟まない人間」という言葉は本当らしい。

ルナさんは、やはりそれに気付くことはなかったが。

「ああ、間違いない。……表にいる奴は普通の一般市民に見えるだろうが、組織の協力者のはずだ。油断するな」

「は、はい……」

正直、言われなければ油断していただろう、と思う。

友好的に接せられたら、私は友好的に返してしまうから。

「……自動防御の魔法かけておこう」

「そんな魔法まであるのか。……私にも頼めるか？」

「あ、じゃあ皆にかけますね。『風よ、その自由な身で我らを守護せよ』！」

ひゅん、と風が舞い、私達を暖かく包む。

私にとってはもう慣れた感覚だったが、彼らはそうもいかなかったようで、驚いたように身じろぎしていた。

「これで、何度かの攻撃は勝手に防いでくれるはずです」

「チハル、ありがとう。さて……そろそろだな」

ルナさんが眩き、例の銀貨を取り出す。そして、『コール・ヴィト』と一言。

「……どうだ、ヴィト？ そちらは準備出来たか？」

『ええ、いつでもいけます』

「なら……行くぞ！」

ルナさんが走り、まるで押し入り強盗のようにその家屋に突入する。

私はその次をついて走り、グレイさんが殿を務めた。

「何ですかアンタたち！」

「問答無用！」

私からすればどう見ても一般市民としか思えない男が、私達の侵入に驚きふためく。しかしルナさんは躊躇することなく、その手に持つ突剣を振りぬいた。

突剣とは、フェンシングのように、相手を突き刺すための剣だ。かといって、彼女が今やったように、それで殴るのが駄目というわけではない。

ただ、それでは相手を無力化することは出来ないが。

……まあ、あれだけ思い切り殴られたら、“ものすごく痛い”だろうけど。

「っ……！　ぐあッ……？」

衝撃で倒れ伏した男が、悶絶して呻き声を上げる。が、ルナさんは容赦せず、その男の腹を踏みつけた。

ここまで、わずか3秒ほどの出来事である。

内心で、こえー、とか思っていたのは内緒。

「……地下への入り口はどこだ？」

「……な、何のことです……？」

「とぼけるな！」

ルナさんは一喝し、男の顔のすぐ横に剣を突き刺す。男はひいと縮こまり、緩慢な動作である方向を指差した。

「グレイ、確認してくれ」

「はい」

グレイさんが、男の指差した部屋に向かう。

その間も、ルナさんは男の腹を踏みつけ、少しでも男が動こうとするたびに、力を強めその動きを封じていた。

こえー。

少しの時間の後、グレイさんが戻ってくる。

「ルナフィリア様、確かにありました」

「そうか。……チハル、こいつを眠らせてくれ」

「あ、はい。『風よ、その自由な身を夢に変え、敵を誘え』」

風が発生し、ルナさんが足蹴にしている男に纏わりつく。男はすぐに昏倒し、ぐったりとした様子で眠りについた。

「……魔法とは恐ろしいな」

「……いや、私はルナさんの方が……」

怖い。そう続けようとしたが、視線を感じたので口を噤んだ。

グレイさんが、用意してあった縄で男の手足を縛る。

「行くぞ」

縛り終えたことをルナさんが確認し、部屋へと先行する。その部屋の奥には、地下へ繋がっている穴がある。穴が見えた。

どうやら、元々食器棚で隠してあったらしく、棚は斜めに動かされている。

「ルナフィリア様、私が行きます」

「ああ、頼んだ」

グレイさんが部屋の中に縄をくりつけ、それを手掛かりに穴に突入していく。

少しした後、ぼんやりとした光が穴から洩れだした。恐らくランプに火を入れたのだろう。それを確認したルナさんも、縄を頼りにしながら下りていった。

さて、次は私だ。じつと中を覗き込んでみると、意外と深い。3メートルほどはありそうだ。

「チハル、下りられるか？」

「あ、大丈夫です。『風よ、その自由な身を翼に変え、我を運べ』、ふわ、と足が地面から離れる。私はそのまま、えいっ、と穴に突入した。

「……本当に何でも出来るんだな」

「あははは……」

呆れ交じりの声で言われ、笑うしかない。

最初はあまり強い魔法を見せないように、とか考えていたけど、最近では忘れ気味だ。風と水に限り、だけど。

大体、ルナさんには結界魔法なんてジョーカーを先に見せてしまったのだ。今更だろう。

「まあ、いい。行くぞ」

「はい」

ランプを持つ 그레이さんが、駆け気味に歩いていく。私とルナさんも小走りについていった。

地下は、床も壁もすっかりと均されており、私にはここ最近作られたものには思えない。それとも地属性の魔法使いがいるのだろうか？

一本道を進む。しばらく行くと、遠くに明かりが見えた。どうやら部屋があるらしい。

グレイさんが手で私達を制し、ランプをルナさんに預けてから、足音を殺して様子を伺いに行く。

そして、帰ってきた彼は、潜めた声で言った。

「……全部で10人ほどだ。チハル、その人数全員を眠らせられるか？」

「大丈夫だと思います」

グレイさんに普通に話しかけられて、少し驚きながらも答える。その答えに満足したのか、彼は、やれ、と視線で言ってきた。

何だか釈然としないものを感じながら、私は明かりの方へと歩いていく。距離的には今の位置でもあの部屋に届くのだが、その場合二人も一緒に巻き込みかねなかったために移動した。

「『風よ、その自由な身を夢に変え、敵を誘え』」

呪文を唱え、ありったけの魔力を込めて部屋に魔法を充満させる。次の瞬間、ばたばたと倒れる音が聞こえてきた。どうやら成功らしい。

「……って、あ」

今の魔法濃度だと、私たちも入った途端昏倒することに気付く。  
あちゃあ、と頭を抱えながら、私はもう一つ魔法を使った。

「『風よ、その自由な身を守護に変え、魔を打ち消せ』」  
本来は敵の放った魔法を打ち消すためのものだが、自分が放った魔法にも使える。

ただし、打ち消せるのは魔法だけで、二次的な効果、つまり燃え広がった炎や、状態異常そのものまでは消せない。ちなみに、状態異常の解除は水属性だ。

私は、こそりと部屋の中を伺う。確かに10人ほどがいたが、全員昏倒していた。

……あれ、制圧ってこんなに簡単でいいの？

どことなく不満が残るが、楽に越したことはないだろう。  
私は二人の元に戻った。

「みんな眠りました」

「そうか」

「チハル、よくやったな」

グレイさんとルナさんが口々に言い、二人は部屋の方へと足を向ける。

その、瞬間だった。

(チハル、大変じゃ！)

(え、フェンリル！？ どうしたの！？)

突然の心話に、私はびくんと肩を揺らす。

一体なんなんだ、と思ったが、フェンリルの声があまりにも切羽詰って聞こえて、私はすぐに聞き返した。

そして、衝撃の一言。

(城で暴動が起きておる！)

「うえええええっ!？」



(城で暴動が起きておる！)

「うええええっ!？」

その言葉は、私にとって予想だにしないことで。思わず、裏返った声が喉から漏れる。

そんな私の奇声に、二人が何事かと言った様子で振り返る。彼女らの視線が突き刺さり、私は説明しようと口を開いた。

が、なんと行って良いのかわからず、口はパクパクと仰ぐばかり。そんな私の所作を、不可解に思ったのだろう。ルナさんが問いかけてきた。

「チハル……何か、あつたのか？」

「えっと！ その！ し、城で、暴動だつて……!！」

その言葉に、グレイさんは「何を言っているんだコイツは？」という顔をしたが、ルナさんはすぐに真剣な顔になって、問い返してくる。

「どづいうことだ!？」

「わっ、私、クオくんどこに居ても連絡が取れるようになってるんです！ 魔法で！ それで、今いきなりっ!！」

我ながら、全く説明になっていない説明だったが、二人はどうに

か察してくれたようだった。

真剣な表情で、二人は顔を見合わせる。

「チハル、クオに詳しいことを聞いてくれるか？」

「あ、はい！」

二人が何やら相談する傍ら、私はフェンリルに心話を送る。

(フェンリル、一体どういうこと!?)

(わしが知るか! じゃが、さつきから悲鳴が止まん!)

(そつだ、クオくんは!?! クオくんは無事!?!)

(様子がおかしくなってます、部屋にあるクローゼットの中に隠れたから無事じゃわい)

その情報に、私は顔に出さずに安堵する。

私にとっての最悪の事態は免れそつだ。

(そつか、良かった……他に何か情報は?)

(そつじゃな……兵士が同士討ちしておるといふことと……あとは、

王子、とか、王が、とか聞こえたかの)

(王子……?)

ふと、記憶がフラッシュバックする。

城を出る前、ルナさんに見せてもらった紙。

今回の制圧任務で、王都が担当だった王子が居たはず。

確か、第三王子、だっただろうか。

(……王族が人質になってるってこと?)

(どつじやるな、詳しいことはわからん)

フェンリルの言葉に、そう、と唸る。

不意に、疑問が脳裏を過ぎった。

ちよつと待つて。このタイミングにこの事件つて、つまりこの作戦のことが外に漏れていたつてこと？

「チハル、何かわかつたか？」

「えつと、兵士の同士討ちが起きている、みたいです。……ルナさん、この作戦が外に漏れることつてありますか？」

「ふむ……無いとは言えないが、一応極秘に進められて来たことだ。最低限の人間しか関わつていないからな……」

「一部つて、どの辺りですか？」

「王族と、その王族に遣える騎士、国の宰相、そして諜報部……辺りか」

彼女の言葉に、疑惑が深まる。

私は、小さな声で彼女に問いかけた。

「……この作戦、王都つて第三王子が担当……でしたよね？」

「そつだ、が……まさか!？」

私の控えめな言葉に、ルナさんが目を見開く。

一方のグレイさんは表情を歪め、私に詰め寄つてくる。

「リークフェイル様が、関わつているとでも言いたいのか……!」  
「グレイ、落ち着け……!」

危つく掴みかかられそうになつたところを、ルナさんが制す。  
グレイさんはぐつと押し留まつたが、その眼光は鋭いままだ。

「……とりあえず、ワイトさんたちと合流しましょう」  
これ以上情報がない今、押し問答は無駄なだけだ。険悪な空気の中、私がそう提案すると、ルナさんが頷いて同意した。即座に銀貨を取り出し、ワイトさんに呼びかける。

「聞こえるか、ワイト」

『……ルナフィリア様、どうされました？』

「作戦は中止、すぐに宿の前に集合だ。わかったな？」

『はっ、はい、了解しました！』

それだけ言って、銀貨は沈黙する。

私たちも重い雰囲気の中、今まで来た道を無言で走った。

（フェンリル、何かあったら、すぐに教えて）

（わかったわい）

フェンリルの了承の声を聞いた私は、思考を変える。

先程は、王子が中心となって事を起こしている、だなんて思ってしまったけれど、それは突拍子もない考えだったと少し反省する。だって普通なら、反乱組織の人間たちによるものだと思うのが当たり前だから。

でも、今回の主謀者がその王子だと考えると、いろいろなことに説明がつくのだ。

結界石が壊されていたこと。

これは、王族である第三王子なら簡単にその場所に入れるだろう。組織の潜伏先を潰すという、今回の作戦。

思い出してみれば、王都から遠い場所から順に、人員の割り当てられた数が多かった……と思う。規模の順だと言われたが、普通、

王に敵対心を持つ者が潜伏するのなら、王都に近い場所じゃないだろうか？

それに、諜報からの情報が的確すぎたこと。

その組織が魔物を操り、しかもそのマジックアイテムが本の形だなんて、一体どこから漏れたというのか。敢えて情報を流し、この事件の重要度を上げているとしか思えない。

……これらは、ただの妄想だ。

だが、余りにも状況が符合している気がして。

「ルナさん」

「何だ」

走りながら、私はルナさんに問いかける。

「第三王子がこの事件を起こす可能性は少しでも“有り”ですか、それとも全く“無し”ですか？」

「まだ言うか！」

グレイさんは怒号を響かすが、ルナさんは冷静だった。

「どちらかと言われてしまうと……有り、だな」

「ルナフィリア様!？」

「そう、ですか……」

ルナさんの言葉に、やはりそうなのか、と思う。

つまり、今回ののは、第三王子の反乱？ 謀反？ まあ、何て言うかは良くわからないけれど、そういうことなのではないだろうか。

理由は知ったことではないが、それを起こす理由が、皆無ではな

いのだ。しかもルナさんが言うのだから、それは確かなのだろう。一体、どこまで第三王子が掌握しているか知らないが、諜報部は既に手の内と考えていい。そして兵士が同士討ちしていた、ということ、兵士の中にも彼の派閥の者がいる、ということだ。

何だか、いきなり話が大事になってきたように思っ、私はこっそりと溜息を吐いた。

私達が宿の前に辿りついた時、既にヴィトさんたちはそこに居た。何が起きているのか理解していない、という顔で、走ってきた私達を迎える。

そして息も整わぬ内に、ヴィトさんが問いかけてきた。

「ルナフィリア様、どうなされたんですか？」

「……王都で反乱が起こったらしい」

「……えっ？」

ヴィトさんも、アルバートさんも、鳩が豆鉄砲食らったような顔をする。一瞬でその言葉を反芻し、ようやく意味を理解したのだろう。すぐに真剣な顔をする。

「すぐに馬車で王都に戻りましょう」

「ああ」

「……ちょっと待ってください」

動き出そうとしたヴィトさんを、引き止める。こうなったらテレポートの魔法も隠してられない。私は一刻も早く、クオクんの無事を確認したかった。

「……今すぐ、王都に戻る魔法があります」  
その言葉に、やはり全員が絶句した。ルナさんが珍しく声を荒げる。

「何故それを早く言わない！」  
「……こんな魔法、普通おいそれと言えません。それに、どこにでも自由に移動できるわけじゃないんです」  
敢えて冷静に伝えると、ルナさんは少しだけ落ち着いてくれたようだった。

「……どこになら移動できる？」  
「クオくんがいる場所……だから、恐らく客室のどこかだよ」  
「それでいい、魔法を頼む。アルバートはここに残って、地下に居た人物の洗い出しをしておいてほしい。……転がってきてしまったからな」

「わかりました」  
ルナさんの言葉にアルバートさんが頷き、すぐに走ってどこかに向かった。

恐らく、仲間のところに向かい応援を頼んだか、もしくは例の水晶を取りに行ったのだろう。

一緒に行かないのか、と少し後ろ髪引かれた気持ちになったが、そんなことに思考を割いている暇はない。

「……ここだと目立ちますから、宿の中に入りましょう。帰りのための目印も、置いておきたいですし」

「そうだな」

五人で急いで移動する最中、心話でフェンリルに伝えた。

（フェンリル、転移用の銀貨を置いてくれる？ 5人分のスペースがある場所に）

（わかった、ちょっと待っておれ）

それを聞いた私は、銀貨を一枚取り出し、魔力を込めた。これをこの街に置いておけば、すぐにこの街に戻ってこれる。そもそも馬車で半日の距離だけだ。

宿の入り口から一番近かったのはルナさんの部屋。緊急事態だからか、グレイさんは特に何も反応しなかった。部屋に入った私は、床に銀貨を置き、よし、と呟く。

「じゃあ、魔法、行きます」

五人に意識を向け、集中する。

「『踏み入れしは、次元の裂け目。我が願うは、愛しき姿』！」  
一人の時には感じなかった、僅かな抵抗感を覚える。元々、次元の小さな歪みを利用してある魔法なので、5人にもなると違和感が強くなってしまふのだろう。

が、それも一瞬。

目をあけた時には、景色が一変していた。



「……着いた、のか？」

唖然とした様子の皆を放り、私はクオくんを呼ぶ。すると、部屋の隅にあったクローゼットから、がちやりと音がして、彼が恐る恐ると言った様相で出てきた。

「クオくん！」

「チハルさん！」

クオくんが、恐怖に歪ませていた顔をホッと緩め、抱きついてきた。私はそれを受け止める。余程心細かったのだろう、私の服が酷く皺になっていたが、彼のするがままにさせていた。

「……チハル、いいか？」

「あ、はい」

ルナさんの声に、クオくんがびくりと肩を震わせ、弾かれたように私から離れる。

恐らく、私以外の人がいることに気付いていなかったのだろう。すぐに俯いて顔を隠していたが、頬がほんのり赤くなっているのが見えた。

「私たちは今から情報を得るため、父上の私室へ向かおうと思う。

が、ここには隠し通路がない。だから、無理矢理突っ切ろうと思う。私たちに、チハルもついてきてくれないか？ お前の魔法があれば、助かるんだが……」

「いいですけど、条件が一つ」

「なんだ？」

「クオくんも連れて行きます」

私の言葉に、グレイさんの表情に明らかかな憤慨が混じる。足手ま

といを連れて行きたくない、そう思っているに違いなかった。

でも、これだけは、譲れない。

だって、ここが絶対安全とは言えない。それだったら、私と共に来た方が、きっと彼には安全だろう。

クオくんは険悪な空気を察し、口を開こうとする。恐らく、自ら辞退しようとしたのだろうが、私はそれを手で制した。

「もしクオくんをここに一人置いていって、万が一何かあったら……私は悔やんでも悔やみきれません。いいですよね？」

「ああ、勿論だ。連れて行こう」

私の気持ちを察してくれたのか、それとも最初からそのつもりだったのか、ルナさんは当然だと言わんばかりの表情で頷く。ヴェイトさんは僅かに眉を潜めてはいたが、仕方がない、という表情だった。グレイさんはルナさんの頷きに一瞬口を開きかけるが、すぐにくっど留まる。ルナさんラブの彼だ。彼女の決定に異は挟めないのだらう。

「……皆、行くぞ！ 最短距離を突っ切る！」

彼女の言葉に、私たちは各々了解の言葉を送る。

「クオはチハルのそばを離れるなよ！」

「はっ、はいっ！」

私たちは、勢いよく部屋を飛び出した。

城の廊下には何十もの兵士が倒れていたが、どこにも赤いものは見えない。どうやら気絶しているだけらしいため、私たちはそれに目もくれず走り去る。

何度か兵士の集団に襲われた。が、兵士は私たち……というよりはルナさんの姿に驚いている間に、前を走るルナさんとグレイさんにはつさばつさと薙ぎ倒されていた。

二人の獅子奮迅の働きにより、後ろを走る私たちは殆ど何も出来ずに戦闘が終わってしまう。出来たことと言えば、彼女らの剣で倒された後の兵士を、眠りの魔法で更に昏倒させたくらいだ。まさに外道！

「父上の私室はここだ。行くぞ！」

ルナさんがとある一室の前で立ち止まり、後ろを振り返る。私たちが頷いたところで、ルナさんはその扉を勢いよく開いた。

……そこは、赤だった。

「……ッ！」

私は即座に、クオくんを私の背に隠し、視界を塞ぐ。

こんな、こんなもの、クオくんに見せたくはなかった。私だって、正直きつい。

その部屋には、4人の男がいた。

1人は、50は過ぎているであろう水色の髪 of 壮年の男。全身傷だらけの上に血塗れで部屋の中央に伏しているが、まだ胸が上下しているので生きてはいるようだ。が、見るからに虫の息。放っておけば、すぐに死ぬかもしれない。

1人は、鎧を着た男。すでに意識を失っているのか、ぐったりと壁を背にしてピクリとも動かない。彼の持つ剣は途中からぼつきりと折れていて、恐らく戦った後なのだろう、と思う。

1人は、剣を持った白髪の男。全身に血を浴びてはいるが、どうやらすべて返り血のようで、平然とした様子でこちらに背を向けて立っていた。

そして最後の1人は、水色がかかった銀髪の男。彼だけはこの中で唯一血を浴びておらず、綺麗な恰好のまま、椅子の上で足を組んで座っていた。恐らくだが、彼が王子なのだろう、と直感する。

「ちっ、父上ッ！」

「あれ、姉さま？ どうやって帰ってきたの？ 随分早かったね？」  
王子なのだろう青年がよいしょ、と立ち上がり、その綺麗な顔に薄く笑みを乗せる。その見とれるくらいに綺麗な笑顔が、この場に似つかわしくなさすぎて、逆に、ゾツとした。

「どうしてではない！ フェイル！ お前は一体何をしている………！？」

「何って……それが判ってるから、ここまで来たんでしょ？ ルナ姉さまも、変なことを聞くね？」

おかしそうに、フェイルと呼ばれた彼が笑う。ルナさんは、その台詞に絶句したのか、それ以上言葉もないようだった。

そこで、今まで静かだったヴィトさんが一歩前に踏み出し、声を荒げる。

「……隊長ツ！ 何を、何をなさっているんですか！？」  
ヴィトさんの言葉に、隊長と呼ばれた男は、ようやく気付いた、というように振り返る。

「お、ヴィト、おつたんか。……何って、見てわからん？」

「わかりません！」

「そうか、それはしゃあないなあ。まあ、手伝いや、手伝い」

「手伝い、ですって……！？」

軽薄な言葉に、ヴィトさんはいつもの穏やかな様子とは一変し、いきりたつ。ぎり、と歯軋りの音が聞こえるようだった。

「僕が説明するよ、キース」

「そうでつか？」

フェイルがそう言って制すと、白髪の男      キースはそう返事して沈黙した。

フェイルは、まるで世間話するように言う。

「簡単に言うと、王座奪取のための反乱だよ。兄さまや姉さまを王都から追い出してる間に、父上を殺しちゃおう。それで、戻ってきたみんなにゼーんぶ押し付けて有無を言わさず処刑しちゃえて計画。王になっちゃえば、僕が正義になるしね？」

にこり。まるで天使の笑顔で、悪魔のような言葉を吐く。

私に背を向けているルナさんから、怒りのオーラが立ち上るのが

わかった。

「で、父上に、王家の秘術とか、色々聞いてから殺そうって思ったんだけど、父上ったら強情でさあ。時間もまだまだあるし、吐いてもらおうと色々やってただけど……まさか姉さまがこんなに早く帰ってくるとは思わなかったなあ。ねえねえ、どうやったの？」

子供のように無邪気に問いかけるフェイル。ルナさんはもはや何も答えず、剣を構えた。

「……あ、もう。それって姉さまの悪いところだよ？ 言葉じゃなくて力で解決って。それに、内側に入れた人に心を許しすぎるのも悪……」

「ハアツ！」

全部言い終える前に、ルナさんの突剣がフェイルを襲う。それは即座に間に入ったキースの剣に塞がれたが、今度はヴィトさんがキースに襲い掛かった。だがそれも、彼が抜いたもう一本の剣に防がれる。どうやら彼は双剣士らしい。

「……え？ ちょい待ち、この二人をわてが相手するんか？」

「んー。まあキースなら何とかなるでしょう？ 頑張つて！」

「うっわあ、ごつつええ笑顔……まあ何とかしますわ」

そう言つてキースは、へらへらと浮かべていた笑みを消し、真剣な表情で二人に相對する。ルナさんとヴィトさんも、真剣な面持ちで彼に剣を向けた。

私もクオくんも、そんな彼らについていけなかった。転々と変わる状況に、ただぼかんと呆けてしまうだけ。私は入り口でただ棒立ちだし、クオくんも私の服を握り締めながら、後ろに隠れている。

そこで私はふと、一言も発していないグレイさんに気付く。彼ならルナさんが戦っている時に、ただ棒立ちなんてことはないと思うのに。

そう思い彼をこっそりと伺い見ると、彼は愕然とした表情でそこに突っ立っていた。まるで打ち捨てられた犬か猫のようだと、彼に對して有り得ない感想を抱く。

「……グレイも駄目だなあ。姉さまとは比べようもないとは言え、王族である僕に憧れを抱いていたのはわかるよ？ でもこうなったら、柔軟に対応しなきゃ、柔軟に。ね？」

ね、のところで首を傾げる彼は、小悪魔そのものだった。

その言葉を受け、ようやくグレイさんは動き出し、フェイルに剣を向ける。が、その動きは精彩に欠け、フェイルの抜いた剣に軽々と弾かれていた。さっきまで獅子だった男は、この場面では猫になっってしまったようだと思う。

さて、この中でフリーなのは私だけだ。

魔法で援護しようにも、混戦状態の今、攻撃魔法を放てば、ルナさんたちも巻き込みかねない。

いつそ全員眠らせようかとも考えたが、ここは狭い部屋の中だ。私自身も眠ってしまうだろう。

ならば、壁に倒れている鎧の男を治療しようかと考える。その男を治療し、彼が戦闘に加われれば、こちらに戦況は傾くはずだ。だが、この戦いの中を潜り抜けて、あの男の元まで行く自信はない。それにクオくんもいる。一応、自動防護はかけてあるが、連撃に耐えられるほどの性能はないのだ。

じゃあ……そうだ。拘束魔法があったっけ。どちらか1人にしか

かけられないが、どちらにかけたとしても戦況はこちらに傾くはずだ。

よし、そうしよう。

そう思った私は、5人の戦いの様子を伺う。

ルナさん+ヴィトさんとキースの戦いはほぼ互角。2対1で互角なのは、さすが隊長、と言ったところか。何故か関西弁だったけど、グレイさんとフェイルの戦いは、グレイさんが押されているように見える。が、大きな傷を負っていないところから考えると、攻められないまでも受け流すことは出来ているのだろう。

なら、今がチャンスか。

私は口を開く。その瞬間、どうしてか私は、咄嗟にその場を飛び退っていた。

そして聞こえる、剣で風を切る音。フェイルの剣筋が、今まさに私の首があったところを通っていた。

全身に、怖気が走る。

自動防護の魔法は、ちゃんとかけているというのに。何故か、今避けなければ、死んでいたような気がした。

今の鮮やかな剣筋にそう思うのか、それとも、フェイルに向けられた殺気でそう思うのか……あれ、待って？ 私、今、ぞわぞわしてない。魔物と戦う時にはあったぞわぞわが、ない。

自動防護の魔法は、“敵意や殺意など、害意を持った者の攻撃”を防ぐ魔法だ。じゃないと、ただぶつかっただけの相手でも、風で弾き飛ばしてしまうから。

いつも魔物に（たまに、グレイさんに）感じていたちりちりとした感覚。

それは、私を殺し、その血肉を食らってやるうという、意思。

でも、今のフェイルには、それを感じていない。つまり、今の彼の攻撃には、殺意も敵意も、宿っていないんだ。



殺すつもりがないのか、それとも彼にとっては、これはただの“遊び”なのか。

「ルナ姉さまが言ってた魔法使って、やっぱり君だったんだ？ たぶんそうかな、とは思ってたんだけど、魔法を使う様子もないし、放っておいたんだ。まあ、注意だけは一応向けてたけどね？ …… 変なことしたら、次は死んでると思ったほうがいいよ？」

変わらぬ笑顔で言う彼に、これはやばいかも、と思う。  
何度も言っているが、私は魔法が使えなければただの人だ。  
防御も出来ない、魔法も使えないじゃ、足手まといだ。

さあ、どうする……？

未だ戦況は動かない。ルナさんたちはキースに翻弄されているようだし、グレイさんも少しずつ調子を取り戻してはいるようだったが、そこでようやくフェイルと互角に見えた。

（ねえ、フェンリル）

（……なんじゃ）

（やばいよね、この状況）

（……冷静なのか冷静じゃないのか、わからん言葉じゃな）  
フェンリルに呆れたように言われるが、でもそれ以上、私には何を言うことも出来ない。

思考が働かないのだ。現代っ子だった私が、こんな窮地に立たされたことなんて、一度もあるはずがなかったのだから。

こちらに来てからは、魔法で全てが何とかなっていた。だから、こんな、命の危険なんて感じたことがなかった。

だけど、何とかしなくては。この中で動けるのは、私だけなんだから。

何か。そう、何かないか？  
記憶を巡り、この状況を打破できる何かを探す。

……………そういえば、詠唱破棄魔法、なんてものがあつたな。

今まで一度も使つたことはない。短縮詠唱魔法とは違い、呪文のないそれは、緻密な魔力の制御が必要だ、と魔法ノ書には書いてあつたから。

でも、やるしかない。この状況を何とかするには、やるしかない。なら、まず何の魔法を使うか決めなきゃ。

さつき考えた拘束魔法は没だ。制御に不安が残るのだから、下手したら仲間の誰かを拘束しかねない。そうすれば、死ぬ。私だけじゃなく、みんなが。

治療も没。壁で倒れ伏している彼が、気絶からすぐに回復しなければ、私は殺される。

ならば、ならばどうしたら？

……………そうだ。

こつそりと天井を見上げる。そんなに高くはないが、それでも3メートルほどの高さはある。急に私が飛び上がれば驚いて隙も出来るだろうし、彼らの剣が届かないように天井と平行に飛べば、一方的に魔法を使えるようになるだろう。そうなれば普通に詠唱をすればいいのだから、拘束魔法を使えばいい。

制御を失敗すると頭を強打しかねないが、大丈夫だろう。短い間ではあつたけど、魔法はたくさん使ってきたんだから。

（フェンリル、クオくん伝えて。こつそりと私の手を握って、つて）

フェンリルが伝えたのだろう。後ろのクオくんが、そつと私の左

手を取る。

よし、これで準備は完了。あとは、私次第。

集中しろ。私は、私たちは空を飛ぶんだ。

詠唱は『風よ、その自由な身を翼に変え、我を運べ』。

そう、翼だ。風の翼。空を舞う大きな翼。そして私たちは、両手を広げて、大空を舞うんだ。自由に、風を纏って……！

……行くッ！

「……！」

ふわり、私たちは舞い上がる。初速は遅かったが、フェイルたちも驚いたのだろう、追撃はなかった。

その間に、私たちはぴつたりと天井にくつつく。

よし、これで私たちは安全……！

「『風よ、切り裂け』」

それは、あまりにも無情な言葉。

私は、何が起きたか、わからなかった。

気付いた時には、空中だというのに何かに弾き飛ばされ、私はそのまま地に落ちていた。落ちた衝撃に、前がちかちかする。背中が痛くて、げぼげぼと咳き込んだ。

……そうだ。だって、この世界は、剣と魔法のファンタジーな世界。

私以外にも、魔法を使える人はいっぱいいるんだ。だから、フェイルが使えたって、おかしくはない。どうして、私は、忘れていたんだろう……？

「変なことしたら、次は死んでると思ったほうがいいって言ったのに。馬鹿だなあ。……まあ、死ぬのはそっちみただけど」

「……え？」

ハッとなって、跳ね起きる。

そうだ。私は、何かに弾き飛ばされたんだ。空中に居たのに。待って？ ちょっと待って？

何か、って、1つしかないじゃん。

そう、1人しか……っ！

「……クオくんッ！」

そこにいたのは、全身に裂傷を負った、真っ赤な、クオくん。抱き上げると、血に塗れているというのに、彼は微笑んだ。

「チハ、さ……が、無事で……よ……った」  
どうして。

どうしてそんなに傷だらけなのに、そんな風に笑えるの。  
私がかこまで連れてこなきゃ、こんなことにはならなかったのに。  
どうして、私の心配、してくれるの？

「……いやあああー！」

その時、私の視界は真っ白になった。

視界が、真っ白に染まる。

絶望でとか、そういう比喻表現ではなくて。

物理的に、私の視界は白く染まっていた。

「……………なに、これ……………」

クオくんから、湧き出るように溢れる、白の光。

一体何が起きているのか、わからない。

(チハル！ 何をしておる！ 呆けておらんで、さっさと魔法ノ書をかざさんか！)

(っ！?)

何で、フェンリルが魔法ノ書について知っているのか、とか。

大体この光はなんなんだ、とか。

それよりも、クオくんを治療しなくちゃ、とか。

一瞬の内に思考は巡って、それと同時に魔法ノ書を身につけている方の腕は、無意識の内に白の光に伸びていた。

白の光は、吸い込まれるように腕輪となった魔法ノ書へと吸収される。

そして、訪れる、奔流。

白の洪水が、私の意識を押し流す。

流れてくる、映像。無理矢理詰め込まれる、知識。理解させられる、魔力の流れ。

そして私の口から零れる、笑み。

……ああ、そうか。そうだったんだ。

溢れてくる全能感。今だったら何でもできる、そんな思いが、私を支配する。

「急に固まって、どうしたの？ そんなにその子供が大事だった！？」

ふざけたことを言う男に、私は無言で魔法を放つ。10本以上の水の槍が、縦横無尽に駆け、相手を貫こうと飛び回る。

相手の剣？ どうってことない。だってそれよりも速く、こちらに向ける隙がないくらいに、魔法で攻めればいいんだから。

みんなを巻き込む心配だっていらぬ。だって、そんなへま、今の私だったらするわけもない。

……だって、魔法ノ書は、完成したんだから。

「クオくん、今治すからね」

水の槍を操作しながら、治療魔法を使う。今までだったら同時に魔法を使うなんて出来なかったけど、今だったら出来る。出来ないはずがない、とまで思う。

薄い水色の光が舞い、一瞬でクオくんの傷が癒え、苦痛に歪んでいた彼の表情も、緩んでいく。これでもう大丈夫だ、と私は安堵した。

「……チハル、さん？」

「クオくん、痛いところ、もうない？」

「は、はい……」

クオくんが起き上がる。私も立ち上がり、私の槍から逃げ回るフェイルを見定めた。彼に負わせた傷は殆どないが、見るからに相手も避けることで精一杯。むしろ、よくあれだけ避けられるものだと感心してしまう。

「……クオくんを笑いながら傷つけた罪、思い知れ！」

更に槍の数を増やし、フェイルだけでなくキースも目標にする。部屋を駆ける槍の数はすでに、40本以上になるうとしていた。

「くっ……これはちょっと……」

「なんやねんこれ！ こない無茶苦茶なの、ありかいな！」

「斬っていいのは斬られる覚悟のある奴だけだ！」

高速で動き回る水の槍を見てか、ルナさんたちはいつの間にか攻撃をやめ、壁の方に寄っていた。

それは好都合ではあるが、何故あんな強張った顔をしているのかわからない。

私、当たり前のこと言ってるよね？

上から下から右から左から。私は敵である二人を翻弄する。

相手も避けてはいるものの、多勢に無勢というやつだ。相手が負う小さな傷も、どんどんと増えてきて、ああ、そろそろ終わりだな、と思った。

「これで最後っ！ 『水よ、その清廉なる身を龍に変え、我が敵を



飲み込まん』！」

今まで使ったことのない、そもそもさっきまでは呪文すら覚えていなかった上級魔法を、私は迷うことなく使用する。水が龍の形ドラゴンでなくに変化し、まるで意思を持つかのようにその顎を開いた。

「行けッ！」

龍が、二人を成すすべも無く呑み込む。その威力は極限まで弱めであるので、死にはしない。ただちよつと、水で溺れて貰うだけだ。これなら血も出ないし、平和的解決だ。溺死が苦しい死に方とかは全然知らない。

がぼがぼと龍の中でもがく二人を、私は冷めた目で見る。何とか外に出ようとしているようだが、その程度で逃げられるわけがない。私怒ってるんだよ？

ま、まだまだ元気そうだし、1〜2分くらい放置しようつと。

「ルナさん、とりあえず片付きましたよ」

「……………あ、ああ」

ただ呆然として宙に浮かぶ龍を見つめる彼女に、私は笑いかける。微妙な沈黙が落ちるが、彼女ははっとして床に倒れ伏す男に駆け寄った。

「父上！ 父上！」

ルナさんが男に呼びかけるが、既に意識がないのか、それともダメージを受けすぎているせいか、返事はない。

「……………あの、チハル……………すまないが治療してもらえるか？」

「いいですよ？」

彼女のどこか引き攣った顔を疑問に思いながら、無詠唱で回復魔法を使用する。水色の光が舞い、男の傷は即座になくなった。

ルナさんはホツとしたように表情を緩める。私も、良かったな、とどこか遠い感覚で思った。

「……あれ……？」

ぐらり。突然、視界が歪む。

どうしてだろう。頭が割れそうなくらい痛い。

立っていられずに、私はその場に膝をつく。

「チハルさん！？」

「クオ、く……ごめ……」

魔法の維持すらも出来なくなつて、龍も途端に掻き消える。どさりと中に居た二人が投げ出されたような音がしたが、それを確認する余裕すらない。

私はその場に倒れ伏し、意識を失った。

私は、白い世界にいる。

何もない、白だけが広がる世界にいる。

突然の展開にも関わらず、私はそれを当然のこととして受け取っていた。

そして、一言呼びかける。

「フェンリル？」

「……うむ」

後ろからの声に、ゆっくりと振り返る。そこにいたのは、いつものもふもふでなく、大きい狼みたいな白い獣だった。

ああ、その姿なら確かに「フェンリル」って感じたよ。かっこいいじゃん。相変わらず手触りは良さそうだけど。

「それにしても、びっくりしちゃった。まさか、クオくんが“下巻”の持ち主だったなんて」

そう。魔法ノ書の下巻は、ずっと彼の中にあった。

魔物を呼ぶ体質だったのも、そのせい。彼から漏れ出る魔法ノ書という少し異質な魔力に、魔物が引き寄せられていたのだ。

魔力はあるのに魔法が使えないのも当然だ。だって彼には、書の使用権がなかったのだから。下巻を使用することが出来るのは、上巻の所有権を持っている者だけ。

「……そうじゃな。わしもお主らに呼ばれたときは驚いたわ。随分早く呼ばれたと思えば、書は完成しておらん。何かと思っただわい」  
「フェンリルを喚ぶには、魔法ノ書が揃った状態じゃなきゃいけないんだもんね」

書が揃って初めて召喚することの出来る、“書の守護獣”と呼ばれる使い魔。それがフェンリルの正体だ。

「下巻の存在には、全く気付いておらんかったの」

「そんなこと言われても、しょうがないじゃん」

小さく笑う。

まあ、今思えば、確かにフェンリルは変だったけどさ。

この世界の中から呼び出されたはずの使い魔が“シヨタコン”なんて使うものか。頭がよければ、その時点で、フェンリルが私の元居た世界について知っている、なんて気付けたのかもしれないけど。私じゃ無理。

「お主の探し物も、意外と近くにあるかも”って、わかってて言ってたんだね”

「まあ、そうじゃな”

フェンリルの肯定に、思わず肩を竦めてしまう。

ヒントを出すなら、もっとわかりやすいものにしてほしかった。

あの夜、あの言葉で救われたのは、確かだけどさ。

「……ていうかさ、聞いていい?”

「なんじゃ?”

「私さ、さつき人格が変わってた気がするんだけど、気のせい?”

“ただちよつと、水で溺れて貰う”、“血も出ないし、平和的解決”、“溺死が苦しい死に方とかは知らない”。

……… どんだけ鬼畜なの自分。

クオくんを傷つけられて切れていたっていうのもあるけど、それでもいつもの私なら、こんなことは言わないと思う。

その問いに、フェンリルは何でもないことのように言った。

「気のせいではないの。下巻を得たせいで、一時的に力に酔ってお

「つたんじゃ」

「ええ……そんな、人を酔っ払いみたいに……」

「事実じゃからの。まあ、お主はまだまだマシな方じゃ。以前の主じゃと、笑いながら自分のいた世界を滅ぼしたりしておったわい。まあこれは極端な例じゃがな」

「うわあ……」

「それは……酔ったと言っているのか？」

「でも、確かにそれを聞いてしまうと、私はまだマシな方だった、と言わざるを得ないだろう。少なくとも、人を殺そう、とは考えなかったんだから。決して誇れることではないけれど。」

「……そういえばクオくんって、魔物を呼ぶ体質じゃなくなる、よね？」

「そうじゃな」

「そっか」

「なら、彼はこの世界に残った方がいいのかもしれない、と思う。」

「魔物を寄せないのであれば、家族や知り合いのいるこの世界に残った方がいいのでは、と。」

「それに、ルナさんという後ろ盾に申し分ない知り合いだっているのだ。この世界の方が、彼にとっては生きやすいに違いない。」

「あ、クオくんとフェンリルとの間の契約は？」

「一応は繋がったまじや。チハルが望むなら切るぞ？」

「望まないって知ってて言うてるよね？」

「少しだけむくれてみると、フェンリルは牙を剥き笑う。」

「私も、何だかおかしくて、一緒に笑った。」

ふと、現実世界に意識が戻る。

知らない天井だ、と言おうかと思ったのだが、天井ではなくベッドの天蓋のようだったのでそれも言えなかった。

辺りを見渡せば、高級そうな調度品で部屋が彩られていて。ここは城のどこかであることを理解する。

周りに誰もいないことを確認した私は、柔らかいベッドに顔を埋め、思い切り叫んだ。

「……思い知れってなんだよもーっ、自分の馬鹿っ！ あああああ  
恥ずかしいいいい！」

枕を抱えながらごろごろとベッドを転がる。

やばい、これはやばい。

私の放った言葉が、頭の中で繰り返し再生される。

『……クオくんを笑いながら傷つけた罪、思い知れ！』  
『斬っていいのは斬られる覚悟のある奴だけだ！』

あああ、なんて恥ずかしいことをおおおお！

後者の台詞とか、どこの皇子だ、私はあああ！

私は魔法ノ書が完成したと思ったら、超ハイテンションで悪役ばりの台詞を吐いていた。

中二病とか黒歴史とかそんなチャチなもんじゃ断じてねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わっ……てます、今現在味わってますよあああああ！

ばたばたと両足を動かして、ベッドの上で暴れまわる。

あれだね、はっちゃけた飲み会の次の日に「昨日課長のツラを取っちゃまったよ、どうすんだよ、今日会社行けねえよ……」って思う部下みたいな心境に似てるよね、これ。

枕を思いつきり抱き潰しながら、私はしばらくの間、とことん悶えていた。

「あー……もうっ……」

じたばたじたばた。

私はまだ、悶え続けていた。

そろそろ落ち着いてはきたけれど、これから先、また何度も思い出してじたばたすることになるんだらうな……。

「……チハル、起き……何をしている？」

いきなり声をかけられて、ハツと動きを止める。

ぎぎぎ、と、まるで油切れのロボットみたいな動作でそちらを見上げると、そこにはいつの間に入ってきたのか、ルナさんが居た。

「な、何でもありません……」

思わず苦笑いで誤魔化すと、ルナさんはホツとしたように表情を緩める。

「……チハル、元に戻ったな」

その安堵がこもったような言葉に、やっぱり端から見ても人格が変わってたんだな、と思う。

「……ご迷惑をおかけしました」

ぺこ、と頭を下げれば、ルナさんは首を横に振った。



「いや、大切な人を守れず、熱くなってしまうのは私にもわかる」  
「どうやら、あの“やってしまった感溢れる台詞”は、クオくんを傷つけられた末の暴走、という美談に纏められているらしい。」

確かにキツカケはそうなのだが、実情は酔っ払った（という）少し語弊があるが）末の行動なので、何ともいいがたい気分になる。

誤魔化すように咳払いをし、話題を変えた。

「……ところで、あの後どうなったんですか？」

「ん、ああ、そうだな。説明しよう」

彼女はぼすん、とベッドに腰掛ける。

「まず、チハルは3日間眠っていた」

「予想外に長い期間に、驚いてしまう。私の感覚からすれば、ほんの30分くらいだと思っていたのだけれど。」

「その間……まあ、色々とごたごたがあった」

「濁して少ししか教えてくれなかったが、それだけでもこれからの国家運営は大丈夫なんだろうか、という具合だった。」

「騎士団の50名ほどがフェイルについてたとか、“耳”と呼ばれる諜報部隊のトップがフェイル派だったとか、とある大貴族がフェイルを支持していたとか。」

「一体全体、どうやったら、そうなるまで気付かないでいられるのか。」

王たちがよほど愚鈍なのか、それともフェイルがよほど才覚と策謀に優れていたのか。どちらだとしても、ただただ呆れてしまう。

まあ、私にはあまり関係のない話だが。

これから、ルナさんたちに建て直しを頑張ってもらおうしかあるまい。

「フェイルとキースの二人は処刑されるまで牢獄に入れていたのだが……いつの間にか消えていた。見張りの兵士も倒されていてな。

……内部犯なのか、外部犯なのかすらわからん」

「……だ、脱獄ですか」

この国、本当に大丈夫かな、と心から思った。

国家転覆を狙った人間を、そんな簡単に逃がすなよ、と突っ込みたい。小一時間、問い詰めたい。

「それと、シルヴァニアの地下にいた奴らだが、あの辺りでは小規模だが名の通った盗賊団だったらしい。潜伏先がわからず手をこまねいていたそう。どうやって居場所を突き止めたかはわからないが、フェイルは知っていたのだろうな」

つまりこの反乱に利用するために、潜伏先がわかっても放っておいた、ということか。

民に被害があるとわかっても、自分の計画を効率よく実行するため。

……わかっただけだが、あの男、人格破綻してるな。敵意も無しに人を攻撃できる人間だし、今更か。

「あと……チハルには、謝らねばならんことがある」

「何ですか？」

「……魔物を操る本のことだ」  
ああ、そういえばそんな話もあった、とはたと思い出す。  
諜報部隊があえて流した情報かな、とも予想していたのだが、実際はどうだったのだろうか。

「実はだな……あれは嘘だったんだ。いや、魔物を操る、というより知恵を与えるためのマジックアイテムはあったのだが、それは本の形をしていない」

「えっと、つまりは、どういうことですか？」

「……母上が、お前をこの任務で使うために、本の形だと偽っていたらしいのだ。……本当にすまないッ！」

彼女の謝罪に、ぽかーんとしてしまう。

意味がわからず問い返せば、彼女は詳しく説明してくれた。

よくよく聞けば、つまりは、またしてもルナさんのうっかりだったらしい。

直接的に私のことを伝えたわけではないのだが、

ルナさんに、信頼のおける魔法使いが出来たらしい

+ルナさんが魔力のこもった本をいきなり探し始めた

「ルナさんが信頼するくらいだから、相当すごい魔法使いに違いない」

「その本は、ルナさんの信頼する魔法使いが探しているのでは？」

「なら、今回の件に本が関わるとなれば戦力増強？」

という図式が、后の中で成り立っていたのだという。

そこで、駄目元でルナさんに少し嘘をちらつかせたところ、私が見事に一本釣りされた、ということらしい。

テレポートなど、反則的な魔法が使える私がいたからこそ、今回の事件は、王族にとって考えられる最善の結果で終わったわけだけだ。

何となくすっきりしないものを感じる私だった。

「まあ、それはもういいです」

「だが、お前の探し物に協力する、と言っておきながら……」

「……気にしないで下さい」

もう見つかりました、とも言えず、私は誤魔化すように曖昧な笑みを浮かべる。

見つかったと言えば必ず、どこで、と聞かれるだろう。

沈黙は金、である。

「……そういえばクオくんは？」

「今は寝かせている。無理矢理にでもそうしないと、寝ないでお前の傍にいそうだったからな」

彼女が言った彼の姿が容易に想像できて、私は思わず苦笑する。

「それは……ありがとうございます。クオくんの居る部屋に案内して貰えますか？」

「もう動いて大丈夫なのか？」

「あ、大丈夫です」

3日も寝ていたからだろう。眉を寄せ、気遣いを見せる彼女に、きつぱりとそう告げる。

今回倒れたのは、レベルが低い内に下巻を手に入れたせいで、色々とおバーフローしただけなのだ。

躊躇いのない言い方に心配はいらなかったのか、彼女はそう

か、と頷く。

「なら行こう」

「はい」

抱き締めていた枕を置き、ベッドから立ち上がる。

あれだけ悶えて暴れまわっていたにも関わらず、まだ少しだけ身体が強張っていた。が、3日寝ていたにしてはマシな方だろう。ルナさんの後について、クオクンの元へ向かった。

「ここだ。私は用事があるので失礼しよう。何か用があれば、外のメイドに言えばいい」

「あ、ありがとうございます」

部屋を案内してくれたルナさんとは入り口で別れ、私はベッドに近づく。

「……………良く寝てる」

横になるクオクンの顔は、少しだけやつれて見えて。

心配してくれたという喜びと、心配させてしまったという申し訳なさが、ないまぜになって、私の胸を占めた。

サイドテーブルの上にいたフェンリルが、ぴょん、と私に飛びかかる。一瞬びっくりとしたが、咄嗟に伸ばした手の上に、上手く着地してくれた。

「やつ、フェンリル」

「こっちでは久しぶりじゃの」

「そう、なのかな？ 私はさっき会ったばかり、って感覚しかないや」

苦笑すれば、何がおかしいのか、フェンリルは笑う。

特におかしくもなかったけど、私もそれにつられて笑ってしまった。

「……ん、う……？」

笑い声が煩かったのか、もぞ、とクオくんが身じろぎする。

起こしちゃった？ と声をかければ、彼は勢いよく跳ね起きた。

フェンリルは空気を読んだのか、ぴょん、とサイドテーブルに戻る。

「チハルさん!？」

「クオくん、おはよう。心配させて、ごめんね？ それと、怪我させて、ごめん」

「……そんな！ 気にしないで下さい……！ だって僕が勝手に……！」

それ以上言葉も出ない。そんな様相で抱きつかれて、この感触が懐かしい、と思った。実際は、数日 私の感覚からすれば、たった一日だ。しか経っていないのに。

あの日、あの時間が、それほどまでに濃かったからだろうか。

地下にいて。反乱があつて。城に戻つて。殺されそうになつて。魔法ノ書が揃つて。

……考えてみたら、本当にあの日は、濃かつた。

というより、異世界に来てからの二週間が、今までにないほどにぎゅっと濃縮されていた。

だってまだ、それだけしか経ってないなんて、考えられないもの。

……でも、もう、帰れるんだ。

私は彼の肩に手を置き、優しく引き剥がす。

「ねえ、クオくん」

「……えっと、なんですか？」

「私ね、異世界から来たんだ」

「……へ？」

寂しそうな表情から、一転してぽかんと呆けた表情に変わる。

それが面白くて、耐え切れなくなった私は小さく笑みを零した。

「私の魔法、色々とおかしかったでしょう？ 強すぎるっていうか、

有り得ないっていうか」

「それは……はい」

「当然なんだ。あれは、この世界の魔法じゃないから。……といっても私の世界の魔法でもないけど」

そもそも私の世界には魔法すらないわけで。

「……よく、わからないですけど……でも、それがどうしたんですか？」

「前、言ったよね？ 私、探し物をしてるって」

こく、とクオくんが頷く。

「それ、見つかったんだ。……というより、ただの成り行きなんだけど」

困惑の表情を浮かべる彼を、苦笑しながら優しく撫でた。

「えっと、クオくんは実感がないと思うけど、私の探し物はクオくんの中にあつた」

「……僕の中!?」

彼が驚愕に目を見開く。

確かに驚くよなあ、と心から思った。

普通、そんなこと思わないもの。

どっかの崩玉しかり、どっかの宝珠しかり。

「簡単に言うと、クオくんの“魔物を引き寄せる原因”が、私の探し物だった」

「……え? じゃあ……」

「うん。それはもう私が持つてる。だからクオくんはもう、魔物を引き寄せる体質なんて持ってない、ただの1人の可愛い子供。私が保障する」

「そ、う……ですか」

どうしてだろう。彼が、哀しそうな表情をする。

嬉しくないのかな、と思って首を傾げれば、彼はまるで泣き出しそうな声色で呟いた。

「じゃあ……もう僕は、チハルさんと一緒に居られないんですね。

探し物が見つかったってことは、もうこの世界には用がないんでし

よっつ。」



「いや、でも、たまにはこっちに来ようとは思っよ？ だから、もう二度と会えないってわけじゃ……」

「でも、たまに、なんですよね？」

「……ええっと……」

まさか、そう切り返されるとは思わなかった。

……それは私と一緒にいたい、ということだろうか。

私のいる世界が、こことは違うって判っていても、一緒にいたいって思ってくれているんだろうか。

「いや、でも……私の居た世界って、こことは全く違うんだよ？ 剣も魔法もない上に、鉄の塊が街中を走り回って、空まで飛ぶような世界だよ？」

「……でも、チハルさんが居ます」

一瞬戸惑いが表情に表れたが、すぐに毅然として彼は言い切る。

「うーん……」

そこまで私を慕ってくれるのはとても嬉しいのだが、いかんせん問題が山積みだ。

連れて行くだけならば、やぶさかではない。

でも、戸籍のない彼が、あの世界で過ごすのは大変だ。

いや、でも、私と一緒に居たいだけであって、あの世界で過ごしたいと言っているわけじゃない、のか？

うう、としばらくの間悩んだが、私は決断する。

「……じゃあ、一緒に来てみる？」

「本当ですか!？」

「試しに、ね。ずっと生活するかどうかはまた別としてさ、遊びに来てみたらいいよ」

「はいっ、連れて行ってください!」

満面の笑顔で言われて、今まで考えていたアレコレが全て吹っ飛ぶ。

まあ、そんなに喜んでくれるならいいかな、と思った。

(シヨタコンが本気を出したようじゃの)

(……ねえフェンリル、いったい私をどうしたいの? それとも、その言葉が気に入ったの?)

(シヨタコン!! 少年を対象に抱く愛情・執着じゃから、間違っってはおらぬだろう?)

(いや、愛情はともかく、執着はどうだろう?……?)

(ならば、ペドフェリアの方がよいか?)

(……もうやだ、このもふもふ)

身元のばれたフェンリルが、今まで以上にはっちゃけるようになってしまい、私は心から号泣したくなった。

「……もう、行くのか?」

ルナさんが寂しそうに言う。

あれからすぐに、クオクんと共に城を去るということを伝えれば、忙しい中、彼女は城の入り口まで見送りに来てくれた。

「はい。王都からも、すぐに発とうと思ってます」

「父上や母上も、手を貸してくれたチハルに会いたいと言ってたのだがな……まあ、しょうがないか。チハルは私たちの恩人だ。束縛はしたくない」

きつとそんな甘いことを考えているのはルナさんだけで、后や、たぶん王も、私を手の内に入れたがっているだろうな、と思う。

ルナさんが信頼しているというだけで、試しに私を引っ掛けるような人たちだ。

テレポートや強力な魔法を連発したり、妙なマジックアイテムを量産している時点で、私を手放すなんて選択はないに違いない。

そんな予感がするからこそ、厄介なことに巻き込まれる前に、さっさと出て行こうとしているわけで。

「まあ、でも……その内、クオくんと一緒に、こっそりと遊びに来ると思います」

「そう、か。ならその時に、あのマジックアイテムの作成を依頼することでしょう」

そういえばそんな約束もしていた、と思い出す。

色々あって、すっかり忘れていたけど。

「そうですね……その時は、あれの他にも色々アイテムを作ってきますよ。その時は、高く買い取ってください。あ、他の人には、内密にお願いしますね？」

「また内緒なのか？ ……まあ、そうだな。あれだけの魔法が使えるのだから、色々とチハルも大変なのだろう」

「そういうことです。……じゃあ、また、ルナさん」

「ああ、またな。クオも達者でな」

「はい！」

二人で並んで歩く。少しして振り返れば、まだ彼女が私達の背中を見送ってくれていた。

手を振ってから、再び前を向く。

「……さて、と。クオくん、こつち」

そそくさと人気の無い裏路地にもぐりこみ、辺りに誰もいないことを確認してから、私は久しぶりのその呪文を口にす。

「『我求む、更なる魔法を。我願う、更なる力を。我望む、異なる世界を。繋がりの鏡よ、我が言霊をもってそれを成せ』！」  
今度はちゃんと出現してくれた、すべてのきっかけだった鏡の前に、私は小さく笑む。

「じゃあ、クオくん、行こうか」

「はいっ！」

手を繋いで、共に踏み出す。

長いようで短かった私の異世界生活は、こうして幕を閉じたのであった。

## 四季編 1

鏡をくぐって目を開けば、そこは見慣れた場所。

初めて魔法ノ書を使った、人気の全くないあの階段だった。

私は万感の思いを込め、こう言った。

「高校よ、私は帰ってきた！」

辺りを見回していたクオくんには、ぼかんとされました。

クオくんの腕の中にいたフェンリルには、哀れみの視線で見つめられました。

泣いてなんかいません。泣いてなんか。……うっ。

「さて……」

そんなことをしている場合ではない、とはっと我に返る。

これからどうしたものか。

「……まずは、家に帰ろう、かな？」

学校で見つかり騒ぎになるより、家に帰って両親に全て説明して一緒に考えた方がいいだろう。大体、この失踪事件(?)がどういう話になっているのかすら、わからないのだから。

そう思った私は、まずは家に帰ることに決めた。

確か、透明になる魔法があるはずだよな、と、私は魔法ノ書を元

に戻す。

そこでクオくんが、驚きの声を上げた。

「チハルさん、そのブレスレットも、マジックアイテムだったんですか!？」

「え？ あ、……あー……」

そういえば、そこから説明しなくちゃいけなかったんだっけ。

私は何と言おうか迷い、結局後回しにすることにする。

「後で教えるね。私の……はじまりだから」

「あ、はい!」

それ以上私の邪魔をしないように、と考えたのだろう。それきり彼は黙して、私がページをめくるのをじっと見ていた。

魔法ノ書は、またしてもその文量を増やしていた。下巻を手に入れた影響だろう。

あとでまた読み返そうと思いつつ、今必要な情報を探し出す。

「……ええと、透明化して空を飛んで帰ればいいか。そういえば、下巻手に入れてレベルが上がったお陰で、もう派生属性使えるはずなんだよな……それも今度試さなきゃ……」

ぶつぶつと呟きながら、魔法ノ書の文字を指でなぞる。

初めて下巻を手に入れた時は、知らない魔法の呪文が頭の中にはつと出てきたけど、今はそんなこともなく。

あれは、力に酔っていて、尚且つクオくんを傷つけられて切れていたからこそ出来たことだったんだな、と思った。

「クリリンのことかあああ」とパワーアップした悟空みたいなものだろう。

「んと、よし。じゃあ窓をあけてっつと」  
すぐ近くの窓に近付き、それを開ける。クオくんも窓に近付き外を見て、わあ、と息を呑んだ。視界に広がる街並みが、あまりにも彼の居た世界とは違っていたからだろう。

「……これが私の世界。あつちとは、全然違うでしょう？」  
「はい……！　すごい、です……！」

彼は目をきらきらさせて、その光景に見入っている。  
私も、初めて異世界の街並みを見たときはそんなことを思っていたから、彼の気持ちはよく理解できた。

「じゃあとりあえず、私の家に行こうか」

「チハルさんの………はい！」  
透明化と飛行、ついでに温度を一定に保つための魔法をかけ、開け広げた窓から外に飛び出す。

ちなみにクオくんは、私の魔法に、もう驚きを示さなくなっていた。  
少しだけ、切ないものを感じた。

学校から歩いて15分ほどの自宅は、空を飛ぶと5分くらいで到着できた。

クオくんは私の魔法には全然驚いてくれなかったが、空から見るこの世界にはしきりに驚きを見せていた。

電柱、車、建物、道路。その街並み全てが彼にとって、初めて見るものばかりだったから。

その内、一緒に街を探検しようね、と言えば、彼は嬉しそうな声色ではい、と言った。残念ながら透明化しているためその表情は見えなかったが、たぶん満面の笑みだったのだろう。

自宅の前に着地し、誰もいないことを確認してから、魔法を解く。

「何か久しぶり……でもないけど。お父さんは仕事だよな。……お母さんいるかな？」

ちなみに、母は専業主婦、父はしがないサラリーマンである。

チャイムを、ぴんぽーん、と一押し。

しばらく待てば、がちやりと玄関が開く。

顔を出した母は、俯いたまま口を開こうとし、そしてようやく視線を上げたところで、目を見開いて固まった。

私は、どこかやつれてしまったように見える母に、笑顔で一言。

「ただいま、お母さん」

「……千春！」

母は勢い良く飛び出し、私の名を呼びながらひたすらに抱き締めてくる。

私の服に熱いものが染み込む感覚がして、ああ、やっぱりとても心配させてしまったのだな、と心苦しく思った。



「あの……ごめんね、お母さん。心配、かけて」  
言葉もなく、母は腕の力を強める。

私はもう一度だけ、ごめんなさい、と呟いた。  
ふと後ろのクオくんは視線を向けると、彼の表情は羨望の色に染まっ  
まっついていて。私はなんとも言えない気持ちになった。

私が視線を向けたことによろやく、母が後ろにいたクオくんに気  
付く。そこでまたしても、母は固まった。

「……ち、千春、アンタちよつと、その子一体どこから連れてきた  
の!?!」

「えーっと、それも含めて今回のことを全部説明したいんだけど…  
…だから、家に入らない?」

「そ、それもそうね」

母は私から離れ、家に入る。私もクオくんを手招きしてからそれ  
に続き、クオくんは戸惑った様相ながらも私の後に続いた。

(……いい母親じゃの)

(でしょ?)

フェンリルにそう答えながら、懐かしい家の匂いを胸いっぱい  
吸い込むと、胸の内に安堵感が満ちる。

リビングに入った私たちはソファに腰掛け、私と母は向かい合う。  
クオくんは私の隣で、がちがちに固まって座っている。

「ええと、お母さん……信じられないかもしれないけど、聞いてね  
?」

「娘の言葉を信じないわけじゃないでしょう。だからグダグダ言っ  
ないで、ちゃっっちゃと吐きなさい」

「……はい」

母のいつもの調子が戻ってきた。私はそのことに小さく笑んで、今回のことについて話し始める。

「ええと、まずは……一週間どこに行ってたかというところ、異世界に行ってた」

「……はあ？ アンタ、何言ってる……」

ほかん、と。母は、鳩が豆鉄砲食らったような表情を浮かべる。

私は言いかけた母の言葉を遮って、畳み掛けるように続ける。

「きっかけは、この本」

ブレスレットにしておいた魔法ノ書を、元に戻す。それを見た母は、さっと表情を驚愕に彩り、すぐに真剣な面持ちへと変化させる。私が、虚言や妄言を言っているわけじゃないと、それだけで理解したからだ。

「たまたま、高校の図書室で見つけたんだけど、魔法ノ書なんてタイトルでさ。面白そうだから読んでたら、本当に魔法が使える本でちよっと試しに使ってみたの。そしたら異世界まで行ったはいいけど、戻ってこれなくなっちゃって。この子は、異世界で知り合ってる事情があっただけで、こっちまで連れてきた。こっちのもふもふは、ペット、みたいなものかな」

(ペットとは何じゃ)

フェンリルに突っ込まれたが、無視しておいた。

一息ついて、最後にこう纏める。

「……どこかの物語みたいだけど、本当の話です」  
証拠も何も無しにこの話をすれば、恐らく私は、鉄格子のついた病院に投げ込まれていただろう。

だが、実際に今、私はその本を手に持っている。形を変化させるところも見せた。だから、母も信じざるを得ないはずだ。

母は、何とも言えない表情をし、じっと考え込む。  
少しして、口を開いた。

「……私が千春に言えるのは、1つだけだわ」

「なに？」

「無事に帰ってきてくれて、ありがとう」

心からの言葉が、照れくさくて、嬉しくて、何も言えずにただ俯く。

目が潤んで、世界がぼやけた。

「さて、と。私はお父さんに報せてくるわ」

さっと立ち上がる母に、私はハツとして問いかける。

「あ、そういうばお母さん？ 警察に届出とかってしてあるの？」

「勿論、してるに……って、そうだった。見つかったって連絡したら、どこに居たのか当然聞かれるわね。どうしようかしら……」

頬に手をあて、うーん、と考え込む母が、ぽつりと言っ。

「……魔法で何とかならないの？」

「いや、ならないから」

「あら、魔法なんて言うから何でも出来るのかと思ったのに。使えないわね？」

あれだけすごいと思った魔法たちも、母にかかると“使えない物”扱いのようだ。母の感性に、苦笑するしかない。

というか、母は魔法をすぐに受け入れすぎだと思う。

魔法に対して忌避を覚えられるよりは、断然いいんだけど。

確実に私は、彼女の血を引いているな、と悟った。

「……じゃあ千春、アンタ家出してたことにしなさい」

「ええー……何で家出？」

母のあまりの言葉に、口を尖らせる。

「なら、異世界に行ってみましたって言うの？ 警察に？」

「それは……。なら、この二週間の記憶がありません、とかどう？ 神隠しってことで」

「“現代の神隠し！ 少女はどこに消えていた！？”とか週刊誌に特集されちゃったりしてね。……まあ、家出なんて言って、内申点が下がるよりはマシかしら」

「世間体うんぬんよりも、まず先に内申点を気にする辺り、お母さんだよな」

「そうね」

肯定するのか。思わず内心で突っ込んでいた。

「じゃ、それでいきましょつか。お父さんと警察、それと学校にも電話してくるわ。あんたは部屋に戻って、携帯で友達に連絡してあげなさい。そろそろ学校も終わる時間だしね」

そう母に言われ、ふと、時間という概念を喪失しかけていた自分に気付く。異世界で携帯の電源が切れてからは、感覚と太陽の角度で大体の予想をつけて過ごしていたせいだ。

時計を見れば、確かに母の言う通り、そろそろ授業の終わりそうな時刻だった。

「……うん、そうする。クオくん、私の部屋に行こう？」

「……あ、はい！」

話に入れず、すっかり置いてけぼりだったクオくんを呼ぶと、彼は勢い良く立ち上がる。

私はこっち、と二階にある自分の部屋まで彼を案内した。

「ここが私の部屋。好きに寛いでね？」

「あ、ありがとうございます」

「すまんの」

二週間ぶりの私の部屋は、何も変わっていなくて安心する。

ただ、学習机の上にぼつんと、あの日学校に置去りにしたはずのスクールバックとコートがあった。きつと、奈津か亜紀が帰ってきてくれたのかな、とか考えながら、どさ、とつつ伏せにベッドへと倒れこんだ。

あー、久しぶり私の布団！ 愛してる布団！ と、一通り布団への愛と賛辞を振りまいてから、身体を反転させる。天井を見上げ、ほう、と息を吐いた。

そして、内心で一言。

……知ってる天井だ。

そんな馬鹿な独り言を心の内で展開させていると、カーペットの敷かれたところに座っていたクオくんが、ぽつりと言う。

「チハルさんには……素敵な家族がいるんですね。すごく、幸せそうでした」

その言葉が、切なく、寂しいものに聞こえて、私は起き上がった。言った。

「クオくんも、これから幸せになるんだよ」

「……そう、でしょうか？」

「うん。絶対そうだよ」

その内、クオくんの家族に会いに行ってみようと思う。

捨てたか、捨ててないかは、わからないけど。クオくんを愛していないなんてことは、きつとないはずだから。

……もし愛情の欠片も無くて、あんな子いらない！ みたいなことを言う家族だったら、もうずっと私の家にいればいいよ。弟になればいいよ。食費とかは私が異世界で稼ぐよ！

「……さて、とりあえず携帯を復活させなきゃ」

枕の脇にあった充電器を掴み、充電が切れていた携帯に刺す。携帯に充電中を示す赤ランプが点灯したことを確認してから、ぱか、と開いた。

「チハルさん、それ何ですか？」

「ん？ 私が作ったコイン型通信機の、凄い版かな？」

「……じゃあ、それ、マジックアイテムなんですか？」

「いや、魔法は使われてないよ。こっちの世界の科学って技術の結晶」

「魔法も使わずにそんなことが出来るんですか……。チハルさんの世界って、凄いですね」

「ま、まあね……」

私が褒められたわけでもないのに、つい照れてしまう。頬をぽりぽりと掻きながら、逆の手で携帯の電源を入れた。

見慣れた起動画面が終わり、待ち受け画面になると、まず私はメールを受信させる。きつと溜まっているんだろうなと思ったら案の定で、一分程で受信したその数なんと213通。

思わず、うはー、と良く判らない溜息を吐いてしまった。

「後でちゃんと全部読もうっと。……えっと、きつとみんな一緒にいるだろうから、奈津でいいよね」

電話帳から奈津の番号を選び、発信する。

ぶるるる、と三度のコール音の後、電話が繋がった

『ちいッ！？ ちいななの！？』

「は、はい！ 千春です！」

奈津のもの凄い剣幕に、思わず姿勢を正してしまう。突然情けない声と共に正座した私を、クオくんが目を丸くして見つめていた。

『ちい……！ アンタ、一体どこ……あ、ちょっとあーちゃん、ま

「私が……千春ちゃん！」

最後に私の名を呼んだのは、亜紀だ。きっと奈津の携帯が彼女に奪われたのだろう。

「……亜紀、心配させてごめんね？」

『本当だよ……！どこに行ってたの!？』

「えっと……それは」

彼女達に魔法や異世界について説明していいか？ という問いが私の中に浮かび、愚問だな、と即決する。

あの三人なら、信頼できるから。

私を、怪しい研究所に売ったりはしないって。

……年頃の女子高生としては変な悩みだが、下手な人に知られると有り得そうで嫌なのだ。

「絶対、説明する。……でも後でね？」

『……わかった。電話越しじゃ大変だもんね。ちょうど明日は土曜だし、家に押しかけるから！ 覚悟しててよ!？』

「は、はい!」

電話越しだから伝わらないというのに、私はこくこくと頷いていた。私にそうさせるだけの圧力が、彼女の声からは感じられたのだ。普段おっとりで大人しい癖に、やるときはやる子だ。

『なら、明日聞くからね。……じゃあ、冬香ちゃんに代わるね?』

その裏で、ちょっとそれ私の携帯なんですけど、なんていう声が小さく聞こえてきて、思わず笑ってしまった。うん、奈津はもう、いつも通りみたい。



『……もしもし?』

「あ、冬香? 元気だった?」

『それはこつちの台詞よ。……全く、千春ったら、私たちを心配させて。明日会ったら、洗いざらい吐かせて上げるから、覚悟しなさい?』

「えっと……はい」

きつめな言葉の中に、私への気遣いと心配がはつきりと見えて。私にはやけながら、彼女の言葉に素直に返事をした。やっぱり私には勿体無いくらいの、素敵な友人たちだ。

『じゃあ奈津に代わるよ。……くそー、私の携帯なのに殆ど話せなかったし』

「明日があるさっ!」

『……ちい、明日アンタ30秒くすぐり責めね』

「うええ!?!」

思い切り変な声が出た。

「ちよ、何いきなり!?!」

『だって何かムカついたんだもん』

「横暴な!」

『はいはい、横暴で結構。じゃあそろそろ切るよ。明日の時間はこつちで決めてメールで報告しますからそのつもりで。じゃ!』

「えっちよ、私の意思はっ……あー……」

つー、つー、と切れた通話に、肩を竦める。こりゃあ、きっと明日は朝の8時とかに来るな、と小さく苦笑を零しながら、携帯をぽふんとベッドに投げた。

「……チハルさんのお友達ですか？」

「うん、そうだよ。明日来るって言うってたから、クオくんを紹介するね」

「……はい」

どこか元気なく返事する彼。私は少し考えてから、ちよいちよいと手で招き寄せる。

首を傾げながら立ち膝で近寄ってきた彼を、えい、と引っ張って抱き止めた。

「ねえ、クオくん……寂しかったら、もっと甘えてくれていいんだよ？」

「……いえ、僕は、十分甘えています。それに今でも、チハルさんには迷惑をかけてますし、これ以上なんて……」

「うーん……そこから間違いかな？ 私は本当に好きでやってるから、迷惑とかは思っていないよ。というか、迷惑だったら連れてきたりしないし、もっと淡泊な態度を取るよ」

迷惑な人を一緒に連れてくるほど、私はお人好しじゃない。本当に迷惑だと思ってたら、ルナさんの両親にしてみたみたいに、全く顔も合わせずに出てくると思う。自らの手に負えなくなるような面倒ごととは嫌いなのだ。

「……それに、クオくんは私の命の恩人なんだから」

フェイルたちと戦っていた時。もしクオくんが庇ってくれていなければ、私は今頃死んでいただろう。自分で傷を治療は出来るが、痛みを抱えた状態でも冷静になれる自信は私にはない。

それに、クオ君の中に魔法ノ書があったからこそ、フェイルたち

を倒せたようなものだ。

「もっと頼ってくれていいんだよ？ 甘えてくれていいんだよ？」  
だから、彼は我慢しないで、もっと私に色々言えればいいんだ。

「だってもう、私たちって家族でしょう？ そう思ってるのって、私だけ？」

「……僕も、です……！」  
ぎゅ、と彼の腕が背中に回されて。それはまるで、必死に何かを求めているかのようにだった。

……きつと、沢山の人に囲まれる私に、孤独を覚えたのだろう。  
それと同時に、私に嫉妬も感じたと思う。

それがどんな気持ちかは、こつこつと囲まれている私にはわからない。でも、それを少なくしてあげることが、出来ると思うから。

私は、彼の背中を撫でる。

将来は絶対ブラコンだな、と、簡単に予想のつく未来に小さく笑みを零した。

## 四季編 2

翌日、朝8時半。

メールで予告した通りの時刻に、三人はやってきた。

「ちい、久しぶりー！」

玄関を開けると、ばふ、と奈津に抱きつかれる。抱きつく、というよりはむしろ絞める、と言ったほうが正しい勢いだったが。

私は苦しさに、ギブギブ、と彼女の背を叩く。  
が、離してくれる様子はない。

「ねえ奈っちゃん。千春ちゃん、苦しそうだよ？」

「いいの！これが私の愛だから！」

亜紀がそう取り成してくれるものの、奈津は離そうとしない。少しの間は我慢していたが、本当に苦しくなってきたので強めにバシバシ叩くと、彼女はようやく離してくれた。私はぜえぜえと息を荒げ、床に座り込む。

「……うう、死ぬかと思った」

「こっちは死ぬほど心配したんだから、おあいこじゃない？」

そう言われてしまえば、私はもう何も言うことが出来ない。

それ以上口答えせず、彼女たちを家に上げた。

「クオくん、皆がきたよー」

「あ、はいー！」

途中でリビングの方にその声を掛けると、母の手伝いをしていた彼がぱたぱたと走ってくる。母はどうやらクオくんのが非常に気に入ったらしく、さっきまで一緒に並んで、皿洗いなんかやっていた。

父とは言えば、少し悩んだ末、何とか異世界や魔法のことを理解してくれた。クオくんについてはかなり悩んでいたが、しばらくは家で面倒を見ることを了承してもらった。それからどうするかは、まだ考えていない。でも、しばらくは一緒にいたいと思う。

「……ちい、その子は？」

「ん、クオくんって言ってね、私の隠し子？」

そう嘯くと、みんなが呆れたように苦笑する。クオくんだけはちよっとだけ恥ずかしそうに笑っていた。

「……まあ、その辺も含めて説明するから、上に行こう？」

そう言って私は、彼女たちを部屋に案内した。

それから十数分ほど時間をかけ、両親にしたような説明を彼女たちにもする。

やはり皆も、疑惑 驚愕 納得という、両親と同じような反応をしていた。

「……はあ、そんなことが起きていたとは」

「流石、千春ちゃん。私たちには考えもつかないところに、平気で突っ走るね」

「千春だもの……それくらい有りそうだわ」

三者三様の返答に、思わず顔が強張る。それぞれ、奈津、亜紀、冬香の台詞だ。

皆が私のことを一体どう思っているのか、よくわかるお言葉である。

「……この二週間の記憶がない、ってことにしたらさ、警察でも病院でも不思議なものを見るような目で見られたよ。お母さんの「神隠し」なんて言葉も、案外信じてるみたいだったし」

「そりゃあ、痕跡もなしに学校から忽然と消えればそうなるって。

……あの日は凄かったんだから。バッグも全部置きっぱなし。目撃証言もなし。何か手掛かりは無いかと、この辺りにあった防犯カメラの映像や、ちいの携帯の発信記録も全部調べたらしいけど、何もない。警察もお手上げだったみたいよ？」

奈津の言葉に、肩を竦める。やはり、随分と大事になっていたよ  
うだ。

「……でも、千春ちゃん、これからちよつと大変かも」

「え、何が？」

亜紀の言葉に、私は首を傾げる。すると彼女は、気まずそうにしながら教えてくれた。

「……あのね、千春ちゃんに対する、色んな噂が流れてたの」

「噂？」

亜紀の言葉に首を傾げると、彼女が潜めた声で教えてくれる。そしてそれは、思わず私の頬が引き攣るほどのもので。

「事件に巻き込まれた」「某国に拉致された」はまだいい。良くないけどまだマシだ。

でも、「監禁されてアレな日々を過ごしている」って、オイ。

一体どこからそんな話が広まったのか、小一時間問い詰めたい。

「うえー……それ本当？」

「嘘でこんなこと言うわけじゃない。……変なこと考える輩もいるかもしれないし、気をつけなさいよ？」

「……はい」

何かあるとは思えないが、彼女たちの助言通り、なるべく気をつけよう。

魔法で防犯グッズでも作っておこうかな？ と私は小さく唸った。

そんな、どこか重くなった空気を払拭するように、奈津が口を開く。

「ところで、クオくんは、フェンリルだったけ？」

「は、はい……！」

「そうじゃな」

クオくんはぴしりと固まって、フェンリルはいつもと変わらずに、それぞれ奈津の言葉に、相槌を打つ。

「そんな固くならなくてもいいよ。私は奈津。これからよろしくね」

「あ、宜しくお願ひします……！」

「宜しく頼むの」

ぺこ、と頭を下げる二人と一匹を皮切りに、亜紀と冬香も続く。

「亜紀です。宜しくね?」

「私は冬香よ。宜しくお願いするわ」

「えっと、ナツさんに、アキさんに、フユカさん、ですね?」

「……奈津お姉ちゃん、でもいいよ?」

奈津の一言に、思わずぶつと吹き出した。亜紀たちは呆れた顔を  
し、クオくんはきよとんとした表情で口を開く。

「ナツお姉ちゃん、ですか?」

「上目がちつ……微妙に傾いだ首つ、イイツ……!!」

グツ、と親指を立て、そのまま悶絶するようにその場に突っ伏し  
た奈津。

私は思わず立ち上がり、クオくんに詰め寄る。

「ちょ、奈津ずるい! クオくん、私もさん付けじゃなくてチハル  
おねえちゃんって呼んで!」

「なら私は、冬香お姉さまと呼んでもらおうかしら」

「えっと、私のことは、好きに呼んでいいよ?」

「あのナツという奴に、妙なシンパシーを感じるのは何故じゃ  
?」

「……大混乱でした。」



收拾がつかなくなったので、結局全員をさん付けすることで強引に纏める。不満の声は、勿論黙殺しました。

「はあ……それにしても、魔法、いいなあ……」

亜紀がうっとりとして呟く。それに同意するように、奈津と冬香も頷いた。

「ねえ、千春ちゃん、魔法って私たちも使えないのかな？」

「んー……やれば出来ないことないかな？」

「えっ、本当!？」

異世界でやってきたように銀貨に魔法を込め、それを彼女たちに使ってもらえば、擬似的にはあるが魔法は使える。それに、創造魔法でもマジックアイテムを作れるはずだ。

そう思って答えれば、亜紀は勢い良く食いついてきた。他の二名も、きらきらと期待を込めた視線で私を見つめてくる。

「……うん、ならやってみようか。ここじゃちょっと危ないし、亜空間に行こう?」

「亜空間?」

「えっと、このバッグの中に広がってる空間のこと」

異世界で使っていた肩掛けバッグを持ち出す。昨日の内に中身の整理をしてあるので、その中にはもう何も入っていない。

それを見たクオくんが首を傾げた。

「あの、それって何でも入るマジックアイテム、でしたよね？」

「うん、そうだよ。私が魔法で亜空間を作って何でも入るようにしたんだ」

「……あ、そうだったんですか」

少し驚いた表情を浮かべる彼に、私はそうだったのです、と胸を張ってみる。

魔法ノ書が凄すぎるだけなので、私自身の功績でも何でもありません。

「……っと、あ、みんなを置いてけぼりにしてごめん。簡単に言うと、四次元ポケット、みたいなものかな、このカバンは」

「……魔法って何でも出来るのね」

冬香が感心したように言う。奈津も亜紀も興味津々と言った様子だ。

「何でも、ってわけでもないけどね？　じゃあ、まずは奈津、どうぞ」

奈津の手首を取り、カバンに突っ込んでみる。腕が全部入ったところで、奈津があははは、と爆笑した。

「すごい！　カバンの底がない！　面白いー！」

「でしょ？　じゃ、ぐいっつと行っちゃえ！」

「はいよ……っつとー！」

ずるん、と奈津の全身がカバンに呑み込まれていく。端から見るのかなり奇怪で恐ろしい映像に、その場に妙な静寂が落ちた。

「……えっと、じゃあ、どんどんどろぞ」

「う、うん」

「本当に変な感じね……」

「えっと、僕もですか？」

亜紀を押し込み、冬香を押し込み、最後にクオくんを押し込む。

フェンリルは行くつもりがないと、留守番を決め込んだ。

机の上にあった異世界の硬貨が詰まった袋を持ち、私も中に入ろうとカバンの口を広げる。

「あ、フェンリル。お母さんが来たら、みんなと魔法でどこかに行った、って言つといて？」

「わかったわい」

それだけフェンリルに伝えた私も、えい、と足をカバンに突っ込んだ。

亜空間は、相変わらずの白と黒の世界だった。だけど今日は、みんながいるので、そんなに怖い雰囲気は感じない。ただ、相変わらず音の反射が無いので、耳が気持ち悪い。

「ちい、遅いよー!」

「ごめんごめん」

そんな迎えの言葉を聞きながら、財布から銀貨を取り出す。

「えっと、みんなは何の魔法がいい？」

「私、火がいい！ RPGの序盤に使えるようなので！」

「えっと、空とか飛びたいな。千春ちゃん、そんな魔法ある？」

「なら私は、水がいいわ」

「僕は、えっと、結界魔法……がいいです」

見事にばらけたな、と思いつつ、皆の言葉に頷く。

「んー、出来るかどうかはわからないけど、とりあえずやってみようか」

まずは銀貨に奈津リクエストの、火の魔法を込める。

RPGの序盤に使えるようなので、最初に使った小さな爆発を起こす魔法にしておいた。とは言っても、あの威力で序盤の魔法と言っているのか謎だが。

「じゃあ、はい、奈津。えっと、火を出したい方向に指を突き出しながら『フレイム』ね？」

「よっし、わかった！ 行くよ！ ……」『フレイム』！」

ちり、と火花が散る。そして、奈津の指差した方が、爆発した。以前は驚きにひっくり返ってしまっただが、今回はちゃんと見る事ができた。というより、前より威力が減っている。本来の威力はあの程度だったのだろう。魔法ノ書効果で酷いことになっただけで、そんな風に考えていれば、彼女は興奮した様子で私の手を取る。

「ちい！ これ超凄い！ 楽しい！ ありがとう！」

「私も最初はそう思ったから、奈津の気持ちはよくわかる」

まるで子供のようにぴよんぴよんと跳ねる奈津に、うんうんと頷いた。

「実際見ると本当に凄いわね、魔法って……」

「ねー？ ……千春ちゃん、次は私だよ！」

私はせがまれるまま魔法を込め、彼女たちはその魔法を楽しんで使う。

しばらくの時間、亜空間の白い空には、火が舞い、水が舞い、風が舞っていた。

「……あー、楽しかった！」

奈津が足を伸ばして少しだらけたような姿勢で座り、喜色の滲んだ声を上げる。皆も思い思いの恰好で休み、口々に同じようなことを言っていた。

私はそんな彼女たちを見ると、少しだけ心苦しくなる。だって、私が魔法を手に入れたのは、本当に偶然で。私だけが、なんて気持ちが悪くてきいてしまうから。

でもそれ以上に、みんなが喜んでくれたことがとても嬉しくて、思わず頬に笑みが浮かんだ。

「……でもさー、こつちじゃ全然使い道ないんだよね、魔法って」  
小さくぼやけば、確かに、とみんなが苦笑する。

「火の魔法なんて、放火にしか使えないしね」

「空なんて飛んだら……NASAとか来ちゃうかも」

「そう考えると、目に見える効果の魔法は、全部駄目よね」

「それに、こつちの世界には魔物なんていないみたいですし、攻撃魔法の殆どがそもそもいりませんよね……」

皆の意見に、そうそう、と頷く。

NASAかどうかは判らないが、人が生身で空を飛ぶところなんて見つかったら、本当に国家権力がやってきそう。

「使い道と言って唯一思い浮かぶのはさ、未来をちょこつと見て、ロトみたいな宝くじを買うくらいだけど……それはズルみたいで何となく嫌なんだよねー」

「えー、いいじゃん？ 50万くらい当てて、みんなで春休みに旅行行こうよ、旅行」

「でも、私はちょっとわかるな」

「というより、未来なんて見れるのね……」

「……宝くじって何ですか？」

クオクンの言葉に、彼の隣に座っていた亜紀が簡単に説明する。クオくんは判ったのか判らないのか、曖昧な表情を浮かべていた。異世界に宝くじなんてないだろうから、しょうがない。

「まあ、未来そのものじゃなくて、今のところ一番可能性の高い将来、なんだけどね。だから、いざ宝くじを買ってみたら、バタフライ効果で外れるかも」

「えー、そうかあ？」

奈津の疑問に満ちた声に、私は肩を竦める。可能性の話だよと言えば、彼女は納得したようだった。

よいしょ、と勢いづけて立ち上がる。亜空間の中なので汚れることも無いのだが、何となくいつもの調子ではんぱんと足元をほろつた。

「だから、こつちじゃ魔法なんて、あんまり意味ないんだよね。もしこれで私が男だったら、透明になって女湯を覗いてやるぜ、とかアリかもしれないけど……」

「あははっ、確かに私たちが男湯見たって嬉しくないよね……！」  
奈津に思い切り笑われた。亜紀と冬香も笑う。

クオくんだけが、きよとんとした表情を浮かべていた。  
彼女たちの笑い声をBGMに、私は宣言する。

「とまあ、そういうことなので、明日からも私は普通の高校生ってことです！」

「普通かどうか激しく疑問だけど、そういうことにしておいてやるう」

「ははー、ありがたき幸せ」

奈津の言葉に、両手を頭の上から下ろし、仰々しく礼をすると、一瞬場がしーんとなる。

誰かがぷつと吹き出すと、もう堪えられなくて、皆で一緒に笑った。

## 四季編 3

異世界から帰ってきて、初めての学校。

私が教室に入るなり、変なざわめきが起こった。

二週間も行方不明だったから、皆、興味津々なのだろう。仕方がないとはいえ、何となく針の筵にいる気分。

教師には、こっちに帰った日にすぐ母が連絡してくれたので、何か聞かれることは無いと思う。

ただ神隠しという設定なので、妙な目で見られることもあるかもしれないが、それは仕方がない。

妙な空気の中、内心で溜息をついて自分の席 いちばん窓側の前から二番目に座る。

「おはよっ、ちい！」

「千春ちゃん、おはよう？」

「千春、おはよう」

でも、そんな空気を払拭するように、三人が笑顔で挨拶してくれて。

「おはよ、みんな！」

私もちゃんと笑顔を浮かべられた。

「あ、そだ。みんな、ノートありがとう。すごい助かったよ！」

土曜日に借りていたノートを、三人にそれぞれ返す。



これが無ければ、今日からの授業が大変だっただろう。何も言わなかったのに持ってきてくれた彼女らに、心からの感謝だ。

ただ、繋がり鏡を通った時に自動的にかかる翻訳魔法のせいで、英語のノートですら日本語に見えて焦ったけど。魔法を解いたら戻りました。

「あ、そういえばちい、昨日結果どうだった？」

「ん？ あ、病院の？ やっぱり体調に異状はなし、健康そのものだって。神隠し中は、よっぽどいい生活してたんだろうねー」

あつげらかと、笑って言う。こうやってわざと情報をばら撒いておけば、周りにも段々と浸透していくだろう。

「でも、神隠しなんて……千春ちゃんも凄いね。全く記憶にないんですよ？」

「うん。ふと気付いたら家の前に居てさ。あれ、さっきまで学校にいたはずなのに、と思って家に入ったら、すっごいお母さんやつれてるし。二週間もどこに行ってたの！ とか怒鳴られるし……あの時はびっくりしたよ」

「……まあ、仕方がないわよ。今回心配させた分まで、ちゃんと親孝行しなさいよ、千春」

「はい……」

一芝居打ってもらうことは事前に相談してあったので、そんな会話がすらすらと交わされていく。周りの注意がこちらに向いているのがわかったけど、私たちは知らん振りで続けた。

「でも、有り得るんだね、神隠しって……」

「すっかりそれに遭遇するあたり、千春よね……」

「……まあ、ちいは、面白そうなものハンターだからね」  
「えっ、ちよっと、“面白そうなものハンター”って何!？」  
思わず本気で突っ込みを入れてしまう。  
あの、そんなの台本にないんですけど。

「だってちいってば、面白そうとか言って、変なものばかり持ってくるじゃん。無駄に長い鉛筆とか、無駄にでかい電卓とか」

「あ、授業中にそれを使って、先生にびっくりされてたよね?」

「あと、変わった飲み物には必ず飛びつくよね。変わったお菓子にも」

「……ジンギスカンキャラメルは、ちよっと本気で不味かったわよね……。それと、受験シーズンのウカールとかも大好きね、受験生でもないのに」

「バレンタインの時は、でっかいチョコシリーズとか言って沢山買ってきたもんね。あのサイズじゃ、板チョコっていうかもうただの板だよ、板」

「どうあっても普通じゃないんだよね、ちいって。ま、全部市販されてるんだから、需要はあるんだろっけどさ」

「よ、よく皆覚えてるね……?」

笑いながらぼんぼんと列挙され、少しへこむ。

少しむくれていたなら、ちよっと先生が教室に入って来たので、そこで会話はおしまいになった。

久しぶりに受ける授業は、何だかとても退屈で。

もし異世界に居たら、なんて考えばかりが浮かぶ。

今頃クオくんと一緒に、魔物退治をしている時間かな。そういえば、アルバートさんに挨拶してこなかったな。ルナさんは今頃、頑張ってるかな。

そんなどうしようもない思考たちに一つ溜息を吐くと、右手でペンを回しながら、外を見た。

微かに聞こえる鳥の声に、今日もいい天気だな、と目を細める。

ふとそこで、異世界に鳥らしき生物が一匹もいなかったことを思い出した。

羽の生えた魔物は居たが、あれは断じて鳥ではないと思う。どちらかというところ、哺乳類に羽が生えた生物、という見た目をしていた。魔物の本には、ほぼ伝説扱いでドラゴンの絵も書いてあったけど、あれだって鳥ではないはず。

やはりこちらとは、進化の過程が違うのだろう。

「相模、次読めー」

「うえっ、ふあい！ あっ、ごめ……！」

考え事をしていて、焦った私は、勢い良く立ち上がる。

弾かれた椅子が、がたんと思いつき切り後ろの席にぶつかって、周りからくすくすとした失笑が漏れた。

「相模ー、記憶はしっかりしてるかー」

「あっ、記憶はしっかりしてますけど、読む場所はわかりません！」

「……ばかものー」

正直に言つと、先生からは苦笑が漏れる。

恥ずかしくて思わず縮こまると、隣の亜紀が笑いながらページを教えてくれた。

「えっと、私が掛茶屋で先生を見た時は……」  
前より少し進んでいる教科書のページ。  
でも、変わらず接してくれる、友人たち。

……二週間が長かったのか、短かったのか。私にはわからないけど。

帰ってこれて良かったと、しみじみ思った。

退屈な授業をやり過ぎ、ようやく訪れたお昼休み。  
私はげっそりとした面持ちで、机に突っ伏していた。

「どうしたの、千春ちゃん？」  
「……いや、何ていうか……長期休み明けって感じがして」  
「……あー、それはそうかもしれないね」  
亜紀だけに聞こえるくらいの小さな声で言うと、納得したらしい。  
どこか困ったような声色で、同意してくれた。

「えっと、ファイト、千春ちゃん！……あ、それより、ご飯食べ

ようよ？ 久しぶりに4人揃ったから、お弁当も張り切ってきたよ！」

どーんと目の前に差し出された二段の重箱に、思わず苦笑する。

「これは張り切りすぎでしょ！？」

「あはは、やっぱり？」

自分でもそう思っていたのだろう。彼女は照れたように、頬を掻いた。

「わっ！ あっちゃん、何これ、どしたの！？」

「凄いわね……」

私たちの席に、お弁当を持ちながら寄ってきた奈津と冬香もそうやって驚く。

亜紀は、さっきと同じ説明を彼女たちにもして、私と同じような言葉で呆れられていた。

「それより、早く食べよう？」

「そだね。じゃ、亜紀の机とくっつけてっ」と

「はいよっ」と

私はいつものように、亜紀と私の机を引き寄せ、くっつける。奈津も手伝ってくれた。

くっつけた二脚の机を、囲んで座る。私もお弁当をバックから取り出し、テーブルの上に置いた。

「……じゃあ、早速いただきますしよー！」

「いただきますー！」

手を合わせてから、亜紀が重箱を開ける。そこには、彩り豊かで美味しそうなおかずやおにぎりの数々が所狭しと詰まっていた。

「卵焼きにタコさんウィンナー、肉団子にほうれん草の和え物、そしてアスパラのベーコン巻きにきんぴらさん……！」

さすがは亜紀。

すぐく、おいしそうです……。

がしつと隣に座っていた亜紀を抱き締める。

「亜紀！ もう、私の家にお嫁に来ないっ!？」

「あはは、考えておくよ、千春ちゃん」

「あー、ちいだけズルイ」

「なら、四人で重婚すれば解決ね」

「あ、それいい」

「えっ?」

亜紀が良くないよ、と奈津をぺしりと叩く。

そんなやり取りに私は一人爆笑し、言い出さずの冬香は、我関せずと言った様子で卵焼きに箸を伸ばしていた。

私も負けじと、肉団子に箸を刺し、ぱくりと一口。

「うう、美味しい……!!」

冷凍食品ではない、彼女手作りの味。きっと朝早くから頑張ってくれたのだと思うと、その美味しさもひとしおである。

「あ、ちい、抜け駆け！ 私も食べる!」

「千春ちゃんも、奈っちゃんも、どんだん食べて!」

こうして賑やかに、むしろ騒がしく、お昼の時間は過ぎていった。

昼食の後は、流れるように時間は過ぎ、放課後。  
下校の準備をする彼女達に、私は一声掛ける。

「あのさ、ちょっと図書室に行つてこようと思つただけど」

「ちい、ついてくよ!」

「私も行くね?」

「一緒に行くわ」

「うえっ!?!」

三人が次々にそう言うから、思わず素っ頓狂な声を出してしまう。  
何でいきなりついてくるなんて皆言い出したんだろう? と、目を白黒させながら少し考えてみれば、すぐに合点がいった。

だってあの日、私はそう言い残して、異世界に消えたんだ。

だから、私が一人で図書室になんか行つたら、またどこかに消えるんじゃないかと思つたんだろう。

もう、そんなことは恐らく起こらないだろうとは判つていても。

それでも彼女たちは、心配してくれたんだ。

その心遣いが、とても嬉しい。

「……特に用事はないんだけど、いいかな?」

「いいよ、行くかう?」

亜紀が、私のカバンを取って、手渡してくれる。私はありがとう、とそれを受け取った。

四人で連れ立って、図書室を目指す。

「……ねえ、ちい？ 特に用事がないって言うけど、じゃあ何しに行くの？」

「えっと……ほら、これとの出会いの場所だから、ちょっと行ってみたくなっただけ」

これ、と手首に着けてある魔法ノ書をちらと指差せば、彼女たちは納得して、各々相槌を打つ。

「ちょっと覗いたら、すぐに帰るから。……ごめんね？ 付き合わせて」

「気にしないでいいわよ。私たちが勝手について来てるだけだから」

「そうそうっ！ だからちいは、思う存分聖地巡礼しててよ！」

「……奈っちゃん、聖地巡礼って……」

「え？ あれ？ 普通に使わない？ あれ？」

焦ったような笑みを浮かべる奈津に、全員がトドメを刺す。

「言わないよ？」

「言わないわね」

「オタク乙」

私たちの厳しい突っ込みに、奈津は頭を抱える。

うっ、オタクは学校じゃ隠してるのに、なんてぶつぶつと呟いていたけど無視しておいた。そもそも奈津は隠しているつもりらしいが、彼女がオタクだということは、クラスメイトの殆どが知る周知（羞恥？）の事実だ。正に、無駄無駄無駄ア、である。



ちなみに私は、奈津に色々と染められたクチ。時たま飛び出す様々な名（迷）言はそのせいだ。

と、グダグダとそんな話ばかりしていたら、もう図書室だ。やっぱり楽しい時間は早く過ぎるなと思いつつながら、引き戸を引いて中に入る。

そして真っ直ぐ、あのラノベコーナーに向かった。

「へー、高校の図書室にラノベなんてあったんだ？」

自暴自棄から復活した奈津が、潜めた声で言う。

「……そっか、奈津は図書室で本なんて借りないで、ネットからコピーだもんね」

「ここら、確かにそうだけど、そんな真っ直ぐ言わないでよ。濁して濁して」

「あ、ごめんごめん」

小さく笑いながら、本棚に並ぶ内の、一冊を手に取る。魔法ノ書を見つめるキツカケになった、あのラノベだ。

「千春ちゃん、その本がどうしたの？」

「……この本さ、私も持ってるんだけど、結構古いんだよね。10年以上前の本だったはず……あ、ほら、やっぱり古い。1997年だって」

言いながら、ぱらぱら、とそのラノベを捲る。青年の書かれた力ライラストを眺め、その懐かしさに目を細めた。

「だからさ、高校なんかにあることにビックリして、あの日もこうやって手に取ったんだ」

「それで、どうしたの？」

「そしたら、その隙間から、これとご対面。……運命的でしょ？」  
手首を見せながら、小さく笑って問いかける。彼女たちはどこか真面目な雰囲気で、頷いていた。

「本当に、たまたまだったのね」

「うん。だから、このラノベには感謝してる。……まあ、そのせいで行方不明なんてことにもなっちゃったんだけど」

思わず苦笑したら、気にするなどでも言っように、冬香が肩をぽんと叩いてくれた。

「……でもね。きっと、魔」

そこまで言いかけて、ハツとして声を潜める。周囲を見るが、誰も近くに居なかったので、そのまま潜めた声で続けた。

「きつとさ、魔法を使いたい人って、いっぱい居ると思うんだよね。亜紀も、そうでしょ？」

「うん、凄く憧れてた。だから、この間は、凄く楽しかった……！」  
うつとりとした笑顔で手を組み、彼女は言う。その輝いた表情に、私は思わず目を逸らしてしまう。

「……だからさ、ほんのちょっと運の良かった私だけが、こんな力を手に入れていいのかって、思っちゃうんだ」

「千春ちゃん……」

どこか心配そうな声色で、亜紀が言う。でも、しくしくと胸を苛む罪悪感で、私は彼女に視線を向けられなかった。

ふと、手の中のラノベに意識が向く。

ん？

……あれ？

……あつ！

「ねえ！ 三人ともっ！」

「しーっ！」

三人から指を立てられ、慌てて両手で口を塞ぐ。

周りからも痛い視線が突き刺さるが、でもこの思いつきは、もう止まりそうに無い。

わくわくと、どきどきが、私の中でこれでもかというくらい暴れまわっていた。

私はラノベを本棚にしまい、啞然とする三人を、力の限り引っ張る。

そして、急いで図書室を後にした。

三人を人気の全く無い廊下まで連れてきた私は、ようやくそこで立ち止まる。

「ちょっと、ちい！ 何、どしたの!？」

「あの子！ あの子！ みんなでVRのゲーム作ろうよ!」

「……はあ？」

ぼかん、と皆の表情が固まった。

私はそれに構わず、畳み掛けるように続ける。

「私が魔法でゲームのシステムを作るでしょ？ で、奈津が広報担当！ 亜紀がゲームのストーリーを書く！ 冬香は皆のまとめ役！ 完璧！ もう完璧でしょ!？」

「ちょっと待って！ ちい、落ち着いて、落ち着いてっば!」

どうどう、と制されて、私は仕方がなく声を落とす。

でも、このわくわくは止まりそうにない。だって、もうさっきから面白そうセンサーがうずうずしてしょうがない!

「ちい、言いたいことはわかった。でも、まずは二人にVRの説明をしようね。VRが何かわかってないから」

「あ……」

申し訳なさそうに頬を掻く二人に、私は思わず停止してしまった。小さくごめんと謝り、深呼吸で自分を落ち着かせてから、彼女達に説明するため口を開く。

「えっと、VRは、バーチャルリアリティ（Virtual Reality）の略なの」

「あつ、それ聞いたことある。確か、現実みたいな世界を体験できるんだよね？ ……じゃあVRのゲームってことは、えっと？」

「……つまりは、魔法で擬似的な世界を作って、その中で遊ぼうってことかしら？ ……でも、VRって言うの、それ？」

「わかんないけど、でも楽しそうじゃない！？ きつと、沢山いると思うんだ！ 異世界に行きたいって人！ 魔法で空が飛びたい人や、剣で戦ってみたいって人！ だから、だからね、私たちから、そんな素敵な世界のおすそ分け！ でも本当の魔法だって思われたら困るから、VRってことにするの！」

興奮のあまり、私は一気にまくし立てる。はあはあ、と息が切れたが、胸に充足感が満ちた。

私は、皆を見回す。三人とも戸惑った顔をしていたが、やがて奈津が表情を明るく変えた。

「……そうだね、確かに面白そう。うん……ちい、やるよー！」  
「本当っ！？」

奈津の両手を握り、彼女に詰め寄る。彼女は私の目を見て、うんと大きく頷いた。私は嬉しくなって、きゃーと奇声を上げながら彼女に抱きつく。

「私もっ、私もやるよ、千春ちゃん！ 魔法を、皆に届けよう！」  
「私も参加させてもらおうわ。たまには見るだけじゃなくて、一緒に楽しみたいもの」  
「本当！？」

嬉しくなって、満面の笑顔の私はその二人にも飛びつく。

どじょうどじょう、どじょうどじょう！

今なら、本当に何でも出来る気分だ！

「ねえねえ、ちい？　じゃあさ、私たちのグループ、いや、ユニット名？　それともサークル？　まあ、どれでもいいけど、名前、決めようよ？」

「名前？　……うん、そうだね！」

「……でも、もう殆ど決まってるようなものじゃないかしら？」

「うん、そうだよね？」

四人で顔を見合わせ、いっせいで口にする。

当然、私たちの声は、きっちりしっかりハモったわけで。

こうして私たち『四季』は、密かに始まりを告げるのであった。

### 四季編 3 (後書き)

やっとここ(本題)まで来ました。

長かった……。

もともと「現代での魔法の有効活用方法って何よ?」から考え付いた話だったので。ゲーム作りが有効的かどうかは置いておいて。

読者の皆様方は、魔法が使えたらこの現代の日本で何をしますか?

「フェンリルーツ！」

「うわっ、何じゃ、どうしたんじゃ!？」

あの後、とりあえず実現可能かどうかを試してみる、ということにして帰宅した私たち。

家に帰るなり、リビングでテレビなんて見ていたフェンリルを両手で握るようにつつまえて、自分の部屋に拉致る。

「あのね! 魔法でVRのゲームを作りたいの! 出来る!？」

「チハル、落ち着け! お主が何を言つとるのか全く判らんわ!

というか苦しい、離さんか!」

あ、という声と共に、私は手の力を緩める。私の両手に捕らえられていたフェンリルは、そこからすっぱりと飛び抜けた。

ベッドの上に着地したフェンリルは、ふう、と溜息を吐く。

「えっと……ごめん……フェンリル」

「落ち着いたなら、とりあえず1から話してみい」

頷いて、事の顛末を語って聞かせる。

そして全てを聞き終えたフェンリルは、呆れた声で言った。

「……前から思ってたが、チハル、お主少し変わったのの」

「……そんなに变?」

「初めてじゃぞ、そんなことに使うと言いだめた主は……」

きつとまともな身体があったならば、頭を抱えていたに違いない声色で、フェンリルは言う。私は、そんなに变かなあ、としきりに



首を傾げた。

「まあ、それはいいわい。それで、チハルは何を聞きたいんじゃないか、フエンリルの問いに、少し戸惑う。」

具体的にどうすればいいのか、全然考えていなかった。

ちよつと考え、まずは、と聞いてみる。

「……んつとさ、下巻が揃ったから新しい魔法、作れるよね？」

魔法ノ書の上巻は、呪文から効果まで型にはめられた魔法が書かれており、いわば魔法入門編みたいなもの。

それに対し下巻は、魔法を自由に創造する方法が書かれており、魔法応用編といった感じ、らしい。

上下巻が揃ってから、まだぱらぱらと流し読みしただけだが、概ねこの認識で正解なはずだ。

「魔法ノ書を読み……と、言いたいところだが、まあいいじゃろ。出来るじゃろが、今のチハルじゃ無理じゃの。魔法使いとしての実力が全然足りんわ」

「今から修行に専念したとして、どれくらいかかる？」

「そうじゃな……今のペースじゃと、一月半くらいかの結構かかるな、と思わずげんなりする。」

出来ることなら、私は今日からでもゲームを作り始めたいのだ。

「魔法ノ書にある魔法を少し変えるくらいなら、今でも出来るぞ？」  
魔法を変える、か。そちらの方が、まだ使えるかもしれない。

「じゃあさ、亜空間を作る魔法ってあるでしょう？ あれを変化させることって出来る？ たとえば亜空間を、緑豊かな世界に変えるとか」

「出来んの。亜空間はああいっ世界じゃから、あのままじゃし、亜空間じゃないものを作るうとする時点で、それはもはや別の魔法じや」

「うーん……駄目か……」

亜空間を好きに弄ることが出来れば、楽だったのだが。そうは問屋が下ろさないようだ。

じゃあ一体どうしたらいいのかな、と頭を捻り、ハッと閃いた。

「そついえば、亜空間とは別の、異次元空間、みたいなのを作れる魔法もあつたよな？」

現実世界を、そつくりそのままコピーした世界を作り出す魔法があつたはずだ。人間や動物はコピーされないので、余計に都合がいい。

「あるの。ただ、そこで壊れたものは現実でも壊れるぞ。異次元空間もそついう世界じゃから、そこは変えられん」

「ええー……」

RPGを作るのだから、当然、魔法や武器は沢山使ってもらふことになる。いちいちその影響を受けるのは、ゲームのステージとしては非常に相応しくない。

「……じゃあさ、生き物の居ない異世界ってあるかな？ しかも、自然は豊かな感じの」

「世界は何千、何万とあるからの。あるかもしれない」

「……あ、よかった」

あるかもしれないのなら、それについては、繋がりの鏡に頼ろうと思う。

上下巻が揃った今なら好きな世界に行けるので、条件指定した上で探せば何とかかなりそうだ。

「……じゃあさ、星属性に世界の理をちよつとだけ弄る魔法があるでしょ？ それって、どこまで適用されるの？ 誰かをこつちの世界から連れて行ったとしたら、その人にその理は適用されるの？」  
「されんの。その世界の理は、その世界に属する物や者だけに適用されるものじゃ」

「うーん、難しいな」

“この世界では人は死なず、致命傷を受けた場合は指定の場所に戻る”とか、そういう風に理を弄った上でゲームのステージにすることを考えていたのだが、それも無理のようだ。

「じゃあ、何から何まで全部魔法で作るしかないか。……うん、大体固まったかな。ありがと、フェンリル」

「……全く。全部、書に書いておることじゃろうて……」

「それはそうだけどさ。でも、書の守護獣さんに聞いたほうが早いと思うて」

「……はあ。わしは下に戻るぞ」

「ごめんね？ テレビ見てたのに拉致って」

「全くじゃわい」

フェンリルは悪態を吐きながら、ぴょん、とベッドから飛び降りる。

部屋のドアをあの身体でどうやって開けるのかとワクワクして見

ていたら、さつさと開けんか、と怒られた。理不尽な。フェンリルを見送ってから、その辺りのいらぬ紙を引っ張り出し、案を書いて纏めていく。

『project』四季』（仮称）について

・まず、どうやって人々をゲームに誘導する？ ネットが何かで宣伝して、ユーザーを募集しようと思う。宣伝方法は、奈津と要相談。

どこかに来てもらうのか、それとも何かアイテムを作り配布するのか

……今はまだ、配布は無理かな？

じゃあ、とりあえずはどこかに集めて、そこから異世界に誘導する方針で

もし新しい魔法が作れるようになったら、幽体離脱の魔法とか、感覚だけ飛ばす魔法とか作りたい

・VRとするために

名目はVRなので、誤魔化すための道具が必要  
無難なのはヘッドセット、とかだろうか？

ヘッドセットをつけたユーザを魔法で眠らせる 異世界に放り込む  
魔法で起こす、で誤認する？

最終的にネットゲみたいに、多人数参加型のものにした

・安全装置

自動防御魔法+転移の魔法をかけておく

防御魔法が無くなった瞬間に、転移が発動するように

一目で残り魔法残量がわかるようにして、それをHPのメーターにする？

創造魔法で、そういう感じのものが作れないか試してみよう

・姿

現実と一緒にじゃ、ゲームにならない

理想の自分になってこそ、ゲームだと思っても、理想を伝えてもらうのって難しい

CG技術がもっと発達してればいいんだけどなー

最初は、髪や肌、目の色で区別をつけよう  
顔は殆どそのまま、ちょっと弄るくらい

・魔物とNPC

この辺りは難しいので、後回し

VRシステムを構築してから、考えよう

今はゲームじゃなくて、VRで魔法を体験してもらうところまでを目標に』

「……とりあえず考えなきゃいけないのって、こんなもんかな？」  
出来上がった紙を見て、私は満足げに頷く。  
とりあえずは、こんなところでもいいだろう。

「よし、じゃあまずは、創造魔法の練習しようっ」と！  
結局、異世界では一度も使うことのなかった派生属性だが、ようやく使う時が来た。

まずは、簡単なものから作ってみよう、と私は実験を開始した。

二時間ほどかかって試してみた結果、色々なことがわかった。

まず、ずっと作ろうと思った宝石類。これは、見た目的には完璧だった。

ただ成分については、目当ての宝石通りとも限らないので、本物と呼べるかどうかはわからないが。

しかし、魔法の触媒としては非常に優秀だ。魔蓄率も魔導率も、金貨の数倍ほどという体感だ。もしかしたら、“魔法を込めるために使う”というイメージを持っていたために、そうなったのかも知れない。

次に、魔法で改造した後のものを想像しても、そういうものは創造されなかった。つまりは、『何の変哲の無いコイン』は創造できても、『通信魔法を込めたコイン』は創造出来なかったのだ。

そして、機械類。やはり、私のイメージ力が足りないのか、中身の機械部分は創造されず、ただのハリボテが出来てしまった。当然、魔法がかかっているわけでもないそれが、動作することはなく。

これらの実験から、創造魔法は、アイテムのための素材を作るにはもってこいだが、アイテム自体は作れない、という結論になった。

「……よし、じゃあここからが本番だな。『我は光を詠う。我は光

を謳う。』……」

自分の望む素材のイメージを、心の中で呟きながら構築していく。形状はとりあえず腕輪。魔蓄率は、複数の魔法を込められるように高ければ高いほどいい。あとは、魔力の残量によって色が変わる性質でも持つてくれれば最高だ。

もやもやとしたイメージを、段々と明確にし、膨らませる。ぴん、と私の中で全てが嵌ったところで、その魔法を発動させた。

「……『光よ、我の唱を聴き、祈りを纏いて発現せよ』！」  
キラキラと光が舞うエフェクトと共に、それが現れる。シンプルな腕輪の形状をしたそれは、鈍い銀色だった。

「……何か、手垢のついた装飾品みたいだな……」  
もっと磨かれた銀を想像していたのだけど。  
少し落胆しながらそれを手に取り、とりあえず自動防御の魔法を込めてみた。

「……お？ お、おお！」  
すると、見る見る銀色が輝いていく。私は思わず、なるほど、と唸った。

「つまり、これが鈍い色になったら、魔力切れが近い……ってわかりにく！」

思わずノリ突っ込み。

通常時ならともかく、戦闘の時までこんな微妙な差に気を遣ってられないよ、これ。

「……でも、こういう性質のものが作れるってわかっただけで、儲けものだと思っておきますか」  
魔力の残量が減ったら、ぴこーん、ぴこーん、なんて音がするものとかも作ったらどうだろう。すぐRPGっぽい表現で面白そうだが、実に間抜けなことになりそうだ。  
それか、魔力の残量が減ると、少しずつ麻痺の魔法がかかるようにする、とか。

次から次へと浮かぶ案に、食指が動きまくって、しょうがない。

よし、今日はとことん、試してみるぞ！

「おはよー、みんなあー……」

「うっわ、ちい、凄い顔……!!」

「……千春ちゃん、具合悪そうだよ、大丈夫？」

「寝不足かしら？」

「冬香、正解……だから、心配はしないでねー」

寝不足でぼーっとする頭のまま、はつきりとした意識で心配する皆に手を振る。そのまま倒れるように、椅子にもたれかかった。

結局、昨晚寝たのは朝方の4時過ぎ。

クオくんを巻き込んでまでの、一大実験だった。

そのお陰で、VRシステムの大体の形は出来た。ただ心配なのは、



安全性について。それについては、クオくんともテストしたが、あとで四人ともテストしようと思う。被験者の数は、多いだけいい。

「例のあれ、作ってたの？」

「うんー、凄いはりきっちゃって……でもそのお陰で大体出来たよー……あとはテストで色々確認かなー……」

「さすがだね、千春ちゃん！」

亜紀が嬉しそうに、ぐったりと突っ伏す私の手を取る。私は彼女の動作に、されるがままになっていた。

「ちいは時々、信じられない位の集中力を発揮するよね。……ま、私もホームページは大体作っちゃったし、ちいのこと言えないんだけど」

「あら、奈津も凄いじゃない？」

「と言っても、本当に形だけだけだね。ページに書く内容も、ちゃんと決まってるないし」

「ああ、それもそうね。……内容って誰が考えるの？ 亜紀？」

「えー、みんなで考えようよ？」

私以外の会話を子守唄に、机にのしかかりながら目を閉じる。

……ああ、早く、放課後にならないかな。

ドキドキを胸に、担任が来るまでの少しの時間、私は浅い眠りについた。

## 四季編 5 (前書き)

この小説に登場する諸々は、実在の人物や企業・団体とは関係ありません！

と、一応注意らしきものを書いておきます。

これから先の話には注意書きなど書きませんので、自己補充よろしくお願いします。

放課後、奈津の家に集まった私たちは、まず、奈津が作ったという私たちのホームページを見る。すつきりとした見やすいページで、さすが奈津、と三人で感心した。

ページには、『四季』の簡単な紹介文や、VRシステムの説明などが書いてあった。

ただ、VRシステムの説明は、当然ながらまるつきり嘘だ。特殊な脳波を利用とか良く判らないことを書いてある。

「……………何これ、奈津？」

「ウィキペトかから適当にコピペしてきた。いいでしょ？ 魔法って知られるわけにはいかないんだから、それらしいこと書いておこつよ」

「……………冬香的にはどう思う？」

実は学者の娘である彼女に聞いてみる。ちなみに学者なのは父親で、母親は医者だったはずだ。

物凄くハイブリッドな遺伝子を持つ彼女だが、そのことで昔色々あったらしく、今では境遇そのものについて滅多に口にする事はない。

ただ、相談ごとをよく彼女に持ちかけたりはするが。

「いいんじゃないかしら？ 具体的な単語は何一つとして書いてないもの」

「……………ま、冬香が言うならいいか」

「え、ちい酷い……私の言葉は信じてくれないなんてッ！」  
泣き真似を始めた彼女を放置し、私は亜紀に視線を向ける。

「ねえ、亜紀。あと必要なページって何かな？」

「うーん……私たちそれぞれの説明とかあっても面白いんじゃないかな？」

「……おい、私は放置ですかー」  
「勿論」

奈津にへこまれました。

適当に彼女を宥めてから、ひとりひとりの説明を皆で考えてみる。  
10分ほど相談した結果、こんな紹介文が出来上がった。

☐ HARU

- ・システム全般担当
- ・自称 魔法使い
- ・暴走特急な四季の言いだしっぺ

ナツ NATU

- ・イラストおよび広報担当
- ・自称 電波塔
- ・一番の苦労人で被害者

アキ AKI

- ・ゲームプランナーおよび癒し系担当
- ・自称 縁の下の力持ち？
- ・影の支配者

FUYU<sup>フユ</sup>

- ・ゲーム調整および四季のリーダー
- ・自称 四季のまとめ役
- ・彼女には誰も逆らえない!』

一段目が簡単な役割説明、二段目が自己紹介文、三段目が三人からの紹介文だ。

「暴走特急か……間違ってるけど」

「苦労人とか被害者だとか思うなら、みんな労わってよ……」

「ねえ、この影の支配者って何……?」

「……誰も逆らえない、ねえ?」

各々思うところはあったが、話し合いが終わらないのでこれで決定。

奈津には、後でそれぞれのイラストを描いてもらうことにして、次はマジックアイテムのチェックだ。

例のカバンから、亜空間に四人でもぐりこむ。

そこで、あらかじめ亜空間にしまっておいたブレスレットを拾い、三人に渡す。

それぞれダイヤのつもりで作った宝石が埋まっており、奈津のはグリーン、亜紀のはイエロー、冬香のはブルーだ。

ちなみに私はピンクで、しかもペンダントだったりする。ブレスレットは魔法ノ書で間に合っているので、形を変えてみた。

「えっと、まずはそのブレスレットをつけて、自分のなりたい姿を

想像しながら、“チェンジ”って言うってみて？」

本当はメタモルなんちゃらとか、ムーンクリスタルなんちゃらとか、テクマクなんちゃらとか、魔法少女っぽい呪文にしようかと思っただが、流石にやめておいた。

私の言葉に、まず反応したのは奈津だ。目を瞑り、真剣な表情で黙り込む。

そんな彼女を、私たちもまた、黙って見守った。

「じゃあ、行くね？ …… 『チェンジ』！」

一瞬、奈津の姿がぼやけたかと思うと、次の瞬間には彼女の姿が変わっていた。

褐色の肌に、髪は赤。瞳は金色で、眼鏡は消失している。服は、まるでどこぞのアマゾネスのような、とても露出の多い恰好だ。胸も非常に盛られている。顔立ちは奈津のものままだが、ガラリとその印象は変化していた。

「……………おお！ 超アマゾネス！」

その場でぐるぐると回り、自分の恰好を確認する奈津。どうやら満足の行く出来だったらしい。

「次からはその姿で固定されるから、思い浮かべなくても大丈夫だよ」

「はいよー」

体をしきりに動かし、奈津は感心する。亜紀や冬香も、どこことなく輝いた目で彼女を見ていた。

「じゃあ次は私だね！」

そわそわとした亜紀が、想像する間を置くことなくチェンジと唱えると、四枚の透き通った羽を生やした、まるで妖精のような姿に変化した。ただし大きさはそのままなので、妖精というよりは大妖精かもしれない。

服は白のロングドレスで、髪と瞳は赤茶色。その長さは腰下まで、二つにまとめてある。顔つきも、いつもの亜紀とは少し違う、おっとりとした可愛い系の美人になっていた。

「さすが亜紀、凄い……」

「いつつ小説とか見てるから、想像力だけはあるんだよ？」

照れたように笑う彼女。熟考する間もなく、ここまで姿を変貌させるとは。

「でも、小さくなるように、って想像したんだけど、変わってないね？ …… やっぱり姿を変えるだけかあ」

「うん、掌サイズになるのも試してみたんだけど、慣れるまで感覚に違和感が出ちゃうし、危ないからやめたんだ。胸を大きくしたりは出来るんだけどね？」

私の説明に納得したのか、亜紀は残念そうにそっかあ、と息を吐く。この辺りもどうにかして改善したいが、今はとりあえず置いておく。

「最後は私ね。…… そういえば千春はどんな姿にしたの？」

「あ、そういえばまだ教えてなかったね」

忘れてた、と頭を掻く。見たいと全員に言われたので、私も彼女たちと同じように姿を変えた。

肩までの緑の髪に濃緑の瞳。まるで民族衣装のようなワンピース姿に、ロングブーツ。顔はルナさんを参考にしたので、超美麗だったりする。そして極めつけは、尖った耳。

「ちょ、美人すぎてびっくりした……」

「……あ、もしかして、エルフ？」

亜紀の言葉に、笑顔とピースで応える。やっぱりファンタジーと言えば、エルフだと思う。独断と偏見だけど。

「エルフにアマゾネスに妖精……ね」

冬香は小さく指を当てて考える。しばらく悩んでいたようだったが、やがて動きを見せた。

「じゃあ、私はこれね……」

そして彼女の変身した姿は、何と云っていいのかわからない姿だった。髪は首元で切りそろえられた薄い青で、目もそれに近い色。肌は白く、服装は黒のボディースーツ？ それはびつちりと彼女の魅惑のボディラインを浮き上がらせ、どこか近未来的な印象を与えている。彼女の頬や腕には、電子的な模様が描かれていた。

これは……機械人形、といえいいのだろうか？ それとも、サイボーグ？

冬香の予想外の姿に、思わず、じつと彼女を凝視してしまう。

「えっと……サイボーグ、でいいのかな？」



「どちらかというと、アンドロイドかしらね」  
私たち三人はファンタジーなのに、彼女だけすごくSFだ。

「エルフに、アマゾネスに、妖精に、アンドロイド……。ゲームのストーリー、どういうのにすればいいのかな。普通にファンタジー……？」

亜紀が、ぼつりと呟く。

私は聞こえなかったフリをしておいた。是非とも頑張ってください。  
い。

「……えっと、みんな姿を変えるのも終えたことだし、とりあえず次の説明に移るね？」

三人が頷いたのを確認してから、胸元からペンダントを引っ張り出す。

「えっと、みんなに配ったには自動防御の魔法がかけられてるの。その残量をHPの代わりにしようと思ってるんだ。魔法の残量が減ると、どうにかしてそれを教えるようにしてさ」

ちなみに自動防御の魔法は、害意ではなく、“自分に対する攻撃全て”に反応するように魔法を弄った。これで、遊び感覚のPKにも対応出来るはずだ。

「ちなみに私のは、HPが減ると麻痺の魔法がかかるようになってるんだ。それならプレイヤーも感覚でわかるかなって。……奈津、ちょっと私に攻撃魔法を使ってくれる？ 奈津のブレスレットの中にはフレームが入ってるから」

「あ、わかった」

彼女達から離れ、奈津の魔法を待つ。昨日テストを繰り返したのだから、大丈夫だとはわかっていても、やはり怖いものは怖い。

私は逃げ出さないよう、ぐっと目を瞑った。

彼女の呪文が聞こえた。そしてすぐ近くで響く、耳が痛いほどの爆発音。同時に自動防御が発動する感覚。それに伴い四肢がぴりぴりと痺れ、重くなっていく。これで、魔法の残りは3分の1ってところかな。

「……ちい、大丈夫？」

「うーん、やっぱり麻痺じゃちょっときついかも。……『水よ、その清廉なる身で我を浄化せよ』」

自分で自分に魔法をかけ、麻痺状態を解除する。

動けなくなるわけじゃないけど、かなり体が重くなる。魔法使いはともかく、剣士や前衛キャラにはキツイ制約かも。

もうちょっとペナルティを軽くした方がいいかもしれない。体力が減れば減るほど窮地に陥るなんて……いや、現実的には間違っただけじゃないんだけど、ゲーム的ではないような。痛みが無いからゲーム的といえばそうんだけど……うーん。

これは、彼女達にも試してもらってから決めよう。

「奈津、もう一回魔法お願い？ ゲームオーバー時の説明をするから」

「ん、はいよ」

もう一度、彼女の魔法を受ける。爆発の威力に耐えられず自動防御が切れた瞬間、私は即座に彼女達の後ろに転移していた。

自分の姿を確認し、どこも焦げていないことを確認する。どうや

らしっかりとテレポートはその役目を果たしたようだ。  
私を探しきよるきよるとする彼女達に、後ろから声をかける。

「HPがなくなった瞬間、テレポートである地帯まで転移するようになってるんだよね」

「わっ、びっくりした」

奈津が声を上げ、こちらを振り向く。亜紀と冬香は声こそ上げなかったが、肩を揺らしながら振り返った。

「ねえ、安全的にどう思う？」

そうやって問えば、三人がそれぞれ真剣な面持ちで黙りこくる。考えてくれているらしい。

少しして、奈津が眉を潜めながら口を開いた。

「ねえ、ちい？ 空とか飛べるようにするの？」

「ん、すると思う。いかにも魔法らしいしね」

「それでさ、もし空から落ちた時とかは、自動防御って発動するの？」

「あー……」

それは考えていなかった。確かに今の仕様だと、そういう事故には全く効果を為さない。

「それに、亜空間の中ならいいけど、水のある場所とかだと、溺れるかもしれないよね」

「あと、土砂崩れとか、そういう災害にも対応できないわね」

それぞれに問題点を指摘され、思わず「あー」と唸る。やっぱり

クオくと二人で考えただけじゃ、色々と穴があるようだ。

「みんな、ありがとう。言ってくれなきゃ気付かなかったよ」

「いやいや、それが私たちの役目だしね」

「あとで、三人の意見を纏めて、千春にメールで送るわね」

「ん、ありがとう、冬香」

“装備者に危険が迫った時に発動”みたいに、魔法を調整してみよう。実は調整って結構難しいんだけど、そこは何とかしなくちゃ。安全でなければ、最早それはゲームではないと思うから。デスゲームとか笑えないじゃん。

「……よし、そこは後で考えてみるね。……あ、そうだ。ねえ、奈津」

「ん、何？」

「どうやってコーザって呼び込もうか？」

「え？……あー、どうしよっか？」

彼女も、今気付いたのだろう。真顔で、うーんと考え込む。俯きながら何やら唸り声を上げていたかと思うと、はっと顔を上げた。

「ねえ？ 例えば、ミコミコとかに動画をアップロードするとかどう？」

「……ああ！」

その提案に、思わずぼん、と手を合わせてしまう。それは面白い提案だった。

「ミコミコって……えっと、動画サイトだよな？」

「確か、コメントを付けられる、のよね？」

「そうそう」

あまりネットをしないはずの亜紀や冬香まで知っているとは。ニコニコは存外に有名ならしい。

ニコニコ動画、通称ニコニコ。コメントの付けられる動画投稿サービスとして一斉を風靡した（している？）サイトだ。

「……最初は“現実そっくりなCGを作ったよ”とかにしておくでしょ？ この世界で私たちが自由自在に飛んだり、魔法を使ったりする映像を投稿するの。で、そこから、“それを利用したゲームを鋭意製作中です”とか言っておいて、そこからテスター募集に話を広げていく。……募集条件は“ファンタジーに憧れている人”で！」

「……うん。それで上手く行くかどうかはわからないけど、いいかもね！」

彼女の言葉に同意する。

段々と形作られていく計画に、心臓の鼓動が速くなっていく。これから先どうなるかはわからない。けど、皆にもこの楽しさを体感してほしい、と心から思った。

「……ならば、早速撮影しようよ？ 何事も、早いほうがいいでしょ」

亜紀の言葉に、皆が同意する。

奈津が、ちょっとカメラ取って来る、と亜空間から抜け出していた。

四季編 5 + (前書き)

現実的に考えると、「ありえないんじゃないかね？」となる箇所もあるかと思いますが、この小説は夢いっぱい希望いっぱいチートいっぱいファンタジーということなので、どうかご了承ください。

201×年×月04日 22:13

その動画は、某動画サイトに投稿された。

『エンターテイメント』『四季』『CG』『ファンタジー』などのタグが付けられたその動画のタイトルは、『【CG】実写そっくりのCGが出来たよー【四季】』。

サムネイルには、緑色の髪のエルフの少女。

その128×96ピクセルが映しているのは、当初、写真かと思われた。

「どうせ腐女子のコスプレだろ？」

「はいはい釣り乙」

「エルフ（。。（。ミ。エルフ）。（。ミ。」

そう呟きながらも、とりあえずその動画をクリックするユーザーたち。

ただの興味本位。

釣られに来た。

他の動画を探す間の暇つぶし。

エルフは正義！

そんなそれぞれの理由から、ユーザーたちは、動画を読み込んで

いく。

動画の説明文には、簡潔にこれだけが書いてあった。

『こんにちは、四季です。実写と見まがうほどのCGを作りました。今私たちは、この技術を利用して、VRPGを作っています。その内テスターを募集しますので、その時はよろしくお願ひします。』

詳しくはこちら      t t p : / / s e a s o n s x x x x x x x x  
x x x . x x x / 『

そんな説明文、最初は誰も信じなかった。  
当然だ。

CGの技術はまだそこまで発達していないし、それにまだどんな大企業だって、どんな研究機関だって、VR技術は開発に成功していない。

VRなど夢のまた夢の技術なのだ。

そんなものを、こんな動画サイトなんかに掲載する人間が開発だなんて、信じるほうがおかしい。

「VRとかありえんwww」

「腐女子の妄想乙www」

「釣りだろ釣りw」

「エルフさえいればそれでいい」

だが、そこまで宣言する動画に、ユーザーたちは興味を持った。



そこに混じる感情が何であれ、ユーザーはその動画に感心を寄せた。

そして、疑いながらも、再生ボタンをクリックする。

無音のまま動画に映し出されたのは、どこまでも広がる、白い空と黒い床。

それだけで、その世界が現実とは違うのだと、ユーザーは認識した。

まさか本当にCGなのか？

そんな期待を抱くユーザーたちは、次々にコメントを残していく。

『1 get』 『釣られにきますた』 『支援』 『期待』 『wktk』  
『全裸待機中』 『エルフ（。。。）oミ。エルフ（。。。）o  
ミ。』

そして、映し出されるものたち。

その空間を縦横無尽に飛び回る、亜麻色の髪の妖精。

その空間で自由自在に炎と踊る、褐色の肌の少女。

その空間に一閃の光を飛ばす、無機質な美貌の女性。

そして、金色の光翼を広げ、画面をじっと見つめてくる、深緑髪  
の美しいエルフ。

どう見ても、何度見ても、本物にしか見えない映像。

コメントを忘れ、人々はそれに魅入っていく。

それは、たった5分間の、奇跡。

最後に流れた『実はこの動画のキャラクターは、私たちが動かし  
ています。VRの部分は殆ど完成していますので、あとはRPGの  
部分だけです』という言葉。

奇跡の目撃者のほんの一部は、その有り得ない言葉すらも信じた。  
どんなにすごいCGが作れたからと言って、VRに結びつくこと  
などないというのに。

だが、夜なことも手伝ってか、それくらい彼らのテンションは異  
常だった。

『すげえWWW』『え、操作……？』『嘘だろ？WWW……嘘だ  
よな？』『てかVRとか抜きにして普通にすくね？』『これマジ  
？』『……ど、どうせ全部合成だろ？』『合成だとしてもすくね  
？』『エルフだけじゃなく機械娘だと……』『……？……そ  
れでも俺はエルフだ！』『。。。』『オミ。』『マイリス余裕でした』  
『機械っ娘萌えええええええ！』『SUGEEEEEEEE』  
『！！！』『ちよWWW超技術WWW』『越えたんじゃね？W  
WWW』『の方が凄いに決まってるだろ』『信者乙』『つか  
四季って何者よWWW』『どうやら4人組のサークルらしいが』  
『素人ってこと？やばくね？』『GGGGGGJJJJJJ  
J！』『もちつけWWW』『鳥肌注意』『くあせdrft  
gyふじこー』『このCGでミク作ってくれ！』『えーりんも頼ん  
だ』『つかもうこれ三次元じゃね？』『つ』『zip希  
望』『高画質希望』『合成乙』『合成ってこんなに綺麗に出来んの  
？』『つかただの特撮じゃね？』『やっべえ超ハリウッドWWW』  
『この映像だけだと何とも言えないが、特撮でも普通にすごい』  
『背景的に特撮は無くないか？』『じゃあ何だよ？』『合成？』『全  
然わからんことだけはわかったWWW』『すげーとしか言えない』  
『テスター募集したら絶対応募する！』『超期待』

ヒートアップするコメント。

『キモイしwww』 『ただの特撮たるww見る価値なしww』 『自演乙』 『工作動画』 『クズ動画注意』 なんていう荒しコメントも当然蔓延るが、しかしそれ以上に支援コメが増えていく。

増えていく再生数とマイリス数。再生数は1万を軽く突破し、2万、3万とその数を積み上げて言った。

タグも、どんどんと付け替えられていく。

『謎の技術』 『超技術』 『ミコミコ技術部』 『野生のプロ』 『野生のFF』 『野生の』 『野生のハリウッド』 『プロの犯行』 『液晶が邪魔』 『科学の限界を超えてやってきた』 『初回 無し推奨』 『2.8次元』 e t c . . .

また、四季の運営するホームページのカウンターも、加速度的にその数字を増やしていった。

ホームページには大したことは書いていない。

ただ、四季と四季のメンバーの説明、それと開発中のVRについてと、投稿した動画だけが載せてある。BBSどころか、拍手やメールフォームすらないサイト。

日記は「工事中」になっており、人々はそれが開通するのを心待ちにした。

動画内は、祭りとなっていた。

コメント職人が現れ、4人の周りに星や花、ハートを散りばめた。また、早すぎるAAが出来上がり、『ジエバンニww』 『職人すげえwww』 などのコメントで流されていく。

201x年x月05日 18:52

投稿から僅か20時間と39分後。

その動画は、速すぎる10万再生を達成した。

「10万オメ!」 「はえええええええええ」 「キターーーーー!!!」  
「殿堂入りオメ!」 「k t k r」 「10万記念にミクを!」 「ボ  
カ口厨うぜえw w w w」 「っひよおおおおおおおおおおw w  
w w w w」 「すすすぎる……」 「きたあああああああ!  
!!!」 「お前らの愛で見えないw w w w」 「俺は今歴史の瞬間に  
立ち会ってる」 「四季はじまた!」 「次元が違うな」 「VR楽しみ  
にしています」 「気が向いたらまたCG投稿してくれー!」 「いやっ  
ほおおおおお!!! w w w w」

沸き立つ、動画。

人々は、四季の反応を待つ。

そして視点は、少女たちへと戻る。

四季編 5 + (後書き)

後々調べたら、今使われているCG技術とか合成技術って、もう殆ど3次元と変わらなかつたりするんですよ。

……んなことあいいんだよ！（AA略

まあ、この小説内では、まだあんまり発達してないってことで。

## 四季編 6

その電話がかかってきたのは、夕方5時すぎ。  
クオくんと安全のためのマジックアイテムについて話し合っていた時だった。

鳴り響く携帯の着信音に、私たちの会話がぷつりと途切れる。

「ん、電話だ。誰だろ……あ、奈津」

「ナツさんですか？ どうしたんでしょうね？」

クオくんの言葉に、さあ、と首を傾げ、通話ボタンを押した。

『ちょっと、ちい！ パソコンつけて！ 動画見てみ！』

「え、何、どうしたの!？」

聞こえてきたのは、興奮気味な彼女の声。

パソコンはリビングにしかないから、私はクオくんと一緒に連れ立って、階段を下りた。

リビングのパソコンを起動しながら、奈津の話を詳しく聞いてみる。どうやら昨日投稿した私たちの動画が、凄いことになっているらしい。

何がどう凄いのかは、見てみると言われたので、素直に見てみることにする。

「えっと……あ、これだこれだ」

ブックマークに入っているミコミコ動画のURLをクリックし、奈津が投稿した動画を検索する。

「えっと、これだ……あ、れ？ 9万再生……？」  
そこに映し出されていたのは、信じられない数字だった。

あれ？ だつてこれ、昨日投稿したんだよね？

私は呆然としたまま、動画ページに移動する。

『やばいよね！？』

「やばいつていうか……何事？」

『何か、ランキングもカテゴリー一位だし、10万再生支援も始まっちゃつてる……！』

「ええ！？」

ここまで大事になるとは、想像もしなかった。

正直、1000再生くらい行けばいいかな、と思っていたので、これは予想外。

「亜紀や冬香には？」

『まだ言つてない。たぶん言つてもわからないかな、と思つたから』

「まあ、普段から見えてないと、この伸び率の異常性はわからないかも。……うーん、とりあえず10万再生ありがとうのコメント出そつか？」

『えっと、ちいが文面考えてくれる？ 私は、あーちゃんとぶーち

やんにも連絡するから』

「ん、わかつた」

ぶつ、と通話が途切れる。

つー、つー、という音を耳にしながら、私は小さく息を吐く。

それにしても、何でこんなに伸びたんだろう？

「どうしたんですか？」

「……いや、宣伝用に投稿した動画が、すごい再生数だったから」

「えっと……9万……って凄いんですか？」

彼の言葉に、深く頷く。

「普通は1000行くかどうかだからね。四桁の壁は厚いよ」

「……確かにすごいですね」

彼は驚いたように言う。

やっぱりサムネイルのエルフが良かったのだろうか？

それともCGという名目に引かれてくれたのだろうか？

どちらにしても、多くの人に見てもらえたのは良かった。

パソコンのテキストエディタを開き、ぼちぼちと打ち込みながら文章を考える。

そのついでにメッセージャーを立ち上げ、オンラインになっている奈津に繋いだ。おーいと打ってみるが反応がないので、どうやら今はパソコンの前にいないらしい。

読み込み終わった動画を再生すると、俗に言う0秒コメントが、画面を埋め尽くした。

『10万まであと5000』 『95000キタ!』 『紫煙』 『つ』 『もうちょっとで10万!』 『wktk』 『お前ら



もつと熱くなれよ!』 『修造www』 『もうちよいだああああ』

「わー、盛り上がってる……!」

思った以上の熱狂に、思わず画面に食いつく。

動画が進むと、更にその熱狂はヒートアップして見えた。

『弹幕薄いよ何やってんの!』 『動画も見ろよお前ら!冬さまあああああ!』 『秋こそが至高』 『エロフの春だろjk』 『エロで春とか自重するwww』 『なら夏は頂いていきますね』 『妖精の動きが優雅すぎる』 『夏はアホの子に違いない』 『自分の火でダメージ受けてたりしてw』 『ワロタwww』 『機械ツ娘のクールさに惚れたぜええええ』 『エルフ)。。(。ミ。エルフ)。。(。ミ。』 『wk tk wk tk』 『マジやべえwww』 『つかエルフ弹幕多くね?w』 『支援』 『きたきたきたああああ』 『愛してるうううううう』 『真赤な誓い』 『愛してる』 『その弹幕はちげえww』

最早、動画どころというより、ただ祭りになってるだけのようだったが、好意的に思われているのは確かなようだ。

だが、やはり流れるのは賞賛のコメントだけではない。

『ただの釣り動画だろ』 『釣られてる奴らwmg)(^)(ザマアwww』 『超きもいんだけど』 『え、こんな動画を喜んで見るとか。引くわ』 『目が腐る』 『死ぬ死ぬ死ぬ』 『見る価値無し』 『エルフwwwとかwwwオタク乙www』 『クスは死ぬクスは死ぬクスは死ぬ』 『VRとかwww頭おかしすぎるwww』

『 工作動画です 』

そう言った荒しコメントも、当然のようにあった。

それに反論するコメント、荒らしを煽るコメント、無視しろよという反応を返すコメント……もはやカオスと呼ぶにふさわしい状況だった。

「ネットってすごいなー……」

思わず呟く。ここで反応して荒しに燃料投下するのもしかと思っただが、この機会を逃さないほうが宣伝にはなるだろう。それに、大多数は好意的な意見だ。炎上はしないはず。……たぶん。

「……本当に凄いですね」

クオくんも、私の後ろから画面を覗いてそう呟く。彼は短時間でこの世界に順応しつつあった。

最初はネットというのも良く判っていなかったが、沢山の人の間でやりとり出来るもの、くらいは理解したらしい。

『でも、CGはともかくVRとかは嘘だよな？』 『だと思っただろ』 『流石にVRはないだろ』 『それでも四季なら……四季ならきつと何とかしてくれる!』

リアルなCGはともかく、やはりVRについては信じている人も少ない。が、少数の人は期待してくれているようだ。

その時ちょうど、メッセンジャーの音がした。

『奈津 さんの発言：

ふーちゃんもメッセに呼んだから、その内来ると思う』

どうやら三人で色々と相談することにしたらしい。

亜紀の家にはパソコンがないので、彼女は参加できないのがネットだが。

恐らくあとで、冬香が結果をまとめて携帯にメールで送ってくれるだろう。

『千春 さんの発言：

おk』

私は簡単に反応を返してから、メンバーに冬香を入れて彼女を待った。

彼女を待つ間、ふと思ったことを打ち込む。

『千春 さんの発言：

やっぱりVR、信じられてないね』

少し待つと、彼女からの返事が来た。

『奈津 さんの発言：

まあ、しょうがない  
実際VRじゃないし』

魔法だもんね、と声に出さず呟き、キーボードに向かう。

『千春 さんの発言：

だからさ、ミコ生とかで放送できないかな？  
みんなのコメント通りに動かすの

奈津 さんの発言：

亜空間の映像を、そのまま配信ってこと？

千春 さんの発言：

カメラで撮った映像をパソコンに取り込んで、デスクトップの画  
面を配信の方が

隣にミコの画面とか開いておいて

奈津 さんの発言：

あー、それならどうだろ

普通に出来る気がするけど、やりかたわからん

千春 さんの発言：

……ビデオカメラに転移魔法とかかけてみよっかw

奈津 さんの発言：

それでどうにかなんのか？w w』

彼女の突っ込みに、思わず笑ってしまう。  
やっぱりどうにもなりませんよね、と一頻り笑ったところで、冬香  
がやってきた。

『冬香 さんの発言：

大変なことになってるみたいね

奈津 さんの発言：

うん

千春 さんの発言：

びっくり

冬香 さんの発言：

ちょっとログ辿るわね』

そう言って沈黙した冬香。 私たちも沈黙し、彼女を待った。  
しばらくして、彼女からのコメントが返ってくる。

『冬香 さんの発言：

ニコ生って何かしら？

奈津 さんの発言：

ニコニコ生放送の略なんだけど

ユーザー側から、リアルタイムで動画を配信できる  
といったもちよっと遅延はあるけど

冬香 さんの発言：  
『そんなのもあるのね』

彼女達の会話を眺めながら、テキストエディタで先程まで打っていた文章をコピーする。

そしてメッセの画面に貼り付けた。

『千春 さんの発言：

こんにちは、四季です。

10万再生、ありがとうございます。

沢山の方に動画を見ていただけたようで、嬉しいです。

VRについては、嘘だと思われる方が大半だと思います。

ですので、近いうちにミコ生で実演したいと思います。

詳細はこちら URL

文章考えたんだけどどう?』

少しして、二人からコメントが返ってきた。

『冬香 さんの発言：

まだミコ生で出来るかどうか決まっていらないだし、最後の一文はやめておいたら?』

書くならせめて、「近いうちに何らかの形でお見せしたい」くらいに

奈津 さんの発言：

だね

というか、ミコ生とかじゃなくて、もうテスター募集しちゃうえば？  
RPG部分はまだ出来ていませんが、VRのテストがしたいので  
募集、みたいに

偽装VRは殆どできてるんだから、たぶんそっちの方が楽だよ』

二人の意見に、あーそっか、と思わず納得してしまう。

確かに、奈津の言うほうが断然楽だ。

それに画面越しよりは、体験した人たちに口コミで広げてもらっ  
た方が、まだ信頼してもらえる気がする。

『千春 さんの発言：

そっかも

どこか場所借りて、やっちゃんおうか』

それを送信してから、ぽちぽちと文章の一部を書き換える。

『千春 さんの発言：

ですので、テスターを募集したいと思います。

募集要項 URL

最後これでいい？』

問いかけると、二人からゴーサインが出たので一安心する。

募集要項のページについては、三人で考え、ささっと奈津に作っ

てもらったことにした。

彼女を待つ間、動画とそれについてコメントを眺める。  
全くもってカオスだ。

「あの、チハルさん」

「何？」

「聞きたかったんですけど、エルフって……この世界では、どういう認識なんですか？」

そう問われ、考えたこともなかったことに悩んでしまう。

どうという認識か……？

「うーん……ファンタジーの登場人物、かなあ……実際にはいないしね。憧れとも言えるかも」

少なくとも、私にとっては憧れの存在なので、そんな説明をする。天使や悪魔、神と並ぶほどに、ファンタジーでは定番だし、間違いともいえないだろうが。

「でも、どうして？」

「僕のいた世界では、エルフは悪い生き物と言われてましたから……」

「へー。ていうか居たんだ、エルフ」

街では人間しか見ないので、人間しかいない世界だと思っていたが、どうやらエルフはいるらしい。

その内、リアルエルフに会ってみたいと思った私だった。

そんな会話を二人で繰り返していると、奈津から待ちに待った反



応がきた。

『奈津 さんの発言：

あげたよー

ttp://seasonsxxxxxxxxxx.xx/x/f  
ortester.html』

彼女の提示したURLをクリックする。ブラウザが別枠で立ち上げられ、そのページが表示された。

私は内容を確認する。

☐ VRテスター募集

日時、場所はまだ未定です。

場所は関東地区、日時は今月下旬、もしくは来月上旬を予定しています。

テスター条件

・ファンタジーや魔法の世界に憧れていること

交通費、謝礼などはお支払い出来ません。

ファンタジーに憧れており、それを体験したいという方の中で、その点を了承してくださる方のみ、下のメールフォームより申し込みをお願いいたします。

追って連絡させていただきます。

規定数より多い応募があった場合は、抽選にさせていただきます。

☐

『千春 さんの発言：

G J

いいと思う

冬香 さんの発言：

応募がくるといいわね』

冬香の言葉にぎくりと身体が強張る。

流石に交通費も謝礼も出せないじゃ、VRなんて不確かなものに  
応募してくれないかもしれない。

でも、それ以外に方法もないので、こうするしかない。

『奈津 さんの発言：

まあ、どうなるかはノリと祭りの雰囲気任せようよ  
駄目なら駄目で、また別な方法を考えればいいんだし』

ま、そうだね。そう打とうとキーボードに手を掛けた瞬間、母に  
名を呼ばれる。

どつやら夕食の時間らしい。

『千春 さんの発言：

ごめん、ご飯

いったん落ちる』

二人の返事を待たず、席を離れる。  
後ろにいたクオくんと一緒に、キッチンに向かった。

夕食を食べ終えた私は、パソコンの前に戻る。クオくんは母に捕まって、一緒にお風呂だ。二人とも順応しすぎだと思う、特に母。

パソコンを見ると、私がない間も二人はメッセージで会話していたらしい。メッセージの画面に会話のログが溜まっていた。二人の話に混ざる前に、ログを辿る。

その内容は殆ど瑣末な雑談で、動画に寄せられたコメントに対するものだったり、四季のサイトの日記についてだったり。

そういえば順番に日記を書くことという話もしていたな、とそれを見て思い出したのは内緒。

『千春 さんの発言：

ただいま

ログ読んだ

日記書くなら、やっぱり春夏秋冬の順番にしたいな』

端的に伝えると、二人はお帰りと共に、それぞれ同意するコメントを返信してくる。

奈津がそれを受け、プログレメンタルしてくる、とメッセージから離れ

た。

『千春 さんの発言：

ねえ、冬香

VRの実験、どこでやるのか

冬香 さんの発言：

……やっぱり考えてなかったの

というよりテスターは何人呼ぶつもりなのよ？

千春 さんの発言：

個人的には、10人〜20人を予定してた

あんまり多いと、大変だと思って

冬香 さんの発言：

なら、公民館の一室でも借り切れれば？』

思わず、その発想は無かったと唸ってしまった。

そうか、公民館って一般人でも借りられるのか。

なんとなく、行政とかそういうイメージだったので、借りるとい  
う発想すら思い浮かばなかった。

『千春 さんの発言：

うん、それいいかも

冬香 さんの発言：

ならちよっと検索してくるわね

千春 さんの発言：  
「いら」

冬香もメッセから離れたようなので、手持ち無沙汰になった私は、動画をまた再生する。

見るたびにコメントが変わって、見ていて面白いし、私たちの動画で盛り上がってくれるのだと思うと嬉しい。荒らしはちよつと苦笑いしながら見なかったことにする。

「あ！」

幾度目かの更新ボタンの後、私は声を上げる。画面上に七色で彩られる“10万再生”の文字に、私の指はキーボードを走っていた。

『千春 さんの発言：  
10万きたー！』

私の発言に、二人がすぐに反応する。

『冬香 さんの発言：  
とつとつね

奈津 さんの発言：  
おー、はえー

動画コメント変更してくる ノシ』

ふう、と一息吐く。

これからどうなるかはわからないけど、上手くいけばいいなあ、  
と思わずにやにやした。

201×年×月05日 19:04

たった21時間弱で10万再生を達成した動画 『CG』実写そっくりのCGが出来たよー【四季】の動画説明文が更新された。

『こんにちは、四季です。』

10万再生、ありがとうございます。

沢山の方に動画を見ていただけたようで、嬉しいです。

VRについては、嘘だと思われる方が大半だと思います。

ですので、この場でテスターを募集したいと思います。

詳細はこちら <http://seasonsxxxxxx> .

[xxxxxx/fortester.html](http://seasonsxxxxxx)』

そしてその内容は、更なる祭りを引き起こすこととなった。

『え!?!』 『テスターとかWWW』 『ちょWWWキタ』

(。)。) 『!!!』 『VRってマジだったん?』

『いやいや釣りだろ釣りWWWWWWくつ……勝手に腕がメルフォに』

『……!』 『やべえWWW応募してくるWWW』 『地方格差の馬鹿』

『ああああああ』 『北海道民舐めんなああああああ飛行機往復』

で5万飛ばしてやるうっう!!!!』 『おまWWW』 『とりあえず』

様子見』 『いやっほおおおお』 『w k t k が止まらない』 『さて、この中の何人がマジで応募するんだかw あ、俺はしましたサーセンw w w w』 『リアルエルフと会えるー？』 『もうヴァーチャルっていうか3次元だな……』 『っーかマジ四季って何者w w w w』 『素人とか絶対嘘だよな……』 『会場に行ったらごつい奴らが居て、拉致られたりしないよな？』 『流石にないだろ……』 『ないよな？』 『だがそれはそれで神展開w』 『俺、ブログやってるから、ちゃんと書置き残していくわw』 『うはw期待w w w』 『四季は宇宙人だったんだよ！』 『ナ、ナンダッテー>』 『なんかもう宇宙人って言われても俺は信じるw』 『まあ自称魔法使いだしなw w w』

く。 荒らしや煽りで、尚更カオスになりながら、彼らの夜は更けてい



## 四季編 7

のんびりタイムな、夜。

私は濡れた髪をタオルで包んだまま、ベッドの上でうつ伏せに寝転がって携帯を弄っていた。

「えっと、タイトルは…… 『祝・初ブログです』 っ」と

奈津が借りてきてくれた四季のブログに記事を投稿するため、新規メールにばちばちと文章を打ち込んでいく。

んー、と考え込みながら、何度も文章を消しては書き、消しては書きを繰り返した。

そして、頭を使うこと十数分後。

「……ん、こんなもんかな？」

書いた文章を読み返す。

『 title :

祝・初ブログです！

内容 :

はじめまして、こんにちは。四季の暴走特急（笑）の、ハルです。このブログは、ゲームの情報1割、その他9割な感じに更新されるブログです。

よろしくおねがいします！

……さて。

早速書くことに詰まりました(笑)

あ、そうだ。

今、テスターを募集している テスト(勝手に命名)について語りましょう。

テストの前段階なので、 テストです。

まだ、RPGの部分は全然出来ていないのですが、テスターを募集させていただきました。

何故、未完成の今なのか。

理由は簡単です。

ぶっちゃけ誰もVRとか信じませんよね?(笑)

なので、今回体験してもらった人に、口コミで広げてもらおうという算段です。

実際にゲームが完成する頃には、少しでも信じてくださる方が増えればなあ、と思っています。

そして、皆でファンタジーな世界で遊びましょう!

じゃあ、今日はこの辺りで。

次はナツです。ナツ、宜しくね?』

しばらくの間、何度も文面を読み返した私は、満足の行く出来ににんまりと笑う。

「よし、これで完成！」  
宛先に投稿のためのアドレスを記述して、送信ボタンをぽちつとな。

「……さて、送信完了つと。……くしゅっ！」  
送信ボタンを押したのと同時に、口から漏れた大きなくしゃみ。髪を乾かしていないせいで、すっかり湯冷めしてしまったようだ。

「うっ、さっさと髪乾かそうつと……」  
ぶる、と震えた肩を抱き、タンスの上に置いてあるドライヤーを手を取った。

そして次の日。

「あ、千春、おはよー」  
すっかり二週間の失踪のことなんて忘れたように、クラスのみんなは登校してきた私に軽く声をかけてくれる。それがとても嬉しくて、私も満面の笑顔で挨拶を返し、自分の席に座った。

クラスメイトたちが心の中でどう思っているかは知らないが、イジメも有りえるかもと考えていた私としては、今の雰囲気は悪くないと思っていた。

そんな、朝の学校特有のざわざわとした空気の中、カバンを肩にかけたままの奈津が声をかけてきた。

「ちい、おつはよ！」

「あ、おはよ、奈津」

一時間目の準備をしていた私は、カバンを探る手を止めて奈津へと挨拶を返す。

カバンを持ったままなところを見ると、どうやら教室の入り口から私の元へ直行で来たらしい。そんな彼女は、とても機嫌が良さそうな満面の笑顔を浮かべていた。

その表情はまるで、機嫌のいい理由を聞いてください！ と言わんばかり。

スルーしても良かったのだが、まだショートホームルームまでに時間はあることだし、聞くことにする。

「……んで、どうしたの？ 妙に機嫌良さそうだけど」

「あのね、昨日だけでなんとメールが20通くらいきてたよ！」

一瞬、何のメールかわからなかったが、すぐにピンと思い当たる。テスター募集のメールのことだろう。

20通。それを多いと取るか少ないと取るかは人次第だが、私は多い方だと思う。

昨日のブログにも書いたが、VRなんて信じるほうが稀なのだ。

これから少しずつでも実績を積んでいけば、信じてくれる人も増えるだろうけど。

でも今は、難しいこと抜きに、喜んでおこうと思っ。

「奈津、それはぐーっどなニュースじゃないですか！」

「だよね!？」

お互いにノリノリで、いえーい！ と両手を合わせる。周囲の視線が、「あ、また何かやってるよ」という微妙に痛いものを見る視線だったけど、気にしないことにした。

「あ、ちょっとトイレ行ってくるね」

午前の授業が終わり、昼休み。みんなと机を囲んでいた私は、弁当を開ける前にそう言って席を立つ。

「落ちるなよー」

「どこにだ!」

奈津のからかいに、思わず突っ込む。

まさかどこかのラノベみたいに、水洗トイレから異世界にコンチハ！なんてことは無いと思う。

例えそんなことがあったとしても、今の私ならすぐに帰ってこれるけど。

「あ、先にご飯食べててねー」

「うん、わかった」

亜紀が小さく手を振る。私も手を振って彼女に応え、教室を後にした。

ふんふん、と鼻歌を歌って携帯を弄りながら、廊下を歩く。と、そんな私の行く手を誰かが遮った。

「……………」

俯いていた顔を上げれば、そこには一人の男子生徒がいた。だが、相手はまったく知らない顔。首を傾げながら通り過ぎようとするれば、しかし彼は私の通り道を塞ぐ。

「……………なんですか？」

眉を潜めながら、私はその生徒に問いかけた。すると、その男はこう返してくる。

「なあ、失踪してたのってお前だよな？」

「そうですね？ まあ、記憶にはないけど、失踪してたみたいですね」

「神隠しだったけ？ ……それってさ、嘘なんじゃねーの？」

「……………嘘って？」  
嘘という言葉に、私は警戒を強め、彼を睨みつける。

……………この男は、何か知っているのだろうか？

彼は私の視線を馬鹿にしたように肩を竦めて、口を開いた。

「だってこの現代日本で神隠しなんか有り得ないだろ？ ガキの御

伽嘯じゃねーんだし。だから、実はさ……監禁とかされてたんだろ？」

思わず、脱力した。

そういやそんな噂が立つてたと、亜紀が言っていたっけ。最近忙しくて、すっかりそんなこと忘れていた。

つまりこの目の前にいる男は、私が監禁されてアレな日々を過ごしていたと思っっているわけか。というより、そっちの方が面白そう、とか思ってるんだろう。

一気に、沸々とした怒りが湧き上がる。

……殴り飛ばしてやろうかな。

こっそり後ろ手で拳を握り締めたが、流石に校内で暴力沙汰は停学になりかねないので我慢した。

「……それで？ 妙な自論を並べて何がしたいんですか？」

「実際のところどうなのか、本人に教えてもらおうと思っつてさ。なあ、何発出されたんだ？」

にやにやと笑いながら下卑たことを言う男に、ぶち、と何かが切れた。

怒りのまま、心の中でとある魔法を思い浮かべる。

「……な、何だよ？」

突然黙りこくりに、雰囲気を変えた私に、男が僅かにたじろぐ。私はそのようなことを気にせず、こっそりと魔法を発動させた。

よし、完了。

「……とにかく、何も覚えてないから、答えられません！　じゃ、私急いでますから！」

私はそう言い残して、本来の目的であるトイレに向かう。後ろではチ、とつまらなさそうな舌打ちが聞こえたが、聞こえなかったフリをしておいた。

「……ってなことがあったわけよ！」

「大変だったね、千春ちゃん……」

教室に戻るなり、弁当をやけ食いした私は、その勢いそのまま憤慨を隠さずに先程あったことを愚痴った。

すると、亜紀がよしよし、と頭を撫でてくれる。私は「うう、辛かったよう！」と芝居がかった仕草で彼女に抱きついておいた。

ちなみに亜紀は（検閲が入りました）カップなので、抱きつき心地は実にマーベラス。ちなみに奈津はステータスで、冬香はエクセレンツ！　な感じ。……何を言ってるんだ私は。

「どこに行っても、トラブルに巻き込まれるのは流石ね」

「人をトラブルメーカーみたいに言わないでよ」

冬香の言葉に、亜紀から離れて口を尖らせる。

別に、トラブルに巻き込まれること自体は、そんなに多くない。

……ただ、面白そうな何かに体当たりで突っ込んでいくだけで。



「それで、相手にはどんな制裁加えたわけ？」

「……制裁じゃなくて、ちょっとしたお仕置きですよ？」

「言葉を変えても一緒だから。で？」

「えっと……」

- 1、性質を変化させる魔法で、相手の運をゼロに
- 2、ついでに、女子からの好感度もゼロに
- 3、ついでのついでに、性質にドジっ娘属性追加

「……みたいな感じ？」

「うわあ……」

私の言葉に、一目散にそう声を漏らしたのは奈津。亜紀と冬香は苦笑を漏らしていた。

「有効時間は三日にしたし、女の子に下品なこと言った罰としては妥当でしょ」

ちなみに今回使用した魔法は、本来は物質の性質を変化させる魔法だったんだけど、ちょっと改造して生物にも使用できるようにしてみたのだ。生物も言ってしまうえば物質の塊だから、改造は簡単だった。

この魔法以外にも少しずつ色々と改造しているので、いつか試してみたいものだ。

「ねえねえ、そのドジっ娘属性ってどんなの？」

亜紀の言葉に、そうだなあ、と例を挙げる。

「何も無いところはずっこけて、パンチラとか。転んで壁に穴をあけちゃうとか。淹れてきたコーヒーをぶちまけて、ご主人様にお仕置きされたりとか……って最後のはちよつと違うか」

「……えつと、それを男が？」

「……………うん」

何だかそう改めて考えると、結構非道なことやってしまった気がする。せめてドジっ「子」にしておけば良かったかな。今更遅いけど。

「……ま、まあ、とにかく！ ちい、これからも気をつけなよ？」

「うん。心配してくれてありがとう！」

奈津の言葉に、笑顔で礼を言う。ちようどそこで昼休み終了のチャイムが鳴ったので、この話題はここで終わりとなった。

後日談として。

ドジっ娘属性（＝なんか妙に可愛い）

+ 女子からの好感度ゼロ（＝男子からの好感度そのまま）

+ 運ゼロ（＝とことん不要なフラグが立った）

というタチの悪いトライアタックのせいで、彼が新たなる何かに

目覚めたとか目覚めなかったとかという話を、風の噂で聞いた。

……本人に資質があっただけで、私のせいじゃないもーん。

今日は、こっちの世界に帰ってきて、初めての土曜日。

帰って来てから、一度もあっちの世界に顔を見せに行っていないかったので、今日はクオくと一緒にあっちの世界に行くことにした。

といっても、戻ってきて一週間しか経っていないけど。

奈津にビデオカメラを借りたので、ついでに色々撮って来ようと思う。

VRテストターの募集は、合計で60強の応募メールが来ていたらしい。荒らしや問い合わせのメールも含めると、200通を超えていたとか。

動画が10万再生されたにしては少なく感じるかもしれないが、VRなんて怪しげなもののテストターに応募してくれた数としては、かなり多いほうだろう。

既に応募も締め切ったので、今頃私を除く三人で公民館の予約や、テストターの抽選など、色々準備しているはずだ。

「クオくん、フェンリル、準備はいい？」

「あ、はい！」

「……わしは特に行く用事もないんじゃないかな」

「フェンリルは、放っておいたら染まるから強制参加」

腕の中のフェンリルのぼやきに、キツパリと切り捨てる。

どうしてかこのもふもふは、ある意味でとても日本らしい文化に染まりつつあった。いや、シヨタとかペドとか奈津にシンパシーと

か言っただけだから、嫌な予感もはしてただけだね？

だがしかし、それでいいのか書の守護獣よ。

「じゃ、行くよー？ 『我求む、更なる魔法を。我願う、更なる力を。我望む、異なる世界を。繋がり鏡よ、我が言霊をもってそれを成せ』！」

ちゃんとあの世界を思い浮かべながら、呪文を唱える。下巻が揃った今、強制的にあの世界に繋がるわけではないからだ。

まだ三度目にも関わらず、すっかり見慣れてしまった鏡を通り、私たちは異世界へと向かった。

たぶん、頭のどこかでアルバートさんを想像していたからだろう。到着した先は、シルヴァニアの門付近だった。

転移の瞬間をばっちりで見られたのか、周りにいた数人が、ぎよつとした目でこちらを見ている。やつちまった、と内心で頭を抱えながら、クオクんと二人で逃げるように門へと歩を向けた。

(まだまだじゃのう……)

腕の中のフェンリルは、心話で呆れたようにそう呟く。私はフェンリルの言葉に、うう、と肩を縮めた。

必要以上の力は隠すべき。その気持ちは、当初から変わってない。

だから、これからはちゃんと気をつけなきゃ。

……VRとか言っているくせに、どの口がそれを言う！ という気もするが、あれは別腹。面白そうなものには勝てません。それに、自分で抱え込むものと、他者に抱え込まれるものは、全然違うものだと思うし。

さて、門の前にいたのは、以前アルバートさんと一緒に門を守っていた、赤い髪の人だった。彼女は私に気付くと、にこ、と微笑む。私も小さく笑いかけながら、彼女に走り寄った。

「あの、すみません。アルバートさんはいますか？」

「隊長は今日は休みだよ」

彼女の言葉に、思わず眉が寄る。

彼に会って、色々と話をしたかったのだが。それと、以前嘘を吐いていたことも謝りたいし。

「……アルバートさんに会いたいんですけど、どこに行けば会えますか？」

「……ん？ 隊長に会いたいの？ なら、私が案内しようか？」

彼女の申し出に、一も二もなくといった感じで、お願いしますと頭を下げる。すると彼女は待ってなど言い残し、門からすぐ近くの詰め所らしき建物に入っていった。

「ねー、クオくんクオくん」

「何ですか？」

「アルバートさんに、“私は異世界の人間です” って伝えたいんだ

けど、正直なところ、信じてもらえらると思つて？」  
胸の内に燻っていた疑問をクオくんにぶつけてみると、彼は苦笑した。

「僕は……何となくチハルさんが“違う”と思つてましたからすぐに信じましたけど……普通ならどうでしょうね」

「やっぱり難しいよね……」

もしも私が元の世界で「異世界から来た」なんて話を聞いたたら、  
「頭おかしいんじゃないのこの人？」くらいは思いかねない。

元の世界であれば、そこで魔法なんて見せられれば信じるだろうが、この世界には既に魔法があるわけで、それは決して超常的なものではない。

そう考えると、魔法に満ちたこの世界の住人に、どうやって異世界を説明すればいいのかと、首を傾げてしまう。

唯一、この世界から逸脱したものと例えば携帯くらいだが……当然通話が出来ないから、ちかちかと光ったり音を出したりするだけの物体と化している。これで信じてもらえるものだろうか。

「……ま、素直に話すしかないよね」

「何の話だい？」

「うわあっ!？」

後ろから聞こえた声に、思わず大声を上げてしまう。

振り向けば、いつの間にか戻ってきていた彼女がそこにいた。

「お、脅かさないで下さい……」

「いやあ、ごめんごめん。じゃ行くうか……っと、その前に、そう

いえば何度か顔は合わせてるけど、自己紹介してなかったね。私は二ーナって言うんだ」

「あ、私はチハルです、宜しくお願いします」

「僕はクオです」

名乗り合い、お互いに会釈する。

「よし、じゃあ行こうか」

満足げに彼女は頷いて、先導して歩き始めた。

彼女に案内されたのは一軒の民家だった。どうやらここがアルバートさんの家らしい。

「隊長ー、隊長のナンパ相手連れてきたよー」

「またお前は何を言ってるんだ。……チハルにクオか。久しぶりだな」

「えっと、こないだの一件以来、ですね」

あの一件について、どこまで知られているかわからないので、一応言葉を濁す。するとアルバートさんは理解したのだろう、苦い顔でそうだなと頷いた。

「それで、今日はどうしたんだ？」

「あ、えっと……アルバートさんと少し話したくて。あと、謝りた



「いことも……あったので」  
そう口にすれば、彼は表情に僅かな疑問を浮かべながら、ニーナさんに目を向ける。彼女はその視線で察したのか、何も言わずに静かに下がっていった。

「どうした？」

「……えっと」

いざ言おうとすると、緊張と躊躇で言葉に詰まってしまっ  
が、ここで言わなければ、これから先もずっと言えない気がする  
ので、私は意を決して口を開いた。

「私、アルバートさんに嘘を吐いていました。ごめんなさいッ！」

「……何だいきなり」

きょとんとした様子で、アルバートさんが私を見る。私は口早に  
続けた。

「私、森で住んでて、お婆ちゃんが死んじゃったって言ったじゃない  
ですか。……それ、全部嘘なんです」

気まづくなつて俯く。謝る時は相手の目を、と思つて顔を上げる  
ものの、やっぱりアルバートさんの目は見れなかった。

「えっと、その……騙していたことは本当に、申し訳なく思つてま  
す。でも、あの時は、私もいっぱいいっばいで……その、ごめんな  
さい！」

がばり、頭を下げる。と、ぼふん、と頭に何か乗った。そ  
れは、何度か感じたことのある感覚で。

「チハルが、何か隠しているのは知っていた」

「……え？」

思いも寄らない言葉に、目を丸くして顔を上げる。

「職業柄、俺は人の嘘や悪意、それに隠し事には敏感なんだ」

「えっと、じゃあ……どうして？」

「隠しごとはわかったが、悪意や敵意は感じられなかったからな。

やむをえず吐いた嘘まで暴くようなことはしない」

「じゃあ、嘘だつてことを承知で、アルバートさんは色々と良くしてくれたんだ。その言葉が嬉しくて、私はぎゅっと心が締め付けられるような気がした。」

「えっと……あの時は、ありがとうございました。この世界に来て、右も左もわからなかったんで、アルバートさんに色々と教えていただけで、本当に有り難かったです」

「……この、世界？」

彼の呆けたような問いに、頷いて返す。

「私、こことは違う世界から来たんです」

私の言葉に、アルバートさんは今度こそ眉を潜めた。

彼に、とある事情があつてこの異世界に来てしまったこと、帰るために必要なものを探していたこと、そしてその探し物が見つかり既にもこの世界に帰ることが出来たことなどを簡単に説明すれば、彼はそうか、と呟いて再び私の頭に手を乗せる。

「苦労したんだな」

「……えっと、それほどでも、ないです」

何となく照れくさくて、俯いてしまう。実際、書のおかげで、殆ど苦労という苦労はしなかったのだから。

「ということは、クオもそうなのか？」

「いえ、僕は……この世界の人間です。でも、今はチハルさんと……一緒に、いますけど」

照れくさそうに笑う彼があまりにも可愛くて、思わず抱きつきたくなった。アルバートさんの前だったのでやめておいたけど。

「えっと……それで、お世話になったお礼、というわけじゃないんですけど、アルバートさんにこれを渡しておこうと思ひまして」

そう言って、カバンからブレスレットを取り出す。VRのための試作品だ。何番目のものかは忘れたけど、守護魔法が入っているのは確かだ。余計な魔法は消した上で、新たに通信魔法を入れてある。

「これは？」

「えっと、自動防護魔法と、通信魔法が込められた魔法具です。ブレスレットとか付けられないかもしれませんが、出来れば肌身離さず

持っていてください」

「……いいのか？」

「はい。むしろ、貰っていただけると嬉しいです」

彼にお世話になったお礼っていうのもあるけど、それと同じくらい、カバンの中に試作品があと数十個ほど眠っているから、という理由もある。

「ただ、絶対に他の人に奪われないようにしてください。これ、あの程度の魔法は全て防ぐ上、物理攻撃も無効化しちゃうんで、厄介この上ないですし……」

「……わかった」

彼は目を白黒させて、私の手からブレスレットを受け取る。その手つきが、まるで貴重品を受け取るようで、なんだか苦笑してしまった。……そんなに手間がかかっているものでもないんだけどね。

「通信魔法は、私に直通です。ただ、世界間通信となると、ほんの数秒ほどしか繋がらないので、簡潔な言葉でお願いしますね」

クオくんを試した結果、なんと僅か6秒という逆快挙。どこの公衆電話だと突っ込みたくなっただけだ。

そんな私の言葉に、アルバートさんは頷いた。

これでアルバートさんへの用事はとりあえず全て終えたかな、と安堵の溜息を吐く。

そこでふと、以前気になっていたことを思い出した。

ルナさんラブなグレイさんの知り合いという話だったけど、どういう知り合いなんだろう？

「あ、あのアルバートさん。一つ、聞きたかったことがあるんですけど、いいですか？」

「ん、なんだ？」

「グレイさんとお知り合いって言ってましたけど、どういう知り合いなんですか？」

「ああ、グレイとヴィトは……まあその、なんだ……弟子だ」  
照れくさそうに笑って、アルバートさんが頬を掻く。

「弟子……」

なるほど。ルナさんラブでも、自分の師匠なら信頼もするだろう。でも、師匠ってことはアルバートさんって強いのかな？

「じゃあ、アルバートさんって二人より強いんですか？」

「いや……もうとつくに抜かされてしまったな。だが、あいつらは未だに私を慕ってくれている」

彼は、そういつて嬉しそうに微笑んだ。きつと、人柄がいいから、慕われてるんだろうな。私も慕うよ、こんな師匠なら。……あ、だからそんなに照れくさそうだったのか。

「なんか、いいですね。師匠とか弟子とか」

私には師匠も弟子もない。そして、これからも出来ないだろう。師匠は今更だし、弟子を取ったって教えられるものは一つもない。

そう思うと切なさも感じるが、この力を手に入れたことは、決して後悔はしていない。今の計画も、これがあつてこそだし。

「あの……」  
そこで、私たちの会話を聞いていたクオくんが、おずおずと声を上げる。

「アルバートさん、僕にも剣を教えていただけませんか？ その……  
… 迷惑でなければ、でいいんですけど」  
「……ふむ」

クオくんの言葉に、アルバートさんが腕を組む。

「そうだな……クオ、一つ質問していいか？」

「は、はい」

「クオは、何のために剣を持つんだ？」

その問いに、クオくんは迷うことなく言った。

「チハルさんを、守るためです。……守る必要なんてないかもしれないですけど、それでもいざと言う時、守る力があるかないかでは、全然違うと思いますから」

キュン。

いつの間にか、随分と男らしくなったような気がする横顔に、思わず胸が高鳴った。

男子三日会わざれば刮目して見よ、だっけ？

……毎日会ってるけど、そんな感じ。

「いい目だな。また私が休みの時に、来るといい」

「……！はい！」

アルバートさんはそう言って引き出しから紙を一枚取り出す。さらさらと何かを書き、その紙をクオくんへと手渡した。ちらりと覗き込めば、どうやら休みなどを書き出してくれたらしい。

こちらの暦で書かれていて、私にはいつのことだかさっぱりわからなかったが。今度教えてもらおう。

「えっと……じゃあ、今日はこの辺で失礼しますね？ クオくんのこと、宜しく願います。あ、私も、また遊びに来ていいですか？」

「ああ、もちろんだ」

ペこ、とクオくんと共に頭を下げてから、アルバートさんの家を立ち去る。

やっぱり、アルバートさんはいい人だなあ、とそんな認識を一段と強めたのだった。

その後、クオくんと共に姿を消しながら空を飛び、ビデオでこの世界の街並みや、豊かな自然を映した。

だけど、やっぱり素晴らしい景色だなあ、なんて感動していたら、すっかり夜遅くなってしまっ

「今日はもう帰らなきゃな」

まんまると浮かぶ青い月を撮影しながら、ぽつりと呟く。

本当はルナさんにも会って行きたかったんだけど、この時間に行ってもあんまり話も出来ないだろうし、やめておくことにした。

また今度、ルナさんに会いにしようよ。



## 四季編 9

異世界で撮って帰った映像を奈津に編集してもらうため、彼女に携帯で連絡を取る。

今は自室でくつろいでるよー、とのことだったので、「今からいくー」とだけ言って携帯を切り、転移魔法で彼女の自室に移動した。

「お、きたきた」

彼女は驚くこともなく、私を迎えてくれる。うーん、あえて「魔法で」とは言わなかったのだけれど、彼女にはバレバレのようだった。

「はい、これ」

「おーう、任せとけーい」

ビデオカメラを受け取った彼女は、早速ビデオを操作する。

「あ、そういえば、そっちはどうだったの？」

「それは明日、皆が集まった時にねー」

「ん、わかった」

説明するのが面倒なのだろう。

どうせならいっぺんに説明したいのは良くわかる。

「さて、どれどれ」

奈津がそう言いながら、私の撮ってきた映像を見始める。

「……おお、色鮮やかな髪」  
「だよな」

感心したように言う彼女に、私も頷く。最初は感心したっけなー。ウィッグみたいな不自然な色じゃない、赤や青や銀に。

「自然豊かだし……あー、私も異世界行ってみたいなー」

「……ちなみに、どこの世界？」

「北方とか、魔法聖女ミラクルなのかとか、薄桜記とか、テイル・オブ・ジ・エビスとか、あ、ハンター&ハンターも………いや、いやいや、違う、違うよ？ トリップとか転生に憧れてるとか、そんなことないよ!？」

いや、それともう「憧れてます」って言ってるようなもんじゃないか。

今度連れてってみようかな？ 漫画やアニメの世界に入る魔法とか作って。それが、似た世界を探してもいいし。

ま、それは四季のゲーム作りが終わってからだな。

「まあ、奈津の痛い願望はともかく」

「いやいやいや、ちょっと待って、だからそんな願望ないってば!」

「うん、そういうことにしておく。んで、」

「ちょ、ちが、違うんだってば!」

「話が進まないから黙れ」

「……はい」

ドスを効かせた声で言えば、彼女はようやくその勢いを沈下させた。

私は気を取り直して、彼女に再び編集を依頼する。

「じゃ、よろしくね？ 尺が足りなければ、また何か撮ってくるし」

「うん、わかった」

「じゃ、私は帰るね。ばーい！」

「ばーい！」

手を振り合いながら、私は呪文を口にする。

ちなみに、レベルを地道に上げ続けているお陰で、すでに大抵の魔法は詠唱破棄できるようになっていた。つまりは、レポートも無言で発動できる。

なら、何でわざわざ呪文を口にしたかって？

「だって、その方がカッコいいじゃない！」

「帰ってきた途端に何を言ってるんじゃない、何を」

珍しく部屋に居たフェンリルに突っ込まれる。私はてへ、と頬に指をあて、首を傾げておいた。

「気持ち悪いぞ、チハル」

「……私もやってて思った」

まあ、それはそれでご愛嬌。

「あれ、クオくんは？」

「ああ、お前の母親に呼ばれたんで、下に行ったぞ」

「そうなの？ じゃあ私も下に行こうかな」

「ん、ならわしも連れてけ」

ぴょん、とフェンリルが肩に飛び乗ってくる。私はフェンリルが

落ちないように片手で支えながら、部屋を出た。  
とんとん、と一定のリズムで階段を下りれば、クオくんが居間から顔を出す。

「えっと、チハル……さん、ちょうどよかった。今、呼びに行くところだったんです」

「あ、そうなの？」

どことなく不自然なクオくんに、フェンリルと目を合わせてから、彼の後に続いて、居間に入る。すると、テーブルを囲んで座る両親が真剣な瞳でこちらを見ていた。

「……えっと、二人ともどうしたの？」

「まあ、とりあえず座んなさい」

言われ、首を傾げながらも、椅子に腰掛ける。

今度は父が口を開いた。

「千春、クオくんをうちの子にしようと思っただ  
「はえ？」

まさに、寝耳に水だった。

あまりにも突然の言葉に、思わず絶句してしまっ

「千春もそのつもりで、連れてきたんでしょ？」

「えっと……まあ、いずれはそうなればいいなあ、とは思ってたけど」

でも、あれから一週間なわけで。

ちよっと早くない？ と思ったり思わなかったり。

そう悶々としていると、クオくんがぽつりと言った。

「チハルさんは……嫌ですか？」

「いつ、嫌じゃないよ嫌じゃ！」

その言葉に、思わず彼の両手を握り締め、力説してしまう。  
それが、決め手だった。

「なら決まりね」

母が、にっこりと笑う。

「戸籍は……出生届けの出されていないハーフの孤児、という名目で取得しよう」

母は機嫌良さそうに言って、ふんふん、と鼻歌を歌いながらキッ  
チンに戻っていた。

どうでもいいけど、ナチュラルに偽造だよね、それ。  
というか、それで取得できるものなのか、戸籍って？

なんて考えてたら、クオくんが私の手をぎゅっと握って、こちら  
を見つめてくる。

「……あの、その……これからも、よろしくおねがいします。チハ  
ル……お姉ちゃん？」

「……ッッ！」

思わず抱き締めました。ええ、抱き締めましたとも。

こうして私の家族は今日、一人増えたのです。

あ、私がクオくんを抱き締めた弾みで吹き飛ばされたフェンリルは、憤慨した様子で、ぼんぼんと飛び跳ねてました。……父の頭の上で。

シユールな光景に思わず笑ってしまったのは、ちょっと父に申し訳なかったかも。

次の日。

私の家に皆集まり、昨日の首尾を確認しあう。その場にはクオくと、フェンリルもいた。

「じゃあまずは千春からお願い」

四季のまとめ役である冬香が、そんな風に司会を務める。

「えっと、昨日は言っていたとおり、あんまり仕事してないです、ごめんね？ あ、撮ってきた映像はもう奈津に渡して引き継いであります。えっと、あとは……クオくんが正真正銘、私の家族になりました」

「ええ!？」

私の言葉に、奈津が大声を上げる。

「あんだ、シヨタに手を出したの!？」

思わず奈津に手が出たのは、私悪くないと思う。

「……奈津は置いておいて。クオくん、おめでとう。千春がお姉ちゃんだと、騒がしいと思うけど、でも、それ以上に楽しいと思うわ」「はい！」

冬香の言葉に、クオくんが満面の笑顔で呼応する。亜紀も、微笑ましそうに彼を見ていた。

奈津は思い切りはたかれた頭が痛いのか、頭を抱えて蹲っていた。

閑話休題。

「じゃあ、話を戻して。次は奈津お願いね」

早々に復活してしまった奈津に、冬香が話を振る。

「はいはい。えっと、とりあえずテストターの募集は15人まで絞ったよ。選んだ人たちにはメールを返して、その内、7人は返事が返ってきてます。あと8人は返事待ちで、一週間以内に返事がなかった場合は、キャンセルとします、って書いていた。サイトの方もそんな風に更新済み。あ、ちいの撮ってきた映像は編集してみたので、あとで一緒に見ようね。報告は以上です」

「奈津、ご苦労様」

奈津の言葉に冬香はそう返して、今度は亜紀に話を振る。

「亜紀、私たちの方の報告をお願いしてもいい？」

「あ、うん。えっと、VR会場とその待合室用に、公民館の二部屋

を借りました。でも、VR会場の方は、見てきたら予想以上に狭かったです。会議室だから、机と椅子が並んでたせいもあるとは思いますが……」

その言葉に、そっかあ、と肩を落とす。ま、公民館ってそんなもんだよね。

「あと、奈っちゃんにはもう伝えてあるけど、日時は三週間後の土曜日、12時から夕方5時までです。あ、中の写真も一応撮ってるので、見たかったら言ってね。以上です」

「ありがとう、亜紀」

「えへへ」

亜紀は照れたように笑って、頭を掻いた。

「と、いうわけで」

冬香はそう言って、自身に注目を集める。

「今日の議題は3つね。1つ目は、当日どついう流れで偽装VRを試してもらつか。2つ目は、部屋の狭さにどう対処するか。3つ目はちよつと話が早いんだけど、今回のテストが終わった後はどうするのか、ね」

冬香は、リーダーらしくそう纏めた。

少し考えてから、私は手を上げる。

「部屋の狭さについては、公民館の室内のように偽装した場所を作つて、そこに転移させればいいと思つ」

「出来そうなの？」



「異世界にそういう場所を作るのは簡単、だと思っ。ただ、そこに誘導する方法とか、違和感を持たれない方法はちよっと思いつかないかな……」

外から見た広さと、作った場所の広さがあまりにも違う場合、どう考えても疑問を持たれるだろうし。

うーん、と唸っていると、亜紀が言う。

「なら、部屋を暗室みたいな風にして、2、3人ずつ案内したらどうかな？ そしたら広さとかもわからないよ……たぶんだけ。暗さの理由は、VRに必要ってことにしてさ」

亜紀の言葉に、それでいいんじゃないかな、と呟く。奈津と冬香も私に同意するように頷いた。

「なら、とりあえずはその方向で行きましょう。じゃあ次は……」  
冬香が中心となって、話は進んでいく。

そうして、全て話し終えたのは、1時間半ほど後だった。

「なら、こんな感じでいいかしら？」

「異議なし」

「私も」

「いいと思うな」

「僕も楽しみになってきました……！」

「……わしも手伝っ羽目になるとは。書の守護獣になんということをさせるつもりじゃ……ぶつぶつ」

五者五様の言葉に、冬香は満足そうに頷く。

「じゃあ、みんな、頑張りましょう」  
その、やる気を鼓舞する言葉に、みんなは笑顔で頷くのだった。

201×年×月13日 21:32

その動画は、某動画サイトに投稿された。

動画のタイトルは『CG』実写みたいな街並みのCGが出来たよー【四季】』。

【四季】という文字を見たユーザーたちは、お、と声を上げ期待しながらその動画をクリックした。

そしてその出来は、正に期待通りと言つべきもので。

まるでヨーロッパ諸国のような街並み。

そしてそこを歩く、様々な色の髪を持つ人々。

自然豊かすぎるほどに豊かな自然たち。

そして幻想的に浮かぶ、青い月。

『うはあああああやべえ』『こんなとこ行ってえええええ』『オレのエルフたんは（。。。）？』『エルフ厨自重wwww』『何でこんな自然なんだ』『あれ、おかしいな。目から汗が』『つーか普通にどっかの外国とかじゃないのか、これ？』『だとしても、人はCGだろ』『CGじゃなかったとして、上空からの映像とか、影もないのにどうやって撮ってるんだよ。普通ならへりの影とか出来るぜ』『魔法？w』『まあ、ある意味魔法みたいだがw』『この月、すげー綺麗な青だなー』

そんな物議を醸している最中、一人のユーザーがこうコメントを残した。

『俺、VRのテスター受かったぜええええひゃっほおおおww  
ww』

その言葉に、ヒートアップ中の彼らが食いつかないはずがなかった。

『ちょwマジかwww』 『フーか応募するやついたんだなwww』  
『俺落ちたんだぜ……orz』 『ドンマイ……』 『まあ15人  
つて書いてたしな』 『VRとかマジなのか超知りたい』 『嘘に決ま  
ってるだろww』 『それでも四季なら……四季ならなんとかしてく  
れる……!』 『そげぶ』 『ちょwwwwwwwwww』 『KJさ  
んばねえwwwwwwww』

とりあえず盛り上がるユーザー達。チャットかよと眉を顰めるユーザーも居たが、勢いが止まらないのは仕方がないことだろう。

『当日はここで実況するわ ttp://xxxxx.blog/  
vrtester777 もし投稿が途絶えたら警察に24piz』

『ok把握した』 『楽しみにしてるー』 『三週間後だっけか?』 『

俺のお気に入りにフォルダが増えてく……」 「俺はとつくに四季関連  
フォルダ作ったぜ」 「wwwwww」 「俺もテスター応募すればよか  
ったな。どうせ自宅警備員だし」 「NEET乙w」 「wktkwk  
tk」

そんなこんなで、彼らの夜は今日も更けていく。

「んー」

夜でも明るい亜空間の白い空の下、自室から持ち込んだクッションを下敷きに、私はうつ伏せになって魔法ノ書を読み耽っていた。

「そろそろ改造する魔法も少なくなってきたなー」

「ごろごろと寝転がりながら、そうばやく。」

最近の夜の日課は、魔法の改造だ。性質を変える魔法や空を飛ぶ魔法、自動防御のための魔法など、様々な魔法を改良している。

ちなみに何故、亜空間内で行っているかというと、この魔法もすでに改造済みで、中の時間が外界の20分の1になっているからだ。これがあれば夜更かししても、次の日の学校に影響が出ず、とても重宝している。

ちゃんと自分の性質も弄って老化速度を20分の1にしているため、浦島現象も心配はない。これって女の敵だよなあ、とちよつとは思ったものの、それはちよつとした役得ということだ。それに外に戻ったら、ちゃんと老化速度も戻してるし。

「攻撃魔法はなあ……」

様々な魔法を改良しているものの、攻撃魔法に関してはノータツチだった。別に今以上の改造の必要性を感じなかったからだ。むしろこの世界では不要な魔法であるわけだし。

しばらく、んー、と考えていた私は、あ！　と思いつく。

「そつだ、繋がり鏡を改造しようつと！」  
今後、VRテストのために使うことになるので、目立たなくなるように改造してみよう。そう思い立った私は、えいしょ、と立ち上がった。

「さてさて、どうやって改造しようかなあ」  
うきうきと鼻歌交じりに魔法ノ書をめくる。今日もまた私の体感での一日は、28時間くらいになりそうなのだった。

ということ次の日。

学校が終わった後、三人を家に招待して、昨日の改造の成果を見せることにした。

ちなみにクオくんは戸籍関係で引っ張り出されているので今日は欠席。フェンリルはうちの近くのTSURUYAで借りてきた、ポケモンの映画を一作目から順に見ているところだ。どうやら家にあつた一作目をやって、ハマったらしい。うん、面白いよねポケモン4Vハピネスさんで、どくどく+たまご産み+身代わり+小さくなる、という嫌がらせ耐久で奈津に渋い顔されたのはいい思い出。鋼出されて詰んだけど。あ、あとハピとタブンノさんは私の嫁、異論は認める。

「ちい、今回は何やったの？」

「ふっふっふー。これを見よ！」

妙な笑い声とともに、ずいっと右手を前に伸ばす。すると、腕はその途中から消えてなくなった。消えたというよりは、見えなくなったという方が正しいけど。

「うえっ!？」

奈津が驚く声を上げる。私はその期待通りの反応に、にやにやと笑った。

「どう、面白いでしょう?」

「いや、面白い以前に気持ち悪い」

奈津の声を震わせた突っ込みに、ちよつとへこむ。

まあ、言つとおりだけどさー、もうちよつとさー。内心でそんな風にぶつぶつと愚痴った。

「で、千春? それは結局、どういう魔法なのよ?」

冬香の問いに、腕を引き戻してから答える。

「んつとね、異世界に行くための魔法を改造してみたの」

以前は異世界との境界を“鏡”という形でしか出現させることが出来なかったのだが、異世界に繋がる境界だけを出現させられるようにしてみたのだ。

つまり今ならば、「ドアを開けて外に出たらいつの間にか異世界に! 後ろを見たらドアも無くなって何故!？」という、小説などでよくあるトリップに必須な状況が簡単に作れたりする。

今度、奈津にやってみたい。でも行方不明系は、私のこともあつ



て勝手に試したら怒られそうだから、ちゃんとOK貰ってからにしよう。

「なるほど。それで、その魔法が千春の腕が切れた辺りにあるっていうことね。見えないけど」

「そういうこと！」

私は冬香の問いに頷きながら、その境界に手を突っ込んだり抜き出したりしてみる。ちなみに境界に飲み込まれた部分の切断面は、真つ黒に見えるらしい。骨とか筋肉とかが見えなくて良かったと、ちよっと思っただ。

「ねえ、千春ちゃん？ ちなみにそれ、どこに繋がってるの？」

「あ、良くぞ聞いてくれました！ この先には、魔法で作ってみた偽VR施設があるのです！」

えっへん。そんな風に胸を張ってみれば、奈津がすごいと返してくれる。棒読みで。他の二人は特に反応してくれなかった。泣きたくなった。

「……ってことで、皆にもチェックして欲しいんだ」

「わかったわ」

「OK！」

「うん、行くうー！」

三人が各々そうやって同意してくれる。というわけで、偽VR施設へ出発しんこー！ なすのおしんこー！

偽造VR施設を作ったのは、クオくんが居た世界とは、また違う世界だ。VRテストの途中で誰かに見つけられて侵入されても困るので、生き物が居ない世界を見つけ、そこに建造してみた。建造と言っても魔法だけだ。

「ってことで、こんな感じ。どう？」

彼女たちを案内した場所は、ベッドが三つと、机が入るくらいの規模の部屋だ。

まだ、これ以外の個室はまだ作っていないが、三人からOKが出てからあと四つ作ろうと思っている。

この部屋を、実際の公民館の部屋にロッカーが何かで道を作つて、その途中から改造した『繋がり鏡』で転移させればいいはず。ちよと角とかに設置すれば急に消えてもわからないだろうし。

小部屋の中には、色とりどりの配線がごちゃごちゃと伸ばされており、パソコンらしきものも二台設置してある。そしてベッドの上には配線が繋がれたヘッドセットが一組ずつ。ちなみに手抜きしたために窓がないので、今は魔法で作った光で部屋を照らしている。亜紀が撮つて来た写真を元に、壁や床を合わせて作ってみたわけだが、中々の出来だと思う。自画自賛。

「いいと思う！　っていうか凄いそれっばい！」

「私もっ、私もそう思う！」

「私は窓も何もないのが気になるけど、テスターの人たちは、そこまで気が回らないでしょうね……うん、いいんじゃないかしら」

どうやらOKらしい三人の言葉に、内心でガッツポーズを取る。

自画自賛とはまた違う達成感に、私は満面の笑みを浮かべた。

「よしっ！ OKも出たことだし……これからどうしようっか？  
まだ4時だし」

今日の学校が終わったのは3時だったので、下校にかかった時間も考えると、まだ四十分ほどしか経っていないことになる。まあ、改造した魔法とこの部屋を見せただけなので、それくらいが妥当だろうけど。

「ねえねえ、千春ちゃん。私、このまま異世界を探検してみたい！  
「お、いいねえ！」

亜紀と奈津の言葉を受け、私は冬香に、どうする？ という視線を向ける。そうすれば彼女も同意するように小さく頷いたので、私はそうだなあ、と考える。

「……えつとじゃあ、私が行ってた世界に行ってみない？」

「あ、行ってみたい！」

「ちいが美人だって言うってた……ルナさんだっけ？ その人も見てみたいしね」

「……でも、王女でしょう？ 簡単には見れないじゃないかしら？  
三人の言葉に、首を傾げながら考える。彼女がどこにいるか判れば、酒場なんか呼び出せると思うけど。それに、私も色々話したいことあるし。」

「んー、わかんないけど、見るくらいなら出来るんじゃないかな。  
ただ、話したりは、一度、ルナさんに話を通しておかないと無理だ

ろっし、私が話してるところを遠くで黙って見ることになると思うけど」

「それでもいいよー？」

奈津が言う。亜紀も冬香を見れば、二人も同意見のようだ。

「じゃあ、ルナさんの顔を拝みにいきますか！」

「おー！」

奈津が右手を上げて、嬉しそうな声を上げる。亜紀はそれを見て、同じようにおー！と手を上げた。

冬香は小さく微笑んで、そんな私たちを見守っていた。

「……こちら千春、応答せよ」

『えっと、こちら奈津。何かあったのか』

「何もない」

『……了解した』

小さな声でメタルギアごっこをしながら、兵士が守る王城の門前から少し離れた場所に立つ。

と言っても、ダンボールをかぶっているわけではなく、透明化の魔法を使っているだけだが。

……いいよね、ダンボール。今度、認識阻害的な魔法をかけたダンボール作ろうっと。使い道はないけど。

兵士は先程の声を感知したのか、こちらを一瞬見る。が、すぐに視線を前に戻した。風が何かで、王都の方から流れてきたものだけでも思っただろう。

『……ねえ、ちい。これやめない？ すっごい意味ないし、周りから変な目で見られるし』

「……だね。じゃあ、また後で連絡するから、街で色々見てて？」

何かあったら要連絡ね。あと欲しいものあったら、渡した金貨で買物してていいよー。お金についてはさっき教えた通りね」

『はいはい、わかったー』

奈津とそんな風に遊んでいたわけだが、虚しくなった私たちはそこで通信を切る。これから城に侵入するわけだし、どっちにしろこれ以上遊んではいられなかったんだけど。

「さてっ、行きますかっ！」  
魔法を使って、ふわ、と浮き上がる。そして易々と、城門を越えた。

「……えっと、こっちか」

あらかじめ、地図作成魔法で城の地図を作り、頭に叩き込んでいたので、迷うことなく進んでいく。しばらく飛んでいれば、ルナさんの部屋に辿り着いた。

ルナさんの部屋をこっそり窓から覗き込めば、彼女が執務机に座っているのが見える。と、その時、がばつと勢い良くルナさんが振り向いた。

「誰だ!？」

視線はしっかりとこちらに向かっている。ちゃんと姿は消しているはずなのになんでだろう、と冷や汗を掻いていると、ルナさんは剣を片手にこちらに向かってきた。

私は思い切り焦ってしまい、思わず声を上げる。

「わーわー! ルナさん私です、千春です!」  
「何……? チハルか!」

切り倒す! そんな鬼気迫る勢いのまま剣を抜いていたルナさんは、私の呼びかけに驚いたように目を見開く。私が魔法を解けば、ようやく剣を鞘に戻し、窓を開けてくれた。

私はホツとして、そこから室内に入り込む。

「突然ごめんなさい。ルナさんに会いたくて、侵入してきちゃいました」

「いやいい、私も会いたかったからな。侵入は……まあ仕方がないだろう。門兵に取次ぎを頼んだとしても、一蹴されるだろうしな」  
ルナさんはそう言って、手に持っていた剣を机の上に置く。彼女の疲れたような表情と、目の下に薄っすらと浮かぶ隈が気になったが、とりあえずそれは置いておく。

「ところでルナさん、何で私がいるってわかったんですか？」

「気配だ」

「……へー」

透明化しても気配は消せないのか。……気配なんて普通の人は感じられないと思うけど、これからは気をつけるようにしようっと。

「それでチハル、今日はどうした？ 何かあったのか？」

「あ、えっと、ルナさんと色々話したいことがあって。……ここじやなんですし、いつもの酒場に行きませんか？」

「む、それもそうだな。誰かが来ても面倒だ。チハルは先に向かっていてくれるか？」

「はい、わかりましたー」

私は頷いて、再び自身に魔法をかける。ルナさんが机の上の書類を纏めるのを横目に、再び窓から外に飛び出した。

というわけで、私は酒場に行く前に奈津たちと合流することにした。待ち合わせ場所を決め、近くの路地裏に一度降りてから、すぐにその場所へ向かう。

「ちいお帰りー」

「……あ、パニシュだ！」

すると、三人揃って懐かしい食べ物を見ていた。初めて異世界に来た時に食べた、白いソース（みたいなもの）がかかった、細いお好み焼きみたいな食べ物のパニシュだ。そういえば最初に食べた時以来食べてないなあ、なんて思い当たる。

「あ、ちいも食べたことあるんだ！」

奈津が口の端に白いものをつけながら笑う。聞けばどうやら奈津たちも、歩いている時に感じたソースの匂いに釣られたらしい。

「ねえ奈津、私の分は？」

「無いよ？」

「嘘っ!？」

「嘘よ。はい、これ」

冬香に手渡され、ほっとする。まさか一人だけ仲間外れかと思っ  
ちやっただじゃないか。

「もう、あるんじゃない！ 奈津のいじめっ子ー」

「ちいのいじめられっ子ー」

口を尖らせて奈津に文句を言ったら、逆に笑ってそう返された。



何さ、いじめられっ子って。

「それで千春ちゃん、ルナさんは？」

「あ、そうそう。酒場で話すことにしたから、みんなも一緒に行こう？ 隣のテーブルに居れば見えるよ」

「ねえ、千春？ 私たち未成年なんだけど……」

「今の時間帯なら、普通に食事だけしてても変に思われないから大丈夫だよ」

「ふうん？」

そんな会話をしながら、いつもの酒場に向かう。ちなみにみんなの格好は、ちゃんとこちらの世界にそぐう物になっている。奈津が格闘家風で、亜紀が魔法使い風、冬香が剣士風だ。

ちなみに私は、いつもの町娘風だったり。

なので4人で歩いていると、私だけが物凄く浮く。剣士・格闘家・魔法使い・町娘なパーティーってどんなやねんっていうね。しかも戦力的には町娘最強。とんだクソゲーですな。

「あ、ここだよ」

私たちは酒場の中に入る。隣同士あいているテーブルに陣取り、私は座ってルナさんを待つことにした。後ろにいる三人は、早速頼む料理を選んでいる。

「……メモ肉のかりかり揚げってのがあるよ？ メモって何だろうね」

「さあ？ 頼んでみたらどうかしら」

「こっちはラゴラのサラダだって。うーん、全然どんな料理か判らないけど、食材が違うのって面白いね」

後ろの会話に、思わず頬が引き攣る。

メモは犬に似た魔物で、ラゴラは植物系の魔物なんだけど。まあ、味は美味しいから言わなきゃわからないだろう。知らぬが花だよ、花。

と、暫くの間ぼんやりと後ろの会話を聞いていたら、ようやくルナさんがやってきた。彼女はいつものローブ姿で、私を見つけてこちらに近付いてくる。

「待たせたか？」

「いえ、大丈夫です」

「そうか、ならよかった」

ルナさんは店員さん呼び、何かを頼む。少しして店員さんが持ってきたのはビールみたいな飲み物だった。ただし、何故か色が真っ黒だったけど。正直ちよっと引いた。

「それで、話したいこととは何だ？」

ルナさんが顔を隠すローブを外してから、そう切り出す。ローブを外した瞬間、私の後ろから息を呑むような音が聞こえた。わかるよ、美人だもんね。

「えっと、長くなるんですけど……」

アルバートさんに説明したように、私がこの世界じゃない場所から来たことと、私はこの世界で探していたものについて話す。もう自身の安全が確保されているので、そう隠す必要もなくなったからだ。あ、ちゃんと口止めはするけどね。なんてったって王妃様は黒

いらしいから。

そして、私の説明を黙って聞いていたルナさんが一言。

「……信じるしかないだろうな」

肩を竦めての言葉に、私も思わず苦笑気味ですみません、と頭を下げてしまふ。ルナさんはいや、と私を手で制しながら言葉を続けた。

「チハルの魔法は、この世界の魔法とはあまりにも違いすぎる」  
「そうなんですか？」

「ああ。あの後、魔法についての文献を漁ったが、転移魔法などは一切記述がなかった。世界のどこかにはあるのかもしれないが、そんな稀有な魔法を、普通の町娘が使うわけもないだろう。色々と正体を予想はしていたが、どれもじっくり来なかったところだ。異世界の人間と言われたほうが、まだ理解できる」

正体、か。彼女の予想ではどんな人間だったんだろう、私。  
すごく気になったが、それについて問うことは出来なかった。ルナさんが先に問いかけてきたからだ。

「それで、チハル。何が目的なんだ？ わざわざ教えるということ  
は、何かあるのだろうか？」

「……まあ、わかりますよね。ええとですね、ズバリ言いますが、  
こことシルヴァニアに一軒ずつ家を用意して欲しいんです」

今回の本題はこれだった。

繋がり鏡を改造したので、異世界との境界が常時設置が可能になった。ので、こちらの世界にも拠点的なものが欲しくなったわけ

だ。クオくんのこともあるし。

「家？ どうしてだ？」

「家というか、隔離された空間があったほうが行き来が楽なんですよ。転移魔法で、いきなり変な場所に出たら怪しまれちゃいますし」

「なるほどな。わかった、準備させよう」

おおつ、即答ですか。さすが王女さまです。

「いいんですか？」

「ああ、勿論だ。例の件では、殆ど礼も出来なかったからな。その分だと思ってくれ」

言われて気付く。確かに、以前の事件では、何一つその類を貰っていない。貰う前に飛び出してきた、と言ったほうが正しいのかもしれないけど。

どっちにしろ今回は、彼女の厚意に甘えておこつ。

「準備が出来たら連絡しようと思うのだが……前回のコインの様な、チハルと会話するための道具はあるか？」

「あ、そうでした。これ、ルナさんにあげます」

アルバートさんにも渡した、VRのための試作品のブレスレットを取り出す。そして同じような説明をルナさんにすれば、彼女は何か眉を潜めてしまった。あれ、いらなかったかな？

「……物はとても嬉しいのだが、誰にでも使えるのは少し問題だな」  
「まあ、そうですね。さっきも言いましたが、取られたら終わりで

すし、だからって肌身離さず持つてるわけにもいきませんし」

風呂のときや寝るときまでずっと身に付けているのは、流石に煩わしいだろう。それにルナさんの場合、色々な行事があつて服を着替えることが多いだろうから、普通以上にずっと付けているのは難しい。

「何らかの使用制限をかけることは可能か？」

「ん……出来るとは思うんですけど、今すぐはちょっと難しいですね。次来るまでに、その辺り何とかしてみます」

条件によつて使用制限がかかる魔道具、か。VR作りにも役立ちそうだから、帰ってからその辺り色々を試してみようっと。

「とりあえず、これは返しておく。だがそうすると、連絡が取れないのか。……そうだな、十日後にもう一度会わないか？」

「十日後……」

頭の中に今月のカレンダーを思い浮かべる。十日後っていうと、VRテストの前の週の日曜日になるのか。ま、大丈夫でしょう。

「大丈夫です。じゃあ十日後で、場所はここですよ。……時間は？」

「今日と同じくらいで頼む」

「わかりました」

了承の意を込めて頷く。ルナさんはテーブルの上にあつた飲み物を、ぐいっと呷つた。……真っ黒だけど美味しいんだろうか、それ。

話が一段楽ししたところで、会った時から気になっていたことを聞いてみる。

「ルナさん、随分疲れてるみたいですね」

「……まあな。以前の件で、城が色々騒がしくなっちゃってな。私含め、皆が奔走しているところだ」

「大変そう、ですね。……そんな大変な時に来てしまっただすみませ  
ん」

「いや、大丈夫だ。 그레이にも「休んでください」と言われていたところだしな。丁度いい機会だ」

不意に出た「 그레이」という名詞に、私は思わず肩をびくつかせてしまう。ルナさん関連で殺気を向けられ続けたこともあり、すっかり苦手意識が根付いているようだ。

「……今度来た時は、リポDでも持ってきますよ」

「リポD？ 何だそれは」

「こつちの世界にある……ええと、元気になれるお薬です」

栄養ドリンクでは通じないだろうと思い、その言葉を変えてみる。するとルナさんが、キツと目を尖らせ、こちらに厳しい視線を向けた。

「……麻薬の類か？」

「いやいやいや！ そんなものじゃないですから！」

まさかの言葉に、思わず過剰反応してしまう。

するとその反応を見たルナさんが、口元にニヤリとした笑みを浮かべた。

「冗談だ」

ルナさんの冗談は笑えません。  
内心、全力で突っ込む私だった。

「では、またな、チハル」

「はい、また」

それから少しの間ルナさんと世間話をしていたのだが、彼女がそろそろ戻るといっているので私は入り口まで彼女を見送る。それからテールに戻る。奈津たちが話しかけてきた。

「ちょっと、ちい！　ちいのキャラってルナさんじゃん！」

「あれ、言ってなかったっけ？」

「言っていないよ！　もう、ビックリしちゃったんだから！」

V Rのための自キャラであるエルフは、ルナさんを参考にしたわけだが。確かにそのことを、三人には伝えていなかったかもしれない。奈津や亜紀に言われ、ようやくそのことに気付く私なのだった。

「でも、それなら納得ね。あんな美人、想像だけじゃ普通は作れないもの」

「確かにモデルはいるんだろうなって思ってたけど、でもまさか異世界人だとは思わなかったよ」

「ごめん、教えてたと思ってた」

照れ隠しに笑いながら、頬を掻く。奈津はしょうがないなあ、なんて顔で私の額をツンと指で突く。爪があたって地味に痛かった。

「じゃあ、今日はそろそろ帰ろっか」

私の問いに、三人が頷く。私たちは食事代を払い、酒場を出た。

「……でも、今日は楽しかったなあ。千春ちゃんがVRゲームで伝えたい“素敵な世界”っていうのが、何となくわかった気がする」  
不意に出た亜紀の言葉に、二人も頷く。どうやら、今日の“日帰り界外旅行”は存分に楽しんでもらえたようだ。

「よし、帰ったらゲームのストーリー考えようっと！」

「応援してる！」

「応援してて！」

心からやる気いっぱいの様子な亜紀に、私たちは各々檄を飛ばすのだった。



とうとう待ちに待ったVRテストの日。

今日までに、ルナさんに家を貰ったり、魔道具改造なんかもしたけど、特に面白い出来事もなかったから、とりあえず省略ね、省略。

「……………とうとう、今日ね」

ごくぐり。緊張したような冬香の言葉に、生唾を飲む。私の家に集まった四季+お手伝いの一人と一匹は、座って円陣を組んでいた。

「みんな、準備はいいかしら？」

「ばっちり！」

「もちろんさ！」

「大丈夫だよ！」

私たちはその声をあげ、クオくとフェンリルの両名はこく、と頷く。

「じゃあ……………今日は頑張りましょう！」

「おーっ！」 そうやって気合いを入れた後は、皆にあらかじめ渡しておいた指輪型のマジックアイテムで姿を変える。もし知り合いなんかがいると、とつてもまずいことになりそうだしね。

ちなみにフェンリルは自力で人の姿になれるのだが、このマジックアイテムで変身するように言っている。……………だってフェンリルが

自力で人に擬態すると、狼耳の銀髪幼女なんだよ。もう、狼耳とか銀髪とか幼女とか、どれとっても案内役には向かないからね。合法ロリですげー可愛かったけど。

「千春……どう?」

「いつもとは違う魅力でナイス!」

一番最初に変身した冬香……フユがその場で自分の身を見回す。腰のちよつと上まであったポニーテールは消失し、ショートカットになっていた。元から整っていた顔つきも微妙に変わっているので、クラスメイトに見られてもわからないだろう。

「ね、ちい、どお!？」

「……どう見ても上げ底です、本当にありがとうございました」いきなり抱きついてきた奈津に感じた、ポイン、とした感触に私は咄嗟にそう返す。容赦ない一言に、奈津は崩れ落ちた。

崩れ落ちた奈津……ナツを改めて見る。

茶色がかっていた髪は、黒に染まり、長さもセミロングになっていた。顔は「orz」となっているので見えないが、たぶん目の色も変えている気がする。茶色がかった髪と目が、彼女の小学校からのコンプレックスだったから。あ、ついでに胸もね。

「千春ちゃん、私はどうかな?」

「おお、可愛い」

亜紀……アキは、どこかの令嬢みたいなふわふわとした桃色のワンピース姿をしていた。どうやら容姿だけでなく、服装も変化させたらしい。髪も背中の中ほどまで伸びており、顔つきは何を参考に

したのかとても愛らしい顔つきだ。……うん、これで白い帽子なんかかぶせたら、本当にどこかの避暑地のお嬢様みたいだ。

「……でも、確かに可愛いけど、それで案内するの？」

「……駄目かな？」

「いや、駄目じゃないけど……浮いてはいるよね」

「やっぱり？」

そう言っアキは服装を、元に戻す。変身前までの、パーカーにチエツクのスカート。これなら浮かないだろう。可愛くて逆に浮いてるかもしれないけど。

「んじゃ、次は私つと」

私……ハルは新しく考えるのが面倒なので、ゲーム用容姿の色違い（2Pカラー）だ。鏡越しに見る、黒髪黒瞳のルナさんも美人ですなあ（自画自賛）。

「ほい、次フェンリル」

「しょうがないのう……」

そう言っ、フェンリルも変身する。その姿に、思わず吹き出した。

「……なんとという3Pカラー」

フェンリル……リルは、私の容姿の茶髪バージョンだった。なんという双子。ルナさんを合わせると三つ子か。

「考えるのも面倒じゃしな……」

「それには同意するけどさ……」

興味外のことには、ものぐさな一人と一匹なのであった。

「最後はクオくんだよー」

「……えっと、はい！」

恥ずかしそうに笑いながら、彼は変身する。

女だけだともしもの時危ないから、抑止力になるような姿でね、と前から言っていたので、彼はその通りに変身してくれた。

……抑止力ある意味抜群の、とあるツナギ姿に。

「ちょっと待てーい！」

恐らく何かを期待していたのだろうナツが、思い切り突っ込みを入れる。

私も啞然としたけどね……流石にその姿はない、と。

「……クオくん、何でその恰好に？」

「抑止力になるものは何かってフェンリルに聞いたら、これだと教えてもらったので、僕なりに調べて変身してみたんですが……違いましたか？」

確かに、抑止力にはなるだろうよ。なるだろうが、それと同時に四季くそみそ説がまことしゃかに囁かれてしまっじゃないか！

「フェ、ン、リ、ル!？」

「で、出来心だったんじゃ！ 悪かった！ 悪かったからやめい！」  
私と同じ顔のリルをとっ捕まえ、首に腕をまわす。そのまま暫くの間、落ちない程度に絞めておいた。

「……頭が痛いわ」

フユが眉を顰めて、頭を抱える。

なんかホント、こんなんでごめんなさい。最近相模家の住人は、何だかとってもカオスです。

結局、その辺りにいそうな黒髪爽やかお兄さんに変身したクオクんと共に、会場である公民館へと向かう。

ちなみに交通手段は、電車だ。何だかんだで私は公民館の下見に行っていないので、転移魔法でそこまで行けないのだ。

転移魔法は、誰かに見られる危険性があるから、あんまりこの世界では使いたくない。だからわざわざ転移魔法だけのためには、下見には行かなかったんだけど。

「……視線が、痛い」

「……そうだね」

アキが引き攣った顔で笑う。うん、そりゃあ、美人だったり可愛い女の子が5人固まったら、視線も行くわ。違う意味での“見られる危険性”を考えておけば良かったなあ、と思ってももう遅い。

そして一番視線が突き刺さっているのは、私の隣にいるクオくん。このハーレム野郎が！ という視線がすごい。それを敏感に感じ取ったクオくんが、肩を縮めていた。たぶん本人は、何で見られてるのかわかってないと思うけど。

「……あと30分、頑張りましょう」

「……らじゃー」

変身魔法には、自重も大事です。

ようやく会場についた頃には、私たちのHPは大幅に削られていた。自重しなかった私たちも確かに悪かった。でも四季は謎の美人4人組！ っていうのは個人的に譲れない。

「美少女4人から構成される、クリエイトグループ『四季』！ ネット上に颯爽と現れた彼女たち、その正体はいかに！？」とかもしも特集されたらなんか燃えるじゃん。どっかの漫画かアニメみたいで。ないと思うけど。

あ。そもそも会場の近くで変身すれば良かったのでは？ という突っ込みは、私が思いついたくらいだから、たぶん皆の胸にもあるのだろう。でもそのことは、誰も口にしなかった。今更感溢れる上に、口にしてしまえば情けなさが当社比120%だから。

「あ、見てみて。『大会議室・小会議室 四季VRテスト会場』だ  
って」

ナツが指差した先には、本日の催し物一覧、と書かれたボードが  
あった。

他には絵手紙教室、ジャズダンスサークル練習などと書かれてお  
り、私たちのそれだけが物凄く浮いていた。

「さて、じゃあ私とナツは公民館のひとに挨拶してくるわね。他の  
皆は、そのまま会議室に行って準備をお願い」

「わかったー」

そう言って二手に分かれる私たち。

「じゃあ、千春ちゃ……じゃなくて、ハル。こっちだよ」

「うん、行こっか」

唯一会議室の場所を知っているアキについて、ぞろぞろと移動す  
る。

只今の時間は12時ちょっとすぎ。VRテストは2時からに設定  
してあるので、準備時間は約二時間。早めに来る人がいるかもしれ  
ないことを考えると、一時間ほどだろう。

大会議室と小会議室は隣り合った場所にあっただので、先に待合室  
のために使用する小会議室を見る。

「こっちは弄らなくて良さそうだね」

「うん」

そこは、椅子と机が並んだ、標準的な会議室だった。狭いものの、

20人くらいは入れるだろう。

「じゃあ、次はあっちだね」

そう言っつて隣の大会議室に向かう私たち。部屋はアキたちの言っていた通り、確かに狭い。大きさは学校の教室くらいだろうか。会議室としては十分だろうけど。

そんなことを考えながら、まず並んでいた机と椅子を片付けることにする。

部屋のドアを閉じ、誰も入れないように鍵を閉めてから、リルが亜空間への入り口であるカバンの口を広げ、クオくんが魔法で重量を極限まで減らした椅子と机をぽいぽいと亜空間に放り込む。

それを横目に見ながら、私も十数枚ほどの暗幕を創造魔法で作りに出した。

「えつと……『ウイングロード』！」

アキが、プレスレットに込められた魔法を使って宙を舞い、暗幕を運ぶ。私も同じように飛びながら、ガムテープで窓の辺りに貼り付けた。なんとなく中学の時の学校祭でやった、お化け屋敷の準備を思い出す作業だ。

……あの時はホント楽しかったっけなー。こだわって作ったお陰で、子供も、別クラスの同級生も、奈津も泣いてた。……奈津の場合、一緒に準備したくせに何故泣いたやら。恐いのすっごい苦手らしいけど、だからって自分のクラスの出し物で泣くか、普通？



さて、窓の半分ほどを塞いだ辺りで、会議室のドアがノックされる。恐らくフユたちが帰ってきたのだろう。そう思いながら、魔法を解いて地面に下りる。

リルがそれを確認してからドアを開ければ、思った通りナツとフユだった。

「挨拶は終わったの？」

「ええ、勿論。それにしてもこの短時間でここまで……流石に早いわね」

「まあね。魔法さまさまって感じ」

並んでいた机と椅子は片付け終わり、窓の半分は既に塞がれている。フユたちと別れてから10分ほどなので、確かにスピーディだ。

「じゃあ、私たちは何をすればいいかしら？」

「ん、じゃあフユは暗幕の続きをお願い。ナツとリルは私の方を手伝って。クオくんは、その隅に積まれてる椅子もしまっちゃってくれる？」

それぞれに指示を出し、また創造魔法を使用する。今度はパーティションを作成。これで道を5つ作り、テスターをそれぞれの道に3人ずつ誘導するのだ。

ぼんぼんと創造していったものを、ナツとリルが引き摺って道になるように微調整する。それを繰り返し、ようやく道が出来たころ、他のみんなの作業も終わったようだった。

「じゃあ、ちょっと電気消してみるよ？」

アキが言って、部屋の電気を消す。うん、思った以上に真っ暗だ。暗幕はきっちりと自然光をシャットアウトしているらしく、漏れ入

る光も殆どない。

「じゃあ、つけるね？」

その言葉で、部屋に明るさが戻ってくる。

はい、感想をそれぞれどうぞ。

「暗すぎね」

「案内とかこれじゃ無理だね」

「私がテスターだったとして、この中には正直入りたくない……正直」

「あはは、お化け屋敷みたいだもんね」

「……そんなに暗かったかの？」

「暗かったですよ……」

フェンリルはどうやら、あの暗い中でも周りが見えているらしかった。なんか猫みたい。

「んー、しょうがない。薄暗く見える程度の灯りは設置しよっか」  
そう言いながら、魔法で作ったランプ（らしきもの）を、ロツカ  
ーの上に幾つか設置する。

「はい、じゃあ電気消して？」

ぼんやりと小さな光に照らされ、浮かび上がる道。

「怪しさが増したわね」

「……ですよねー」

「でも、この程度なら『VRのための環境として、薄暗くしています』って言い訳で通じるんじゃないかな？」

「……うん、そういうことにしようか」

妥協と言いつくとは、何と素晴らしき言葉であるうか。

「じゃあ、あとは道の角部分に『繋がり鏡』を設置して、っと……  
……こんな感じ、かな？」

魔法を設置した場所には、ほいっと暖簾をかけておく。そうすれば色々誤魔化しが効くし、ナツたちが案内する時もわかりやすいだろう。

「あ、ちょっと待っててね？」

皆にそう伝えてから、暖簾をくぐり、繋がり鏡を通る。その途端、辺りが真っ暗になった。偽装VR部屋には、窓も作っていないので仕方がないが。

ランプを幾つか作成し、部屋を照らす。うん、これであっちと同じくらいの明るさになっただろう。

「ただいまー」

「お帰りなさい。大丈夫そう？」

「うん。同じくらいの明るさになったし、わからないと思うよ」

「どれどれー？」

ナツが言いつて暖簾を潜る。うん、角だし薄暗いせいもあって、急に消えたとしても不自然には思えないだろう。

少しして、ナツがあっちから帰ってくる。

「うん、大丈夫だと思うよー」  
「そっか。じゃあ他のところにも同じようにやってくるねー」  
ささつと他の偽VR部屋にもランプを置いて、会議室に戻る。  
電気をつけて、ようやくホッと一息。

「んじゃ、準備も終わりだね」

「そうだね。……えっと……あ、1時間かかってないよ」

「わ、本当だ」

アキの携帯を覗き込んだナツが驚く。

私も時刻を見せてもらうと、1時2分前だった。始めたのが12時ちよつと過ぎだから、50分強か。

「……普通にやったらどれくらいかかるのかな」

「えっと……まずベッドを運び込まなきゃいけないから、それだけで1時間くらいかかるんじゃないかな」

「そのまま運ぶにしても、分解したものを運ぶにしても、このメンバーじゃ1時間じゃ足りないと思うわよ？」

「結論は、沢山時間がかかるってことで」

「うん、ナツは正しい」

そのやり取りに、私たちは笑う。

さあさ、準備は完了です。

みんなで、魔法パーティを楽しもうじゃないか！

## 四季編 12+

ニコニコ大辞典のとあるページ。

単語記事：四季<sup>シキ</sup>

- 1、四季とは、春夏秋冬のこと。
- 2、4人からなる創作グループ「四季」のこと。

ここでは、2について解説する。

### 概要

201×年×月05日 19:04に投稿された『【CG】実写そっくりのCGが出来たよー【四季】』の作者である。四季の名の通り、4人からなる創作グループであり、そのCGの完成度は非常に高く、神の領域といっても過言ではないだろう。

### メンバー紹介

以下、四季運営HPからの抜粋。

<sup>ハル</sup>  
H A R U

- ・システム全般担当

- ・自称 魔法使い
- ・暴走特急な四季の言いだしっぺ

NATU<sup>ナツ</sup>

- ・イラストおよび広報担当
- ・自称 電波塔
- ・一番の苦勞人で被害者

AKI<sup>アキ</sup>

- ・ゲームプランナーおよび癒し系担当
- ・自称 縁の下の力持ち？
- ・影の支配者

FUYU<sup>フユ</sup>

- ・ゲーム調整および四季のリーダー
- ・自称 四季のまとめ役
- ・彼女には誰も逆らえない！

## 関連動画

- ・『【CG】実写そっくりのCGが出来たよー【四季】』
- ・『【CG】実写みたいな街並みのCGが出来たよー【四季】』

## 関連商品

- ・劇団「色」<sup>あし</sup> DVD

## 関連項目

- ・ミコミコ技術部
- ・ミコミコ殿堂入り
- ・うん、全くわからん。
- ・2.8次元

### 関連外部リンク

- ・project『四季』(四季の運営するHP)

### 掲示板

1 : ななしの動画 : 201x/xx/15(火) 22:  
 10:34 ID: Daseha2c  
 とりあえず記事を作ってみました。  
 追記なんかあったら皆さん宜しくお願いします。

2 : ななしの動画 : 201x/xx/15(火) 23:  
 25:51 ID: CsX3fasd  
 <<1 GJ!

### つーか関連商品www

3 : ななしの動画 : 201x/xx/15(火) 23:  
 35:49 ID: eruFMoe7  
 <<1 よくやった、オプーニヤを購入する権利をやるつ。  
 だがテストターの権利は渡さん。

4 : ななしの動画 : 201x / xx / 16 (水) 04 :  
28 : 02 ID : AdaaE9Xi  
<<1 乙

<<3

渡さんのかwww

つかテスターうらやま

5 : ななしの動画 : 201x / xx / 16 (水) 07 :

51 : 12 ID : 5Mannbye

<<4 俺もテスター受かった。北海道民だけ。

6 : ななしの動画 : 201x / xx / 16 (水) 11 :

24 : 41 ID : AdaaE9Xi

<<5

道民とかwww

か・・・漢だな、お前

7 : ななしの動画 : 201x / xx / 16 (水) 17 :

34 : 10 ID : agdjmp tw

つかさ、ずっと気になってたんだけど、冬のキャラって何？

ロボット？

8 : ななしの動画 : 201x / xx / 16 (水) 21 :

24 : 41 ID : Keixaex

<<7

春・エルフ、夏・戦士系？、秋・大妖精、冬・サイボーグだとおもってた

( 中略 )



1 1 : ななしの動画 : 201x / xx / 18 (金) 2  
1 : 11 : 48 ID : K x a r A c h i  
神とか普通にキモイので記事編集しました

1 2 : ななしの動画 : 201x / xx / 18 (金) 2  
1 : 31 : 29 ID : K e i x a e 9 x  
< < 1 1  
余計なことすんなks  
誰か直してくれー

1 3 : ななしの動画 : 201x / xx / 18 (金) 2  
2 : 04 : 22 ID : L s x 9 9 j u e  
< < 1 1  
確かに、神とか言うのは俺もどうかと思う  
でも工作うんぬんはさすがに嫉妬乙

1 4 : ななしの動画 : 201x / xx / 18 (金) 2  
3 : 11 : 56 ID : D a s e h a 2 c  
修正しました。  
神の表現直そうかと思ったが、思いつかなかったなのでこのままで  
スマンす

1 5 : ななしの動画 : 201x / xx / 18 (金) 2  
3 : 25 : 41 ID : K e i x a e 9 x  
< < 1 4  
おつおつー

(中略)

2 1 : ななしの動画 : 2 0 1 x / x x / 2 1 (月) 1  
2 : 2 8 : 2 8 ID : H d 8 A w 2 X x

ついかさ、本当にCGなんだろうかって俺は正直思ってる  
ちよつと映像関連かじってるんだが、何か完璧すぎるんだよな！  
あんなん全部計算でやれないと思うんだが・・・

2 2 : ななしの動画 : 2 0 1 x / x x / 2 1 (月) 1  
5 : 4 2 : 1 7 ID : x A 9 1 L c m E  
< < 2 1

リアルすぎるったらリアルすぎるけどな。

でも、CGじゃなかったら何だよ？実写って言う方が嘘くさいだ  
ろ。

2 3 : ななしの動画 : 2 0 1 x / x x / 2 1 (月) 1

6 : 1 8 : 3 6 ID : H d 8 A w 2 X x  
< < 2 2

そうなんだけどよ・・・  
うーん・・・

(中略)

3 0 : ななしの動画 : 2 0 1 x / x x / 2 4 (木) 2

1 : 2 9 : 1 8 ID : x a E x l l 1 9 3

ブログ更新キター

3 1 : ななしの動画 : 2 0 1 x / x x / 2 4 (木) 2

1 : 3 7 : 5 4 ID : w X a 9 2 K i e  
< < 3 0

ごくり・・・

公式設定的には、春がエルフ、夏がアマゾネス、秋が妖精、冬が

アンドロイドか

3 2 : ななしの動画 : 201x / xx / 24 (木) 2  
3 : 3 9 : 1 9 ID : x a E x 1 1 9 3

腹黒妖精な秋サマ美味しいです

3 3 : ななしの動画 : 201x / xx / 25 (金) 0  
0 : 3 2 : 2 8 ID : 4 C h i H a R u  
むしろ4人の百合が美味しいです

3 4 : ななしの動画 : 201x / xx / 25 (金) 0  
7 : 5 9 : 0 9 ID : N a T s u 0 9 0  
夏かわいいよ夏

3 5 : ななしの動画 : 201x / xx / 25 (金) 1  
6 : 1 8 : 3 6 ID : D a s e h a 2 c  
今年のコミケで百合の夏総受け本が何冊かは出ると思ってる

3 6 : ななしの動画 : 201x / xx / 25 (金) 1  
8 : 2 1 : 4 9 ID : e r u F M o e 7  
今年のコミケで陵辱な春本を期待してる。文字通りエロフだな。

3 7 : ななしの動画 : 201x / xx / 25 (金) 1  
8 : 4 1 : 5 0 ID : 4 C h i H a R u  
< < 3 6

自w重w w w w

……かまわんもつとやね。

(中略)

58 : ななしの動画 : 201x/xx/03(土) 0

8:20:13 ID: CSX3fasd

とうとう今日か！。

テストターの皆さん、感想よろしく。

59 : ななしの動画 : 201x/xx/03(土) 0

8:23:24 ID: eruFMoe7

<<58

まかせろー(バリバリ)

60 : ななしの動画 : 201x/xx/03(土) 0

8:25:58 ID: Xalksjdh

<<59

やめて！

61 : ななしの動画 : 201x/xx/03(土) 0

8:35:11 ID: aXase901

<<58

ここで張るのもどうかと思うんだけど、だんだん不安になってきたから張つとく

ttp://xxxxxx.blog/vrtester777

俺のブログなんだが、もし投稿が途絶えたら、ガチで警察に通報して欲しい

62 : ななしの動画 : 201x/xx/03(土) 0

8:25:58 ID: 8axWEEK

<<61

宣伝すんなよ・・・

まあ、見るけど

63 : ななしの動画 : 201x/xx/03(土) 0

8:25:58 ID: aliekcj3

<<61

ツンデレめ

<<62

正直、ここにURLは良くないと思うが、不安なのはわかる  
ま、四季が宇宙人だったら警察に言っても意味ないがWWW

- 四季の記事へ戻る - 前へ 1 - 31 - 61 -

「……ネットの世界とは、やはり面妖じゃのう。だからこそ面白い  
んじゃが」

銀髪幼女なフェンリルが、かちかちとマウスを操作する。

「フェンリル、みんな来たよー？」

「わかつとる、今行くわい」

フェンリルは返事をしながらパソコンを落とす。

口元に笑みを浮かべながら、たん、たん、と二階に上がっていく  
のだった。

「ねえ、ナツ、来るかな？」

「来るよ、きつと！」

公民館の入り口の辺りで、ナツと二人でテスターの人たちを待つ。他のみんなは、テスターの人たちが来るまで小会議室で待機中だ。

「VR、楽しんでもらえるかな？」

「楽しんでもらえるよ、きつと！」

わくわくとした声のまま、お互いに問答を繰り返す。そわそわと落ち着かない私たちは、そうやってじゃれあって緊張を解そうとしていた。

「あ」

と、そこでちょうど、第一不審人物発見。

きよろきよろと辺りを見回しているジャケットを着た、高校生か大学生くらいの男性に、二人一緒に笑顔で声を掛ける。

「こんにちはー！」

「え、あ、え!?!」

声をかけられた男性は、おどおどと挙動不審な様子で肩を揺らす。男性は私の顔をじつと見て、ぱくぱくと口を仰がせた。

私は、ん、と首を傾げてから再び口を開く。

「どうしました？」

「あ、いえそのっ……こんにちは……？」

男は、何故かいまだ落ち着かない様子だったが、ちゃんと挨拶を返してくれた。

「えっと、四季のテスターに応募して下さいの方ですか？」

「あ、はい、そうです」

「お名前をお願いします」

ナツが相手の名前を確認する傍ら、私は心話でリルに連絡する。

(一人来たので、至急案内のための人員を送るべし)

(了解じゃ。アキを送るぞ)

そんなやり取りをしている内に、確認が終わったらしい。

「はい、確認が取れました。では案内しますね。じゃあハル、案内お願いね」

「了解！ じゃあ、こちらです」

手に向けて案内する。男性は恐縮したように肩を縮ませ、私の後についてきた。

妙に緊張した様子の彼に、私は笑顔で話しかける。

「緊張なさってますか？」

笑いかけながら問えば、男性は強張った表情でこくこくと頷く。

「えっと、はい……正直、すごい驚いています。ハルさん、ですよ

「？」

「はい、私が四季の暴走特急、ハルです」

びしっと敬礼のポーズを取りながら冗談めかして言えば、相手も少し笑う。ほんの少しでも緊張が取れたのか、その相手は長く息を吐いた。

「でも……まさか動画に出てくるエルフそのままの姿だとは思いませんでした」

「あはは、試作品は自分の容姿をサンプリングしたので、私だけ本当の姿にそっくりなんですよ。色は違いますけど」

「そうだったんですか……」

何から何まで大嘘だ。これについては、必要悪だと思ってるけど。流石に、魔法ですから！なんて言えたものじゃない。

と、そこでアキがこちらに向かってるのが見えた。

「あ、アキ！ ここからお願いね」

「うん、わかったよ。……じゃあ、ここからは私、アキが案内させていただきます」

ぺこ、と頭を下げる彼女に、男性はほっとしたように表情を緩ませた。きつと、アキの可愛さに緊張が解けたのだろう。

軽く手を振って、アキと男性の背を見送る。

「つと、戻らなきゃ」

ぱたぱたと走って玄関まで戻る。

あと十四人、ちゃんと来ますように！



「わー！　すげー！　超エルフー！」

「あはははは、超エルフですー！」

「俺、北海道から来たんですよ。寝台特急で」

「……わー、お疲れ様です。その分、ファンタジーな世界を楽しんでいただけたと思いますので、楽しみにしててくださいね」

「は、はい……！」

「エルフ！　エルフじゃないですか！？　……力の限り抱き締めていいですか？」

「駄目です。女同士とは言え、セクハラで訴えますよー？」

「ナツさんは動画と違うんですね」

「いや、ハルが特殊なだけですよー。姿変えたほうがいいと思うんですけど、あの子考えなしなんで」

「その言い草はひどくない？」

「大丈夫さ、問題ない」

「……スゲー！　つーかヤベー！　動画そのままとか想像してなかった！　なあ！？」

「あ、ああ……びっくりした……」

「あれ？　友達同士での参加ですか？」

「ん、いや。友達の知り合いにテスターに受かった奴が居るっていうから、紹介してもらって一緒に来たんです」

「あ、なるほどー」

「エルフの人が二人!？」

「それは残像だ。……冗談です、リルは私の双子の妹です」

「姉じゃ」

「妹です」

と、そんな感じに、最初のテスターさんが来てから30分。テスト開始時刻まで、まだ30分はあるけど、テスターの方々は全員揃った。

大抵の人たちは、私を見ると、動画のエルフそっくりなことに驚く。そしてリルの姿を見てもっと目を丸くする。ちなみにリルの設定は、私の双子の姉妹。姉か妹かは、意見が割れてしまうので未決事項ということで。

テスターさんたちの内訳は女性が2人、男性が13人。女性が圧倒的に少ないのは、やはりVRなんてものは非常に怪しいからだろう。

動画内でも拉致だとか色々と言われていたけれど、確かにそう考えるのも無理はないわけで。一回目のテストが終われば、少しくらいは信じてくれる人も増えそうだし、それまでの我慢我慢。

フユが紹介やVRに関しての説明をしてから、三人ずつテスターの人たちを案内する。クオくんはこの部屋で荷物番だ。ちなみに私

の担当は女性二人と、男性一人。女性を固めたのは、その方が安心出来ると思ったからだ。

「この中に入るんですか……？」

暗がりの会議室の前で、私と同じくらいの女の子がそうやって不安がってはいたけれど、動画で見慣れたエルフというだけで一応は信頼してくれて、概ねスムーズに案内は済んだ。

フユが前に言った。「慣れない環境にいる人は、見覚えのあるものに安心感を覚える」って。つまりは目論見どおりってことです。

その後、テスターの三人に眠りの魔法をかけたたり、VRのための腕輪を彼女らにつけたりと、すべての準備を終えた私は、一足先に亜空間の中に向かった。

亜空間の白い空の下。

眠ったまま、綺麗に一列に並ぶ、変身魔法で姿を変えられたテスターの人たち。と、動画での姿に変身した私たち。

「なんか、一列に並んでるのがって異様だね……」

「ごめん、凄く不謹慎なんだけどさ。大きい事故とかの後に、遺体が一列に並べられるじゃん？ それ思い出した」

「うん、思った以上の不謹慎さでびっくりしたよ」

「いや本当ごめん」

そんな馬鹿みたいな会話をつらつらと交わしながら、状態異常を回復させる魔法を全員にかける。

「ん……？」

一番最初に目が覚めたのは、赤い髪を短く刈り上げた男だった。ちなみに姿は元の姿を参考に、髪と目の色、服装を変化させるだけに留めてある。

男はぱちくりと目を瞬いた後、白い空と黒い床が広がる世界をぽかんと眺め、自分の手を握ったり開いたりする。

そして。

「うおおおおお！？」

思い切り叫んだ。その声で目を覚ましたのか、他のテスターの人たちも身体を起こしたかと思うと、ぼんやりとした面持ちで、延々と広がる黒の床を見つめた。

「うお！？　なんだこれ、なんだこれなんだこれええ！？　すげー！　すげえええええええ！」

最初に目覚めた男が立ち上がり、奇声を上げながらぴよんぴよんとそこらを飛び回る。それに誘発されたように、他の人たちも立ち上がって、自分の姿を確認しているようだった。

「……まずまずの掴み、なのかな？」

「そうなんじゃないかしら？」

「こそこそと会話を交わす私とフユ。何だか魔法がなくとも、今のままでもとても楽しそうなので、落ち着くまで放置することに決めた。」

「何だこの空！ やべー！ すげー！」

「私の髪、青くなってる……！ ちゃんと触感もある！」

「すげえええええ！ こええええええええ！ ひよおおおおお！」

「世界が動画のまんまだ……VRとか嘘だろってずっと思ってたけど、やべえ……これはやべえ……」

「楽しげな声を上げて興奮する人たちに、何だか懐かしさを感じる。私も魔法を使えるようになった当初は、すごい楽しかったっけなー、なんてぼんやりと考えた。今も十分楽しいけど、最初の興奮にはやっぱり敵わない。」

「リアルエルフー！」

「わあ!？」

「こちらに飛び掛ってきた金髪の女性を、私は目を丸くしながら何とか避ける。その女性は、慣性のまま、ずしゃあ、と地面に滑り込むように倒れこんだ。」

「いつ……たくない!? やっぱバーチャルなんだ！」

「私はその言葉に、ホッとす。どうやらちゃんと護りの魔法は、効果を発しているらしい。」

っていつかエルフ好きなんだろうか、この人。玄関でも、抱き締めていいですか、とか言ってたし。

「セクハラで訴えますよー？」

「エルフにだったら訴えられても構いません！」

「……どんだけエルフ好きなんですか」

「日々エルフという単語で動画検索するくらいには！」

この人キャラ濃いなあ、なんて内心で思いながら、視線を全体に向ける。まだ落ち着いた様子には程遠いが、最初よりはマシになっただろうか。

「えーっと、皆さん楽しんでますか？」

「楽しんでまーす！」

「は、はいっ……!!」

「ホント、すごいです、これ！」

「俺、北海道から来た甲斐あったわ……ホント、五万円の価値あったわ……」

問いかけに帰ってきた言葉は、全て好意的なものだった。どうやら存分に楽しんでくれてるらしい。

皆の視線がこちらに集まったところで、隣にいたフユに視線を向けた。フユは私の視線に頷き、口を開く。

「では、ファンタジーの醍醐味ですし、魔法を使ってみましょう」

魔法という言葉に、ざわりとテスターさんたちが騒がしくなる。

VRという体験が強烈過ぎて、忘れてかけていたのだろう。

「じゃあ、システム担当の私ことハルが説明しますね。といっても、使いたい魔法に応じた呪文を口にすればいいだけなんですけど。じやあまらずは簡単な魔法から」

ぴっと腕を伸ばし、誰も居ない方向を指差す。

「『フレイム』！」

私にとってはVR作りのために散々見た魔法だが、テストの方たちにとってはそうじゃない。ちりりと舞う火花と、そのすぐ後に起こった爆発に、声も無く魅入っていた。

「とまあ、こんな感じですよ。口にするのは恥ずかしい、と思うかもしれませんが、大きい声で呪文は言いましょうね！」

私がつこりと笑うと、テストの方々が我先にという風に呪文を唱えはじめた。

「『フレイム』！」

「ふっ……これしきで私がやられると思ったか！」

「何っ、避けられた、だと……!?!」

「ふははは！ 私の魔法を受けてみよ！ 『フレイム』！」

「ぐああああ！」

ごく一部で、アクション映画ばりの寸劇をやっている人たちが居た。護りの魔法のお陰で、多少の熱は感じてても、怪我することもないし別にいいんだけど。というか痛みがないからこそ、あれだけゴロゴロと転がったりアクロバティックな動きが出来るんだろう。

「ねえ、ハルー。私たちもあれやろうよー！」

「ん、いいけど。でも、下は皆いるから空中戦にしない？ アマゾン  
ネスとエルフの空中戦って微妙な感じするけど」

「え、いいんじゃない？」

「そう？」

二人で笑いながら、すい、と白い空を舞う。

「使用魔法は、ファイアボールだけね。どっちかが被弾したら終わり  
りで」

「わかった。じゃあ、はじめッ！」

ナツが勢い良くこちらに飛び込んでくる。私はそれから逃げるよ  
うに更にも上へと飛んだ。空中での追いかけっこに、地上にいるテス  
ターの人たちは魔法を忘れ、私たちを見上げている。

「『ファイアボール』！」

ナツが打ち込んでくる三発の火炎弾を旋回することで避ける。が、  
その火炎弾は、私を追うように急角度で曲がった。

「わ！？ ナツ、ちょっといつのまに誘導とか出来るように！？」

「私とリルはオタク友達だからねー！ こっそりとハルを驚かせる  
ために、練習させてもらってたのさー！」

「な、何だっつー！？」

あの毛玉！ たまに亜空間バッグを持って外に遊びに行くと思っ  
たら、そういうことか！ てっきり買い物のためかと思ってたぜH  
A H A H A 畜生！

私はうう、と唸りながら、後ろに向けて四発のファイアボールを  
放った。火炎弾同士はぶつかり合って、小さな爆発を起こす。予備  
だった残りの一発は、あらぬ方向に飛び去っていった。



下では、テスターの方たちが盛り上がっているようだ。私を応援する声、ナツを応援する声、そのどちらでもない歓声が耳に入ってきた。

私たちは少し離れた位置で、向かい合って対峙する。

「今度はこっちから行くよ！ 『ファイアボール』！」

「そっちは大きさでくるかっ……！」

さつき出したものとは比べようにもならない大きさの火炎弾に、ナツが眉を寄せる。それを両手で抱えるように上げて、私は台詞を發した。

「みんな、私に力を貸してくれー！」

「元 玉かよ!？」

ナツのツツコミをよそに、私は、でええい！ と彼女に思い切り火炎弾を投げる。ナツはそれを避けるため、咄嗟に上へと跳ぶ。

だがそこには、先程あらぬ方向に飛び去っていったはずの火炎弾が！

巨大な火炎弾ばかりに気を取られ、自分からその火炎弾に突っ込んだナツは、悲鳴を上げながら地面に落ちていった。

私もそれを追いかけて、ゆっくりと着地する。

「ナツ、大丈夫？」

「ん、大丈夫ー。あーあ、私の負けか。特訓したのになー。……でも楽しかったー！」

「私もー。あんまり戦いとか好きじゃないんだけど、こづいづのっ  
て燃えるね」

「だねー」

二人であれこれ言いながら、みんなのいるところに戻る。

迎えてくれたのは、テスターの人たちのキラキラとした目と、リ  
ルの楽しい目と、アキとフユのどこか冷たい目。……うんごめん  
ね、予定にないのにあんな大立ち回りしちゃって。

「ゲームではさつきみたいに、空中バトルなんかも出来ますよー！」

「お、お楽しみにー！」

私とナツは取り繕うように言う。すると、感極まった様子のテス  
ターの人たちに、私たちは囲まれた。

「期待してますー！」

「俺も！」

「エルフのためなら世界中どこにでも行くわ！」

「またテストやってください！」

「俺、道民だけど、また応募しますー！」

「……それは無理すんなって」

私とナツは口々に期待の言葉をかけられる。その期待がくすぐつ  
たくて嬉しくて、お互いに顔を見合わせて笑った。

「VRテストに行ってきました。」

結果だけ言います。VRはマジでした。そしてハルはリアルでの顔でした。四季はみんな超美人。正直色々ばかった。

……なんつーか、まだ夢心地で何も言えないんで、今日はこれだけで」

とある被験者テスターの日記帳プレイヤーという名前のブログに更新された記事。たったこれだけの短文だが、ミコミコ大辞典にURLが貼られたこともあり、コメント欄は少しだけ賑わった。しかし新参のブログのため、その内容に懐疑心を覚える人々は多かった。

「おつかれですー」「具体的なレポート希望」「つかマジなのか、VR」「リアルである顔とか……あそこが熱くなるな……」「つかこいつ四季の中の人じゃねーの?」「その可能性は否定できない」「うーん、ここだけじゃ判断できないな」「まあ、これから他の人からの感想とかも上げられるんじゃないか?」

と、そんな風に微妙な盛り上がりを見せるこのブログとは別に、もう一つ、このVRテストについて記事を上げたところがあった。

それはとある界隈で有名な、「みーにゃ」という人物の運営するブログだった。

みーにゃは、抜けるエルフと言えばこの人！ と呼び声高い、18禁同人壁作家だった。

エルフが好き！ エルフは人生！ エルフは至高の存在！

日々、そんな風に声高に主張するみーには、それはもうエルフという存在を愛して愛して愛しまくっており、エルフならシヨタだろつがロリだろつが百合だろつが薔薇だろつが陵辱だろつがリヨナだろつが何でもござれ。性癖：エルフと言えるような人物だった。

「エルフ（。）。（。）。（。）。（。）。（。）。（。）。（。）。（。）。」

……はい、いつものエルフコールも終わったことで、今日の出来事をば。

今日、ミコミコで一時期祭りになった四季さんのVRテストに行ってきました。

……俺はそこで、リアルエルフに会ってしまった。やばいね、もう死ぬかと思った。つーか死んでもいいとまで思った。あれは夢の時間だったわ。

何度腕を振ってエルフコールをしようと思ったか。さすがに自重したが。

VRも楽しかったし、これからも期待していこうと思います。

ウワサの四季さんの動画はこちら

その内、VRテストの様子も上げるそうですよー。」

前述したブログとは違い、こちらのブログは非常に歴史が長い。具体的にいうと、5年以上続いている。そんな人物が、絶賛と言える記事を書いた。

その事実を、みーにゃの信者や四季の信者を、大いに沸かせることになった。

「みーにゃさん乙です」「リアルエルフとは羨ましい！ エルフー

！(。°。°)〇ミ。」「動画見てきました。……VRマジなんですか」「ミコミコから来ました。つーかみーにやさんテスト受かってたんですか!?!」「やつべええええ」「是非漫画でレポート描いて欲しい」「楽しかったですか?」「みーにやさん、お疲れ様です。というかテスターの中に居たんですか(笑)俺もテスターでした。春と夏が空で戦ってたの凄かったですよね」「21 k w s k」「24 VRテストの最中に二人が空中戦してた。マジかつこよかった」「30 やべえ見TEEEEEE」「みーにやさんと同じエルフ好き同士として、四季を今まで知らなかったのが悔しい……」

「四季にいくらで買収されたんですか?」なんて書いた人物は両方の信者にフルボッコにされ、肯定的な意見ばかりがコメント欄にぎわせた。

また動画のコメントは、「みーにやさんのところから来ました」のようなもので多くが埋められ、一時、荒らしのような様相を見せた。

「来ましたコメント自重しろ!」「みーにやさんに迷惑かけんな」「つーかみーにやって誰?」「同人壁作家。割と有名」「トン」「またテストやってくださいいいいい!」「今度は人数増やして……ホントに」「15人じゃなー」「何か実感ないけど、マジなんじゃないかって気がしてる」「エルフは正義(。°。°)〇ミ。」「みーにやさんが言ってるんだからマジだろおおお!」「第二回テスト期待」

そんなこんなで動画は再生数とコメントを増やし、ランキングの一位に再びのしあがっていくのだった。

VRテストが終わり、会議室その他の後始末も終えた私たちは、私の家に集まっていた。

「ひとまずはお疲れ様、っていうところね」

「ホントだねー。でも楽しかった！」

「滅多に出来ない体験だしねー」

「まあまあじゃったのー」

「僕はお手伝いでしたけど……凄くわくわくしました！」

私の部屋であれこれと会話を交わしながら、お互いにVRテストの成功を喜ぶ。私はベッドでごろんとうつ伏せになりながら、みんなの話に、うんうんー、と気の抜けた声で同意した。

態度が悪いのは重々承知だが、私はすっかり気が抜けてしまっていた。通過地点だとはわかっているけど、今日のためにみんなで頑張ってきたから。

……でも、ホント楽しかったなあ。

皆、喜んでくれていたようだったし。企画した甲斐があったというものだ。

「おーい、ちい、寝るには早いよー」

「ぐえ」

奈津に腰の辺りに座られて、蛙が潰されたような声を上げてしま

「なあーっー！ おーもーいー！」

「重いとは失礼な」

「重いに決まってるでしょうがー」

べしべしと奈津の太股を叩き、彼女に退けてもらっつ。

それから、よいしょ、と起き上がり、今度はベッドに腰掛けた。

「あ、そだ。アンケート見ようよ！」

「そうね、みんなで見ましようか」

テストが終わってからテストターの人たちに書いてもらったアンケート用紙を、冬香が取り出す。そして何枚かずつ、私たちに配ってくれた。

「もう、ホント楽しかったです！ 夢見たいな体験をありがとう！」

「正直、VRとか信じてなかったです。ごめんなさいorz」  
「エルフ愛してます！（デフォルメエルフのイラスト入り）」

みんなのコメントに、思わずにやにやしてしまった。

「というか最後のエルフ、たぶんあの女の人を描いたと思うんだけど、すごい上手いな。……漫画家か何かなのかな？」

最初に奈津の持つ用紙と交換し、次に亜紀、クオくん（withクオくんの頭上で、もふってるフェンリル）、最後に冬香と交換して、順番に読み進めて行く。どれもみんな、楽しそうな、満足そうなコメントばかりだった。

何か、うん、よかったなあ、なんて。胸の内が、ほっこりした。

「全部読んだかしら？」



「うん、読んだー」

冬香がそれぞれの用紙を回収してくれる。それを纏めてファイルにしまつてから、改めて冬香が口を開いた。

「じゃあ、今回の反省会をしましょう」

「えっ、今から!？」

奈津が嫌そうな声を上げる。その気持ちもわからなくはないが、そんな露骨に言わなくても。

「今だからよ。人間は忘れる生き物だもの、反省は早いうちにしないと」

冬香の正しすぎて涙が出るお言葉に、彼女以外の一同は小さく溜息を吐く。でも確かにその通りなので、私たちは姿勢を正し、反省会を始めることにした。

「じゃあまず……千春からね」

「え、トップバッターですか!？」

いきなりのご指名に、腕を組んで考える。

「……うーん。やっぱり、会場設営が面倒だったかな。個室なんかも作ったりしたし」

魔法があつて色々楽だったとは言え、反省はするべきだと思う。似非VR道具作成の次に、多くの時間をかけているからね。

「確かにそうね」

冬香は小さく頷きながら、バッグから取り出した小さなノートに私の発言をメモしていく。そしてその手が止まったところで、次は奈津、と彼女に視線を向けた。

「テスターの人たちが集まってから、亜空間に案内するまでが、かなり面倒だったと思うよ」

冬香は再び同意するように頷いてから、ノートにメモを書き連ねていく。

ということ、次はフェンリルとクオくん。

「僕は特には……あ、そうだ、電車の中での凄い視線がちょっと気になりました」

「……そういえばそんなこともあったかの。わしは特にないぞ。あくまで手伝いじゃいな」

つまりは、移動時の問題だね。次からは気をつけようってことで。じゃあ次は亜紀かな。

「……予定にないことは、しないでほしいかな」

じつとりとした目で見つめられて、私は思わず目を反らす。そうしたら隣にいた奈津と目が合った。彼女も私みたいに、目を反らしていたようだ。

しかしいつまでも絡みつく視線が無くならなかったので、ごめんなさい、と亜紀に頭を下げておく。土下座風味で。床に額をつけたままちらりと隣を見たら、奈津も私みたいに頭を下げていた。

「……亜紀、気が済んだかしら？」

「うん、先に進めていいよ、冬香ちゃん」

「わかったわ」

呆れたように息を一度吐いてから、冬香が纏めに入る。どうやら亜紀の機嫌も直ったようなので、私たちも元の姿勢に戻った。

「ということ、これからの課題は、三つね。これは千春に頼りきりになってしまっけれど、VRをもっと簡単に行えるようにする」と

「うん、了解。今のままだと大規模には出来そうにないしね」

今の擬似VRの方法じゃ、どう転んでも大規模にするのは無理だから、根本的に違う魔法にする必要がある。それはまた、少しずつ考えてみようと思う。そろそろ魔法も新しく作れるはずだし。何だかんだで、あつちの世界から帰ってきてから一ヶ月以上経ってるわけだし、毎日のように魔法は使ってるし。

「あとは、移動も含めた当日の予定をしっかりと立てて、それにちゃんと従うこと。これは特定の誰かさんがたに言っておくわね」

「すみません」

「ごめんなさい」

何度目かわからないが、二人で謝る。ほんの出来心だったんです、ええ。

「まあ、結果的には喜んでもらえたんだし、これ以上は言わないわ。最後に、次のテストについてだけ……」

「ええと、また公民館借りるの？」

亜紀の言葉に、うーん、と首を傾げてしまう。公民館が悪いつて言うわけじゃないけど、精々今日みたいな人数が精一杯だ。そんな

少数でやり続けても、沢山の人にファンタジーな世界は体験してもらえないわけで。もっと別の方法を考える必要があるだろう。

「まあ、これについては、千春の改良結果によるかしら。期待して  
るわよ、“自称魔法使いさん”」

冬香にからかわれるように言われて、私はにやりとした笑顔で返す。

「……そう言われては、魔法使いの名にかけて頑張るしかないじゃないですか!」

胸を張って宣言すれば、みんながパチパチと軽い拍手を浴びせてくれる。

「おー、ちいカッコいいー!　じゃあ私は今回の様子を纏めて動画でも作るかー!」

「頑張つてね、千春ちゃん!　私もゲームの世界観をもっと作り込むよ!」

「私は……えーっと……みんなを見守っているわね」

何も見つからなかつたのか、冬香がそんなことを言う。私たちは思わず吹き出して、ずるいよー、じゃあ宿題やってー、リーダーもっと頑張つてよー、なんて軽口を浴びせながら、じゃれ合うように腰の辺りに抱きつくのだった。

「うーん、新しいのか？」

反省会も終わり、それぞれ解散した四季の面々。亜紀と冬香は自分の家に帰ったし、奈津は動画作りのために、亜空間に籠もっている最中だ。

私はといえば、ベッドに横たわりながら、新しいVRについて、あれこれと考えていた。

学習机の上で一人……いや、一匹黙々とゲームをやっているフェンリルの後ろ姿を見ながら、ぼんやりと思考を巡らせていく。

……ってというかフェンリル、どうやってゲーム機握ってるの？

思わず気になって、私はだるい身体を起こし、学習机に近付く。するとちょうど一狩り終わったのか、フェンリルはゲーム機から離れてしまった。

「……む」

「なんじゃ？」

私の漏らした不満げな声に、フェンリルがもふんと全身で振り返る。

「いや、どうやってゲーム握ってるのかなーって」

「ん？ 普通にじゃが」

「……普通？」

首を傾げれば、もふもふな毛が指向性を持ってさわさわと動き出す。思わず、うわっ、と呻いてしまう私。

「……随分、嫌そうな声じゃの」

「や、だって、気持ち悪っ」

「今まで知らなかったかの？」

「知らないよ……今までフェンリルがゲームしてるところとか、ちゃんと見たこと無かったし」

そんなもそもぞと動く毛玉とか、すごく嫌なんだけど、視覚的に見てて何だか背筋がぞわぞわする。

たぶん私は、物凄く嫌な顔をしていたのだろう。フェンリルが私を見上げながら溜息を吐いて、ぴょん、と私の方に飛び掛ってくる。私は咄嗟に両手を突き出し、それを受け止めた。

「こうやって軽快に飛べる時点で、毛を動かせることくらい、わかると思うんじゃないの？」

「あー、そういえばそうかも」

言われてみればと、納得する。

今までは、手足とかあるのかな、とか考えてたけど、例えあったとして毛玉に埋もれてる時点で、あんなに飛距離が出せるわけないもんね。

「で、何じゃ？」

「へ？」

うんうん、と納得して頷いていれば、フェンリルがそうやって問うてくる。その問いが突然すぎて良く判らず、私は思わず首を傾げた。

「何が？」

「……何か用事があったわけでは無いんじゃないの？」

「いや、全然」

「ごめん、なんて軽い調子で謝れば、フェンリルは私の掌の上で溜息を吐く。それからぴょんと私の頭の上に飛び乗ってきた。

その時、頭で受け止めるのを少し失敗したせいで、首がぐぎりと逝きそうになった。が、何とか耐えた。

ほんの少し引き攣ったような感覚の首筋を手でさすっつていれば、フェンリルのどこか心配したような声音が降りてくる。

「わしはてつきり、新しい魔法作りが煮詰まっておるのかと思ったぞ」

一狩りしながらも、気には掛けてくれていたらしい。私は気を向けてもらっていた嬉しさに、薄い笑みを浮かべてフェンリルを両手で驚掴みにして頭から下ろす。うむ、相変わらず魅惑のもふもふです。

「色々と考えたところで、まだ新しい魔法は作れないしねー。出来るようになってから、色々と試行錯誤するよ」

完全オリジナル魔法を作るには、まだレベルが足りないようである。体感的には、あともうちよつとで出来ると思うんだけど。

「まあ、それもそうじゃな」

フェンリルの同意を得たところで、壁に掛けてあったバッグから腕がにょきりと生えてきた。私はちょうど目に入ったその異質な光景に、目を剥いて固まってしまふ。

よいしょ、と亜空間バッグから這いずり出てきたのは奈津だ。きつと撮影が終わったところなのだろう。だがしかし、これは何度見ても、見慣れない光景だと思う。まるでどこかのホラー映画みたい。

「ちい、ただいまー」

「お疲れー、奈津ー」

私はねぎらいの声を彼女にかける。奈津はふぶん、と鼻を鳴らしてから、私のベッドに勢い良く腰掛けた。

「んで、いい映像は撮れた？」

元々魔法ノ書には、過去を見るための魔法がある。それをビデオカメラと合わせることで、VRテストの様子を奈津に撮って貰っていたわけだが。

私の問いかけに、奈津はいえーいと両手でピースを返してきた。どうやら首尾は上々らしい。

「動画出来たら、見せるねっ！」

「うん、お願いっ！」

何故かノリノリで、お互いにながちりと握手しあふ。

私の手から肩に移っていたフェンリルは、何故か呆れたように息を吐いた。



初めてのVRテストから、一月が経った。

私の生活には殆ど変わりがないけれど、やっぱり変化した点も少しはある。

リビングでフェンリルを胸に抱きながら、テレビを見る。ちなみに番組は情報バラエティ。そんな中、リビングと併設されたキッチンでは、私の母とクオくんが、一緒に料理をしていた。

「透、ニンジンの皮剥いてくれる？」

「はい！」

クオくんの嬉しそうな声に、私はフェンリルを目の前のテーブルに置いて、振り返る。そして、ソファから身を乗り出すように二人の和気藹々とした様子を眺めた。

『相模 透』。それが、クオくんにこちらの世界で与えられた名前だ。つまり、戸籍取得は何かあったということ。

ちなみに名前は、クオ クア クリア 透明という、良く判らない母の連想ゲームの末にこうなった。

私がじっと見ていたことに気付いたのだろう。母がわざとらしく言う。

「それにしても、透が手伝ってくれて嬉しいわあ！ 千春ったら、何もしないんだもの。お嫁に行つて、料理ができなかったらどうするのかしらね？ 透もそう思うでしょっ？」

急に話を振られたクオくんが、何も言えず苦笑いを浮かべる。私は「クオくん困ってるじゃん」なんて軽口を叩きながら、ソファから腰を上げた。

私は相変わらず、クオくんのことにはクオくんと呼んでいる。第三者がいる時は透と呼ぶけれど、でもクオくんの方がまだ呼びやすい。それに、見た目外国人だし、漢字よりは横文字の方が似合っていると思う。彼的には、どちらの名前も好きなので、どちらでも好きに呼んでください、だそうだが。

「ね、今日の夕ご飯は何？」

二人の手元を覗き込む。すると母の手元には、ぎざぎざとした形の若草色の野草があった。その野草は、「ルミナー」と呼ばれる植物で、あちらの世界では専らサラダとして食べられるものだ。

クオくんという家族が増えて、我が家のエンゲル係数は多少なりとも上昇した。クオくんが使う消耗品の分だつて余分にかかる。

彼を引き取ると言った時点で、両親は資金面だつて承知の上だつたわけだが、やはり私もクオくんも申し訳なさが先立ってしまう。宝くじで少額当てるよ、と言つても、いい意味で一般人である両親は、首を縦には振らなかつた。全く余裕がないわけじゃないし、そういう胸を張れない行為は出来るだけやらないように、なんて逆に窘められてしまったくらいだ。

そのため食料を異世界から色々と輸入？したり、日用品は創造魔法で作つたりして使っている。あちらで真つ当に稼いだお金で色々買ってきたり、魔法を使うのは可らしい。

その内、アクセサリなんかを色々買ってきて、ネットオークションで売り捌き、収入源にしようかと企んでいる。上手くいくかはわからないけれど。

食べ物についてだが、フェンリルに聞いたところ、世界が変わったところで、特に毒になる要素が違うわけでもないそうだ。

品種改良なんか当然されていないので、果物なんかはあまり美味しくない。だけど野菜であれば新鮮な分、異世界の物の方が美味しかったりする。

「今日は、炊き込みご飯と里芋のお味噌汁、それと異世界産お魚の煮付け、きんぴら人參に、ルミーナの胡麻和えよ」

「わ、美味しそう！」

それと最近、うちの食卓に和食が上がるが多くなった。あちらの世界では和食に近い味付けのものが無かったから（世界のどこかにはあるかもしれないが、少なくとも私の知っている範囲では見当たらなかった）、クオくんの色々と食べさせたいらしい。

母はクオくんが大好きなようだ。いつそ娘の私よりも愛を込めているんじゃないだろうか、と思うことさえある。今更、母親の愛に飢える歳でもないし、いっこうに構わないんだけど。

「アンタも手伝いなさいよ、千春」

「えー、私もー？」

言いながらも、私は袖を捲る。

仕方ないなあ、たまには手伝ってやろう、なんて意気揚々としていたくせに、茹でたルミーナを熱さのあまりそのままシンクにぶちまけた時は、二人の視線が、少し、痛かった。

クオくんはいつも、私の両親と寝ている。川の字という奴だ。だからというわけではないが、彼は自分の部屋を持っていない。そのため食後の時間は、リビングで家族団らんとしていたり、私の部屋で一緒に過ごしたりする。今日は後者だった。

「クオくん、修行はどう？」

三週間ほど前から、クオくんは週に一〜二回のペースで、アルバートさんに剣を習いに行くようになっていた。以前改造した異世界へ渡る魔法のお陰で、いつでもあちらの世界に行けるようになったからだ。

ちなみに入り口はクローゼットにある。合言葉を唱えながらクローゼットを開けると、あら不思議、あちらの世界へご招待というわけだ。

ちなみに合言葉は「ラミパス、ラミパス、ルルルル」だったり。古いけど。

「少しずつですけど、頑張ってます!」

生き生きとした表情に、思わず頬が緩む。そうやってあちらの世界にも、信頼できる人を増やすのはいいことだ。修行しているうちに、また別の出会いもあるだろうし、自分に自信だつてつく。そうやって自分に自信を持つ内に、本当の両親に会いに行く勇気だつて起こるかもしれない。そうしたら、彼はもっと前を真っ直ぐに向けてるようになるはず。

私は、頑張れー、と頭をかいぐりと撫でておいた。

「それで、千春お姉ちゃんはどうですか、新しい魔法作り」

「あー……」

彼の問いに、思わず小さく項垂れてしまふ。

新しい魔法が作れるようになって、早一週間。正直なところ、それはとても難航していた。

元有る魔法を改変するのが、答えも解説もある数学の基礎問題を数値だけ変えて解くことだとしたら、一から魔法を作るのは、公式だけを与えられて応用問題を解くことに近い。その公式がどのような意味を持つのか、どのような場合に使えるのか、そしてその公式を用いた計算方法など、しっかりと理解していなければ解くことが出来ないのだ。

魔法を改変することで多少の知識と勘はついたし、レベルも上がったが、一から魔法を作り上げるのは、やはり大変なものだった。

「やっぱりね、難しいよ」

「そうですね……。ところで、どういう魔法を作るんですか？」

「うんとね？」

VRのための新しい道具を作るにあたって目標にしたのは、次の三点。

1、その場にながらVRを体験できること。これは、亜空間や異世界にいちいち身体ごと送るのは酷く非効率なためだ。

2、広く流通できる形にすること。これは、最終的な目標が、大規模なVR、つまりはMMORPGだからだ。今のままでは、みんなが手軽にVRでファンタジーな世界を、だなんて夢のまた夢だ。

3、最後に、当然とも言えることなのだが、VRが魔法だとばれ

ないようにすること。これは、VRを広く流通させることを目標としているのだから、当然解析の対象にもなりえるだろう。昨今、ゲームが出た翌日には解析されて違法に？起動出来るようになっていたりする世の中なのだから、より注意する必要があった。

「たとえば、人形を操って、その視点を共有できるとか、そういう魔法を作ろうって思うんだよね」

「人形ですか？」

クオクンの言葉に、うん、と頷く。

異世界に創造魔法でユーザーの好きなように作った人形を置いておいて、ユーザーがVRの道具を使った時点で精神が人形に宿る。そして、人形の視点を通して、世界を体験できる。利点は、先程挙げた1番の目標を達成できること。そして、安全性に気を遣わなくて良いことだ。欠点は、人形の目を通すために多少の現実感が無くなってしまふ、といったところか。欠点と言えるほどのものではないだろうが。

「ただ、そういう精神系の魔法って、魔法ノ書にはあんまり無かったから、難しくって」

精神に作用する魔法は、光翼を出して相手を畏怖させる魔法か、相手を混乱させる魔法くらいだ。どちらも操作とかは関係ないので、全くはかどらなかつたりする。

「大変そうですね……」

「んーん、好きでやってるから大丈夫。それに、大変ということは、これ乗り越えたら『大』きく『変』わるのさ！」

私が胸を張ると、クオくんが首を傾げる。

「どういうことですか？」

「ん？ ……あ、そっか。翻訳魔法がかかってるんだもんね」

一緒に過ごしていると、時たまこういうことがある。

「大変」という言葉は理解できるし、「大きく」「変わる」という言葉も理解できる。ただ、大変という言葉に使われている漢字が理解出来ていないために、そういう言葉遊びの類を理解できないらしいのだ。

「えっとね……」

私はノートを引つ張り出し、漢字を書いて説明しようとして、書き文字も翻訳されるのだと気付く。

どうしようか迷って、結局全部口で説明した。クオくんは良く判らないような、判ったような、微妙な表情をしていた。

それからクオくんと色々と話していれば、彼が寝る時間になった。

「おやすみなさい、千春お姉ちゃん」

「おやすみー」

部屋を出て行く彼を、手を振って見送る。それからベッドの上に転がっていた携帯を取って、ネットに繋いだ。それから、ミコミコ

動画にアクセスする。

そして、開いた動画は『【CG】テストの模様をお伝えするよー【四季】』。奈津が、一月前に投稿した動画だ。

携帯な上に時間帯が時間帯なので遅い読み込み。少しだけもどかしいものを感じながら、表示されるコメントを追っていく。

『元氣玉ああああ!!』 『夏アホwww』 『これは仕方ないだろww』 『VRってマジなんだろ?謎の技術すぎる』 『どうだろな。人が少なすぎるし、なんとも』 『俺の同級生に二人テストーいるんだが、マジだったらしい』 『話だけだったら何でも言えるしな・・・つかテストー二人とか裏山』 『春>>>>夏は揺るぎない事実』 『夏だって可愛いだろ!』 『エルフ。。。』 『ミ。エルフ。。。』 『つか俺は、この春と同じ顔の奴が気になる』 『リルっていうらしい。何でも春のリアル妹とか』 『姉だと聞いたが』 『...つまりは百合か(ゴクリ)』 『双子姉妹とか美味しいよな』

「一月も経つのに、みんな元氣だなー」

思わず他人事のように呟いてしまう。だけど、本当はかなり嬉しかったり。

サイトの方にも、早く二回目のテストやってください! とか、いつからゲームやれるんですか? なんて拍手コメントやメールが多い。

それだけ期待されているのだと思うと、何だか背中に押し掛かってくるような重さを感じて、だけどそれ以上に胸がくすぐったくて嬉しくなる。

まだまだ壁はあるけれど、早くみんなでファンタジーな世界を楽しみたい。



「……頑張ろうっと」

そう呟いて、役目を終えた携帯をベッドに放り投げる。

それから、私はいつものように亜空間へと足を突っ込んだ。

「……ぐあーっ！」

私は吼える。今までの鬱憤を晴らすように、思い切り。

その雄叫びは、亜空間の白い空に飲み込まれ、跡形もなく消えていく。

反響すら残さず消えてしまったそれに、私は疲労感が増した気がして、がっくりと肩を落とす。そして、黒いリノリウムのような床にどっかりと腰を落とした。

新しい魔法作りは、難航していた。

それはもう、難航していた。

VRのための魔法を作り始めて早三週間。

つまりは、初VRからもう一ヶ月半は経つ。正直、そろそろ私たち『四季』も、そしてそれを応援する人たちも、熱が冷めてくるのだ。動画内のコメントは相変わらず賑わっているけれど、たぶん一部の人たちが頑張ってくれているのだと思う。

進展がないわけではない。先に「想像通りの人形を作る」という魔法を作ってみたのだが、こちらは呆気ないほどにすぐ出来た。恐らく、創造魔法というヒントがあるからだろう。

が、しかし、肝心の「人形を操り、視界を共有する」という魔法が出来ない。出来ないどころか、きっかけすらも見えてこない。

どうしたものか。そう思っていた私を、不意に後ろから呼ぶ声が

あつた。

「千春お姉ちゃん、電話ですよ？」

部屋へと続く穴から、クオくんの上半身だけが覗いていた。もうそろそろその奇怪な光景も慣れてくる頃で、私は表情も変えずに、今行くー、と返す。

亜空間から私の部屋に戻ると、充電器に繋がれた携帯が音を立てていた。その着信音は奈津からのもので、私は半分亜空間に入ったまま、クオくんに携帯を手渡してもらった。

「もしもし」

ぴっと通話ボタンを押し、そのままの様相、つまりはバッグから半身を出した状態で通話を開始する。亜空間に戻ってしまえば、電波が届かなくなってしまふからだ。

「やほー。ちい、元気ー？」

「元気だよー。ってか今日も学校で会ったでしょうに、何をいつてるかね君は」

「あつはは、まあね！　そんで本題だけど、魔法作りはどう？」

思わず眉根を寄せて、停止してしまふ。すると奈津は悟ってくれたのか、やっぱりかと言いたげに、僅かに息を吐いた。

「駄目かー」

「うーん、まだまだだねー。少しでも掴めれば、あとはなし崩しに何とかなると思うんだけど……」

『あつちの世界に、そういう魔法とかってないの？』

「あー……」

思考が魔法ノ書だけで完結していたが、確かに異世界の魔法にも学べるところはあるかもしれない。ルナさんにでも聞いてみようか。

「そつだね、明日は土曜日だし、あつちに行ってみるよ」

『頑張れ、応援だけはしてるぜ！』

「ふははは、この私を応援する権利をやるっつ！……あ、そういえば、サイトの方はどう？」

『いつも通りだよ。短い応援コメントが何個か来てた』

「そっかー！ それを聞くと、やる気出てくるねー」

『ちい、最初からやる気とノリだけは溢れてるじゃん？……ただそれが結果に結びつかなかつたり、とんでもないところに不時着するだけで』

「何か言った？」

『いいえ、何も』

そんないつも通りのグダグダとしたやり取りを交わし、私と奈津は通話を終える。

明日の予定は異世界訪問。ならば明日は、早く起きなくちゃ。

私は今日の魔法作りを終えることにして、亜空間からずりりと抜け出した。

「ラミパス、ラミパス、ルルルル」

調子をつけて呪文を唱えてから、クローゼットの右の扉を開ける。

一步踏み出せば、そこはもう異世界だ。

雨戸を閉め切っているために、真っ暗な室内。そして、些か埃っぽい。

私は魔法で明かりを作ってから、古びた木造りの内装を見渡す。ほとんど物は無く、生活の痕跡が全くない。

この古びた一軒家が、ルナさんに用意してもらった家の一つだった。王都の隅にあるこの建物は、もう誰も住んでおらず、その内取り壊しされるのを待っていた物件だそうだ。

もう一つの、シルヴァニアにある方の家は、ここまで古い物件ではなく、そこそこに綺麗な石造りの一軒家だ。そっちの方に行くには、呪文を唱えながらクローゼットの左の扉を開ける必要がある。

私は雨戸を開けて、室内に光を入れる。それからついでに、風の魔法を使って埃を全部外に吹き飛ばした。その際、ほんの少し威力配分を間違ってしまい、申し訳程度に置かれていたテーブルや椅子などの家具が煽られて、がこん、ごこん、と音を立てた。

思わず、あ、と苦笑いしてから、私は外に出る。

王都の中心部から外れたそこは、人気がなく、静かだった。

「さて、行きますかー」

一步を踏み出し、それからふつと家屋を振り返る。今にも倒壊しそうに見えるボロ屋に、私はルナさんの申し訳なさそうな表情を思い出した。

この古い建物をルナさんに引き渡された時、彼女には「申し訳ない」と謝られてしまった。一応の恩人である私に、こんなボロ屋し

か用意できなかったことが、彼女の矜持に触れたのだろう。見た目に反して倒壊の危険は無いらしいが、きっとルナさんは、もっと街中に近い綺麗なところを用意したかったに違いない。

だが私は、これくらいの寂れた方がいいと思った。たまにしか出入りしないのだし（実際、貰ってから初めて来た）、人が住んでいないくらいに見えていた方が都合がいい。

ポケットからルナさんへの直通回線を持つブレスレットを取り出し、彼女へとコンタクトを図る。呼び出しを示すちかちかとした点滅の後、ルナさんの声がブレスレットから聞こえてきた。

『チハル、どうした？』

「こんにちは、ルナさん。えっと、ルナさんに教えてほしいことがあつて来たんです」

『教えてほしいことか？ 一体何だ？』

「えっと、魔法についてなんですけど」

『む、チハルが魔法を、だと？ 珍しいな？』

驚いたような声に、私は苦笑する。確かに、魔法ノ書なんていう規格外アイテムを持っている私が、今更魔法など言い出すとは思わなかったのだろう。

ルナさんは、少しうーむと唸ってから、悪びれた声で言う。

『……だが、悪いが今はまだ抜け出せそうにない。都合が良くなったらこちらから連絡しよう』

「わかりました。えっと、大体どれくらいかかりますか？」

『四時間ほど……だな』

「じゃあ、それまで時間を潰してますね」

『すまない』

「いえいえ、こっちこそ突然でしたし。じゃあまた後で」

『ああ、またな』

そう言つて、通信を切る。

さて、何をして時間を潰そうかな。

「……久しぶりにギルドでも行くかな」

あつちに戻つてから全く行つていなかったし、ここでお金を稼いでおくのもいいかもしれない。私はそう思つて、ギルドへ向かうことにした。

久しぶりのギルドの雰囲気、私は思わず弛緩した溜息を吐く。

ああ、あの日々が懐かしい、なんて遠くない思い出に浸った。

それから、カウンターにいる受付のお姉さんのところに向かう。

「こんにちは」

「こんにちは！」

挨拶を交わしながら、ギルドカードを提示する。お姉さんはそれを受け取って確認したあと、依頼の書いた紙の束を渡してくれた。

私はそれにざっと目を通す。私の職業が魔法使い（水）なだけあって、臨時要員としてパーティーの後衛募集や、治療などに関連した依頼が多い。ちなみに治療と言つても緊急性の高いものではなく、

腰痛治療とかそういった類のもの。Ｃランクなんてそんなものだ。

私はその中で、短時間で終わりそうなものを選ぶ。

「えっと、これと、こっちの治療依頼でお願いします」

「はい、わかりました」

何やら手続きをした後、お姉さんがギルドカードと、依頼書の写しをくれる。私はそれをバッグにしまってから、ギルドを出た。

「さて、行きますかー！」

私が受けたのは、足を捻挫してしまった子供を治す依頼と、腕を骨折してしまった男性を治す依頼だ。ということで、私はまず子供の方へと向かうことにした。男性には悪いが、子供を優先したい。

「まほーつかいのおねーちゃん、ありがとうございます！」

スカイブルーの髪を二つ分けにした少女が、嬉しそうに手を振ってくる。私がそれに手を振り返すと、青の髪を持つ母親がぺこりと会釈してきた。私もそれに会釈を返してから、もう一度少女に手を振ってその場を去った。

さて、次は男性だ。私は依頼書を手に、男性の住居に向かう。子供の家からすぐ近くにあるのは、依頼を受ける時に確認済みなので、私はうろつろと家を探す。



「えっと、青い屋根の……あ、あれだ！」  
家を見つけた私は、たた、と駆け出す。そして、声を掛けながら  
戸を叩く。

「ちょっと待ってくれ」

中から聞こえた声に、私は「あれ？」と首を傾げる。どこかで聞いたことがあるような気がしたからだ。

そして少しの間の後に中から姿を現したのは、私の天敵、ルナさん馬鹿のグレイさんだった。

「……！？ ちよつ、えつ、くくッ！？」

私は思わず後ずさって、素っ頓狂な声を上げてしまう。

以前、八割がたルナさんのせいで厳しい環境に置かれるハメになっていた私は、もはや微妙に涙目だった。しかも久しぶりに会ったせいで、彼に対しての免疫がゼロに戻ってしまっている。

彼は左腕を三角巾で吊りながら、目を丸くして私を見つめた。

「……チハルか」

どこか威圧的に聞こえる声に、私は肩を揺らす。それから、インテルもびっくりなスピードで頭を下げた。

「は、はい！ チハルですグレイさんにいたしましてもご機嫌麗しく  
あらせられるでしょうかあ！？」

良く判らない文言と共に頭を下げているら、頭上から溜息が降っ

てくる。

恐る恐る顔を上げれば、グレイさんはどこか呆れたように、無事なほうの右腕で頭を抱えていた。

……何ですか、その反応。

「……まあいい、入れ」

釈然としないものを感じながら、招き入れられるままに家に入った。

グレイさんの家の中は、殺風景だった。ベッドや食器棚、テーブルなど、必要最低限のものしかない。テーブルの上には十枚ほどの乱れた書類の束が置かれており、ついさっきまで読んでいたのだろうと思う。

グレイさんは書類を整えて手に持ち、ベッド脇にあるサイドテーブルの引き出しの中にしまう。それからどかりとベッドに腰掛けると、私には椅子を勧めてくれた。

「まさかお前が来るとは思わなかった」

「……私も、グレイさんだとは思いませんでした」

正直なところ、依頼人の名前なんかろくに見ない。見たとしてもさっと流してしまふ。じっくりと見るのは期限と、報酬くらいだ。

二人の間に落ちる沈黙に、私は落ち着かなくそわそわと身体を揺らす。グレイさんはむすつとしたような表情で、そんな私をじつと見る。耐えられなくなった私は、彼を見ながらおずおずと問いかけた。

「あの、その腕どうされたんですか？」

「……お前には関係ない」

「でーすーよーねー！」

泣きそつになりながら、私は立ち上がった。こつなつたら、さつさと治して帰ろう。

「えつと、じゃあ治しますね。『ヒール』！」

短縮詠唱で魔法を発動させる。詠唱は無くとも発動出来るのだが、一応はこの世界の魔法らしく取り繕った方がいいだろう、と思ったためだ。だが、あの事件の日、共に行動していた彼には今更だということに、魔法を使った後に気付いたけれど。

私は少しだけ口元を歪めて自嘲してから、彼に問いかける。

「どうですか？」

「ふむ……完全に治っている、な」

彼が三角巾を取り、何度か腕を動かす。どうやら痛みは無いらしく、私は良かったと息を吐いた。骨を繋ぐだけであれば医療知識など必要ないし、簡単な魔法で済むのだが、不安なものには不安だ。変にくつついてしまえば、筋を痛めてしまつかもしれない。

「感謝する」

彼らしくない素直な感謝の言葉に、思わず引き攣った笑みを浮かべてしまう。

「やっぱりどうしても、この人は、苦手だ。」

「じゃあ、これにサインを」

終了証明書を差し出せば、彼は左手でサインする。どうやら左利きらしい。そんなどうでもいい情報は、目から脳へと辿り着き、そのまま蓄積されることなく空へと飛んでいったが。

「はい、ありがとうございます。私は帰りますね」

「ちょっと待て」

「……な、何でしょう？」

さっさと去ろうとした私の背に、声が掛けられる。私はびくりとして、振り返った。

「ルナフィリア様のお傍に近寄ることを、認めてやる」

「……そう、ですか」

今更そんなことを言われても、既に何度か会っている上、これから会う約束もしているわけだが。

そんなことを言えば、きっと私の寿命が縮まりかねないので、口を噤んだけれど。

私は最後にぺこりと頭を下げて、たたたと彼の家を走り去る。

うん。やっぱりあの人は、心っ底、苦手だ！

「お久しぶりです、ルナさん」

「久しぶりだな」

いつもの酒場で落ち合った私たちは、奥のテーブルを選び、向かい合って座る。

彼女の顔色は、前とは比べようもなく良く、私はほっと安心した。定型句に近い簡単な挨拶を交わして、早速本題に入る。

「それで、いきなり魔法について聞きたいなど……一体どうしたんだ？」

ルナさんがテーブルに肘をつき、組んだ手に顎を置き、こちらをじっと見つめる。私は「そんなに大したことじゃないんですけど」と前置きしてから、口を開いた。

「新しい魔法について研究してるんです。でも、全然上手くいかなくて。なので、参考になる魔法がこっちに無いかな、と思ったんです」

「なるほどな」

一度頷いて、彼女は前のめりだった姿勢を戻す。今度は椅子にどっかりと深く座り直してから、問いかけてきた。

「それで、どんな魔法なんだ？」

「えっと……人形を操って、その人形と視界を共有する、みたいな魔法が作りたくて。そういう魔法があれば、危険な場所でも救助活動とかしやすいかな、なんて……」

後半は取ってつけたような言い訳だった。

だが、まさか遊びに使いたいです！　なんて言えたものじゃないし。言ってもルナさんはチハルらしいなんて言って笑っただけだろうが、私だって体面は保ちたい。保つ体面なんか最早無いかもしいないが。

「ふむ……少し違うかもしれないが、確か、遠見の魔法なら光属性にあつたはずだな」

「本当ですか！？」

遠見の魔法ということは、つまり視界を別の場所に飛ばすということだろう。作りたい魔法は、感覚を人形に飛ばし、それを操ることだ。その魔法が応用出来れば、やりたいことの半分は解決できそうだ。

「城仕えの光属性の魔法使いなら使えるはずだ。だが、戦術魔法だからな……教えてもらえるかは判らんぞ」

「うーん……適当な魔道具渡して懐柔とか……いや、でもあんまりそういうのは広めたくないし……」

アルバートさんやルナさんには渡しているけど、悪用しないと信頼できるからこそだ。渡すものによるだろうが、下手な人間に渡せばどうなるか判ったものじゃない。

「確かに、下手に広めると大変なことになりかねんな……というより、ちゃんとそう言った自覚があつたんだな」

「いや、私は元々、あんまり力を見せたくなかつたですよ？　誰かに巻き込まれたので、色々やるハメになりましたが」

「誰のことだ？」

「わかってて言ってますね？ ……もういいです」  
彼女があまりにも真顔だったので、私は訴えを取り下げた。  
何だか、ルナさんが妙にしたかになっていく気がする。色々あったからだろうか？

「……本か何かに、その魔法について書かれてないですか？」  
「あるかもしれないが、魔法自体が門外不出なんだから、書かれて  
いる本だって持ち出し禁止だぞ」  
「うーん。そうですね。困ったな」  
手掛かりが近くにあるかもしれないのに、手が出せないのが酷く  
もどかしい。

「ルナさんの権限でどうにかは……無理ですよね？」  
「どうにかしても良いが、対価は貰うぞ？」  
「それはいいですけど……というか、やっぱりルナさん、ちょっと  
変わりましたね」  
前の彼女なら、見返りなく二つ返事で了承していたような気がする。  
私が率直に思ったままを言えば、ルナさんは少し口元を歪めて  
笑った。

「そうか？ ……だが、少し前まで、父上の代わりに、腹の見えな  
い奴らとやりあってたからな。チハルの言うとおり、少しは変わっ  
ているかもしれない」  
具体的なことは何も判らないが、彼女が大変な思いをしたことだ  
けはわかる。何か言おうと思ったが、私が何を言っても安っぽくな  
る気がして、何も口に出来なかった。

「私のことはいいさ。ところで、どうするんだ？」  
口を噤んだ私に、ルナさんが殊更明るい口調で言った。

「ちなみに、対価は何がいいですか？」

聞けば、ルナさんが腕を組み合わせて考える。「あれにするか、いやしかしあれの方が急務か」なんてぶつぶつと呟いていたので、何を作ってもらおうか考える、というよりは、どれを作ってもらおうか考えているのだろう。

……私に色々頼む気まんまんだっただな？

別に嫌ではない。ただ、少し前までのルナさんと違うなと感じるだけだ。

そついやルナさんの母親は腹黒だっけ。ルナさんにもその因子が僅かでも受け継がれているのだろう。今まで発芽はしていなかっただけで。

「そうだな……これみたいにも、すぐに連絡が取れるようなものがない。それぞれの街に置きたい」

ルナさんが、手につけているブレスレットを指差しながら言う。

つまりは、電話のような通信網を構築したいということか。

それくらいなら、さほど苦労せずに来るだろう。ついでに、空气中の魔力を集めて、半永久的に使用できるようにしてみようかな、なんて余裕のあることまで考えられるくらいには。

悪用の危険はないのだろうか、と一瞬考えたが、ルナさんが言い出したんだし、彼女の方できっちり管理してくれるはずだろうと思  
い直す。



「わかりました。次に会うときまでに作っておきます。いくつ必要ですか？」

「とりあえずは、五つほど頼もうか。試験的な導入に使いたい。ああ、チハルの名前は出さないから安心してくれ。遺跡から発掘された、とでも言っておく」

「ええ、それでお願いします。あ、ルナさんの方は、どのくらいの期間が必要ですか？」

「一日あれば十分だ。城の魔法使いに話を通すだけだしな」

「じゃあ、また明日会いましょうか」

「ああ、私はそれでいいぞ」

というわけで、話は纏まった。

その後、お腹を減らしていた私が、このままここで食事を取ることにすれば、ルナさんもお酒を飲みつつ、それに付き合ってくれることになった。

料理が来るまでの間、私たちは談笑に興じる。

「そういえば、ルナさんって、何カップあるんですか？」

「……カップ？」

「えっと、胸のサイズの話です」

「ばっ……なっ、チハッ……」

かああ、と頬を瞬間沸騰させるルナさん。したたかになったと思っただが、こういう話題には弱いらしい。私は意地の悪い笑みを浮かべて、更に続ける。

「ルナさんってスタイルいいじゃないですか。どれくらいあるのかなあって、前から気になってたんです」

「……知らん！」

「つてことはこつちでは体系化されてないのかな？ こつちの世界では、胸のサイズは体系化されてて、AとかBとかで分別されるんですよ。ちなみに私は……」

「まだその話を続けるのか！？ ほ、ほら、チハル、料理も来たぞ！ さつさと食べ！」

ルナさんの言うとおり、軽く振り向けば料理が運ばれてきていた。頼んだのは、ルミーナのサラダと、グレナデという魚のムニエル、それに焼きたてパンだ。うんうん、どれも美味しそう。

ルナさんはサラダを頬張る私を、胸元を押さえながら恨みがましそうな目で見える。

「何ですか？」

フォークを手に持ちながら、首を傾げる私。

「……お前への認識を、私は改めねばならんのかもしれない」

「いや、そんな大袈裟な」

しかしルナさんは、どこか不機嫌そうのまま。

ちよつとからかい過ぎました。ごめんなさい。

「ご馳走様でしたーっ」と

ルナさんに胡乱な目を向けられながらも、食事を終えた私。そんな時、私はふっと思いついて、ルナさんに問いかける。

「そういえば、グレイさんが怪我してましたけど、どうされたんですか？」

「……何故チハルが知っている？」

怪訝な目で見られて、私はギルドで受けた依頼と、彼の様子について話した。

するとルナさんは、説明を続けていく内に、どんどんと鬼気迫る表情に変化していった。私は思わず引いてしまう。

「グレイめ……」

「あ、あの……どうしたんですか？」

「……ふふふ、私の言いつけを破るとは。いい度胸じゃないか」

がたんと音をさせて、椅子から立ち上がるルナさん。私はたじろいで口を開こうとするが、彼女に先を越されてしまう。

「チハル、すまない。急用が出来た。また明日、今日と同じくらいの時間にここで会おう。それでは」

そしてテーブルに銀貨を一枚置いた彼女は、早歩き……いや、小走りに近い速度で酒場から出て行ってしまふ。

残された私は、ぽかーんと背を見送ったのだった。

翌日、再び酒場で落ち合ったルナさんに聞いたところ、数日前、小競り合い程度の戦闘があったらしい。その際にグレイさんがルナさんを庇って利き腕を骨折してしまったとか。

最近、色々あったこともあり、あまり休みを取っていないかった彼に、それにかこつけて休みを取らせたわけだが、わざわざギルドに頼んでまで怪我を治してしまった拳句、書類整理までやっていたこ

とがばれてしまった、というわけだ。

雷を落としてやった、と笑うルナさんに、私は背筋に冷や汗を掻いてしまう。

次に雷を落とされるのは、私だ、と……。

嫌だぁあああ〜〜！

「……でき、た……」

ぎゅうつと手に握り締め、歓喜に震える私。

魔法を作り始めて、苦節一月半。亜空間の中で作業をしているので、実質感はその3倍以上！

ようやく、ようやく新しい魔法が出来た！

「あー、あー、あー！」

嬉しさのあまり、ぱたぱたとその辺りを跳ね回る。

きつと、これくらい大した苦労なんじゃないと思う。世の中にはもっともっと苦勞して、何かを作り上げる人がいるんだと思う。でも、私としては、結構頑張ったのだ。

まず最初に、ルナさんから借りた文献を読んで、視界を別の場所に飛ばす魔法を再現した。異世界の魔法という、似ているけれど少し違うものを再現するのは時間がかかったけれど、レベルもそれなりに上がりつつあったから、出来ないことはなかった。ちょっとだけ、フェンリルに手伝ってもらったけど。

そこからは、その再現した魔法を改変していく作業だ。視覚 視覚+聴覚 視覚+聴覚+嗅覚……というような順序で改変した。改変はいつもやっているの、そこまで苦じゃなかった。そしてようやく、身体感覚を全て、よそに飛ばす魔法が出来上がったのだ。

その後は発想を転換して、「物を操る」んじゃなくて「思考に反応して動く人形」を作れないかと奮闘した。人形作成の魔法を再び改造するその試みは、幸いなことに上手く行き、とうとう今、新し

い魔法が完成したのだ。

魔法の名前は「バーチャルリアリティ」。

そのままだけど、もうこれ以外の名前が浮かばなかった。

「でもっ、まだ完成じゃないよねっ！　まだまだ見直さなきゃいけない部分もあるしっ！」

浮き足立った声のまま、何とか自分を制す。

目標とする、世界を越えるほどの出力は、まだこの魔法にはない。今は現実世界や、亜空間で遊ぶのが限界だ。だから、まだ手を加えなきゃいけない部分は多い。

だけど、今はこの新しい魔法を作った自分を褒めてあげたい。と  
いつか自画自賛でべた褒めしておこう。よしよしよしよし。

477

「……………うーん、とりあえず明日、VR魔法ベータ版が出来たことを教えて、家に集まってもらおうかな。あ、ビックリさせたいから、集まるまでは魔法のことは秘密にしようっ！」

私は高鳴る胸を押さえながら、亜空間から現実へと戻る。

にやにやしたまま、ベッドの上でDSと、ミの国とか言うゲームソフトに付属していた魔法の本？を横に並べ、睨めっこしていたフエンリルを抱き上げる。

「な、何じゃ！？」

「フエンリル〜！　あははは、聞いて聞いて〜！」

「おいこら、チハル！？　ワシを振り回すなっ！　こらっ！　やめっ……………！」

「あつははははは〜！ あのね〜？」

両手で鷲掴んだまま、右足を軸にして、ぐるぐるとその場を回る。それは、フェンリルがあまりの気持ち悪さに、ぐったりとするまで続いた。

次の日、放課後。学校で約束した私たちは、私の家に集まっていた。

「ごほん、今日は重大発表があります！」

「とうとう魔法が出来たんでしょー？」

咳払いして胸を張り、口を開きかけた私に、奈津が笑いながら茶々を入れる。私がつくりと肩を落とし、恨みがましく彼女をじつとりとした視線で見た。

「お見通しですか……」

「そりゃあ、昨日まで「うーん」とか「はあ〜」とかうじうじしていた人が、今日になっていきなり「お早う今日も良い天気だね！

輝いて見えるよ！」なんて言い出したら、誰でもわかるっの。ねえ、あーちゃん、ふーちゃん？」

話を振られた亜紀は気まずげな笑いを浮かべて頷き、冬香は「そうね」なんてクールに一蹴してくれた。

私はさっきがつくりと落とした肩を、更に落として、だらんと力ーペットに倒れこむ。

「なら学校で言っておく……」  
「あはは、つい」  
語尾に「かつこわらい」が付きそうな言い方だったんですけど。  
私は彼女の反応にむくねながら、むくつと起き上がり、奈津には  
いっと指輪を渡す。

「ちい、何これ？」  
「新しい魔法が込められた指輪」  
「おお！」  
キラキラと目を輝かせる彼女に、私はおざなりに指示を飛ばす。

「じゃあ、奈津。それを付けて私のベッドに寝て？」  
「ほいほい」  
奈津が私のベッドに腰掛け、足元の方で畳まれている掛け布団ま  
で引つ張ってこようとしていたので、私はていっとチョップを頭に  
落として止める。

「そんな熟睡する姿勢にならなくていいから！」  
私の言葉に、奈津は「えー」なんてぶーたれながら、結局はベッ  
ドの上で横たわるに留めた。

「じゃあ、後は「コネクションスタート」って言った後、聞こえる  
声に従って進めていってね」  
「……恥ずかしくないか、その始め方」



「う、うるさいなあ！ 早くはじめてよ！」

照れくささに、ぐいっと彼女の脇腹を揉む。奈津は「うひゃあ」と身体を捻らせた後、「コネクションスタート」と言って魔法を始動させた。そのまま眠りに落ち、ぴくりとも動かなくなった奈津。

……綺麗な顔してるだろ、それ、生きてるんだぜ？

「じゃあ、奈津が魔法を体験している間に、結局どんな魔法を作ったのか二人に教えておくれ」

「そうね。奈津が起きるまで、これからの方針を決めましょうか」というわけで、三人で色々話し合う。魔法についてとか、魔法の改良についてとか、今度のテストは楽そうね、とか。だけどやっぱりそこで問題になるのは、会場についてだ。

「どうしようかしらね？」

「また公民館、借りる？」

「でもそうしたら、また少人数だよ？」

「うーん……別にさ、少人数でもいいと思うんだよね」

「どういうこと？」

私の言葉に、亜紀が不可思議そうな顔で問いかけてくる。

「ほら、今はもうアイテムだけでどうにかなるから、何度か小規模に試した後は、大々的に配ってベータテストしちゃおうかなって」

私の意見を言えば、亜紀と冬香の顔が、不安げに曇る。

「それって大丈夫……なのかな？ 魔法ってばれたりしない？」

「それは、大丈夫なようにするよ！」

自信を持った様子を貼り付けて言えば、二人は不安と期待がない交ぜになったような表情を浮かべる。そんな二人に、私は畳み掛けるように言った。

「それに、最終的な目標はたくさん広めることなんだし。今から練習練習！」

「練習つて、それで失敗したら大変なことになりかねないよ？」

「……でも、そうかもしれないわね。最終的な目標は多くの人と楽しむことなんだし、魔法バレを心配しても仕方がないのかもしれないわ」

冬香が溜息混じりで言ったちようどその時、寝ていたはずの奈津がガバリと起き上がる。あまりにいきなり過ぎて、私たち全員がびっくりと身体を揺らしてしまった。

奈津は少しの間ぼうつとしていたみたいだが、自分の置かれた状況に気付いたのか、ハツとしてこちらを見る。

「おはよ、奈津。どうだった？」

「うん、楽しかったよ！ っていうか、ナレーションの音がちいで笑った。『では、貴方の分身を作成しましょう』とか、超ノリノリですねえ！ 声優志望ですかー？」

「う、うるさいっ！」

からかうように自分の所業を次々と口に出されて、私は赤面する。だってしょうがないじゃないか！ 声優なんて簡単には雇えないし、ネット声優って手もあるだろうけど、すぐに見つかるとも限らないし……っ！

「つていつか奈津だつて昔、一緒に漫画の読み合いっことかしたじやん！ 録音までしてさあ！」

「なっ……そんなすっごい昔の黒歴史取り出してこないでよーっ！？」

「言い出したのはそっちでしょー！？」

「ちいなんか、自称『春の妖精』だつたくせに！」

「そ、それはっ、千春つて名前だったから、小さいころから言われてて、それでっ！」

「ま、まあまあ、千春ちゃん、なっちゃん、それくらいにして？

ね？」

「……亜紀、ほっとけばいいのよ」

「で、でも……」

亜紀がおろおろと、冬香が呆れたように息を吐く傍らで、私と奈津は睨みあう。

「そういえば、奈津つてば『黒姫<sup>あ</sup>ま』つてハンネ使つてたよね！

絵板に投稿するときとか！ 『ちよつと失敗しちゃいました（汗）

』なんて書いて！ あんなの顎尖りすぎだつての！」

「ああああっ、うう、うるさいっこの二重人格！ 『あ、あのさ……

…私、昨日何か言つてなかった、大丈夫？ その、昨日は……あっ、なんでもないので、なんでもない』とか見えっ見えのこと言つてたじやん！」

「あっ、あれは、前日は風邪で熱が出たから変なこと言つてないか気になっただけ！ 別に二重人格とかじゃないからっ！」

「はーん、どうだかねー？ 『傷ついた妖精が、私の中にいるの……

……』とか言つてた気がするけどなー」

「ぎゃあああああ、やめてっ、やめてえええ！」

そのままお互いがお互いの黒歴史をあれやこれやと引っ張り出し

(伊達に小学校からずっと一緒じゃない)、お互いのライフがゼロになるまで、戦いは終わらなかつた。  
……だがしかし、ファーストブラックヒストリカルウォー第一次黒歴史戦争がもたらしたダメージはあまりにも大きく、私たちはしばらくの間、その爪痕に悶え狂うしかなかったのでありました、ちゃんちゃん。そして一番得をしたのは、私たちの黒歴史(弱み)を握った亜紀と冬香だと思つ。

### 閑話休題。

「……でもさ、こつちの道具だとやっぱり、自分で身体を動かすのと違って、少し難しいわー。亜空間で走ったりしたただけなのに、疲れたもん」

「うーん、それはしょうがないかも」

お互い冷静になった私たちは、改めて魔法について語り合う。

やっぱり身体そのものを動かすのとは、少し違う感覚になつてしまふ。「右手を動かす」というような、明確な意思を持たないと、ちゃんと思つたように動かないのだ。少し慣れてしまえば、まるで自分の身体を動かしているように、動かせるようになるけれど。

だが、それはしょうがないだろう。むしろリアルすぎるよりは、こつちの方がVRっぽくていいんじゃないかな。なんて。言い訳なんだけど。

「いいなあ、なつちゃん。千春ちゃん、私にもあとで試させてね」  
「勿論だよ！ というより、皆に配るから、動かす練習しといたほうがいいよ」

「うん、そうする！ ……あつ、そうだ！ 千春ちゃんの魔法も完成したし、ここでお披露目しようかなっ！」

「お披露目？」

私は彼女の言葉に首を傾げる。亜紀はにっこりと笑って、カバンから一冊のノートを取り出した。

「クォーターという世界には、四つの国があります。エルフなどの亜人が治め、春を司る国リーンディア。アマゾネスなどの人が治め、夏を司る国アグナ。妖精などの精霊が治め、秋を司る国ロムネスカ。そしてアンドロイド、つまりは超古代文明の遺産たちが治め、冬を司る国クランク。ユーザーの人たちには、このどれかの種族に属するキャラになってもらって、それぞれの国に所属してもらうんだ」

亜紀がとうとうと語るそれに、私たちは耳を傾ける。

彼女が語るのは、VRの舞台になる世界だった。

「その世界のどこかには、『四季の楔』という秘宝が眠っているとされていて、各国の王はこの遺産を探しているの。ユーザーの人たちは、国が運営するギルドとかでクエストと呼ばれる依頼をこなしていく。そうしていく中で『四季の楔』の秘密を知っていく、って感じなんだけど、どう？」

亜紀の話は、聞いているだけでワクワクした。有りがちなのかも知れない。だけど、それは私たち『四季』がこれから作り上げる世界なのだ。ワクワクしないわけが無かった。

「うん、すごく素敵だと思うー！」

「私もそう思うよー！」

私の隣で、奈津も言う。

冬香も楽しげな表情で笑っていたので、きっと彼女も同じ考えなのだろう。

「わ、本当？ よかったあー！ 一応、これに合わせて、魔法案とかスキル案とか、冬香ちゃんと一緒に考えてきたんだ！」

冬香が何も言わなかったのは、既に設定を知っていたからか。

「これよ」

冬香が差し出したルーズリーフには、ぎっしりと魔法やスキルの案が書かれています。

ここまで考えるのはかなり大変だったろうに、楽しかったわよ、なんて言って静かに笑う彼女たちに、頭が上がらない。

このゲームの名前は、「クォーターズ・オンライン」。直訳すると四半期とか、四分の一とかになっちゃうけど、そうじゃない。

これは私たち四人がそれぞれの手で作り上げる、私たちの世界なんだ。

『舞台は、クォーターと呼ばれる西洋風の文明を築く世界。

魔法が存在し、精霊などの不可思議な命が生きる世界』

少女の声で紡がれる言葉。

そしてその言葉と共に写るのは、豊かな自然と、ゆらゆらと幻想的に揺れる光。

『その世界には、四つの国がある。

巫人が治め、春を司る国「リインディア」』

緑の髪を持つエルフが、こちらに背を向け、さらりと髪をなびかせる。

『ヒトが治め、夏を司る国「アグナ」』

赤い髪を持つアマゾネスが、荒野を背に不敵に笑う。

『精霊が治め、秋を司る国「ロムネスカ」』

茶の髪を持つ妖精が、沢山の花に囲まれて微笑む。

『古代文明の遺産が治め、冬を司る国「クランク」』

青の髪を持つアンドロイドが、機械的な模様の書かれた間で、無表情で佇む。

『そんな四つの国の王が求めるのは、「四季の楔」という秘宝だっ

た。

四季の楔は、永遠の繁栄を約束すると言われている。

人々はそれを求め、深き森や険しき山を踏破せんと、自らの武を鍛え、知を磨いた』

金髪の少年が、黒髪の男性の指示の下、剣を振る。

粒のような汗が散り、真剣な表情は、更に凛々しく輝いて見えた。

『そんな世界で、あなた プレーヤー は、何を為しますか？』

映る街並み。活気の良い市場。

そんな光景がフェードアウトされたかと思うと、画面を覗き込むように、銀髪の狐のような獣耳を持つ、幼い少女が映る。

「ワシは、待っておるぞ。四季の楔の元で、の……」

それは、まるで鈴の音のように、耳障りの良い声だった。

『世界初のVRMMORPG 〈クォーターズ・オンライン〉』  
そして画面にどん、と映し出される「20XX年、後悔予定」の文字。

……ここまで動画を見たものは、例外なく最後の誤字に脱力した。  
しばしの間、わざと!？ それとも天然!？ という議論がなされたのかなされなかったとか。



四季編 18+ (後書き)

奈津いわく、『後悔』するくらい沢山人がくるといいなあ、という  
意味らしい。

でもたぶん言い訳。

あと、ナレーションの声は奈津。

とある掲示板の、とある板に立てられた、「お前らこれ応募しよ  
うぜwwww」スレッドにて。

1 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします : 2  
0 1 X / X X / 0 5 (金) 2 0 : : 1 6 : : 3 4 ID : haru  
love +

お前ら、これ応募しようぜwwww

http://seasonsxxxxx.xxx/q  
uarteronlineboshu.html

5 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします : 2  
0 1 X / X X / 0 5 (金) 2 0 : : 1 5 : : 3 2 ID : rcks  
heock  
2 get

7 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします : 2  
0 1 X / X X / 0 5 (金) 2 0 : : 1 6 : : 0 1 ID : Xer9  
slk+w  
<<5

もうちよつと頑張れよww

8 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします : 2  
0 1 X / X X / 0 5 (金) 2 0 : : 1 6 : : 3 4 ID : NWSO

k u m i n

引用〜ここから〜

こんにちは、四季です。

計三回行われましたVRテストへのご協力、ありがとうございます。  
た。

皆さんの意見は、大変参考になりました。

これからのゲーム作りに役立てさせていただきます。

さて本日は、恐らく世界初？のVRMMORPGである、「クォー  
ターズ・オンライン」テストのご案内をいたします。

イベントなどの実装はまだですが、異世界を歩き回り、魔法を自由  
自在に使うことが出来ます。

まだゲームとは言えない段階ですが、これもいち早く皆様に「フア  
ンタジー」をお届けしたいからです。

こちらのページにある募集要項をお読みいただいた上で、了承頂け  
た方だけをご応募ください。

引用〜ここまで〜

……VRMMO？

11：以下、ななしにかわりまして・民がお送りします：

201X/XX/05(金) 20:19:56 ID: Vrt

Okapgr

……何これ？VR？

意味判らん

13 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 20 : 21 : 32 ID : aRi  
eNdaro  
釣りか？

16 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 20 : 26 : 01 ID : Hok  
kaido5  
<<13

いや、ガチっばい  
あんまりここで話に出したくないが、ミコミコでは結構有名な人の  
サイト  
ようつば転載の方を載せとく

【CG】実写そっくりのCGが出来たよー【四季】のURL  
【CG】実写みたいな街並みのCGが出来たよー【四季】のURL

【CG】テストの模様をお伝えするよー【四季】のURL  
【CG】ゲーム紹介動画だよー【四季】のURL  
【CG】テストの模様をお伝えするよー2【四季】のURL  
【CG】ミクさんが実際にいたらこうなる。【春】のURL

最後のはメンバーの個人動画だが、おススメ。

19 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 20 : 31 : 23 ID : Vrt  
Okapgr

<<16

実写そつくりとかwwwwww過剰広告乙www

・・・あれ？

20 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :

201X / XX / 05 (金) 20 : 31 : 44 ID : mik

kumiku

<<16

胸熱

21 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :

201X / XX / 05 (金) 20 : 32 : 08 ID : aRi

eNdaro

<<16

ええええええええ

何ぞこれwww

22 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :

201X / XX / 05 (金) 20 : 32 : 41 ID : AC9

jenmcj

CGつてレベルじゃねーぞ！

23 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :

201X / XX / 05 (金) 20 : 34 : 02 ID : Lpc

9xi2xk

<<16

<<16  
<<16

24 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :

201X / XX / 05 (金) 20 : 34 : 32 ID : Xap

49xkle

<<16

はあ？

これマジなのか？

27 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :

201X / XX / 05 (金) 20 : 37 : 59 ID : fUy

uMeda

<<24

ミコミコでも、だいぶ議論された

でも今では事実つてのが通説

つか二回目のVRテスト行ったが、マジだった

28 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :

201X / XX / 05 (金) 20 : 38 : 21 ID : WAR

05waro

<<27

ミコ厨乙

30 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :

201X / XX / 05 (金) 20 : 38 : 59 ID : aoc

DD1wod  
<<27  
ミコ厨乙

31 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 20 : 39 : 00 ID : aRi  
eNdaro  
<<27  
ミコ厨乙

35 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 20 : 43 : 27 ID : fUy  
uMeda  
<<28 <<30 <<31

神降臨とか言われると思ったらこれだよ！

37 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 20 : 45 : 33 ID : aOc  
DD1wod  
<<35  
ブックスクスクス

39 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 20 : 47 : 21 ID : W1c  
o0+13c  
せんせー、<<35くんが恥ずかしいこと言ってまーす！

40 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 20 : 48 : 02 ID : a3z  
+ 9 e I w x  
< < 3 5

ねえねえ、今どんな気持ち？どんな気持ち？のA A

46 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 20 : 52 : 59 ID : + M i  
k o c h u U  
これマジなんか  
マジなら俺は今、日本の夜明けに立ち会っている・・・

50 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 20 : 57 : 41 ID : a R i  
e N d a r o  
とりあえずばちって応募してきた

58 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 21 : 02 : 11 ID : A s o  
i o 9 + s a

おいおい、情強のおれたちがこんなもんに応募するのか!?

64 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 21 : 08 : 51 ID : V r t



o k a P g r

だが正直、本当にVRなら興味ある

7 2 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :

2 0 1 X / X X / 0 5 (金) 2 1 : 1 3 : 2 9 I D : r o r

i S i n s i

ぶっちゃけこのCGで抜ける

無機質機会っ娘ハアハア……

7 8 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :

2 0 1 X / X X / 0 5 (金) 2 1 : 1 5 : 3 2 I D : 8 e R

u f + M o e

< < 7 2

エルフの人、リアルも同じ顔らしいぜ

9 1 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :

2 0 1 X / X X / 0 5 (金) 2 1 : 1 8 : 1 3 I D : r o r

i S i n s i

< < 7 8

まじじじっで!!?!?!?!

1 0 0 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :

2 0 1 X / X X / 0 5 (金) 2 1 : 2 1 : 2 1 I D : z o

r o m E + 0 0

< < 9 1

落ち着けwww

1 1 3 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
2 0 1 X / X X / 0 5 (金) 2 1 : 2 9 : 3 8 I D : V r  
t o k a P g r  
ついかVRとか理論的にどうなの?  
おしえてえろいひと

1 2 6 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
2 0 1 X / X X / 0 5 (金) 2 1 : 3 3 : 5 8 I D : z d  
A W e c o 4 C  
< < 1 1 3

既存技術じゃ無理

1 5 1 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
2 0 1 X / X X / 0 5 (金) 2 1 : 4 5 : 2 3 I D : 1 E  
o x k j e s o  
< < 1 1 3

S A N Yとかの企業レベルでも無理だと思われる  
しかもこいつら同人サークルレベルなんだろう?  
どう考えてもありえん

1 7 1 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
2 0 1 X / X X / 0 5 (金) 2 1 : 5 1 : 2 7 I D : f U  
y u M o e D a  
< < 1 5 1

有り得てるから困る

188 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 21:55:37 ID: Xa  
suiauw  
<<171

三口厨乙

200 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 21:57:35 ID: kx  
iKw3iZd  
<<171

三口厨乙

231 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 22:04:18 ID: aR  
ieNdaro  
<<171

三口厨乙

250 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 22:09:21 ID: fU  
yuMeDa  
もう二度とこねえよ!、(、)ノ ウワァァン!!

280 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 22:17:37 ID: IO

uJCeIck

普通こついうスレってさ、なんぞこれwwwってなるじゃん  
SUGEEEEとかなんないじゃん  
がつかrいいぞもつとやれ

291 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 22 : 22 : 22 ID : zo  
rome+oo

はび すた神社のお見合いとかだと思って開いた奴拳手

321 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 22 : 26 : 51 ID : Lk  
em5i+dz  
<<291  
ノ

330 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 22 : 29 : 51 ID : Pz  
XCoiAE7  
<<291  
こじにもいるぜ

362 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 22 : 34 : 28 ID : Ex  
09asduf  
<<291

俺はありえない募集の求人とかかと思った

371 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 22 : 41 : 16 ID : aR  
ieNdaro  
<<362

地雷撤去の資格を持つてる人、とかのやつかww

391 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 22 : 45 : 20 ID : IX  
EkCasdf  
<<362

むしろそっちの方が良かった

何か、純粹にすごいとあんまり笑えん

423 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 22 : 53 : 59 ID : 8u  
X+o2K1M  
ニコニコ発祥のもので、ここまで(いい意味で)盛り上がるこつ  
てこれから先ないんだらうな

451 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 22 : 58 : 41 ID : MI  
Kochu+9  
<<423

それでも四季なら、四季ならなんとかしてくれる……!!

512 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 23 : 04 : 22 ID : Xa  
d9LpcnQ  
<<451

ノリがきもい

巣に帰れ

534 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 23 : 11 : 48 ID : CQ  
ox1kc6B

ブログ見ると、どうも学生っぽいな

その歳でこんなことできるって、人生楽しいんだろうなー

561 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 23 : 15 : 51 ID : Vr  
tokaPgr  
とりあえず様子見

591 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 23 : 21 : 09 ID : vV  
pcoakdc  
つーかスレの勢いすごいな

620 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :

201X / XX / 05 (金) 23 : 28 : 37 ID : HK  
gx3plsd  
<<591

なんだかんだで巫女に興味のある俺ら

634 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 23 : 34 : 11 ID : KW  
woilpx  
<<620

普段、情強とかいってんものになwww  
こんなあからさまに怪しいものに引っ掛かるとかwww

651 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 23 : 41 : 26 ID : Vr  
tokapgr

つか、金取るんじゃない、これ

678 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 23 : 48 : 13 ID : 2X  
oOiusxe  
<<651

おい

おい

683 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 23 : 51 : 21 ID : 2 +  
3kxz09T  
<<651  
マWジWだWWW  
今まで応募したやつらザマアWWW  
せいぜい騙されるWWWpgrm9 (^ ^ )

690 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 23 : 54 : 18 ID : 9E  
xkchaos  
<<651

あ、本当だ  
でも1000円だろ？送料と道具代じゃねえ？  
なんか、家のパソコンで出来るらしいし

701 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 23 : 59 : 16 ID : 2 +  
3kxz09T  
<<690

信者乙

729 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 06 (金) 00 : 09 : 25 ID : Xa  
d9LpcnQ  
<<690

火消し乙



741 : 以下、ななしにかわりまして・民がお送りします  
201X / XX / 05 (金) 00 : 14 : 51 ID : IO  
uJCheck  
ぶつちやけ1000円なら騙されても痛くないしなーまあ警察には  
届けるが  
つか、ちゃんと募集要項にかいてるじゃん、最初から誰も無料って  
言ってるねえ  
ちよっと応募してくるわ

769 : 以下、ななしにかわりまして・民がお送りします  
201X / XX / 05 (金) 00 : 18 : 55 ID : aR  
ieNdaro  
俺は応募しないから、届いたら誰かスレ立ててくれ

823 : 以下、ななしにかわりまして・民がお送りします  
201X / XX / 05 (金) 00 : 34 : 29 ID : WI  
c00+13c  
実際どうなんだろうな

932 : 以下、ななしにかわりまして・民がお送りします  
201X / XX / 05 (金) 00 : 58 : 03 ID : kx  
iKw3izd  
どうせ巫女( ) だろ  
厨房の釣りに決まってる

965 : 以下、ななしにかわりまして - 民がお送りします :  
201X / XX / 05 (金) 01:05:09 ID: Vr  
tokapgr

とりあえず応募してきた

1001 : 1001 : Over 1000 Thread  
このスレッドは1000を超えました。

もうかけないので、新しい職を探してください。。。

最近の『四季』に対するお問い合わせ第一位は、「テストにお金取るんですか!?!」だ。

これだけだと何を言っているかわからないと思うので、最初から説明しようと思う。

新しい魔法を完成させた私たちは、とうとうVRだけでなく、RPG作りにも手を出した。

そのためサイト上で、早めにテスターを募集することにしたが。

「……今の勢いだとさ、普通に募集すると、絶対私たちのキャパ越えるよね」

すでにその時、VRのテストを計三回行っていた私たちの感想は、それだった。

一回目の募集にきたメールが、六十ほどだった。

二回目の募集は、百をゆうに越え、百五十ほどだった。

三回目にはいたっては三百を越え、ここから十人ほどを選ぶのは、何というか、胸が痛くなったものだ。

そして今回。「アイテムを送って テストを行う」ということで、今まで場所の都合や、不安があつてVRテストに来れなかった人も応募してくる可能性があつた。

そのため、本当にファンタジーな世界を体験したい人を選別する、という意味を込めて、「いくらかかりますよ」ということにした。もちろんその“いくらか”の中には、配送代も含まれている。さすがに魔法で送るのは、怪しまれそうだし。配達記録とかが残るご時勢なのだ。どこからともなく現れた荷物！　なんて、疑ってくださいと言っているようなものだ。

だから、中学生でも払いやすく、同人ゲームに相応しいかな、と思った金額　千円という値段設定にしてみたわけだが。

「……ここまで言われることか？」

奈津に転送してもらったメールを前に、私は溜息を吐く。メールには、「見損ないました」だとか「四季は金の亡者だったんですね」だとか「詐欺じゃん」だとか「テストに協力してやったんだからタダでやらせる」だとか「今まで無料だったのに意味がわからない」だとかいう内容が、目の滑る文章で書かれていた。

ちゃんと理解して応募してくれる人だっている。むしろ、そちらの方が人数が多い。だけど、こういう内容のメールを貰うと、正直へこんでしまう。

まあ、こういう人たちは、いざゲームをやった時も問題を起こしそうだし、今の内に選別出来てよかったかな、と思うことにする。というより、そうやって思わないと、やってられない。

「はあー……」

パソコンの前でぐったりする私に、母が追い討ちのように話しかけてくる。

「そんなのでぐったりしてたら、これから大変よ、アンタ。客商売するつもりなんでしょう？」

母は、今私たちが『四季』として活動していることを知っているというか、色々ゴソゴソやっていたら、いつの間にかその一端がバレていた。

そのため、母には全てを洗いざらい伝えてある。あらず頑張りなさい、で終わったが。

「……んー、だよねえ」

これから先、もしも正式にサービスを立ち上げたら、お金はちゃんと取るつもりだった。月額になるか、年額になるかはわからないけれど、対価はほしい。というより、対価が無ければ、ゲーム市場が壊滅する恐れすらある。そこまで出来のいいものが出来るかはわからないが、VRというだけで一極集中する可能性は高いのだから。

また、もしもそこまで規模が大きくなった時は、VRのための会社を立ち上げるつもりだ。他のゲーム会社に委託するということも考えたけれど、偽VRが魔法である以上、どう考えても無理だ。そもそも、そんな人脈ないしね。

今時、一円からでも会社は出来るらしいし、経理担当の冬香が何とかしてくれると思う。……いや、最終的にはどっかの経理事務所に頼むと思うが。そしたら、所得税やら、法人税うんぬんも事務所にやってもらえるし。

法律関係も怪しいから、そっちのチェックもどこかに頼みたい。特定商取引うんぬんは、同人規模だし、今はまだ記載無くても大丈夫だと思う。PL法はパソコン周辺機器には適応されないし……V

Rの道具はどうか知らない。あと抵触するものってあるんだろうか……私の調べた限りではこれくらいだったけど。

と、そんなことをグダグダ考えながら、私はパソコンの電源を落とす。

「ねー、お母さん」

「なによ？」

「お母さんも、ゲームやってみない？」

「私はいいわよ。あっ、でも、海外旅行はしたいわあ！」

私は思わずうっこけた。

パソコンを置いてあったデスクに、ごっこん、と顎を打ち付ける。

「……ゲームから、どーして海外旅行に話が飛ぶの」

「だって、アンタの魔法でどこにでも行けるんでしょ？　ハワイ連れて行きなさいよ、ハワイ」

我が母ながら、野望が小さいと思った。いや、ハワイって大きいのか？　最近、自分の感覚がずれているようで、良く判らない。

「その内考えておくよ」

「はいはい、宜しくね」

母ののんきな言葉を背に、私はリビングを後にするのだった。

それにしても、ハワイか。……南国っぽい異世界にバカンスもいいなあ。軌道に乗ったら、またみんなで行こうかな、界外旅行。

一つの世界を作る。

それだけ聞くと、まるで神様みたいだと思う。

実情は、物凄く泥臭い作業なんだけどね。

「モノ、ジーナ、トリイはそっちお願い！ テトラとペンは私の方を手伝って！」

エルフの姿をした五人（内訳・女三人、男二人）が、私の指示に従ってテキパキと動く。私は、魔法でログハウス風の家を作った後、最後に呼んだ二人に内装を任せた。

「さて、次はつと……」

小さく声に出してこれからの予定を確認しながら、今頃同じ世界にいるであろう、他のみんなのことを考える。

……みんな、頑張ってるのかなあ？

ゲームを作るにあたり、まず私たちは「RPGに必要なものは何か」と考えた。

きっと答えはたくさんあるだろう。

世界。街。NPC。モンスター。スキル。魔法。ストーリー、イベント。

はつきり言って、どれも作り上げるのは大変だ。

まず、世界。これについては、人や魔物の生息しておらず、しかし自然に満ちた世界を探した。そして、ちょうど都合の良い世界を見つけた私は、その世界に他の生命体が居ないかを調べた。

すると精霊らしきもの（どちらかと言うと靈魂っぽい？）が居たので、ゲーム作りに協力してもらうことになった。

ぼんやりとした意識しか持っていない彼らは、私が人形の身体を提供するといったところ、一も二も無く手伝うと言ってくれた。元来遊び好きの彼らは、人形と言えど肉体を持つことがとにかく嬉しいらしい。

そうして生まれたのが二十人。

エルフ型、ヒト型、妖精型、アンドロ型が五人ずつ。

エルフ型にはそれぞれ、モノ、ジーナ、トリイ、テトラ、ペンタという名前を付けた。奈津たちもそれぞれ名前をつけて、こき使っていることだろう。……いや、同意の上でだよ？

これからも、どんどんと人数は増やしていくつもりだ。それがこの世界における住民代わり、というわけ。

次にモンスター。これについては、世界の「設定」を書き換えて、魔物を作った。作ったといっても、情報体みたいな感じだ。思考も何もない、ただ存在するためだけに存在するもの。

多少の罪悪感はあるものの、今まで創造魔法で作っていたものと何ら変わりはない。ただ、動くという一点のみが違う。そして倒されると、粒子となって消えるようになっていく。

街は、精霊の協力の下、それぞれに割り当てられた国を作ってい



る真つ最中だ。三人には創造魔法をめいっぱい込めた道具を渡し、自由に、自分の好きなように作っている。まるで気分はリアルシムシティ。みんながどんな国を作るのか、今から楽しみだ。

そしてストーリー、イベント。

これについてはまだ保留だ。まだ完全に設定が出来上がっていないし、まずは世界を作り上げることを優先しているからだ。それに、イベントといっても、「を持ってきたら××に案内してね」なんて話を精霊たちに通すだけだろうし。

そして最後に、スキルと魔法。これは私の仕事。1から10から100まで全部人形や魔法に組み込むのだ。……正直これが一番しんどい。一個や二個組み込むならいいけれど、その数は膨大で、正直投げ出したい。そして今投げ出してこっち来ている最中だったり。というか、半分くらい出来たら投げ出そうと思うんだ。残りの半分は、後々実装ってことで。

「ハルさんハルさん、こっち出来ましたよ〜」

精霊の一人が、ぼうつとしていた私を呼ぶ。それに呼応するように、他の精霊達からも、終了の声が聞こえてきた。

「はいはい。じゃあ今日はみんなは終わりにしよっか？」

「おっ、終わりか！？ ……なあ、ハル、持ってきたか！？ 持ってきたのか！？」

「勿論持ってきたよ〜。今日はケーキにしてみました〜」

バッグからひよい、と白くて四角い箱を取り出す。それを見た五

人の目が、キラキラと輝き出したのを見て、私は思わず笑ってしまった。

彼らは、甘味が好きだった。いや、大好きになった、というベ  
きか。

食事を取る必要性はなく、また、身体のない彼らでは食べるこ  
が出来なかったため、今までも何も食べたことが無かった。たまた  
ま私が「疲れが取れるよ」と飴を渡したことから、彼らの甘味中毒  
は始まった。

チヨコやらお団子やらクッキーやらと、色々持って来続けて、今  
日はケーキを持ってきたのだった。

「はうっ、これすごい美味しい〜！ ふわふわの土台としっとり  
な白いの〜！ それにこの赤いのも甘いよう〜！」

精霊の内の一人が、浮かれた声で言う。

なんとというか、彼女たちを見ているだけで、こちらの頬が緩む。

五感を飛ばすという魔法もちゃんと上手く行ってるみたいだし（  
元々精霊に五感があったのかは知らないけど）、人形も上手く動い  
てる。精霊たちの存在は、働き手としても、テスターとしてもあり  
がたかった。

でも、それ以上に。

「ハル、今度は何持ってきてくれるんだ!？」

「私はこないだの、オダンゴ?がいろいろすな〜」

口の横にクリームをつけながら、期待に満ちた瞳で見つめてくる彼らと、こつやちて話したり、友達になれたのが、凄く嬉しかった。

「じゃあその分働いてもらおうよー！」

あ、友達になったのと、こき使うのは、また別問題だから。

今日も今日とて、亜空間の白い空の下。

クオクンの素振りど、死んだように横たわって眠る“私”を視界の端に入れながら、いつものように魔法の改造作業に勤しんでいた。

「んーむ……本当、私のやることが多いよなあ。いや、言い出したのは私だし、文句言うなって感じだけど……もう疲れたよ、ぱとらっしゅ……」

ぶつぶつとそんなことを呟きながら、指での操作と共に空中に現れたスクリーンを見上げる。透過された青を背景にして浮かぶ情報に、私は小さく満足の息を吐きながら、文字を指でなぞっていく。

「ええと……LV、HP、MP、攻撃、防御、魔攻、魔防、俊敏、運、職業、種族、所持金額……」

ステータスに表示されている項目を一つ一つ読み上げて確認しながら、指でスクロールしていく。

今現在表示されている私のキャラクターは、LVが11、魔攻が9999（カンスト）、攻撃が20以下、他が30前後と言ったところだ。この魔攻は装備品に魔法ノ書があるからで、それを外してしまえば50近くまで落ちる。それでも高いのは、エルフの魔攻が高い設定だからだ。ついでに初期状態で覚えている魔法も多い。

他の例を上げると、アマゾネスは攻撃が高く、素早さはそれに次いで高いが、特攻が低い。そして初期スキルは多く覚えているのだが、魔法は覚えていない。

妖精は素早さと魔攻がそれなりに高く、防御がかなり低い。そして、最初からレポートや飛行などの、移動系の魔法が使える。

アンドロイドは防御・特防が高く、他のパラメータも平均的に伸びる。しかし魔法を使うことが出来ず、その代わりに、レーザービームや火炎放射などの魔法っぽい科学技術？が使える。種類は少ないが。

と、というような感じに、種族の差別化を計っている。

ちなみに種族の提案は亜紀、大体の容姿の設定は奈津、バランス調整は冬香、そして実装は私。人形に制約つけるだけだけど。

他にもダークエルフとか、鳥人族とか、普通の人とか、精霊とか、ドワーフとか、獣人族とか、サイボーグとか、シノビとか、種族は結構沢山あったりする。

「クオクーン。そつちから文字見えない？ 大丈夫？」

素振りをしていたクオクーンに問いかければ、彼は手を止めてこちらを振り向く。それから青いウィンドウをじっと見つめた。

「大丈夫ですよ」

「本当？ 良かったー！ じゃあ次は『ステータス開示』っと。クオくん、今度は文字見えるようになった？」

「あ、はい、見えるようになりました」

「そっか、良かった。上手く行ってるんだね」

ステータスを他人に見せるかどうかを選択出来るように、なんて細かい機能もちゃんと動いているようだし、ゲーム周りのシステム

は、大体これで完成だ。

VR魔法の発動は“インターネットに繋がっているパソコンに接続した時のみ可能”とか、色々条件もつけてあるし。この条件付けは、前にルナさんに頼まれて試行錯誤したのが役に立った。

ということでごっちに關してやることは……魔法と、スキル組み込みか。魔法は八割がた終わってるけどスキルは……うん、これはもう明日にしよう。ワタシ、ツカレタヨ！

ちなみに、世界作りに関しては順調だ。私の割り当てられた国は大体出来てるし、アイテム関連は亜紀と冬香にまとめてもらって、世界の理いじりつつデータを流すだけだし。

ステータス画面から「ゲーム終了」を選んで、私は“私”に戻る。

「ふわあー……」

起き上がるなり、大きな欠伸が漏れた。精神的には覚醒状態だが、肉体的には思い切り睡眠状態だったからだ。

でもこれ、ちょっと身体に悪そうだね。ゲームやっている間は全く身体を動かさないわけだし。空腹とか、尿意とか、身体になんらかの異常が起きたらアラートを出して、強制終了するような作りにはなっているけど、一度にやれる時間は2〜3時間くらいに決めたほうがいいかもしれない。1時間やったら15分の休憩を取ってください！ みたいな感じで。

「……さて、と」

起き上がった私は、その場から人形が無くなったことを確認する。無くなった人形は、異世界クォーターにある保管庫に小さくなって並べられているはずだ。

……保管庫は、すぐく、恐ろしい部屋と化しています。

考えてもみてほしい。小さくなったとは言え、人にしか見えない人形がずらつと並んでいるところを。恐いつての！ 作ったの自分だけどね！

と、内心で自己ツッコミを一通り行った私は、気を取り直してクオくんを声を掛ける。

「私はもう戻るけど、クオくんどうする？」

「あ、なら僕も戻ります」

額に垂れていた汗をぐい、と拭い、クオくんが言う。私はそっかと答えてから、不意にクオくんの剣を見た。

「あれ、その剣どうしたの？」

今の今まで気付かなかったが、クオくんが持っていた剣は、以前あちらの世界で買い与えたものではないようだった。剣の違いなんで私にはわからないが、前よりも刃渡りが長く、少し幅広い、よくな気がする。前に買い与えたものをずっと使っていた気がするのだが、いきなりどうしたのだろうか、と私は首を傾げた。

「あ、その……この間、依頼の途中で折れちゃって」

「あらま……」

クオくんの言葉に、私は目を丸くする。

修行がてら、クオくんがギルドの依頼を受けていることは知っていたけれど、剣がぼつきり折れるって恐ろしい気がするよ？ 剣なんか消耗品だし、そんなこともあるんだろうけれど、魔法使いの私

にとつてはかなりの大事件に聞こえてしまつ。

「怪我とかしなかつた？」

「あ、それは大丈夫です。……でも、折角、チハルおねえちゃんに買ってもらつた剣だつたんですけど……」

浮かない顔をするクオくんは、私は彼の頭を撫でる。

「気にしない気にしない。……といつても、やっぱり気になるか。じやあさ、折れた剣の代わりに、クオくんのために魔道具作るね。剣を折るくらいに頑張つてるんだから、私からのプレゼントってことで」

今でも、VR用に作った試作品は渡してある。

でも、剣が折られた、なんて話を聞いてしまった今では、それでも不足な気がしてしまった。……過保護なのはわかつてるんだけどね。

「……大変じゃありませんか？」

「ん、大丈夫。気晴らしにもなるし、日本一の魔法使いである千春おねーちゃんが、腕によりをかけて作るうじゃないっ！……まあ、日本一つたつて、魔法使いなんか私くらいだろうけど」

確かめたわけじゃないが、たぶん私以外に魔法使いなど居ないのだろうと思う。いや、もしかしたら私以外にも居るのかもしれないけど、それでも魔法ノ書を所持する私はトップ近くに立っているはずだ。

……そんな私が魔法で何するかってゲーム作りなんだから、世の中色々間違つてるよね。私が言うことじゃないけど。



「じゃあ、今度こそ戻ろうっか」

嬉しそうにはにかむクオクんの頭にぽんぽん、と手を置いてから、その声をかけて、亜空間の入り口に足を向ける。クオくんも後ろからついてくるのを足音で感じながら、私は亜空間の外に出た。

部屋に戻って時計を確認すれば、11時2分だった。亜空間に入ったのは10時55分で、亜空間の中の時間の流れは外界の20分の1だから……7分×20で140分＝2時間20分ほど、亜空間に居たらしい。

……最近、体内時計が狂いまくっている自覚がある。亜空間であれこれやってるんだからしょうがないが。流石に20分の1は、やりすぎなのかもしれない。5分の1くらいに設定しなおそうかな？

「じゃあ今日はもう寝よ？」

「そうですね。おやすみなさい」

「ん、おやすみー」

部屋を後にするクオくんを見送った私は、その辺にあったメモ帳に「5分の1に変更！」とだけ書いてから、さっさと着替えて寝ることにした。

次の日、私は思い切り寝坊した。やっぱり体内リズムが狂っているらしい。ただの言い訳だけど。

一分一秒が惜しかった私は、亜空間に制服を持ち込んで着替える。ついでにくつと伸びて眠気を完全に覚まして、魔法で水を出して顔を洗ってから外に戻った。

「やっぱ遅刻！ 遅刻！」

「魔法で行けばいいじゃない？ テレポトみたいな魔法あるんじゃない？」

どたんばたんと煩い私に、呆れ口調の母が言う。

「それは駄目！ 実験されたくない！」

テーブルの上のお弁当をひつつかんで鞆に入れ、ついでに皿に乗っていた目玉焼きの両端を掴んでぐるんと丸めたあと、大口を開けて一口で頬張る。普通に朝食を食べていたクオくんが、目を丸くして私を見ていたのが見えた。行儀悪くてごめんね。私を見習っちゃ駄目だよ。

「ふいつへふいまふ！」

「チハルお姉ちゃん、行ってらっしゃい！」

「事故に合わないようになさいよー」

二人の見送りの言葉を背に、魔法を使う。と言っても、テレポトとかじゃなくて、足を速くする魔法だが。

軽く走っても、全速力ほどのスピードが出ているのがわかる。頬に当たる風が段違いで強く、冷たい。これなら余裕で間に合いそうだ。

「私は今、風になるっ！」

「ちいつてば、何をアホなことを……」

調子に乗って、年甲斐もなくアラレちゃん走りをしていたら、後ろから聞き覚えの有る声に突っ込まれた。ほんの少し速度を落とすとして後ろを見れば、私にぴったりとつくように走っていたのは奈津だった。家が近いので、たまに行きが一緒になるのだが、こんな日まで一緒になるとは。

「わ、奈津おはよー」

私の速度についてきているということは、彼女も魔法を使っているんだろう。ちらりと彼女の手首を見れば、奈津にあげたブレスレットが見えた。

「今日は遅いんだね？」

「うん、ちょっと寝坊してさー。ほら、世界作りがあまりにも楽しくて、寝たの夜中なのよー」

ゲームの舞台になる異世界へは、全員が自由に行けるようになってる。と言っても行けるのは精神だけであって、身体ごとではないが。

「おお、頑張ってるねー。どんな感じ？」

「んー、ようやく半分ってとこかな？ 精霊さんたちに指示だけしておいて、次の日行ったら結構作業が進んでるでしょ？ だから、本当にゲームみたいな感覚だよ、シムシティみたいな」

「あ、その気持ちわかる！」

「リアルシムシティ……需要ありそうじゃない？ 第二弾のVRゲームはこれで決まりですなー！」

「需要はありそうだけど、どんだけ世界を使い潰す気だっ！」  
突っ込みに、奈津がげらげらと笑う。  
端から見れば全速力で、しかし実情は小走りで、私たちは悠々と会話を交わしながら道を駆ける。

「あ、そだ。ねえねえ、奈津。ちょっと意見を聞きたいんだけどさー」  
「何？」

ふと思い出し、私は奈津に言う。彼女は不思議そうに首を傾げてこちらを見た。

全速力で走りながら、顔を見合わせあう私たち。端から見れば異様なんだろうなあ、なんて思いながら問いかけを続ける。

「ゲームにさ、制限みたいなもの付けたいんだよね」

「制限？ 何で？」

「ほら、VRって寝っぱなしでしょ？ 絶対、健康に悪い」

「あー」

私の言葉に、得心が言ったように唸る奈津。彼女はうーん、と手を顎に当てる。

端から見れば全速力。しかし、腕も振らずに足だけ動かす女子高生。絶対奇妙だろう。考えたくもなかったので端から見た自分たちの姿を頭の隅に追いやってから、奈津の言葉を待つ。

「でも、どんな制限？」

「んー……ゲームは1時間やったら15分の休憩を取りましょう！  
みたいな」

「……それってあんまり意味ない気がするなあ。15分ぽっちじゃ、

そのまま横になって過ごされそう。それに、1時間ずつしかゲーム出来ないって萎えると思う」

「確かにね……。……じゃあ時間を延ばして、2〜3時間やったら1時間はゲームが出来ません！とか」

「絶対、一時間おきに起きてやる馬鹿が出るよ、それ。世の廃人舐めちゃいけない」

「えー……。じゃあー……。一日に数時間までしか出来ません、みたいな？」

「それはそれで、文句が出そう……。金を払ってるのに数時間しか出来ないとか、有り得ない！金返せ！」みたいな」

「あーもうっ！クレーマー乙ッ！」

そう茶化したものの、奈津の言うそれらは酷く現実的だった。1000円で文句を言われるんだし、そんな制限なんかつけたら格好の的になりそう。

二人であれこれと話すものの、いい案が浮かばない。

結局、何の解決法も見出せないまま、私たちは息切れも汗も無く、学校に辿り着いてしまったのだった。どうしようかなー？

「千春ちゃんも、奈っちゃんも……馬鹿でしょ？」

その落ち着いた口振りが恐ろしい亜紀に、私と奈津は「すみませんっしたー！」な勢いで平身低頭。冬香はもはや呆れて言葉も出ないのか、私たちに意識すら向けてくれない。

それというのも、つい先程まで、同じクラスの陸上部の子に延々と勧誘されていたからだ。

どうやら、遅刻しそうだった朝に、話しながら爆走していたのを、思い切り見られていたらしい。余裕を見せながらあのスピード。本気で走ればどれだけ速いのか、期待されるというのも当然だろう。

「どうして二人は、今日に限ってトラブルを呼び込むのかなあ？」

今日は、私の家で四季のミーティングを行うはずだった。ゲーム作りを開始してから毎週一度は必ず、各々の進捗具合と問題点の相談などを行っているからだ。

が、放課後まで続いた勧誘のせいで帰宅時間が普段より一時間近くも遅れてしまった。何とか振り切れたから良かったけど。私と奈津は名誉帰宅部員なのだから、今更部活なんて所属するわけがないのに、しつこいっいたらありゃしない。

私たちは、しどろもどろで言い訳する。

「……いや、だって、遅刻しそうだったから、ね？」

「うん、そうそう……遅刻したらうちの担任恐いし、だからしょう

がないっていうかさー……………ごめんなさいッ！」

「ごめんなさい！」

言い訳は無言の圧力に負けました。

「……………うん、もう諦めたよ」

そして諦められた。

怒られるより、よほど嫌なのは何故だろう。

とりあえずそこで亜紀のお叱りは終わり、それから冬香も参加して普通に雑談しながら私の家に帰った。……………のだが、家に着くまで何となく肩身が狭かったです。

「ただいまー」

「帰ってきたのかの、チハル……………っと、おお、お主らも来たんじゃないな」

帰宅した時、玄関ではフェンリルが出迎えてくれた。ちょうどリビングから私の部屋に行くところだったらしい。

「こんにちはー！ フェンリル一週間ぶりー！」

「お邪魔します」

「上がらせて貰うわね」

「どぞどぞー、狭い我が家ですが」  
いつものように、二階にある私の部屋に案内。もう案内するまでもなく、みんなわかってるけど。

フェンリルは亜紀が抱きかかえ、一緒に部屋に連れて行く。奈津は、亜紀の腕の中のフェンリルに手を突っ込んで、ふわふわもふもふ、なんて言いつつ感触を楽しんでいるみたいだった。

私の部屋に着き、全員がそれぞれの位置に陣取ったところで、リーダーである冬香が早速ミーティングを開始する。フェンリルは一人、ゲームを始めていた。最近のマイブームはPSアーカイブらしい。WA面白いよね。

さてさて、まずはお互いに進捗報告。今日は珍しく四季の逆順での発言だった。

「私から報告するわね。……申し訳ないんだけど、誰か余裕のある人に、こっちの国を手伝って欲しいのよ。ラルトとノージアが喧嘩して、街を半壊させてしまっ……」

ラルトとノージアは、冬香が精霊たちにつけた名前だ。方角をもじってつけたらしい。

「……何やってるんだ精霊。」

「何でまた……」

「前から相性が悪かったのよ。何とか止めようと思ったのだけど……魔法が始めてから壊滅までは早かったわ……」

精霊は私たちに好意を持ってくれているとは言え、性格はそれぞれ。おっとりさんも居れば、喧嘩っ早い奴も居る。でも、私が手伝ってもらっている子達は、いい子ばかりなんだけどな。

疲れたように、重い溜息を吐く冬香。文句を言いたくとも、手伝ってもらおう立場なので、そこまできつく言えないのだろう。

「……次からはやらないと、泣きながら誓わせたから、もう無いと



は思っけれど」

前思撤回。どうやら泣くくらいには、きつく言ったらしい。

さすが、「彼女には誰も逆らえない」とホームページに書かれるだけはある。書いたのは私たちだが。

「じゃあ、一番進んでる誰かが手伝いに行けばいいかな？」

「そうね、そうして貰えると助かるわ。……あ、そうそう。四季の法人化は何とかなりそうよ。会社の所在地については、貸し住所を使おうと思っっているんだけど……お金がかかるけどいいわよね？」

「ん、いいんじゃない？ さすがに、私たちの住所は使えないし」

会社所在地を私たちの実家にして、誰かに押しかけられても困る。あとグーグルマップとかで見られても困る。

というか貸し住所なんてものが、世の中にはあるのか。初めて知ったよ。

「じゃあ、テストのあとになると思っけれど、書類だけは用意しておくわね」

冬香はそう締める。よろしくー、と気の抜けた声で応援しておいた。

会社かあ……このまま順調に行けば、テストが終わるころには、私は副社長なのか。ほんつと実感ないなー。

あ、社長は冬香ね。リーダーだし。

さて、彼女の報告が一段落したところで、次は亜紀だ。

「んつと、国は七割くらいかな。メインクエストは最後まで書けたよ。あとは、サブクエストと、道具の案をもつと出して、纏めるだ

け！」

「おお、結構進んでるね？」

「うんっ、すっごい楽しいから！」

亜紀は全開の笑顔で言う。

彼女は、ゲーム作りを始めてから、とても楽しそうだ。以前からずっと、ファンタジーとか魔法に憧れてたから、余計に気合が入っているに違いない。読む小説も、ハリーペッターとか、ナルミアとか、ファンタジーが多かったし。

「それじゃあ、こっちは亜紀に手伝ってもらおうことになりそうね？」

「たぶんそうなるのかな？ あ、でも千春ちゃんと奈っちゃんの進み具合によるけど」

「そうね。じゃあ、次は奈津お願い」

「あ、私か。えーっと、国は半分ちよつとつてところかな。それと、テスト募集の方は締め切って、住所録の作成までは終えたよー」

奈津はそこで言葉を区切り、意味深な表情で黙る。

私たちは、彼女の次の言葉をじっと待った。しかし、雰囲気の間いか何故か緊張してしまう。気分はミリオネアだ。

「……それでね、テストに申し込んでくれたのは全部で682名でした。あ、勿論悪戯とか、無効なのは除いてね」

「えっ、すっごっ！」

奈津の言葉に、思わず大きな声を上げてしまう。

「ってか700人近いんだ！？ VRのテストのときは、300ちよつとだったから、一気に2倍以上に跳ね上がったよ。」

「いや、ネットゲってサーバーに1万人とか居るのが普通なんだろうけど、でもミコミコで宣伝してるだけなのに、それは凄いなと思う。」

テストの甲斐あったんだなあ……しみじみ。

「つまり、これだけで70万近く行くわけだよ。まあ、応募してくれた全員が振り込んでくれる前提だし、ここから必要経費も引かれるんだけどさ」

「でも、それでも凄いわね……」

「うん、驚いた……結構、期待されてるんだね」

冬香と亜紀の二人も、そんな風に驚きを表に出す。

「頑張らなきゃって気になるね」

「そうね。今更、引き返せないわ」

その会話に、私も頷く。

引き返すつもりは毛頭ないが、緊張感が増してきた。

「ええと……少し逸れてしまったのだけれど、次は千春よ」

「あ、うん。私は、国の方は殆ど出来て、あとは精霊たちが細々としたところをやってくれてる感じ。VRのシステムに関してはあとは微調整のみ……そうそう、ちよっと相談したいことがあるのでそこは宜しく。RPGの方のシステムは……ようやく4割ってところかな。製造職のスキルがちよっと手間取ってる感じ」

私の報告を聞きながら聞いてくれる三人。

聞き終わった冬香は、全員の話をもとめる。

「残っている仕事量は、私を除けば全員同じくらいかしらね。でも、千春は少し詰まってるみたいだから、奈津と亜紀に手伝ってもらうことにするわ」

「わかったー」

「了解だよ！」

「二人とも、私の代わりによろしくー」

手をひらひらと振って、二人を応援。とは言っても、私も頑張らなきゃいけないんだけど。

でも、こうして皆の報告を聞くと、別に私の仕事量だけが多いわけでもない気がするな。でも全体量を考えれば、やっぱり私が一番多いのか。

「さて、現状を纏めたところで。千春、相談って何かしら？」

「あ、そうだったそうだった。あのね、VRに制限を掛けたいんだ」「制限？」

朝、奈津にした説明をもう一度繰り返す。すると二人も納得したような表情で、それについて考えてくれる。

まず案を出してくれたのは亜紀だ。

「一時間いくらで買ってもらおうとか、どうかな？ 一ヶ月何百時間まで、みたいな購入制限をかけてさ」

「クレーム出すなら金を出せ！ ってか。サーバーの負荷うんぬんって誤魔化せば、いけるかな？」

亜紀の案に対して、私が応える。

すると奈津が横から意見を挟んだ。

「うーん、でも、あんまりお金で有利になったり、不利になったりは嫌だな、個人的な意見だけどさ。ネットゲって、リアルの財力で色々左右されるのが結構あるんだけど、私たちのゲームでそれをやるのは何か違う気がするんだよね。目標は、ファンタジーな世界で楽しんでもらうことですよ？」

奈津の言葉に、私も亜紀も、確かにと唸ってしまふ。

ファンタジーな世界で遊ぼう！ という目的を元にここまで来たはずなのに、結局現実のお金で左右されてしまふのは、奈津の言うとおり何かが違う気がする。

とは言つても、無制限にしてしまつては、健康に悪いし、制限によつてはクレームが……うーん。

「ねえ、千春？ あつちの世界は、亜空間みたいに時間の流れを変えられないのかしら？ たとえば、こつちの時間で3時間って制限をかけても、あちらの時間で6時間プレイできるなら、満足度も多少は違うんじゃない？」

冬香の言葉に、んー、と考えてみる。亜空間はもとも次元の歪みから出来ているので、時間を歪ませるのも割りと簡単だったのだが、世界間の時間を歪ませるのは少し難しいかもしれない。だけど、たぶん可能だろうとは思ふ。やったことはないが。

「やれば出来ると思うけど……それはそれで身体に悪い気がするな」。あれつて結構、体内時計狂うよ？」

まあ、私の体内時計が狂つてるのは、20分の1なんて比率にしてるからだけ。2〜3分の1くらいなら大丈夫なのかな？

「ネットゲなんかやる時点で、どうやっても体内時計は狂うと思うし、とりあえずはそれでいいんじゃない？ それに、時間の流れが違つても、VRの設定ではありがちだし、よりいつそうVRっぽくなりそう」

奈津の言葉に、まあそうか、と思ふ。確かに、VRの中では時間の流れが違つてというのは、VRゲームの小説なんかでは良くある

設定だ。

「うーん、じゃあとりあえずそういう風にしてみようかな」  
「ってまた私の仕事増えたな。別にいいけど。」

「じゃあ、1日にゲームをプレイできるのは、現実時間で……6時間くらいかな。ただし、3時間ごとに1時間以上の休憩を取る必要が有る、って感じで。それでゲーム内時間では……12？ それとも18？」

「いつそ24時間にしちゃえば？ それならクレームつけようがないっしょ。」1日に24時間やれますが何か文句でも？「みたいな」  
「でも、時間感覚が狂うと言うことなら、12時間くらいがいいのかもね」

「じゃあとりあえず、24時間を目標にやってみるよー」  
机の上にあったメモ帳を引っ掴み、「5分の1に変更！」と昨日メモした次のページに、新しく「目標は24時間で」と書き記しておく。

「もしかしたらVRの魔法を弄ることになるかもしれないから、その時は皆のブレスレット回収するね」

「……魔法のアップデートは手動なのね」  
「今のところねー。その内、中心で管理するような大きい魔道具作るつもりではいるけど。ユーザーの情報も、魔法の管理も、全部行えるようなやつ」

さすがにゲームのアップデートをするたびに、魔道具一つ一つを回収なんかしてもらえない。

それに、ゲームが終わるときのために、一斉に魔法の効果をなく

す方法なんかも用意しておかなくちゃいけないし。始まってもしない内に終わりを考えるのも、何となく切ないが。

「ということは、千春にはその魔道具作りも残ってるのね」

「まあ、残ってるといっても、たぶん1日くらいあれば出来ると思うよ」

「そうなの？」

冬香の疑問を乗せた言葉に、自信ありげに頷く。

ルナさん達がいる世界では、マジックアイテムを使ってギルドに登録された人たちの情報を管理している、といつだったか聞いた。しかもその情報は、小さな水晶と常時同期しているという超すぐれもの。

なのでその内、城にあるらしい大本を見せて貰いに行こうと思っている。参考になる……というか、ほぼその複製品で何とかなるだろう。

「システム面が千春に頼りきりなのは申し訳ないけれど……頑張って頂戴ね？」

「もっちゃん！ 魔法少女チハルに任せなさい！」

「魔法使いすぎて魔女にならんようにねー？」

えへんとわざとらしく胸を張れば、奈津が笑って茶化してくる。

「大丈夫、私になるとしたら魔女ガエルだ」

「あはは、なついな」

お互いにしみじみ。

これは亜紀と冬香にも判ったらしく、二人とも懐かしいねと頷いていた。

「……じゃあ最後に、そろそろ テストの開始日を正式に決定しようと思うの。決まった日を目標にしてた方が、やる気が出るでしょう？ いつにするかは……千春が決めて頂戴」

「私？ んー、そだなー。じゃあ……一ヶ月後くらい？」

「……それでいけるの？」

「……いけるっ！」

私の宣言に、冬香が笑う。

「じゃあ、一カ月後の今日に テストを開始しましょう。……つまり、配達にかかる日数を考えると、三週間後くらいには完成させないといけないわけだけど」

「ああっ!？」

思い違いに、思わず声が漏れる。そうだ、道具はシロネコさんで送るんだっ！

少し狼狽する私に、冬香がわざとらしく冷ややかな目で、こちらを見る。

「千春？ 女に二言は無いわよね？」

「……やってやるっじゃないの!」

挑戦的な表情で言われたので、それに乗ってみる。

まあ、自動的に魔法のアップデートが出来るような仕組みにするつもりだし、一週間の差はそこまで考えなくていいだろう。お届けの最中にも、魔法は改造できるのだ。冬香も判ってて言っているだろう。



「じゃあ、あと一カ月間、ラストスパート頑張ろうねっ！」

「勿論だよ！」

「一番最初、ちいが失踪した時に、誰がこんな展開になると予想しただろうか……」

「確かにそうね」

確かにVRなんて半年前には、思いもよらなかった。

でも、それはもうすぐ現実になる。

わくわくする。

具体的な日にちが決まって、本当にどきどきする。

楽しんでもらえるだろうか。いいや、きっと楽しんでもらえるはずだ。

一ヶ月後の、今日。

私たちの世界は、とうとうはじまるんだ！

「クォーターズ・オンラインのテストに応募してくださった皆様へ。」

「こんにちは、四季です。」

クォーターズ・オンラインのテストの開始日時を、

XX月17日 21:00～

に正式決定いたしました。

以下、留意点をいくつか挙げさせていただきます。

プレイ時間の制限について

今回のテストでは、健康面、サーバの負担などを鑑みまして、

「一日にプレイできる時間は6時間まで」

「一度にプレイできる時間は3時間まで」

「プレイの間には、1時間以上の休憩を挟む必要がある」

という制限をかけさせていただきます。

ですが、今回皆さんにテストしていただくVRシステムでは、ゲーム外とゲーム内の時間の流れが異なります。

具体的に言いますと、現実時間での1時間は、ゲーム内では約4時間となります。つまり、6時間のプレイで、24時間のプレイを

行うことが出来ます。

制限はございますが、十分なプレイをしていただけたらと思います。

## VRの機材について

VR機材は一度プレイすると、自動的に脳波などの個人情報登録されるため、最初にプレイされた本人しか使用することが出来ません。

そのため、Y A F O Oオークションなどでの転売については、全面禁止とさせていただきます。正規ルート以外での購入については、四季は一切サポート致しません。ご了承ください。

もしお使いの機材が故障した場合には、メルフォームからお問い合わせください。

## ゲームアカウントについて

プレイキャラについてですが、性別、身長、体重などは、ある一定の範囲内において、自由に変更できます。種族も、多彩に取り揃えております（種族については こちらの ページを参考にしてください）。

“何でもあり”な、キャラメイクをお楽しみください。

また、今回のテストにはあまり関係ありませんが、ゲームの本稼動時において、複数機材、複数アカウントでのプレイは禁止とさせていただきます。

つまり、1人1アカウントです。キャラリセは出来ますが、アカウントを停止された場合、それ以上プレイを行う方法はありません。それを念頭に置いてのプレイをお願いします。

と、様々な制限をつけさせていたいただきましたが、これもファンタジーな世界を快く楽しんでもらいたいが故です。どうかご理解ください。

では、テストの始まりまで、皆さん今しばらくお待ちください。

『

このページを見て、とある大学生は思った。

「エルフにしよう」

春のファンだった男は、自キャラをエルフに決めた。

このページを見て、とある高校生二人組みは思った。

「俺、女キャラやるわ」

「ネカマ乙w」

初のVRテストから数ヶ月、何だかんだで仲良くしているようだった。

このページを見て、とある厨ちゃんは思った。

「制限とか信じられない訴えてやる厨ちゃんに管理させるそれが駄目ならGM権限よこせくあwse drftgyふじこふじこー!」

メルフォを爆発させたので、アク禁された。ついでにテストの名簿からも抜かれた。



「ちいの家にお泊りとか、中学以来だなー」

「冬香ちゃんの家には良く泊まったけど、千春ちゃんの家には初めてだな。楽しみ！」

放課後。私たちは、和気藹々と帰宅の途についていた。

一月前、テストを始めると決めた日付は、狙ったわけでも何でもなく、金曜日だった。

だから今日は、私の家でみんなでお泊り。みんなで、一緒にテストの開始を祝うのだ。

……そしてその後は、地獄のトラブルシューティングな時間が始まる。恐らくは、GMコールに呼び出され、色々と奔走する羽目になるだろう。ぶっちゃけ今から少し不安。ちゃんと700人近い人を、問題なく楽しませることが出来るのだろうか。

「平和なお泊りにはなりそうにないけれど……頑張りましょう」

「すごい不穏な台詞やめてー！ ああ、胃が痛い……」

「ちい、大丈夫ー？」

胃を押さえる仕草の私に、奈津は私の背をさすってくれる。いつもすまないねえ、と決まった台詞を言えば、それは言わない約束だろうおとつつあん、とこれまた決まった台詞を返してきた。全く変わりのない、いつものやり取りである。

「今日から、かあ……」

私の作り上げた魔法で、私たちの作り上げた世界で、世界がはじ

まる。動き出す。VRの道具（色々考えたが、結局ヘッドセットにした）はシロネコさんで送付済みだし、魔法もとりあえずオールグリン。精霊たちも新しい来訪者たちを待ちわびているだろう。

あ、そうそう。

NPC役である精霊たちとは、2つだけある約束を交わした。

1つ目は、世界の根幹に関わることを口にしないこと。まあ、本当にクォーターは異世界なのだから、女の子が身体を作ってくれたとか、そんなことを言っても、“そういう設定”なのだと思うられるだけだろうけど。疑惑の種はばらまかないに限る。

そして、2つ目。それは、精霊たちが自由に振舞うことだ。

横暴に振舞うプレイヤーがやってくるかもしれない。そうになったら、叩き出してくれていい。

NPCである精霊を奴隷のように扱う人がいるかもしれない。そうになったら、魔法で抵抗すればいい。

逆に、友人のように仲良くなれる人がいるかもしれない。そうになったら、精霊も友人のように過ごして欲しい。なんなら、一緒に冒険に出ても構わない。

ストーリーに関わるメインイベントは本稼動時に開始するつもりだが、サブイベントは至るところに散りばめている。それを、精霊たちの機嫌で発生させるかどうか決めていい。だから人によっては一生辿り着けないサブイベントがあるかもしれない。それはそれで面白いと思う。……とはいっても、限度は考えるように言っているけど。

ゲームだとしても、そこは本当にファンタジーな世界なんだと、テスターの人たちにそう思って欲しいから。別に、マナーがどうこ

うじゃない。……いや、こつすることでも少治安が良くなるだろうな、つても実際あるけど。ほら、この類のゲームで一番気を遣うのって、雰囲気維持だと思うし。

まあ、それはともかく。

私たちみたいに、現実とは違う、もう一つのファンタジーな世界で楽しんでほしい。私が、四季が思うのは、それだけだ。

「じゃあ、後で千春ちゃんの家に行くね！」

「また後でね」

帰り道の途中にある丁字路で、亜紀と冬香と別れる。

手を振って二人を見送り、私と奈津は再び歩き出した。

「ねー、ちい？」

「なにー？」

「頑張ろうね」

「そうだねー」

ものすごく緩い会話を交わしながら、二人で歩く。

「いつだったか、前にも言ったけどさ、どうしてこうなった状態だよね、お互い」

「あはは、確かに」

奈津の言葉に、笑ってしまう。

彼女の言うとおり、どうしてこうなった、と発案した本人である自分に聞きたくなる。

魔法ノ書を見つけて、本当に私の世界は変わった。180度正反対……というわけでもないから、240度くらい？　なんかそれくらい微妙な角度の方が私っぽい。どうせなら、239度とかの方が



微妙感が漂っていていいかも。

「あ、そうだ。ねえねえ、私らも、一緒にゲーム参加していいよね？」

「いいと思うよ。ただし、時間があれば、だけど」

「時間……あるのかな」

「さあー？」

奈津の言葉に、半笑いで目を逸らす。

時間ができるかどうかは、これからわかるんじゃないですかねー。

……うん、イッツ棒読み。

ただ、管理については、色々と考えてはいる。というか、私たちと精霊だけじゃ、きつといつか限界が来ると思うので、何とかしなくてはならないはずだ。一応代案はあるので、色々と画策してみようと思う。

実際どうなるかはわからないし、かなりの調整が必要になるとは思うけど。

「ま、まあ、お互い頑張りましょうー！」

「だ、だねー！」

私たちはそうやって明るさを取り戻す。

何となく上っ面な感じなのは、気にしちゃいけないところだろう。

「んじゃ、後でねー、ちい！」

「ん、待ってるー！」

交差点で奈津と分かれ、私は一人帰り道を歩く。とは言え、私の家はここから1分もかからないのだが。ちなみに奈津は、ここから

5分ほどの距離だ。

「……頑張ろうっ」

ぼつり、呟いた私は、駆け出した。

……勢いを付けすぎて、沿道に足突っかけて転びそうになったのは秘密だ。

「乾杯！」

その後、私の家に集合した私たちは、クォーターにやってきていた。

奈津の作った国「アグナ」にある王城で、私たち四季と、そして私たちを手伝ってくれた精霊達で乾杯を交わす。あ、もちろんジュースです。

精霊たちが作ってくれた料理に舌鼓を打ち、私たちは和気藹々と今日までの苦勞をみんなで語り合う。その最中、ラルトとノージアと名付けられた二人の精霊は、微妙に肩身を狭そうにしていた。まあ、半壊させたらしいしねえ。

「今日までありがとう、みんな！　そして、今日からもよろしくね！」

ぐいっとオレンジジュースを飲み干してから、私は礼を告げる。私を手伝ってくれていた精霊たちは、私たちが持ってきたお菓子を

まるでハムスターみたいに頬張りながら、何度もこくこくつと頷いていた。

「こんな楽しいことなら大歓迎だぜ！」

精霊の一人が言った言葉に、他の精霊たちが同意するように頷く。

「うんうんっ、街を作るの、とっても楽しかったですよぉ〜！」

「あ、わかるっすわかるっす！」

「今日から、僕達がみんなに住む街ですもん、楽しくないはずがありません」

精霊たちのきゃあきゃあとした言葉に、私はとっても嬉しくなつて、両手を広げてみんなを抱き締める。

「あああつ、もうありがとうね！ みんな大好きッ！」

「ハル苦しいっす！ やめるっす！」

「や、やめれ〜っ……！！」

「ハル！ ジュースで酔っ払うなよー！」

「あははは、酔ってない酔ってないーいー！」

「反応が酔ってる人だよ！」

ナツの突っ込みに、あはははは、と爆笑で返す私。

精霊たちの嫌がる素振りは見知らぬフリをして、私は彼らをぎゅうつと絞め続ける。

まあ、声色は嫌がっていなかったし、大丈夫でしょ。

アキはちびちびとジュースを口に含みながら、そんな私を見て笑い、フユはこちらをチラ見しながらも食事を黙々と食べていた。

こっちの世界であと2時間後。学校の廊下で始まった私たちのク  
ォーターズ・オンライン（ ）が、ようやく始まる。

……とりあえず、くれぐれも大きな問題が起こりませんように！

「ようこそ、クォーターズ・オンラインへ」  
女性、というよりは少女に近い声。

上も下もないような不思議な空間で、唐突に頭の裏側に響いた声に、（あれ、俺はどこにいるんだっけ）と、青年は一瞬そう迷って、すぐに思い出す。

（そうだ、今日から テストが始まるんだ）  
現実感の薄い世界の中、青年は回想する。

突如、ネット上に現れた創作グループ『四季』。彼女たちは、VRという未知の技術を引っ提げて、どうしてかニコニコ動画にやってきた。

そこで彼女たちが発表したゲームの名は「クォーターズ・オンライン」。そのゲームの舞台になるという世界は、圧倒的なリアリティで描かれ、多くの人たちを魅了した。

青年もまた魅了され、テストの申し込みが始まった時にはいち早く応募していたのだった。

今日から始まる テストの開始は9時からだが、その前にキャラメイクが出来るとアナウンスされていた。だから青年は9時丁度にはログインが出来るように、キャラメイクは先におこくと、30分早くヘッドセットをつけてベッドに入ったのだった。

食事も、風呂も、先に済ませてある。ゲーム終了後に覚醒するか、そのまま睡眠に入るかは、ゲーム内の設定で選ぶことが可能だ。そのため青年は、ゲーム終了時にそのまま就寝することに決めていた。ただ、早寝の準備をしたせいで、母親に訝しがられてしまった。

ゲームのためなどと言えば、また嫌な目で見られるのは判りきって

いる。青年は明日早いんだ、などと誤魔化して部屋に閉じこもったのだった。

そんなことまで一通り思い出したところで、少女の声が告げた。

「それでは、キャラクターを作成します。まず性別と種族を選んでください。種族の説明は必要ですか？」

「あ、いや、大丈夫です」

今日が楽しみすぎて、種族についてのページを熟読していた青年は、淀みなく答える。そしてすぐさま、ある種族を選んだ。

「えっと、性別は男で、種族は獣人族にしてください」

「何をモチーフとした獣人族にしますか？」

「あ、狼で」

獣人族は攻撃力と防御力が良く伸びる。また、サブクエストによっては、スキルの制限と引き換えに攻撃力が二倍になる「狂化」というスキルが得られるという情報がサイトに載っていたため、孤高ぼうちの前衛職を目指す青年は、この種族を選ぶことに決めていた。

「それでは、キャラメイクをはじめます。1から作りますか？ それとも、貴方の姿をコピーし、それを元に作りますか？」

「んじゃあ、コピーで」

青年の言葉に呼応するかのように、彼の目の前に光が現れる。その光はだんだんと肥大化し、やがてその中から彼とそっくりな、しかし人の耳ではなく狼のような耳の生えた身体が出現した。生気が全くない身体は、飾り気の薄い地味な服を纏っている。青年は驚きに目を丸くし、それを見つめた。

青年は、とりあえず目を切れ長にして、鼻筋をすつと通して、身長も高くして、筋肉質にして、ついでにオッドアイなんかにしようとして、ふつと我に返る。

(ああ、これ、俺が操作するんだっけ)

理想を追い求めるのは楽しいが、あんまり美化しすぎると現実とのギャップに耐えられなくなりそうだ。青年は結局、元の顔をちょっと整え、髪の色を茶髪にして、身長を+5センチにするくらいに留めておいた。服も多少弄れるらしいが、センスがないと自覚している彼は、飾り気のない服のままにしておいた。

「テスト中はキャラリセットは出来ません。これで宜しいですか？」

「はい」

「では最後に、キャラクターネームを登録してください」

その言葉に、青年は一瞬怯む。キャラメイクに気を取られ、名前について全く考えていなかったのだ。

「えっと、じゃあ……『シユン』をお願いします」

青年は少し迷って、ハル 春 シユンという全く捻りのない名前にする。

「キャラクター『シユン』を登録しました。それでは、ログイン可能時間まで、しばしお待ちください」

「あ、はい」

青年が小さく頷くと、ふっと彼の視界から全てが消え、そして次の瞬間には緑の中に居た。

「は？」

青年は、啞然とした表情で周りを見回す。

どうやら森を切り開いて出来た広場らしく、葉の隙間から陽の光が筋となって地面を照らしている。

彼の周囲に多くの人間 とは言っても、エルフだったり、鳥人

族だったりと、亜人ばかりのようだった。がいなければ、感情のままに叫び出していかもしれない。それくらい、彼にとって唐突な出来事であり、そして放り出された世界はリアルに満ちていた。

手を見る。指紋まではつきり見えた。

髪に触れる。自分より硬質な髪の感触がした。

空を見上げる。雲ひとつない透った青が見えた。

足で地を踏みしめる。足裏にしっかりとした反動が返ってきた。

彼がそこまで把握出来たところで、周囲からのざわめきが、やがて小さな歓声に変わる。誰かが騒げば、それが波及して、大きなどよめきになった。

「すごい！」「これってVRなの！？」「まんま異世界じゃん……」

「白黒の世界はどこ行った？ いや、マジ、うああああ！」

百人以上はいるであろう人々の口からは、次々と色々な言葉が零れ出す。青年の近くに居た兔耳の女性は頬を高潮させ、きらきらと輝いた目で当たりを見回している。また、妙に整った顔のエルフの男性は、自分の顔にぺたぺたと手を這わせた後、思い切りにやけていたりもした。

周りの声に浮かされるように、青年の口元からは笑みが漏れる。何がおかしいのか、ふ、と息を吐き出して、小さく肩を上下させる。

（やべえ、これ、すげえ……！）

腹の底から、楽しさと冒険心が湧き上がって来る。動画のコメントで、1000円で文句を言ってる奴がいたが、そいつらは馬鹿だ、大馬鹿だ。そんな文句でこの光景を、この世界を棒に振るだなんて、有り得ない！

ぎゅ、と掌を握り締めて、感触を確かめる。あまりにもリアルすぎる感触に、一瞬、まさか異世界にトリップしたのでは、などと思



ってしまつ。しかし、そんな考えが脳裏にちらついた瞬間、広場に声が響いた。それは何故だか、騒がしいざわめきの中でも、良く聞き取れた。

「ようこそ、クォーターへ！」

一瞬の間に静まり返ったユーザーたちが、一斉に視線を向ける。

そこに居たのは、『四季』のメンバーの一人である、ハルだった。彼女は広場の端にある、物見やぐらの上に立っていた。

不意をつかれた登場に、静まり返ったはずの人々が、また一気に沸き立つ。ハルは笑顔でそれに応えたあと、愛嬌のある笑顔で口を開く。

「みなさん、テストにご参加くださり、ありがとうございます！」

今日は……いえ、今日から、この世界を楽しんで下さい！」

「ハルー！」「きゃあおうえあお！」「愛してるー！」「パンツ見せろー！」「うおおおお！」

言葉になっていない雄叫びや、彼女の名を呼ぶ声、下品な野次。

そのすべてにハルは笑い、手を振って応える。

「この世界に、チュートリアルはありません！ 自分の好きなように、感じるままに、過ごしてください！ ただし、この世界の住民にも心があります！ 意思があります！ それを心のどこかに置きながら、この世界で遊んでください！ それでは、また！」

それだけ言って、ふわ、と飛び上がるハル。何人かが追いかけてよと走ったものの、あまりにも飛行スピードが早く、すぐに諦めたようだ。

「……感じるままに、過ごす、か」

青年は僅かに口元に笑みを浮かべて、周囲を見回す。広場から少し離れた場所にログハウスが、そして木の上にはツリーハウスが見

えた。きっとここは、自然が豊かなエリア　亜人の国「リーンデ  
イア」に違いない。そう結論付けた青年は、これからの指針を考え  
る。早速、戦闘に繰り出すか、それとも街を見て回るか。

「……まずは、この街を見て回るか」

戦闘も楽しみだが、それはこの街を、この世界をもう少し知った  
後でも遅くない。普通のMMOなら、いち早く魔物と戦って、経験  
値を貯めるべきなのだろうが、このゲームはVRなのだ。PCを前  
にマウスをクリックするだけのゲームとは、勝手が違うだろう。

そう考えた青年は、未だざわめき消えぬ広場から、一人抜け出し  
た。

(おおー……)

いち早く広場を抜け出し、街中を見て回ることにした青年は、市場らしきところにやってきていた。目に入る木々の緑はぐっと減り、切り拓かれたそこには木造の店舗が立ち並んでいる。

店先では、民族的な服や薬草など、様々なものを売っている。(こつこつというのはオーガニックって言うんだっけ?)と、青年はどうでもいいことを考えた。

その辺りを闊歩し、賑わいを演じているエルフや獣人などの亜人たち。青年は、それらとすれ違つては感心しきつたような溜息を吐く。

「みんな、NPCなんだよなあ……スゲエ」

全てのプレイヤーは一樣に、右手首に目立つ腕輪をつけている。その腕輪は装備品には含まれず、絶対に外すことが出来ないため、これをつけているかどうかでNPCかプレイヤーかを判断できた。遠目であればプレイヤーかどうか判断するのは難しいが、遠くから判断が必要な場面はそうそう無い。

サイトに載っていたNPCとプレイヤーの見分け方を思い出し、いれば、青年の耳に、ざわめきに混ざって会話が聞こえてきた。

「今日は旅人さん、多いね!」

「そうだね!」

「あたし、旅人さんとお話したいなあ!」

「私もーっ!」

「ほらほら、あんたたち、そんなところでお喋りしてないで！」

「きゃははは、はーいつ！」

「はいはい！」

亜人たちの会話は、AIであることを疑うような、ごく自然で、人らしいものばかり。もしかしたら、誰かが操作しているのかもしれないとさえ思っ出来た。

しかし、住民は数え切れないほどに存在し、恐らくは今この世界に居るテストターの数よりも多い。そんな数をNPCとして雇えるような財力があれば、もっと四季は有名だったろうし、大規模に宣伝も出来ただろう。

それを思えば、やはり彼らは、彼女らは、AIなのだ。

青年はただ呆然と、リアルに満ちた世界で、NPCであるはずの彼女らを見続けていた。

「……つと、やべえ、時間忘れる……」

このまま流れる人たちを見ていてもしょうがない。そう我に返った青年は意を決し、市場らしきその通りを、歩き回ってみた。

どんな細い道にもちゃんと入ることが出来るし、民家は扉が締め切られているところが殆どだが、窓から覗くと家具が置かれており、生活感に溢れている。この世界はどれだけ細かく実装されているのかと、青年は恐ろしいものさえ感じた。

本当にここは、ゲームの中なのか？ 異世界ではないのか？ そんな疑いが、青年の中で巡っては埋もれていく。

「……ん、ちょっと誰かに話を聞こ」

ただ無闇に歩いてばかりでなく、情報収集をしなくては。裏通りを歩いていた青年は、たまたま目に入った、こじんまりとした店に入る。

そこはどうかやら薬屋のようだった。店の中には、あまり口にしたくない色の液体が入った瓶が、乱雑に置かれている。

「お兄さん、いらつしやいつす〜！」

カウンターの向こう側に座っていたのは、妙な喋り方をするエルフの少女だった。オレンジ色の髪と金色の瞳を持つ、可愛らしい顔の少女に、青年はきよどりながら頭を下げる。

少女は好奇心旺盛そうな瞳で、落ち着かない様子の青年を射抜いた。

「お兄さん、その腕輪は旅人さんつすね！ 買い物つすか？」

「あ、いや……色々、話を聞こうと思つて……駄目だった、か？」

「いやいや、構わないつす！ このペンタにお任せつすよ！ ウチに何でも聞くんつす！」

「あ、俺はシュン。よろしく、ペンタ……さん？」

ペンタと名乗った少女に、青年も同じように自己紹介する。彼女がNPCなのだという認識は、もはや彼の頭からすっぽりと抜けていた。自然な仕草を見ても、応対を見ても、目の前にいる少女の行動は到底AIのそれだとは思えなかったからだ。

声が上がらず、疑問調になる青年に、少女はけらけらとおかしそうに笑う。

「さんとかむず痒いんで、呼び捨てにしてくださいっす！ じゃあまずは何を聞きたいっすか？」

「ん、んー……」

いざそう問われると、何を聞けばいいのか全く浮かんでこない。

青年は少しの間考え、やがて自信が無さそうに口を開いた。

「……じゃあ、まずは基本操作とか、いいか？」

簡単な操作はサイトと、ヘッドセットに同封されていた説明書で一通り読んで知ってはいる。だが、ここで教えてもらえるのであればその方がいい。特に聞くことも見つからない彼は、そう判断して

彼女に教えを請う。

少女は頷いて、ひょいっとカウンターに足を掛けて飛び越え、青年の隣に降り立った。

「わかったつすよー。だったら、メニューの表示からつすね」

「あ、そうだな、それで頼む」

青年の言葉に、少女は実演を踏まえながら教えてくれる。少女が実演して出現させた透過された青いウィンドウに、NPCでもメニューの表示が出来ることにやや驚きつつも、彼も彼女と同じようにメニューを表示させてみた。

「おおー」

メニューには、ステータスや、アイテム、装備、パーティーなど、RPGに良くありそうな項目が揃っていた。また、一番下にはログアウトという文字もある。

「……おにーさん、ログアウト、押しちゃ駄目つすよー？」

「……わかつてる」

少女に言われ、ぴくりと指が震える。

少しだけ、ログアウトを試してみたい気持ちがあつた。ここが本当にゲームの世界で、自分が元の世界に戻ることを確認したかつたからだ。

しかし、ログアウトしてしまえば、次のログインまでに時間を置かなくてはならない。それは余りにも馬鹿らしいので、やめておいた。

だが「やってはいけない」と思うものほど危険な魅力を孕んでいて、数秒ほどぴくりぴくりと、指が疼くのだつた。

「じゃあ次は、道具の出し方つかね？ とりあえずお兄さん、ここに来たばかりで何も持っていないだろうから、これあげるつす」

何もないところから少女の手の上に現れたのは、赤色に濁った液体の入った瓶だった。

「ん、回復薬か何かか？」

「解毒薬つす。値段はそれなりに高いくせに、この周辺じゃ全く役に立たない薬つす」

「なんでそんな微妙なモンを……貰うけど」

手渡されたそれを、青年はまじまじと眺める。傾けてみると予想以上に粘度があり、どろっとしていた。いざこれを使用する時に躊躇わずにいられるかどうか、彼は少し不安になった。

「じゃあ、また同じようにやってみるっすよ」

これまた、少女が実演し、説明してくれるのを見ながら、青年はアイテムの出し入れを試す。

手の上から物が消えたり現れたり、まるで手品のような現象に、青年は面白くなって十数回ほど試してしまうのだった。

「これで俺も一流マジシャン！」

「そうっすねー」

「スゲー棒読みだな……」

ペンタの反応に、正直へこんだ青年であった。

「とりあえず基本的なアイテムの出し入れは、こんな感じっす。ただ、色々と工夫も出来るんすけど、ここから先はお兄さん自身で色々試してみしてほしいっす。というか工夫しないと、戦闘とか大変かもっすから、頑張るっす」

「ああ、戦闘の時は悠長にアイテムセレクトとかしてられないもん  
な」

「そっついうことっす」

ふむふむ、と納得する青年に、少女は頷いた。

「えーっと、あとは……他のメニュー項目なんかについては自分で何とかするっす！」

「おいっ!?!」

いい笑顔の少女に、青年は思わず突っ込む。

「全部説明するの面倒になったっす」

「何でも聞くっす！」とか言ってたのは誰だよ？」

「……そんなこと言われてもっす……ねッ！」

「いつ……!?! おまつ、いきなり蹴るなよ！」

少女に脛を思い切り蹴られ、青年は咄嗟に患部を押さえて蹲る。だが、すぐにきょとんと目を瞬かせ、何事も無かったかのように立ち上がった。

「あれ？ 痛くない？」

「そりゃあそうっすよ。旅人さんには、衝撃はあっても、痛みという感覚は無いっすから」

「へー。……って、実演しないで口で言え！」

「いやあ、悪かったっすね！ ま、習うより慣れるっすことっす」

「……まあ、そうかもしれないが」

納得いかない。そんな表情をする青年に、少女はからかうように笑う。

「もー、しょうがないっすねー！ そんなワガママなお兄さんに、とっておきを教えてあげるっす」

「とっておき？ 何だ？」

首を傾げる青年に、少女は口元を手で隠し、噂好きのオバサンのような仕草で、彼に近寄る。

「この世界で力尽きたら、まず貯めていた経験値が減るっす。その



上、持つてるアイテムは装備している物以外、無くなってしまっ  
す。ついでにお金も半分無くなるんで、気をつけるっす!」

「うわ、マジか。デスペナ結構厳しいな……というかそれが「とっ  
ておき」かよ!」

「本当なら、一回死ななきやわからない情報っすよ? とっておき  
じゃないっすか?」

笑う少女に、まあそうか? とほだされる青年。

確かに、あらかじめ聞いておかなければ無理をして、まんまとデ  
スペナルティを食らってしまったかもしれない。情報収集をしてい  
て良かったかも、と青年は思うのだった。

「ま、それもそうか。ありがとな、ペンタ」

「お礼は、今度からウチの店をご贖肩にしてくれるだけでいいっす  
よ!」

「おいおい」

調子のいい少女に、青年は笑った。

と、二人の会話が一段落した丁度その時、店に客が入ってくる。

二人組みの男性だった。

「いらっしやいませっすー!」

ひょいっとカウンターの中に戻るペンタに、青年は邪魔にならな  
いようにと、店の端に寄る。

「お、なんかいい雰囲気じゃん。やっぱり表の普通の店よりは、裏通  
りの隠れた名店だよな!」

「だよなー。ってことで、薬くれ!」

「ここまで来たんだから、お嬢ちゃんまけてー!」

「来てくれたのは嬉しいっすけど、それはちよつと駄目っすー!  
で、何が欲しいっすか?」

男性と少女のやり取りを、後学のため青年は見守る。少女と男性

たちの間で2、3やりとりを交わした後、彼女が金額を提示すれば、男性の一人は銅貨らしきものを取り出した。どうやらお金を出すには、アイテムを出す時と同じようにすればいいらしい。青年はメニューを表示して、色々と弄ってみた。

少しして、ステータスの欄に所持金額を発見したところで、彼らの買い物は終わったようだ。

「ありがとつす、また来てくださいつす！」

ペンタの見送る声に、青年が顔を上げた時。

ガシャン。

男性の足が、棚にぶつかつた。置いてあつた瓶が倒れ、地に落ち、何本かは割れてしまう。しかし男性たちは焦つた様子もなく、酷く楽しそうな歓声を上げた。

「うお、リアルー！」

「はははっ、すげえ！」

「やべえな、こんなところでマジリアルとか、すごすぎー！」

「だなんだな、超おもしろー！」

割れた瓶からとくとくと流れる液体に、男性たちはただただおかしそうに笑う。その様子に、青年はむっとして、二人の男性に大声で話しかけた。

「お、おい、笑つてないで謝るとか、弁償とかしろよ！」

「んあ？ 何お前？」

「おいおい、そんなことでカッカすんなって。どうせその辺にあるのなんか、ただのオブジェクトなんだし、すぐ直るだろ？」

「そーそー、場面切り替えれば元通りつてな！」

青年の責める言葉に、男性たちは笑いまじりでそう反論して、さつさと店から出て行ってしまったのだった。

「あいつらっ……！ ペンタ、ごめんな。追いかけたほうがいいか？」

「ありがとうつす、お兄さん。でも大丈夫つす。あの辺は、簡単にまた作れますから」

「……それにしたって……」

声のトーンを落とす青年に、少女は再びカウンターを越え、風の魔法で割れた瓶の欠片を集める。近くのかごにそれを纏めて捨てた後、気にしていないことを主張するように、尚更明るい声を出した。

「お兄さん、優しいつすね〜！ でも、その気持ちだけで十分つすよ！ ただの住民のウチを庇って、他の旅人さんとギクシヤクするの嫌っしょ？」

確かに、NPCである彼女を庇って他プレイヤーと争いを起こすのは、良くないのかもしれない。しかし青年は、頭を振った。

「いや、普通だろ。つか、ペンタの……店主の前で、ああいう態度だったあいつらの方がおかしい」

とは言え、たとえばゼロダの伝説なんかで、壺を割ってルピーをゲットした拳句に、その家の住人に謝るかと言ったら、謝るわけがないのだが。それとこれとは話が別、と青年は内心で一人ごちた。

「ま、こんなつまらない話は、この辺りでやめましょ」

「そう、か？ ……そうだな」

「……ま、あの二人に何もなかったら、そうでもないんですけど。商人ネットワークなめんな」

「ん？」

ぼつりと呟かれたそれを、青年は聞き逃す。聞き返したが、ペンは曖昧に笑って誤魔化すだけだった。

「……えつと、あ、そうだ。レベル上げしようと思うんだが、どこ行けばいいかな？」

「そつすねー」

青年は再び情報収集すべく、ペンタに再び問いかけた。

戦闘の仕方なんかも簡単に教わった青年は、聞き終えた情報を自身の中で整理すると、よし、と頷く。

「じゃあ俺はそろそろフィールドに出てみるわ。ありがとな、色々」「じゃあ、さつき怒ってくれたお礼に、これあげるっす」

渡されたのは、二本の瓶。それぞれ緑と青の液体が入っていた。

「緑のほうにHP、青いほうにMP回復っす。頑張ってくるっすよー！」

「おう、ありがと！」

受け取ったアイテムをしまつてから、少女の声援を背に店を出る。手を振って見送ってくれた彼女へと、同じように手を振り返した。

そこから少し離れたところまで歩いて、はたと気付く。

（つていつか買い物しろよ俺！ 買い物した分、瓶を割ってた男の方がよっぽど客だわ！）

あまりの情けなさに、その場で蹲って自嘲する青年。

戦闘が終わった帰りに、また寄ってみよう。そして薬を買えるだけ買おう。

そう決めた青年は、メニュー内にあるマップを見ながら、フィールドに出るべく街中を歩いていった。

この頃には、青年にとってAIだとかNPCだとか、全く気にならなくなっていたのだから、不思議なものである。

とうとう始まった テスト。

調子乗ってみんなの前で演説？つばいことなんかやってしまった私は、その後赤面しつつ出発地点の街や、その周辺のフィールドを巡る。他のみんなも（演説はやってないと思うが）、私と同じように巡回中だろう。

そうやって、何かトラブルがないかと真剣に目を光らせていたのだが、特に問題は起こらなかった。

……最初の30分間は。

開始30分を越えたあたりから、この世界に慣れたのだろう。

「痴漢された！」という訴えだとか（結局、勘違いだった）、「俺のイチモツが消えました」というセクハラまがいの質問だとか（性犯罪防止のために、人形に生殖器はありません、あしからず。ついでに排泄も必要ありません）、森に魔法を放って火事にする馬鹿とか（すぐく身に覚えがあつて凹んだ。そうだよ、そういうの試す馬鹿が出てくるよね。仕方がないので世界全体の森林に魔法耐性の魔法をかけて対処。死ぬほど疲れた。あとで何とかしなきゃ）、「死んだらアイテムと所持金がなくなっただけどバグ？」という質問だとか（デスペナの仕様です。というか死んだ後、街で復活したときに説明が出るようになってるんだけど！ 読んで！ というか死ぬの早いな！）、面白がつて精霊（NPC）に猥語を連呼する馬鹿どもとか（全員に対し、イエローカードを発行しました）、小さいものから大きいものから中くらいのものまで、多岐に渡る質問

やらトラブルだとか揉め事だとかが、これでもかと舞い込んで来たのだった。

……いやあ、疲れた。本ツ当に疲れた。

『ハル、こっち来てくれ！ ごつつい奴らが喧嘩してる！ 俺たちじゃ無理だ、止められねえっ！』

「……喧嘩くらいさせとけば？」

通信アイテム越しに聞こえる精霊の声。疲れていた私は、おざなりにそう返す。しかし精霊は焦ったように続けた。

『食堂の中でやってんだよ！ テーブルも壊れそ……あ、折れた』

「はい！ 今行きまーす！」

自棄に近い声を上げながら、教えてもらった場所にレポートで急行する。

「……おおう」

そこに居たのは、人よりも獣に近い容姿をした獣人の男性と、背に茶の羽を生やした鳥人族の男性だった。両者、ごつつい顔をしている。視線だけで人を殺せるような、怖い顔をしている。あと、妙に筋肉質で、背が高い。あらくれ！ という言葉のイメージにぴったりである。何でわざわざキャラメイクであの姿にしたのか、はなはだ疑問であった。

（何でゲームの中でまで、取っ組み合いの喧嘩するかねー……ゲイ

ムの中だからか?)

二人は相手の胸倉を掴み、もみくちゃになっている。壊れたテーブルや椅子の足が、その辺に散乱しているのを見て、私は溜息と共に眉を寄せた。

食堂にいた周りの人たちは精霊含め、そんな二人を遠巻きにしている。

街中で攻撃魔法をぶつ放したり、武器を抜いたり出来ないようになっていて、殴りかかるのは普通に出来てしまう。スキルや道具の制限は出来ても、行動自体の制限はちょっと難しいのだ。

「ジャツジメントですの! …… って違う違う。そこ、やめなさい!」

「うるせえッ…… って、あ」

「クソアマは引っ込んで……う」

二人は私の顔を見るなり、ぴたりと停止した。私は風の魔法で二人を離し、ついでにべしゃっと地面に叩きつけておく。

私は仁王立ちで、二人を見下ろした。

「喧嘩するなら誰にも迷惑のかからない、広場かどっかでやってください! 中でやらない! 埃が立つし、何より物が壊れます!」

「やめないつもりならイエローカード発行しますよ?」

イエローカードは、まあ文字通りのものだ。何かしらの問題を起こすと1枚発行され、3枚溜まるとレッドカード扱いとなり、一週間クインが出来なくなる、という恐ろしい?ペナルティが待っている。そしてレッドカードが3枚溜まると、アカウント剥奪という恐ろしいペナルティが以下略。

しかし、イエローカードが発行されてから3日間、問題を起こさなければ1枚消えるので、レッドカードになるような人はそうそう

出てこないだろう。たぶん。

ちなみにイエローカードが発行されると、腕輪の色が変わるので見た目で判ったりする。そうなると精霊たちの店でどうなることやら私は知らない。ということで皆さん気をつけましょう。

「……あ、すみません」

「……チツ……これくらいで許してやるよッ！」

イエローカード発言が効いたのか、鳥人族の男性は素直に謝ってくれる。が、獣人の男性は粗野に言い捨てて、食堂からさっさと出て行こうとした。しかし私はそれを許さない。服の襟を掴んで彼を止めれば、ぐえ、と苦しそうな声を上げ、男性は立ち止まった。

「な、なんだよ……」

「テーブルと椅子を壊したんだから、弁償していただくさいね」笑顔ですごむ。男性は一瞬目を見開き、舌打ちしながらお金を置いて出ていった。うむうむ、素直で宜しい。

鳥人族の男性からもお金を徴収して、とりあえずこの場を収めることに成功した私は、ふう、と溜息を吐く。まあ、思い切りネームバリューと脅しのお陰なんだけど。

精霊達でちゃんと警察組織みたいな立ち上げた方がいいな、と今更ながらに思う。明後日あたりにメンテナンスってことでゲームを締め切って、立ち上げてみようって。

「ハルさん！ お疲れー！」

「ありがとー！ ちょっとその辺のテーブルを片付けるの、手伝ってくれるかな？」



「いいですよー！」

「ありがとう！」

プレイヤーの女の人が声を掛けてきたので、逆に仕事を頼み返してみる。笑顔で了承してくれたので、私は一旦それを任せてから、通信をくれた精霊に近付いた。

「……大丈夫？」

「ごめんなあ、ハルう〜」

少年ダークエルフ姿の精霊が、申し訳なさそうに言う。基本的に揉め事は精霊達で解決するように言っているんだけど、流石に慣れていないうちから、身の丈が二倍以上ある相手には難しいだろう。というか、普段の私だったらあの二人を止めたくないし、関わりたくもない。

「あれじゃ、しょうがないよ。でも、なるべくは頑張っ！」

「おう、次からは俺が叩き出す！……ハア、とりあえず代わりのテーブルと椅子出すか」

手伝ってくれるユーザーさんと一緒に壊れたものを片付け、精霊が創造魔法でテーブルと椅子を作る。その様子に女性は感心したように声を上げ、精霊は自慢げに胸を張った。おいおい、普通の魔法はともかく、創造魔法は私の魔道具で発動しているだろうに。ま、いいけど。

「ありがとうな、手伝ってくれて。お礼に、食事をご馳走してやるよー！」

「わ、本当？ 嬉しい！」

少年の言葉に、女性は嬉しそうに微笑む。

うんうん、プレイヤーと“NPC”の交流もいい感じだ、なんて思っていたら、精霊は私の方に向き直って口を開いた。

「ハルも食べてくか？」

「ん、どうしよっかなあ……って、あ、通信」

返事をしようとした瞬間、またしても精霊からの通信が入ってくる。あまりにもタイミングが悪すぎて（良すぎて？）、思わず私と精霊はお互いに顔を見合わせて苦笑してしまう。

「無理そうだな。頑張れ、ハル！」

「うん、頑張るー。また今度ご馳走してね」

「おう、任せろ！」

そんな会話を交わしてから、私は次の現場に急行するのだった。

「ちっばいが触りたかったんだ！」  
痴漢騒ぎだと呼ばれて行ってみれば、私の目の前で高らかにそう  
宣言した馬鹿がいて。

「……………退場ッ！」

私は即座にレッドカードを発行、痴漢男をゲームから蹴り出した。  
イエローカードの余地無しである。

というかああいう馬鹿は、マジでアカウント剥奪したいんだけど、  
どうしようかな。最初に取り決めたレッドカード三枚うんぬんって  
いうルールを端から破るのもどうかと思うのだが、これは普通に放  
つとけない問題だ。……………あとでみんなと相談しよう。

開始から二時間ほど。

相変わらず私の元には、色々なトラブルが舞い込んできていた。

その中でも多いのが、痴漢などといった性的トラブル。現実では  
ないと思うとタガが外れるのか、それともゲーム中だから犯罪には  
ならないという意識から来る故意犯なのか、結構多いのだ。

……………マジもげればいいのに。あ、なかったっけ。

幸いなことに、今回の被害者は中の人だっただけで、大きな  
騒ぎにはならなかったけれど、何らかの対策を取らなくちゃと今更  
ながらに思う。というか、この辺りの対策が甘すぎたと自戒。今の  
ところ、勘違いだったり、未遂だったりだが、この先人口が増えれ

ば、もっと酷いことになるだろう。

胸と腰の周りにでも、自分以外は触れないような防御壁でも作るうかなあ……。

「エルフー！」

「うわっ！」

うんうんと悩んでいれば、後ろから誰かにがばりと抱きつかれる。きよどりながら後ろを見れば、私の腰周りに抱きついていたのはダークエルフの女性だった。

「な、な、何ですか!？」

「エルフの居るところ、みーには現れる！」

「意味がわからない! セクハラで訴えますよ!？」

「エルフになら訴えられても構いません！」

何かこのノリに、物凄く覚えがあるんだけど……。ダークエルフだし。

とりあえず私に巻きついて腕をぐいっと引き剥がし、そのまま格闘スキル『一本背負い』でべしつと投げ飛ばす。攻撃スキルだが、管理者権限で街の中でも使えるのだ。

HPにダメージは幾らか受けているだろうが自業自得である。

彼女は、しこたま打ち付けたであろう腰を摩りながら、よいしょと立ち上がった。

「えーつと……エルフだらけでテンションが上がりました……すみません」

「次からは、気をつけてくださいね? セクハラは即レッドカード

なんで。反省が無ければ、アカウント剥奪も考えてますし」

「き、気をつけます！」

ぴしいっと敬礼されて、思わず苦笑してしまう。この人の場合、前からエルフ好きを前面に出してたし、中の人は女の人だし、ちょっと羽目を外しすぎただけだろう。でも、今の内に釘を刺せて良かったと思う。

「あ、そうだ。この世界、楽しんでますか？」

「ええ！ それはもう！ ここはパラダイスです、極楽浄土です！ 毎日通い詰めて、エルフの皆さんとお話しようと思ってます！」

「そ、そうですか……それは良かったです！」

もはやRPGの楽しみ方じゃないけど、それはそれでいいことだ。この世界の楽しみ方は、人それぞれなのだ。

「じゃあ、私はそろそろ行きますね。楽しんでいてください」

「はい！ ありがとうございます！」

そう言っただけで彼女と別れ、私は再び巡回を再開する。

痴漢対策について色々と考えながら、ふらふらと街中を回った。

「はあ……疲れた」

開始から、4時間。つまりは、現実時間で1時間。

色々な厄介ごとやら何やらを片付け、ひと段落つけた私は、精霊の首む喫茶店で一息ついていた。

4時間も経てば精霊たちも慣れてきたようで、段々と呼び出しも減ってきており、私もようやく休む時間が得られたところだ。

先ほど、奈津たちにも連絡を取ったところ、彼女達もようやく休む時間が得られたらしい。お互い大変だねー、なんて言い合っていた。

クォーターの一日は30時間。そのため、毎日同じ時間にしか口グイン出来なくとも、毎日ちよつとずつプレイできる時間帯が変わることになっている。ちなみに、テストの開始は、クォーター時間で正午からなので、今は午後の4時、ちょうどおやつ時、と言った所だ。

「ハル、お疲れさまですう！」

この喫茶店の主である精霊 トリイが労いの言葉をかけてくれる。私は彼女がテーブルに置いたグラスの、果汁100%ジュースを一気に飲み干した。何の果汁かは知らない。何らかの果汁だ。ちなみにこういう街だけじゃなく、果物や野菜などの作物を作っている村なんかもこの世界にはある。サブクエストしかないから、プレイヤーはあんまり行かないだろうけど。

「ふっはあ、生き返る！ 美味しい！」

「あはは、ありがとうございます！ ハルも、ぜひぜひっ、頑張ってくださいねえ〜！」

「ありがとー！」

トリイが私から離れたのを見計らって、テーブルに突っ伏す。街の隠れた名店、のような位置づけであるこの場所にはユーザーの姿はなく、私は存分に休息を取ることができた。

私が最初に身体を作り、名付けた5人の精霊たちは、みんな“隠れた”の主となってもらっている。喫茶店とか、図書館とか、薬屋さんとか。

それは、サブクエストのためだったり、「ある目的」のためだったりだ。隠れたと言っても、少し街を見て回ればすぐに見つかる位置にはあるが。

「ごろごろ、とテーブルに身を預けながら、これから先のことを考える。今日だけでも色々と不具合、というかやるべきことは色々見つかったので、その辺りを改善しなくては。」

やるべきことを脳内で指折り数えていく。片手を越えたあたりで、げんなりして、私はそれをやめた。

と、そんなことをやっていたら、精霊から新しい通信が入った。

『ハル、もし暇だったらでいいんですけど、こっちに来てほしいです』

「あ、判った、すぐ行くね」

ペンタの声に、私は彼女の店へと急行することを決める。私が名付けた数少ない子だけに、何とというか、鼻肩してしまうのだ。

「トリイ、私行くねー」

「はあい、頑張ってくださいねえ〜」

トリイに代金を払い、ぱっぱとレポートでペンタの店に向かう。相変わらず彼女の店は、様々なものでごった返していた。

「やっほう、ペンタ!」

「やっほうっす、ハル!」

挨拶してみれば元気そうな返事が返ってきたので、どうやらトブルがあつたとかではなさそうだ。私は首を傾げながら、彼女に問いかけた。

「そんでどしたの？」

「ちよつとした報告つす。いい奴見つけたんすよ、一人っすけど」

「え、本当!？」

思わぬ言葉に、私は驚きに声を上げる。まさか初日から有望株が見つかるとは思わなかつた。

「どんな感じの人？」

「んー、お人よしっすかね？」

「お人良しかあ……まあ、それはいいかな。裁量でどうとでもなるし」

私だってお人よしだしね! ……言つてて虚しい。

「ちなみに名前は「シュン」って言つっす」

「おつ、四季にぴつたり! ありがと、ペンタ! あとでプレイヤ情報、調べてみるね」

頭の中のメモ帳に、せこせこメモする。シュンシュンシュン…

…よし覚えた。

「……バイト候補、第一号かあ。なつてくれるかなー？」

「どうっすかねー？」

本稼動時には、きつとユーザーが増えるに違いない。その時には、きつと私や精霊だけじゃ色々対処しきれなくなる。精霊たちも頑



張つてはいるが、NPCという立場ではどうにもならない事態もあるだろう。

精霊たちだと、犯罪とか、そういう概念もあんまり無いし、微妙な機微があんまりよく判らなかつたりする。あと、ゲーム外のことも、当然範疇外だ。

だから、正式稼働の前に、バイトを雇おうと思っている。現実時間で時給5千円（予定）。そしてそのバイトにGM権限を与え、トラブル解決をもらう。ゲーム内では四時間になるので、実質的にはちよつと高めの時給にしかならないが、でも現実時間で考えれば短時間で稼げるバイトではある。

だが、多少のGM権限を渡す以上、人柄は見極めなくてはならない。横暴な人間だつたりすると、余計な問題になってしまう。

そのために私は、五人の精霊に見極めを頼んだ。ただのNPCにしか過ぎない彼らが信頼できるというのなら、大丈夫だと思うから。

「んー、どうなるかなー？」

「どうなるっすかねー？」

二人で首を傾げながら、そんなことを語り合う。

吉と出るか凶と出るか。そもそも引き受けてくれるのかどうかすらも、未知数だが。

ま、なんとかなるでしょう、うん。

街から外に出た青年は目を細め、広大なフィールドを見渡す。視界にあるのは風になびく草原。それと、左手の方には大きな森もあった。

「森は、俺にはまだ早いつて言ってたな」

青年は、自らに色々と教えてくれた少女の言葉を思い出しながら、草原の方へと足を向ける。

草原にはプレイヤーだと思われる人影が、数十はある。しかし草原の広さの前には微々たる人数でしかなく、青年が経験値稼ぎをする余裕は十分にあるようだ。

青年は、街近くから少し離れ、人気の殆どないところまで足を伸ばす。

「お、出た……」

四方10メートルほどは誰もいない場所に陣取った青年の前に、早速魔物が出現する。

何も無いところから無為に現れた魔物に、（これは妙にゲームっぽいな）と、今まで見てきた世界にそぐわないものを感じながら、青年は右手で初期装備のショートソードを抜き、臨戦態勢を取った。

青く透き通ったゼリー状の魔物は、バランスボール大の柔らかい身体を威嚇するように伸ばし、青年を押し潰さんとする勢いで襲い掛かってくる。青年はそれを、ゲーム開始時点でランダムに割り当てられていた補助スキル『ハイジャンプ』で避けた……の、だが。

「うおおおおッ!?」

青年の口からは、情けない絶叫が漏れる。

彼の高度、約4m。想定以上に、飛び上がってしまったらしい。

「ハイすぎんだろオイ！ やべえやべえやべえって！ うあああやべえええ！」

流石に生身でそこまで飛び上がれば、恐怖も覚える。青年は冷や汗を覚える嫌な浮遊感に、わけのわからぬまま同じ言葉をただ連呼した。

しかし魔物は青年の焦りに手心を加えてくれるはずもなく、あとは落ちるだけの青年を、身体を震わせ待ち受けている。

(呑まれる！)

瞬時に青年は、魔物に受け止められ、そのまま取り込まれ、絞め殺される自分を想像する。不意に脳裏には、デスペナの四文字が浮かぶ。

経験値も、所持金額も、まだ初期のままだ。だから、本当なら、デスペナルティなんて気にしなくてもいい。

だけど、折角ペインタに回復アイテムを貰ったのだ。そして、「頑張れ」と応援されたのだ。すぐに街へと死に戻るなど、彼にとってあまりにも恥で、情けなかった。

「初っ端から、やられて、たまるかつ！」

彼は咄嗟に、持っていた剣を右手から両手に握り変え、落下する勢いのまま振り下ろす。

「でえええいつ！」

剣は魔物に呑まれ、あっさりとその身体を二つに割った。青年が拍子抜けするほどの、呆気なさだった。

着地のことを全く考えていなかったが、スライムの残骸がちょう

どクッションとなり、ダメージはなかったよう。

「おおっ……」

無事、初戦闘を終えた青年は、バクバクと高鳴る心臓を押さえ、ほっつと息を吐く。一度深呼吸をしたところで、彼の尻に敷かれたゼリー状の魔物は光の粒子となり、青年のつけた腕輪へと吸い込まれていった。

やがて落ち着いた彼は、ぱつと破顔する。

「……おもしれー！」

現実では出来ない体験に、青年の心が躍る。魔物を倒すことにもう少し抵抗を覚えるかと思っていたが、パニックでそれどころではなかったようだ。

魔物という存在だけ、やけにリアリティが薄いのは、きっと敵を倒すという行為への抵抗感を減らすためなのだろう。青年は先ほど感じた疑問をそうやって飲み込む。

「よっしゃ、次こい、次！」

調子に乗った青年の前に、三匹の魔物がいつぺんに現れたのには、流石に前言を撤回したくなった。

ちなみにその後どうしたかと言えば、ハイジャンプを駆使し、飛距離と高低差を利用して、どうにか倒したようだ。ハイジャンプは、攻撃スキルのように派手なエフェクトも強力な威力も無いが、彼にとっては地味に当たりスキルだった。

調子に乗って二時間ほど経験値稼ぎに勤しんだ彼は、休憩のために街へと戻ってきていた。

肉体的な疲れは、さほど無い。だが、どこか気疲れはある。とはいえ、レベルも3まで上がり、気疲れ以上に喜びの方が大きいようで、彼はほくほくとした表情を浮かべていた。

「所持金額も増えたし、飯でも食べようかな……って、ゲームの中で飯とかも変な感じだな」

呟きながら、一番最初に目に付いた食堂に入る。

食事はHPとMPを回復させる効果があるが、割合回復のため、HPの少ない初期の内は薬を買ったほうが安く済む。だが、やはり食事を取った方が休息になるからか、食堂では多くの人が食事をしていた。

「いらっしやい！ 旅人さん、一人？」

「ああ」

「じゃあこつちどーぞっ！」

元気そうなダークエルフの少年が青年を迎える。少年の案内に、青年は窓際の席に着いた。メニューから適当に頼んで頼み、料理の到着を待つことにする。

渡されたおしぼりで、顔を拭く。程よい熱さが、肌に気持ちよかった。

(……ってどこのオッサンだ、俺は)

ついやってしまった行動に自嘲してから、拭いた面を内側にして折り、テーブルの上に戻す。

(……あ、アイツら)

ふと、厨房に近い方の席に、見覚えのある二人組みが座っていることに青年は気付いた。ペンタの店で瓶を割った二人組みだ。

青年は、ちらちらと二人に視線を向ける。何故かは判らないが、二人は酷く落ち込んでいるように見えた。

(……どうしたんだ?)

青年は首を傾げながら、小さく漏れ聞こえてくる彼らの声に耳をそばだてる。

「……まさか、ゲームの中で借金を負うとは」

「これが他人事なら超ウケるんだが、自分のことだしなあ……」

(借金!?)

思わず青年の顔に驚愕が浮かぶ。一体どういうことかと、彼らの言葉に更に集中したが、彼らはその後すぐに食堂から出て行ってしまい、全く事情は把握できなかった。

「……借金、なあ?」

腕組みをして、思考を巡らせる青年。

だが、しばらくの間、一人であれこれと考えても判らなかったのだ、あとでペンタに聞くことにして、運ばれてきた食事を楽しむことにした。

食事を終えた青年は、先ほどの男性二人組みについて情報が無いかと、薬の補充も兼ねて、ペンタの店に行くことにする。

しかし改めて行こうと思うと、意外と入り組んだ場所であり、少し迷ってしまった。

「ペンタ、いるか……あっ」

十五分ほどかけて、どうにか辿りついたペンタの薬屋。中から話し声がすると思えば、そこにはハルが居た。

思わず入り口で立ち止まり、驚きに目を開く青年。彼女も同じように驚いた表情を浮かべた後、ペンタへと視線を向ける。

「あ、シユンおにーさん、よく来たっす！」

「……ほー、じゃあこの人が？」

「そうっすよー」

ハルに、どこかじろじろと値踏みされるような視線で見られ、青年は気まずげに肩を竦める。

「何か俺の顔についてます？」

「あ、違う違う。ごめんね」

青年が問えば、ハルは愛想笑いを浮かべそう答える。

誤魔化された？ と青年は一瞬思ったが、何となく気後れして、それ以上深く問うことも出来なかった。

「あ、そだ。……えっと、ペンタ、今大丈夫か？　もしかしてハルさんと何か話してた？」

「いや、大丈夫っすよ。それで、どうしたっすか？」

「ん、なんか、さっきここに來てた二人組みが借金とか言ってたから、何か知ってるかな、と思って……」

青年の問いに、合点がいったようにペンタは「あー、それっすか」とにんまり笑う。その笑みに、何故か青年はぞくりと背中に良くないものを感じながら、続きを問う。

「どうも、“たまたま”入った武器屋で、高価な武具を“偶然”壊しちゃったらしく、修繕費を請求されたらしいっすよー？　持ち金足りなくて、借金状態らしいっすけど」

「え……」

青年は思わず固まった。そんな彼に構わず、少女は笑顔で続ける。

「ちゃんと返さないと、この街じゃろくに買い物出来ないっすからねー。ま、外で100体も倒せば返せる金額っすし、二人ならすぐ終わるっすよ。大丈夫だとは思っけど、おにーさんも気をつけてくださいっす!」

(100って十分多いだろ……)

からからと笑うペンタに、青年の頬がひくひくと引き攣る。何故か、このゲームの製作者であるはずのハルも、引き攣った表情を浮かべていたが。

リアルだリアルだ、とは思っていたが、こういったイベント？なんかもあるとは、恐ろしい世界観である。

とはいえ、店のものを壊したのはあの男性二人だろうし、実際に二人の態度を見ていた青年は、彼らに対して同情することも出来なかったが。

青年は(これからもつと足元には気をつけよ……)、早速あの二人を反面教師にするのだった。

「ペンタって、意外と根に持つよね。モノにお菓子取られた時も、恐かったし」

「ハル、なんのことっすかー？」

「……なんでもない。ま、ほどほどにね」

「わかってるっすよー。というより、“ウチは”何もしてないっすしー」

「ん？」

邪気のない笑顔のペンタに、引き攣り笑顔のハル。その脇で、一人判っていない様子の青年であった。



四季編 25+

425 : ななしはもうしんでいる 201X/XX/31(金)

19:19:56 ID: Aoicke99s

つか、民家の実装もすげーよな

こないだ親しくなったNPCの家に行ったんだけど、普通に生活観  
ぱりぱりだったし

正直、色々漁りたかったですw

仲良くなった住人に嫌われたくないからやらなかったが

427 : ななしはもうしんでいる 201X/XX/31(金)

19:23:26 ID: TozocPray

<<425

盗賊プレイ楽しいぞwww民家から盗み放題だし、やりたい放題  
だwww

捕まったら現実時間で三日間牢屋の中だけだな！www

RPGなのにwwなんwwにもwwww出来ずにwwwwうえっ

えwww

勇者道は辛いぜwww

428 : ななしはもうしんでいる 201X/XX/31(金)

19:26:49 ID: eL93y7co9

<<427

それを知ってるということは……(ゴクリ)

4 3 1 : ななしはもうしんでいる 2 0 1 X / X X / 3 1 (金)  
1 9 : 3 1 : 1 1 ID : T O z o c P r a Y  
<< 4 2 8

クォーターの勇者とは俺のことだwwwwww捕まったけどwwwwww  
ログインするたび牢屋のなかだね！

俺の貴重な3日wwwwww返してwwwwww

脱獄とかwwwwww頑張ったけどwwwwwwあれむりwwwwww

……いやホントすみませんでした盗みラクショーとか思ってたすみま  
せんでした裏技k t k rとか思いましたでも勘弁してくださいもう  
やりません

まあ、獄中で囚人と色々話してたら、スキルゲット出来たからいい  
けどw

4 3 2 : ななしはもうしんでいる 2 0 1 X / X X / 3 1 (金)  
1 9 : 3 5 : 2 8 ID : E d + h s i 9 0 c  
<< 4 3 1

スキル！？

なんwぞwそれwwwwww

正直スキルは羨ましいが、でも三日間閉じ込められるのはちょっと・

・  
・  
w

4 3 3 : ななしはもうしんでいる 2 0 1 X / X X / 3 1 (金)  
1 9 : 3 5 : 5 1 ID : e L 9 3 y 7 c o 9

三日は厳しいなww

でも捕まるまで盗み放題？ 所持金額とかどうなったん？

つーかスキルつてwww  
そういう楽しみ方？もあんのがスゲーよマジ

435 : ななしはもうしんでいる 201X/XX/31(金)  
19:42:16 ID: ic83SXjk  
盗賊プレイ面白そう  
やりたくはないけど

そついやwikiに書いてた「魔法スキル：テレポート」の  
取得イベント試そうと思ったんだけど、発生しなかったんだよなー  
何でだかわかる？

436 : ななしはもうしんでいる 201X/XX/31(金)  
19:46:36 ID: jAbaeExbm  
<<435  
wikiを良く嫁

438 : ななしはもうしんでいる 201X/XX/31(金)  
19:46:40 ID: ProIog+09  
<<435  
Wikiにも書いてるが、クエストの発生条件がまだ不明慮で確定  
してない  
時間・パラメータ・内部パラメータ（好感度とか）、どれが影響し  
てるのか、全然わからん  
ぶっちゃけ絶対数がたりん

テストの終了まであと二月半あるけど、全然極められる気がしな

いw  
イベントありすぎなんだよー

440 : ななしはもうしんでいる 201X/XX/31 (金)  
19:50:01 ID: 7rAnndomy  
ランダムだったりして

441 : ななしはもうしんでいる 201X/XX/31 (金)  
19:53:28 ID: eL93y7co9  
普通にありうるw

443 : ななしはもうしんでいる 201X/XX/31 (金)  
20:03:08 ID: ProIog+09  
ところで テスト開始から半月経つけど、みんなレベルどれくらい  
まで上がった？

444 : ななしはもうしんでいる 201X/XX/31 (金)  
20:05:21 ID: E96cieoPm  
<<443  
街で会話ばっかしてるからまだ10

445 : ななしはもうしんでいる 201X/XX/31 (金)  
20:05:56 ID: 97gckiseo  
やっと23に上がったとこ  
デスペナが痛かった

446 : ななしはもうしんでいる 201X/XX/31(金)  
20:07:42 ID: tOEICplh5  
23すげえw

<デスペナが痛かった  
あるあるあ r

447 : ななしはもうしんでいる 201X/XX/31(金)  
20:11:53 ID: eL93y7co9  
気をつけてればあんまり死ぬことないけど、  
やっぱり厳しいよなw

とある掲示板のとある板にある、「【世界初VRMMO】クォー  
ターズ・オンラインスレpart7【テスト】」スレッドを見な  
がら、青年はにやにやと頬を緩める。

彼はマウスホイールをカリカリと回転させながら、1レス1レス  
に同意し、または感心しながら、読み進めていった。

次のログイン可能時間まであと十分ほど。それまでの暇つぶしに  
は、もってこいだ。

「俺は16まで来た、っと……」  
ボタンをクリックし、書き込みが反映されたことを確認してから、  
青年はほっと一息つく。

テストが開始された日から、ちょうど二週間。

青年はめいつぱい、世界を楽しんでいた。メンテナンスでログイン出来なかった日を除けば、ほぼ毎日、限度時間までログインしている。

コツコツとレベル上げを重ね、今はレベル16まで上がった。これでもかなりの時間を経験値稼ぎに費やしているはずのだが、トップ軍団のレベルは25に近いという。

ログイン時間は同等なはずなのに、どうやったらその域までいけるのか、青年には不思議だった。

街の探索などせず、ログイン時間の全てを経験値稼ぎに当てればそうなるのだろうか。

「でも、レベル上げだけつても寂しいしな」

ペンタの店を拠点として、住人（最近はNPCのことを、「住人」と呼ぶプレイヤーが大多数だ）の知り合いも増えた。モノという少年と一緒にフィールドで魔物を倒したり、テトラという青年の管理する図書館で魔法スキルを覚えられる本を借りたり、ペンタと一緒にトリイという少女の喫茶店でお茶したり。

これは、青年だけが特別な経験をしているわけではない。多少なりとも街で過ごすプレイヤー全員が、何らかのイベントを経て、住人たちと交流を深めている。

例を挙げるとするならば、某ダークエルフの人は順調にエルフハイルムを築き上げているとか、借金持ちだった男性二人は借金返済を頑張る内に店のツンデレ看板娘と打ち解けたとか……まあそんな感じであった。

「今日はどうすっかなー」

青年はにやにやとした表情を隠そうともせず、考える。

今現在、彼が経験値稼ぎをしている場所は、とある洞窟だ。今日もそこに行こうか、それともモノを誘ってもう一つ上のランクの場所まで冒険してみようか。

やれることは沢山で、まだまだ見ていないものばかり。やってもやっても世界が広がる感覚はなくならない。それが青年にとって嬉しくて、楽しくて、子供みたいにはしゃいでしまうのだ。

びび、と携帯のアラームの音が鳴る。青年はぱつと表情を変え、慣れた手つきでVRをセットし、今日もゲームを開始した。

ログインと共に目を開けば、視界には見慣れた街が広がっている。いつもと変わらぬ賑わい。そして、行き交う人々。青年は未だ枯れないわくわくを胸に秘めながら、いつものようにペンタの店を目指した。

「ふっ………！」

補助スキル『ハイジャンプ』を使用し、家屋を飛び越えた青年は、道程を大幅にショートカットする。

街中でも補助スキルであれば使用できることに気付いてからは、青年はいつもこうやってペンタの店まで向かっていた。彼女の店は裏通りの路地にあるため、道を遠回りをしなくては辿り着けなからいからだ。

「あ、空飛ぶ人だ！」

「おーい！」

しかし、そんなことを繰り返していれば、当然住人の皆様にも知

られてしまうわけで。今では彼らの間で、一種の名物とまで化していた。

青年を指差して手を振る住人たちに、青年は照れくさそうに笑う。空中で軽く手を振り返し、彼は先を急いだ。

「ペンター、いるかー？」

「あ、おにーさん、こんにちはっすー」

いつものように中に声を掛けながら、彼女の店に入る。店内には、いつかと同じようにハルも居た。

「あ、ども」

「お、シユンくん、こんにちはー」

青年とハルはお互いに、慣れた様子で挨拶する。

というのも、青年とハルは、行動範囲というか、交友範囲が思い切りかぶっているらしく、度々会ってしまうからだ。

ペンターの店で話し込むハルと出会い、喫茶店でのんびりするハルと鉢合、図書館で爆睡するハルに出くわした時には、さすがに青年も笑いたくなった。いつの間にか顔見知りになり、どんと仲良くなっていた二人である。

「今日も精がでるねー？」

「そりゃあそうですよ！　すごく楽しいですから！」

「楽しんでもらっているようで何よりだよ！」

青年の心からの言葉に、ハルは心底嬉しそうに微笑んだ。

青年は一度、ハルと仲良くなり始めた頃に、聞いたことがある。製作者なのにゲームやるんですね、と。

彼女はそれに、笑って答えた。

みんなが楽しんでいるところを見るのが楽しいから、と。



青年は疑問に思ったことがある。どうして四季は、わざわざニコニコなんかで宣伝したのか、と。これはネットでも、よく疑問に上がることだ。彼女達の技術力があれば、どんな企業にでも引っぱりだこだろうに、何故わざわざ魑魅魍魎やら厨房がはびこる動画サイトなんかに見れたのか、と。

だけど彼は、ハルの答えを聞いて、なんとなく判った気がした。きつと、四季は純粹に遊びたかったのだ。企業に属すれば必然的に、権利とか、競争とか、利益とか、そういうしがらみが出来てしまうから。

そういうのを、全部抜きで、彼女たちは自分たちに楽しんでほしかったのだ。

彼はそう悟って、更にこのゲームがもっと面白く感じるようになった。

この世界は、楽しむための世界だと理解したから。

「ねー、シユンくん。あのさ?」

「はい、なんですか?」

「バイトって、やってみたくない?」

だから、ペンタも交えた雑談の最中に、不意に彼女からGMのバイトについての話を持ちかけられたとき、青年は考える間もなく、その話を断った。

「俺は、純粹にこの世界を楽しみたいですから」と。

話を持ち出したハルはあまりの即答に一瞬きよんとして、そっかあ、と残念そうに、だけどどこか嬉しそうな笑顔を浮かべる。



それぞれの国には特色がある。

亜人の国リーンディアは自然豊か、ヒトの国アグナは西洋風、精霊の国ロムネスカは花や水晶などで作られた幻想的な場所、古代文明の国クランクは遺跡街が広がっている。

それらの国を、一度でいいから実際に見てみたい、と思うのは当然のことだろう。

「頑張つて！……ん？」

不意に、ハルが片手で耳を押さえ、あらぬ方向に視線を向ける。

まるでインカムか何かをつけているような仕草だと、青年は思った。彼女の行動に疑問を抱いた彼は、真剣な面持ちのハルをじっと見つめる。

数秒の後、驚愕に瞳を揺らした彼女は「ええええええ！？」と素っ頓狂な声を上げた。ペンタと青年もその声にとても驚き、目を丸くするのだった。

ばーちやるりありていは、たいへんですね。

思わずそうやって棒読みしたくなるくらいには、テストが始まってからのこの二週間は大変だった。とりあえず、行ったことは以下の五つだ。

- 1、自然保護
- 2、セクハラ対策
- 3、自警団の設立
- 4、初心者窓口の開設
- 5、第二次 テスター募集

それぞれ読んだままなので説明するまでもないと思うが、一つずつ解説しようと思う。

まず一つ目。自然保護。

これは私が一人で請け負った。

燃やされた木は蘇生魔法で復活させた上で、森一帯に火属性への魔法耐性を付与した。ついでに効果延長の魔法を重ね掛けし、数ヶ月ほどは保つようにした。前は数日の延長が限界だったので、一応は成長したんだなあ、としみじみ実感したりしなかったり。

……本当は、世界の理自体を弄って、魔法じゃ森が燃えないようにしようとか思ってたんだけど、精霊たちから猛批判を食らいました。

無かった概念（魔物について）を足すのはまだしも、元からある法則に関してを弄ってしまうと、バランスが崩れて精霊が存在できなくなってしまう可能性もあるらしい。いやあ、ホント不勉強でこめんなさい。

次に、セクハラ対策。

これは私と奈津の二人で担当した。胸や腰周りに見えない壁を作るだとか色々考えたけど、そうすると友達同士でじゃれあうとか、そう言ったことにまで制限がかかってしまう。それに腹フェチとか、足フェチとか出てきても困るし。

フレンド登録した相手にはOKにするとか、そう言ったことも考えたのだが、ゲームマネー（もしくはリアルマネー）を稼ぐための「ぱふぱふ屋さん」なんかが出てきたらマズイのでやめた。クォーターズ・オンラインは18禁ではありません。

なので、いやらしい目的を持って相手（PC、NPC問わず）に触ろうとすると、“何か良く判らないけど凄く嫌な気持ちになる”という効果が出るように、VR魔法を変更した。

奈津（実験台）に試してもらったところ、何か良く判らないけど凄く嫌な気持ちになって、相手に触る余裕なんて全くなくなったぞうだ。

私も試したら何か良く判らないけど凄く嫌な気持ちになった。言葉には表しづらいのだが、あえて表すとすれば「うじゃうじゃと蟲がうごめくバケツの中に手を突っ込む感覚」というか。正直、トラウマになりそうなくらいの感覚だった。奈津ごめん。

さすがにこの感覚の中、女体へ突撃する奴も出ないと思う。……これでセクハラ被害出たら、どうしようかなあ。

三つ目は、自警団の設立。

これは亜紀と冬香に一任した。

精霊たちの中から血気盛んなのを集め、自警団を纏め上げたそう  
だ。団の規則や行動指針は亜紀が作り、それを冬香が徹底させた。  
後で様子を見たらどっかの軍隊みたくて恐かった。

何をしたらそうなるの、冬香……？

団長と副団長である精霊には、イエローカードを付与する管理者  
権限を預けることも決めた。こうすることで、完全ではないものの、  
私達の負担も大幅に減るだろう。

ただ、精霊は色々と抜けている。基本的に善意の存在だ（一部例  
外有）。だから、きつと足りない部分が出てくると思う。今のとこ  
ろ人数も少ないから大丈夫だが、将来的に彼らだけでゲームを管理  
するのは難しいだろう。……いや、精霊がみんなペンタみたいな性  
格になれば、ゲーム管理も普通にこなしそうではあるが。

そして初心者窓口の開設。これも、亜紀と冬香に任せた。という  
より、自警団の本部を、初心者窓口と兼用することになった。

……うん、チュートリアルはありません！ と豪語したはいいが、  
問い合わせが多発しすぎて阿呆らしくなったんだよね。ある程度の  
指針は必要だということで、色々聞けたり、資料が置いてあったり  
する場所を用意すること。

……流石に、説明書も読まず、メニューの出し方も判らないまま  
フィールドに出て、ばっさばっさと魔物をなぎ倒し続け、そのまま  
時間切れでログアウト、なんてことになる人が出るとは思わなかつ  
たんだよ……。精霊たちと交流する気皆無だな。それもまた、楽  
しみ方の一つだけ。

最後に、第二次 テスター募集。これは奈津の担当。  
幸いなことに、テストの初日から、私たちの世界は、結構いい評価を貰った。ニコニコ動画でも「面白い」とか「凄い！」とかいうコメントが多い。それ自体は嬉しいのだが、そのせいで、ものすごい量の問い合わせがサイトに届くようになったのだ。  
いわく、「自分もテスターやりたいです!」「次のテストはいつですか!?」「テスターしてやるから道具送れ! もちろん給料払え!」「テスターの二次募集無いのー?」などなど。

そんな内容が数百通を越え、某掲示板でも叩かれ始めたあたりで、第二次 テスターの募集をすることに決めた。

元々 テストは三ヶ月間の予定だったため、「終了日程は変えられないが、今からでも世界を体験したい人」という募集内容で、数日間募集したら何かたくさん応募が来た。簡単に言くと、なんと初回の倍以上。

やはり、詐欺だとか、住所の収集だとか、そう言った行為を疑った人が多かつたらしい。

とりあえずその人たちは、テスター後期組として、来月の中旬からログインしてもらうことにした。人数を増やしても対応できるのか試してみなきゃいけないし、ちょうどいいだろう。

とまあ、二週間で色々に対応していたら、非常に疲れてしまったというわけで、今日はゲーム管理のあれこれは忘れることにしました。変更を加えたところも、大体安定してきたみたいだし。

「奈津と亜紀は、これからフィールド行くんだよね?」

アグナの城の客室で、いつもとは違うキャラになった二人に、私

は声をかける。奈津はキツネ耳の女性姿で、亜紀はローブの少女姿だ。

何故城にいるかというと、私たち、というか権限持ちプレイヤーがクォーターにログインする時は、この部屋から開始することになっているからだ。

二人は私の言葉に頷く。

「うん、行ってくるよー！ この剣でばっさばっさと切り倒してくる！」

「たつくさん魔法撃ってくるからね！」

「あはは、頑張れー」

管理を忘れて真っ先にやるのが「魔物退治」な辺り、ストレス溜まっていたのかなあ、なんて思ってしまう。これからは楽になるはずだし、お互い頑張ろうね。

ちなみに冬香は、勉強道具を持ち込み、城の図書室内で勉強中。最近勉強が疎かになっていたので、時間の流れが違うこの世界で勉強するらしい。

……冬香はホントすごいと思う。こうやってちゃんと努力するか頭いいんだよね。

え、私？ やるわけないじゃないっすかー！

部屋を後にした二人を見送ってから、私はしばしの間考える。

冬香のように勉強など論外だし、奈津や亜紀のように魔物退治とこのもつまらない。魔物退治はクオくんとの日常だったし。

結局、私はいつものようにペンタのところで駄弁ることに決めた。ペンタは中々情報通なので、ゲームの中の情勢が判って面白いのだ。



……たまに恐いけどね。

「やほー、ペンタ」

「やほーっす、ハル！」

奈津たちとは違い、いつもと同じキャラで彼女の店までテレポーターした私は、これまたいつも通りに挨拶を交わす。

「最近はどうな感じ？」

「うーん、そうっすねー」

カウンターの近くにある椅子を借り、頬杖をつきながらペンタの話聞く。

連続空き巣犯が無事に出所したとか、借金を負った二人と看板娘の間のラブコメディとか、最近のリーンディアの情勢を脚色を交えながら話してくれた。いつもの事ながらペンタの引き出しはかなり多いと思う。

あとは、この国以外の話なんかも色々教えてくれた。アグナでは城に入ろうとして度々掴み出される人が居るらしい。

緑色の服とか着てオカリナ吹いてなかった？ と聞いたら、ペンタに不思議な顔をされた。

「ああ、そういえば」

ふと、思い出したようにペンタが口を開く。

「エルフさんが、アグナとの国境越えたみたいっすね。アグナに居

るっていうエルフを求めて」

「……うわー、エルフさんすげー」

ペンタの話に、思わずあんぐりとしてしまう。エルフさんは私たちの間での通称で、確かプレイヤーネームは「ミーにゃ」だったかな？

あの人、会話中心プレイだったはずなのに、どうやって国境越えたんだろう。逃げスキルとか持ってたっけ？

「アインとモニカが手伝ったみたいっすね。スパルタ上げとかしてたみたいっすよ」

「ああ、あの爆裂兄妹。あれ、でもエルフさんハーレムの一員だったっけ？」

「最近組み込まれたらしいっすよー」

「エルフさんホントすごい……どうやってあの三癖くらいある子たちを一員に出来るのさ……」

「エルフさんっすからねー……似顔絵とか描いてもらおうとポイント高いみたいっすね。うちにそういう文化なかったっすから」

「あー、なるほど」

などと二人でしみじみと色んなことを話していれば、店の入り口から見知った顔が現れた。

「ペンター、いるかー？」

「あ、おにーさん、こんにちはっすー」

シユンくんだった。彼は私を見ると、頭をぺこりと下げてくる。

二人の挨拶に遅れ、私も挨拶を交わした。

「今日も精がでるねー？」

「そりゃあそうですよ！　すごく楽しいですから！」

「楽しんでもらっているようで何よりだよ！」

シユンくんの言葉に、思わず笑顔になる。うむうむ、楽しんでもらえているようで、本当に何よりだ。

彼もカウンター近くの椅子を引つ張り出し、私から少し離れた位置に座る。

「そういえば、シユンくんはレベルどれくらいまで行ったの？」

「ようやく16ですねー」

「おー、中堅プレイヤーだね！」

現在のトップレベルは確か22だったかな？　といってもリーンディアのことしか把握してないので、他の国のプレイヤーについてはわからないけど。

「ふっふっふー、ウチのお陰っすねー！」

「感謝してるよ、ペンタ」

「……そう素直に礼を言われると照れるっすね」

「ははは、何だよそれ！」

何かこの二人はこの二人で、仲いいな。

くう、ペンタの名付け親は私なんだぞ！　ペンタが欲しければ私の屍を越えていけ！

なんてね。

二人がわいわいと話している脇で、私は妙に微笑ましい二人をぼんやりとした面持ちで見つめる。

色々大変だったけど、この光景を見られただけで、この世界を作った甲斐はあった、なんて思ってしまう。今までの疲れが、じんわりと溶けていくような気持ちにさえなった。ああ、癒されるわあ……

…。

二人の談笑がひと段落したところで、私はふと思い出して、彼に問う。

「あ、そだ。シユンくん、あんまり話題にしたいくないんだけどさ。大体毎日、限度いっぱいまでログインしてるみたいだけど、大丈夫？」

「んー、あー、大丈夫です。バイトやめましたし」

「やめた！？ え、それ大丈夫なの！？」

「元々、時間を潰すために始めたバイトでしたしね。三ヶ月間はこちでめいっぱい遊ぶつもりですよ！」

予想外な彼の台詞に、目を見開く。バイトやめたって、え、それはいいの？ 大丈夫なの？

あっけらかんとした彼に、私は思いがけなく悩んでしまう。「時間を潰すため」という彼の言葉を信じるのなら、別に問題じゃないんだろうけど……。

あれ、でもこれはもしかしたらチャンスかも？

「ねー、シユンくん。あのさ？」

「はい、なんですか？」

「バイトって、やってみたくない？」

思い切って、彼に提案してみる。本当はもつと後に、具体的にはテスト終了前後に言うつもりだったのだけど、バイトもやめたということだし、いい機会だったのだ。

簡単にどういうバイトか説明し、彼の答えを待つ。彼は、即答し

た。

「いや、いいです。俺は、純粹にこの世界を楽しみたいですから」  
そのきつぱりとした答えに、一瞬目をぱちくりとさせてしまう。  
彼が、あまりにも即断だったからだ。

……でも、そうか。純粹に楽しみたい人にとっては、管理者権限  
なんか不必要、むしろ余計なものかもしれない。じゃあ、こう  
やってクォーターの中で勧誘しても意味が無いのかも。

私は今更ながらに、ようやくそう思い当たって、自分の今までの  
思い込みに小さく笑ってしまった。

「男の人って、みんな俺TUEEEEがやりたいんだと思ってたよ。  
偏見だったかな？」

あまりにも即答で断られたのが何となくすぐたくて、そう話  
を逸らす。シユンくんもそれに乗ってくれたので、少しだけだけど  
気が紛れた。

「あ、そういえばね、リーンディアからアグナに行った人が出たみ  
たいだよ？ 国境付近は敵のレベルが結構高いから、もつと先だと  
思ってたんだけどなー」

「へー、早いですね？」

「ホントだよなー。シユンくんも頑張って国境越えてみてね。他の  
国も本当にいいところだから」

「ええ、俺も早く行ってみたいです」

「頑張つて！」

彼のキラキラと生気に満ちた目に、私は応援の言葉をかける。彼

は頷いて、それに返してくれた。

（チハル！）

（……ん？）

そんな会話の最中、不意に脳裏で響く声。フェンリルからの心話だった。

そういえば心話を使うの久しぶりだなあ、なんて思っていたら。

『街が魔物の大群に襲われて、クオがそれに……ああもうこんな悠長にしとる場合じゃないの……とにかくっ、クオが危ないんじゃない！』  
「ええええええ！？」

切羽詰った響きを持った言葉に、私の口からは思わず上ずった声が漏れた。

魔法ノ書編 1 (前書き)

あけましておめでとうございます。今年も宜しくお願い致します。

久方ぶりの更新、本当に申し訳ありません。

また、諸事情により、感想の返信を休止することにいたしました。申し訳ないです。感想はすべてモチベに繋がっております。感想を下さった方々、本当にありがとうございます！

奇声を上げ、狼狽する私。クオくんが危ないって、どういこと！？

ペンタとシユンくんからの怪訝な視線が刺さるのも構わず、フェンリルから更に情報を得ようと、質問を重ねる。

(街が魔物に襲われてるって……シルヴァニア！？)

(いや、王都じゃ)

(はあ！？ また！？)

まさかの言葉に、驚きと呆れが浮かんでくる。だって、そんなの以前とほぼ同じ状況じゃないか。結界どうしたよ、結界。

(こつちもざつくりとしか聞いておらんから、詳細はわからん。が、魔物は前の比でなく王都に入り込んでおるらしくての、救援を求められた)

(ああもうつ、わかった、今から行くっ！)

(こら待て、チハル！ 言ったじゃろ。“魔物は前の比でなく王都に入り込んでおる”と。お主一人じゃ、到底どうにもならん)

その言葉に、ぎり、と唇を噛む。確かに、大規模制圧は得意だが、入り込んでいる魔物を一体ずつ倒さなくてはならない状況において、私だけの力では足りなすぎる。そんな状況で大規模魔法を使えば、確実に一般市民を巻き込んでしまうだろう。

(とりあえずもう少し詳しい話をしにそっちに行くから、チハルは



城で待機しとれ！)

フェンリルが焦れたようにそう言って、唐突に心話を断ち切った。私の口から了承の言葉が出る前に、フェンリルはうんともすんとも言わなくなってしまう。

消化不良気味に会話を終えた私は、二人に向き直る。

「ごっつ、ごめん、ペンタ、シユンくん。私、用事が出来たから行くね！」

「え、あ、お気をつけて？」

「……ハル、大丈夫っすか？」

「たぶん大丈夫っ！……にするっ！」

ペンタの問いに希望的観測で応え、私はテレポートでその場を後にし、城に戻る。いつもの一室でそわそわと足を忙しく動かしたまま、私は三人に通信で呼びかけた。一人じゃ手に負えない以上、友人たちに助けを求めるしかない。

「奈津、亜紀、冬香。休暇中のとこ、ほんつとつにごめん！ 緊急事態発生につき、いつもの部屋に集まってー！」

『うえっ、ちいどうしたの！？』

『……うん、判ったよ！ 奈っちゃん、いごっ！』

『わっ！？ あーちゃん、引っ張らないで………うわはあッ！？』

ずささささ、という何かを引き摺るような音は、聞かなかったことになっておいた。

『いつもの部屋って、城のでいいのよね？ 今行くわ』

「うん、ありがと。私はもう部屋に居るから、待ってるね！」

冬香にそれだけ言って通信を切った私は、部屋に用意されたソファにどっかりと座る。そわそわと貧乏ゆすりを繰り返して、がしがしと頭を掻く。髪の毛がぼさぼさになるのが判ったけれど、とにかく落ち着かなかった。

ああ、クオくん大丈夫だろうか……。  
それにしても、一体何がどうなってるんだ……？

心臓がばくばくと嫌な感じに高鳴って、うーん、と唸りながら胸元を手で押さえたとき、部屋の扉が勢い良く開かれる。顔を覗かせたのは、勉強道具を小脇に抱えた冬香だった。

「千春、一体どうしたって言うの？」  
どこか厳しい面持ちで、冬香が問う。

「クオくんが危ないって……また、魔物が王都を襲ってるって」  
「……何だか、いつか千春に聞いたようなシチュエーションね？」  
「私も、同感。とりあえず、フェンリルがここに来たら、説明してもらおうつもり」  
「そう……」

テーブルに勉強道具を置いた冬香は、私の隣に座る。

「……髪、ぼさぼさよ」  
「うんー……」

彼女は言っ、て、手櫛で私の髪を整えてくれた。

フェンリルたちを待つ時間が、とても、長く感じる。

本当は今すぐにも、飛び出して行きたい。でも、私一人じゃ、どうにもならない。気を急いで飛び出して、もしクオくんを死なせたりしたら、後悔してもしきれない。というか間違ひなく引きこもる、私。

ルナさんやクオくんとは通信越しに話を聞きたくとも、音声通信は時間の流れが違う場所同士だと上手く発動しない。心話だと、時間の流れが違う場所でも発動できるんだけど。うーん、通信機、心話仕様にしとけば良かったかなあ。

「ああ、早く早く……」

外とは時間の流れが違うから、多少の時間のロスは殆ど問題にならないとは判っていても、気持ちが焦ってしまったって仕方がなかった。

それからこの部屋に全員が揃ったのは、冬香が到着して約五分後のことだった。

フィールドから全力疾走してきたらしく、奈津と亜紀は息を切らしながら、ソファに沈みこんでぐったりとしている。ちなみに二人の姿は、今日のために作った一般プレイヤー仕様ではなく、いつものゲーム中のものに戻っていた。あと、奈津は妙に煤けていた。

私たちはフェンリルの言葉に耳を傾ける。

「今の状況を簡単に説明するぞ。王都に、千は下らない数の魔物が

入り込んだらしい。クオ坊はそれに巻き込まれて、たった今交戦中だそうじゃ。市民は各々立てこもっておるから殆どが無事じゃそうだが、その立てこもりがいつまでもつかはわからん」

それらの情報は、どうやらクオくと一緒にいるらしいルナさんが纏めたものらしい。つまり、ルナさんも同じく王都に居るということだ。王女だし当然なのだろうが、残念ながら彼女の場合、飛び回っているイメージしかない。

「で、原因じゃが。想定しておるとは思うが、フェイル、とかいう王子の仕業らしい」

久しぶりに聞いた王子 第三だっけ？ まあ忘れたけど王子のどれか の名前に、思わず深い溜息を吐いてしまう。前回に引き続き、物凄いことを引き起こす人だ。前は色々あつて決着付けられなかったけど、今回はちゃんとお縄についてもらわねば。……いや、前は前回できっちりお縄につけたはずなんだけどね。何故か私の寝てる間に脱獄してたね。

それにしても、考えれば考えるほど、国家運営に問題のある国だと思う。内憂もいところじゃないか。出奔したのであれば外患の方かもしれないが。

「見渡す限り魔物、とかいう状況らしいの。出せる戦力全てを集つて迎え撃っているそうじゃが、正直もつて二十分、と言っておつた」  
「もつて二十分……ってことは、こつちの世界だとあと一時間ちょっとの猶予があるってこと、でいいんだよね？」

「そういうことじゃの」  
ただそうは言っても、出来るだけ早く助けに行きたいから、どうにかしてあと三十分くらいで対処法を考えなきゃいけないだろう。

私は、うーん、と考え込んでしまう。同じように、奈津たちも唸っていた。

「とりあえず先にこれだけ聞いておくれ。……三人とも、手伝ってくれる?」

「ちい、それは愚問だよ」

「そうだよ、千春ちゃん」

奈津と亜紀の二人が言い、冬香が頷く。

即答は本当に嬉しかったのだけれど、私は重ねて聞いた。

「判つてると思うけど、この世界と違って、魔物は本物の魔物だよ。生きてるし血も出るし魔法選択ミスると本当にグロい。……いや最後の、冗談じゃなくね?」

水で押し潰しちゃえ! とかやると、ぐちゃぐちゃのどろどろになった魔物の死骸とかを見る羽目になる。ええ、一度やらかしましたとも。

「……それでも、手伝ってくれる?」

私の真剣な問いかけに、三人とも押し黙る。

その問いに一番最初に答えたのは、意外なことに亜紀だった。

「うん、大丈夫、私は手伝うよ。それにね、魚も鶏も捌いたことあるから、それくらい今更だよ」

「鶏イ!?!」

……彼女の発言は、本当に意外だった。いやいや、魚はともかく鶏って何だ。家庭的とかいうレベル超えてるんだけど。

根掘り葉掘り聞きたい衝動を今はグツと堪え、うん、と頷く。

「ありがとう、亜紀」

亜紀はにっこりと微笑んだ。

「ちい、私もやるよ。グロは正直、苦手なだけだよ……ここで何もしない方が後々キツくなると思うんだ」

「そうね。私も奈津と同意見だね。まあ、私の場合、多少の耐性はあると思うけど。亜紀ほどではないにしろね」

亜紀以上に耐性があっても何事かと思う。

まあ、それはともかく。

「うん、ありがとう。改めて、よろしく三人とも」

私の言葉に、三人がほぼ同時に頷いた。

各々の心が決まったところで、早速作戦会議を始める私達。

「千春、王都って以前、行ったところよね？」

「うん、そう。全体の広さは、たぶん……この市が全てすっぽり入るくらいじゃないかな？」

以前の記憶を掘り起こす。結界魔法を使ったときの手応えを思い出し、想定を広さを口にした。冬香がいつの間にか出していたノートに、シャープペンシルでそれを書き留める。

「王都の地図はあるかしら？」

「あ、今作る」

魔法を用いて、王都の地図を作り上げ、それを手渡す。悩んだ様子の子の冬香がそれを見ながら、シャーペンのノック側で自身の頬をぶに、と突いた。

「……流石に、その広さを四人でカバーするのは無理ね」

「そうだね。ちいみに、魔法使い放題ってわけでもないし、限度が有るよ」

「千春一人で、どれくらいまでいけるかしら？」

冬香の問いに、少し考えてから答える。

「魔法が使い放題とは言っても、街の中っていう制約がある以上、大規模な魔法は行使出来ないから、正直なところそこまで広範囲は難しいと思う」

「……そうよね」

難しい顔をしながら、かち、かち、と頬でシャーペンをノックし続ける冬香。伸びていく芯に何となく目が行く。

そんな時、不意に、彼女の動きが止まった。咄嗟になのか、シャーペンが手から投げ出され、伸びきっていた芯がぼきりと折れる。

「そうよ、いるじゃない！ 使える人材が！」

「え？」

「精霊達よ！」

「ああ！」

思わず、ぽん、と両手を打つ。が、すぐに動きが止まった。

「いや、でも、大丈夫かな？ さっきも言ったけど、本物の魔物な

わけだし、精霊たち、怯えないかな？」

「ふふ、自警団の子たちなら、きっと大丈夫よ。ね、亜紀？」

「うん、そうだね、冬香ちゃん」

何を考えているのか、にこにここと笑う二人。

深くは問うまいと決めた。

「えっと、自警団って全部で何人くらいいたっけ？」

「戦闘が出来る子たちは殆ど集めたから、三百人くらいだった、よね？」

「確かそうよ。あつ、でも、プレイヤーがいるから、全員連れて行くのはマズイかしら……」

「いや、大丈夫じゃないかな？ 戦闘能力持ってない精霊たちは残るんだし」

ペンタに話を通しておけば、数時間くらい何とかしてくれる気がする。

「じゃあ、自警団の子たちは全員使いましょう。そうなれば……」

落としていたシャーペンを拾い上げ、冬香がノートに何か数式のようなものを記述していく。少しの後に、それらを囲うように大きく丸を書いた。

「たぶん、行けるはずよ。全員を効率的に配置して使うことが前提だけどね」

彼女の頼もしい明言に、私達は安堵の息を吐いた。

「私はこれからどの子をどの地区に送るかを考えるわ。亜紀は自警



団の子達に通信で呼び掛けて、みんなを城の中庭に集めて。奈津も同じように、ここに残る精霊たちに簡単でいいから話を通して。千春は中庭にあっちへの道を作っておいてね。10分以内よ、出来る？

冬香の言葉に、私達は顔を見合わせて頷く。そして、各々の役目を果たすために、動き出した。

数時間の経験値稼ぎをいったん終え、ペンタの店へ戻るためにウキウキと街中を飛び回っていた青年は、不意に強烈な違和感を覚えて立ち止まる。

「……ん、あれ？ 何かおかしい……ような気がする？」

一体自分は何を感じたのだろう。両腕を組みあたりを見回して少しの間考えるものの、別段いつもと違うところは見当たらない。首を傾げながらも、青年は店へ向かう。

店の中はいつもと変わらず、ペンタもいつも通りにカウンターの中に座っていた。なんとなく青年はほんの少し安堵して、いつもの定位置に席を陣取りペンタに話しかけた。

「なあ、ペンタ？」

「どうしたんすかー？」

「なんかさ、変じゃないか？」

「気のせいじゃないっすかねー？」

ペンタの答えに、青年は納得いかないように首を傾げる。頭をがりがりと掻き、あれこれと思い巡らせていけば、ようやくそれらしいことに思い当たった。

「あー、さっきは声をかけられてないんだな」

いつもであれば、ハイジャンプで街中をショートカットなんかしていれば「あ、空飛ぶ人だ！」だとか「なんとかは高いところが好

きなんだろー！」なんて呼びかけられたり、揶揄されたりするのに、今に限ってそれが無い。

思い返してみれば、街中を歩いていた住人も少なかつたようだ。確か、経験値稼ぎのために街に出る前までは、普通だったはずなのだが。

「なあペンタ、住人少くないか？」

「……んー、やっぱりシユンおにーさんは、この世界を良く見てるっすねえ」

半ば感心したように言われて、青年はぼかんと呆けたような顔をする。ペンタはからかうように笑って、こんなことを言った。

「いま、ちよつとしたトラブル発生中なんすよ。だから、住人ちよーつと少ないんっすよね。でも、シヨップなんかはちゃんと動いてるから、大目に見るっす」

「……トラブルかあ。さっき、ハルが飛び出して行ったのっすそれか？」

「ま、そういうことっすね」

ここ二週間 テストを経験してきた青年にとって、初めてとも言えるトラブルに妙な関心を抱いてしまう。珍しい、と一瞬思ったのだが、今まで大きなトラブルもなく、平穩にゲームを楽しめたことの方が開発中のゲームとしてはよほど珍しいことなのかもしれない。

「じゃあ、あんまり鯖に負担かけるのも嫌だし、今日は一旦落ちようかな」

「気を遣わせて悪いっすね。また来てくださいます、旅人のおにーさん」

「おう、またな」

手を振ってペンタの店を後にする青年。人気の無さに気付いたかなのか、街が妙に寒々しく思えて、彼はさっさとログアウトするのだった。

そんな平凡な風景から、ところ変わって。

異世界の、王都。そこは、まさに地獄絵図だった。

視界を埋め尽くす魔物、魔物、魔物。

王都に伸びる道という道すべてに蠢くものたちが押し寄せるのを見たときには、クオの口から思わず力の無い笑いがこみ上げてきたほどだ。

自分に魔物を寄せる力があつたときだって、こんな光景は見たことがなかった。

そんな風に自嘲して唇を歪める暇なく、クオは剣を振るう。

「大丈夫か、クオ！」

「だ、大丈夫ですっ……！」

ルナフィリアの言葉に、息も絶え絶えながら、クオは応じる。

幸いなことに、この周囲に牽引された魔物は弱いものばかりの上、路地は見通しがよく不意打ちを気にする必要は殆どない。必死に剣を振るって、叩き切って、減らない魔物に、積み上がる骸に、辟易としながらもどうにか持ちこたえていた。

「姫さんッ、そろそろ交代だッ！」  
離れた場所から聞こえてくる太い声に、ルナフィリアは頷く。

「すまないっ！　クオ戻るぞ！」  
「はいっ！」

物陰から飛び出してきた数人の兵士に場所を譲り、二人は物陰に飛び込むように隠れる。

これで数分は休める。

ルナフィリアが引き攣るように息を吸い込むと、額から頬から流れてきた汗が口に入ってきて、酷く塩辛かった。

クオは崩れるように倒れこみ、仰向けに寝転がる。肩で息する少年に、ルナフィリアは問いかけた。

「……クオ、チハルはまだか？」

「ま、だみたいですよ……！」

圧倒的な物量の魔物たちに何度も絶望しかかって、それでも心が折れなかったのは、彼女を待っていたからだ。数十分どうにか持ちこたえれば“最強の魔法使い”が、助けに来てくれると、二人は判っているからだ。

この絶望的な状況で、いまだ士気が保たれているのは、抗うには酷く脆く見える二人組　歳若い女と幼いガキ　が折れようとならないからだ。

「……くそっ……」

弟の仕出かしたことに、ルナフィリアは口惜しそうにぎりりと唇

を噛む。

魔物を操るマジックアイテム。嚴重に保管されていたそれが、「ただの抜け殻」だと気付いたのはいつだったか。

長らく警戒はしていたものの、まさかここまで事を大きくするな  
ど、誰が思おうか。

「……いや」

唇に、自嘲の笑みを浮かべるルナフィリア。

王に……父親に手をかけようとした時点で、あれの箍たがはとつくに外れていたのだ。それに気付けなかった自分が、愚かなだけだったのだ。

「大丈夫ですか……？」

「ああ、心配させてしまったか。大丈夫だよ、クオ」

余計なことを考える前に、今はこの街を守りきることを考えなくては。

今はまだ、士気は保たれている。それに、戦っている者たちがいる内は、立てこもる一般市民たちに、積極的に牙を向けることもない。だから大丈夫だ。まだ、限界ではない。爪をぎりりと腕に突き立て、ルナフィリアはそう自身に言い聞かせた。

ふと、すぐ傍の少年が、不安げな顔で自身を見上げていることに気付く。ルナフィリアは少年の汗に濡れた頭を、些か乱暴にぐりぐりと撫でてやった。

「クオ、少しは休めたか？」

無言でしっかりと頷くクオに、ルナフィリアは微笑む。

「出るぞ！」

「お願いします！」

声に、兵士たちが答える。

陰から飛び出し、二人と兵士が交代したその瞬間。

……すぐ目の前、石畳が爆ぜた。

王都に居た魔法使いは、魔力切れでもうとつくに使い物にならなくなつた。

ならば、この爆発は……！

ルナフィリアとクオがぱっと目を輝かせて振り向くと、そこにいたのはチハル……などではなく十数人ほどの集団だった。

「チ……なっ!？」

「チハルさ……ええっ?」

思わず喜色ばんだ二人の口から、言葉が途切れた。絶句である。何が起こつたのか全く把握できず、ぼかんと間抜け面をしていれば、集団の内から「行けえええ！」という緊張感のないどこか抜けた声が聞こえてくる。

そこからは、また別の意味で地獄のような絵図だった。

土砂降りのようにでありながら、秩序ある順列で魔法が降り注いでいく。逃げ場をなくした魔物たちは、咆哮を残しながら命を刈り取られていった。

この世界では、魔法使いは貴重な存在だ。そのため、魔法への耐

性のある魔物はごく僅か。少なくとも、ここに集められた魔物たちの中には、そんな高等なものは存在しなかった。そんな状況で、戦況が一方的にならないはずがない。

酷く圧倒的かつ無慈悲な光景は続く。ルナフィリアとクオ、そのほか防衛線を繰り広げていたはずの者たちは、しばらくの間、ぽかんと気の抜けた面持ちでそれを見守ることしか出来なかった。

「あ、いた！ クオくん、大丈夫！？」

「あつ、ナツさん！」

不意に、後ろから聞こえた呼びかけの声に、クオが振り向く。声の主を確認した彼は、ぱつと笑顔を浮かべた。ルナフィリアは剣に手を添え、一瞬警戒した素振りを見せたものの、クオの反応を見て刃を収める。

「ちいに変わって、助けに来たよー！ ちいも王都に来てるよ！」

「ええと、ありがとうございます？ ……あでも、ナツさん、これはどういうことでしょう……？ チハルおねえちゃんはこれだけの魔法使いを、どうやって……？」

「うーん……人望かな！」

チハルはあれほどの力を持った魔法使いなのだから、これほどの数の弟子が居てもおかしくはない。

ルナフィリアは奈津の言葉を聞いて、勝手にそう納得した。

「チハルおねえちゃんの、人望……？」

「……クオくんそんな不思議そうな顔しないで、ちいが微妙に可哀想だから。精霊たちだよ」



「あっ、なるほど」

「こっちはこっちで納得したようだった。」

「よっし、ノルマ終わりッ！」

担当を言い渡された地区の魔物を掃討し終えた私は、喜色ばんだ声を上げた。が、折り重なるようにして路肩に散らばる骸たちを思い出し、はあ、と重い息を吐く。

「というかこれ、疫病とかが怖いな。一応、その辺りのことも考えておかなきゃ。……もしそこまで考えての上だったら、フェイルが性格悪すぎる」

この国の人たちだけで対処に当たっていたら、そこまで気が回ったかどうか怪しい。ただでさえ、物量作戦に対処しきれていなかったわけだし。

もしフェイルが勝てば、即座に魔物の骸の処理を指示すればいい。そうすれば、疫病の発生の確率は、限りなく低く出来る。

逆にフェイルが負け、骸の処理が滞れば、“嫌がらせ”も自動的に完了する。きっちりに対処されたところで、特にフェイルに痛手はないだろう。

もしそんな考えを持ってこの事態を引き起こしたのだとしたら、フェイルはどこまでも外道だと思う。まあ、そんなことまで考えていなかった可能性の方が大きいかな。……ないと言い切れないのが、やはり恐ろしいが。

『おーい、ちい。聞こえる?』

考え込みながらぶつぶつと呟く私の耳に聞こえてきたのは、奈津の声だった。彼女の声がよく聞こえるように、ぱつと耳に手を添える。

「あ、奈津！ そつちは終わったの？」

「うん、大体ね。まだ少し残ってるけど、あとは街の人たちだけで大丈夫だと思う。あ、勿論クオくんたちも無事だよ」

「そっか、よかった……奈津、ありがとう、お疲れ様！」

「ちいこそね！」

お互いに苦勞を称えあつてから、奈津が本題に入る。

「それで、ルナさんが少し話をしたいから、来てくれないか、だつて」

「あ、うん、わかった。奈津のところに移動しようと思うから、半径1メートル以内に物が無い状態にしてくれる？」

「了解！ ……準備いいよー」

その声に転移しようとして、不意に自分の姿を思い出す。そういえば「ハル」の姿では、ルナさんには私だって判らないだろう。というかそれ以上に、ルナさんをモデルにして作った姿だから、混乱させてしまいそう。

混乱を招く前にと、自身の姿を魔法で変化させる。

「さて、じゃあ行きますか」

今度こそはと気合を入れ、私は奈津のもとへ転移した。

「呼ばれて飛びでてじゃじゃじゃーん」

「ふるっ！」

すぐ隣にいた奈津がすっかり突っ込んでくれて、私は思わずぐつと親指を立てる。彼女は呆れたのか小さく苦笑してから、人差し指を私のちょうど後ろの方へと向けた。指先に従って振り向くと、くたびれた様子のルナさんとクオくんが並んでいる。私は思わず、クオくんのもとに駆け寄っていた。

「クオくんっ、無事っ!？」

「は、はいっ! あ、あの、助けに来てくれてありがとうございます!」

ホッとしたのと嬉しいのが合わさって、思わず口元が緩んだ。それを必死に押さえつつ、クオくんに「ご苦労様」と声を掛ける。彼は疲労で頬を赤くしながらも、嬉しそうに頷いた。

クオくんとの会話に区切りがつくと同時に、ルナさんが改まった様子でこちらに向き直る。彼女も疲れているだろうに、毅然とした表情を保とうと努めているようだった。

「今回のことは、本当に助かった。感謝する」

「まあ……なりゆきというか、偶然みたいなものです」

頭を下げるルナさんの言葉に、私は肩を竦める。

正直なところを言うと、たまたまクオくんがこちらに居なければ、放っておいた可能性が高い。というか、この事態に最後まで気付かず、次にこの世界に来たときに呆然としていたような気がする。

「たとえば、なんだったとしてもだ。チハルたちに助けられたことは、間違いない」

「……何にせよ、助けられて良かったです」  
言つと、ルナさんは再度、頭を下げた。そのまま静止すること数秒の後、彼女はゆっくりと頭を上げる。緊張した面持ちで、口を開いた。

「……今度こそ、決着をつけたい。手伝ってくれないか、チハル」  
瞳に真剣な光を映す彼女の言葉に、私はふう、と息を吐きながら頷く。そんな中、視界の端で、奈津がクオくんを連れて私達から距離を取るのが見えた。気を遣ってくれたのだろう。その気遣いに感謝しつつ、話を続ける。

「フェイルの居場所は？」

「恐らくだが、王城だ」

「根拠は？」

「明らかに魔物の分布に偏りがある。誘っているのだろうな」  
ものすごく畏っぽい。畏っぽいのだが。

「行くしかないでしょうね」

その言葉に、ルナさんも同意して頷いた。

侵入した城内は、妙な静けさに満ちていた。

ルナさんと警戒しながら進めば、途中、倒れている兵士などに行

きあった。どうやら眠っているだけのようなので放置する。今この状態で起こせば、パニックを誘発しかねないからだ。

「父上の私室に行こう」

言ったルナさんが先導し、廊下を進んでいく。物音一つしない空間は、非常に不気味だった。

私は歩きながら、半年ほど前のことを思い出していた。

そういえば、あの時は 그레이さんや ヴィトさんも一緒にいたっけ。そういえばあの二人って、今何してるんだろう？

「ルナさん、 그레이さんや ヴィトさんは今ごろ何してるんですか？こんな事件があれば、彼らは真っ先に出張ってくるだろうに。そういう意図を込めて彼女に聞く。」

「最近、魔物の動きがまた妙になっていてな、あの二人にはそれを調べて貰っていたところだ。……そういえばチハルは、 그레이の怪我を治したんだっただか」

「あー、そんなこともありましたね。……ってあれ、 그레이さんの怪我って、ルナさんを庇ったんだとか言ってますでしたっけ？」  
「その頃は、私も一緒に調べてたんだ。ただ、それだけにかまけてもいられなくなってるな」

「そうなんですか、と相槌を打つ。……ルナさん愛のくせに肝心な時に役に立たないなー、なんて別に思ってます。」

と、そんな雑談を交わしているうちに、何の異変もなく私室前の扉まで辿り着く。畏らしきものが特に見当たらなかったのが、逆に

警戒心を責め立てた。

ルナさんは一度こちらを振り返る。私がそれに頷くと、一気にそのドアを開き放った。

そこには、いつか見た水色がかつた銀髪の青年が立っていた。青年は音に反応したのか、ゆっくりとこちらを振り返る。

「やっぱり来たね、姉さま。それに、魔法使いの君も、久しぶり。来てくれて嬉しいよ」

彼が浮かべたのは、全くもって隔意のない笑顔だった。私の前に居たルナさんは肩をぴくりと跳ねさせたが、ぐっと堪えたように拳を握り、冷静さを保っているようだった。

私は言葉を発さず、二人のやり取りを見守る。

「しばらくだな、フェイル。もう会えないものだと思っていた」

「僕は、ずっと姉さまと会いたかったんだけどな」

「残念ながら片思いだ」

「うん、そうみたいだね」

その会話は、穏やかとも言える、寒々しいものだった。

「父上はどこに隠した？」

「僕たちの逢瀬には邪魔でしょう？ キースに言って、みんな地下に運んで貰っているよ」

「地下、というと牢か？」

「うん、これでおあいこでしょ？」

おあいこ、というのは恐らく自分が牢に入れられたことに対して言っているのだろう。心狭いな。……そもそも、そういう問題でも

ないか。

「それでフェイル。こんなことまでしてかして、今度は何がしたいんだ？」

「うーん、前も言ったと思うけど、王座がほしくてね。ただ、それにはやっぱり姉さまが邪魔みたい。というか、姉さまが繋ぎを持っている、魔法使いの君が邪魔なだけけど」

唐突に話に加えられて、私の身体がびくりと揺れる。二人から向けられる視線に、思わず視線をあらぬほうに逸らした。

「ねえ、君。なんで姉さまに従っているの？ それとも、この国がそんなに好きなの？」

「いや別に、ルナさんに従っているわけじゃないです。あ、当然、この国を守りたい！ とかそういう義憤に駆られているわけでもないです」

後半怒られそうな発言だが、本音だった。いやまあ、クオクンの母国だし、ルナさんいるし、アルバートさんもいるのだけれど、国自体はどうでもいい。割とどうでもいい。

私の言葉で、ルナさんが齒の奥に何か挟まったような表情をしていたが、見なかったことにして続ける。

「でも、ルナさんとは、何だかんだで友達ですから。手伝えることは手伝ってるだけです」

もし友人が困っていて、それを助ける力が自分にあるのならば誰だって、手伝ってもいいかな、と思うだろう。それさえも面倒だと思つような相手ならば、それはもう友人じゃないし。

ただ今回の場合、クオクンが巻き込まれていたのも大きいのだが。



「じゃあ、僕とも友達になろうよ。なんなら、恋人になってもいい」  
彼は誘うような、蠱惑的な笑顔を浮かべて言う。その笑みは、ルナさん以上の美貌だと心底思えるくらいには、美しい笑みだった。

「いや、要らないです」

しかし私は即答だった。

フェイルは微妙な表情を浮かべ、口を尖らせる。

「……僕、結構美形な自信があっただけだな。それこそどんな貞淑な姫君でも、微笑み一つで僕と同衾したくなるくらいには。ね、君ってさ、趣味が悪いの？」

「いや、確かに格好いいとは思いますが……」

ルナさんを裏切つてまで、手に入れたいものでもないし。

というかそれ以上に、ゲームの中では出会う人の三分の二は美形なので慣れたとも言えたりする。みんな盛りすぎだ（自分含め）。  
シユンくんはあの中でもノーマルな顔つきだから、何となく見ててほっとする。

「まあ、それはいいや。で、友達になつてくれないかな？」

「今更、無理です」

あの時、クオくんを傷つけられた恨みは、忘れていない。

それにそれが無かったとしても、王座篡奪などを企んでいる人間と、私が友達になどなれるわけがないし、なつたとしてもそれに協力するわけがないのだ。

「うん、そう、残念だな。じゃあさ、仕方がないから……死んで？」  
「え」

言葉が消える。

何かが自身の右胸を貫く音を、私は確かに聞いた。

『悪役がペラペラと話を長引かせるのって、絶対時間稼ぎしてるよね』

いつだったか、奈津が漫画を読みながらそんなことを言っていた。確かに、戦いの前にペラペラと会話を交わすなんて、時間稼ぎくらいしか考えられない。

冷静に考えてみればそうなのだが、あの状況でそんな考えに至るはずもなく。

悪役の話に付き合っていた私は、彼の部下であるキース（実際に見て確認はしていないが、恐らくそうだろう）にまんまと後ろから刺されてしまったのだろう。

きたない、さすがフェイルきたない。……部屋の入り口で後ろを警戒していなかった自分も、相当間抜けだとは思いが。

「あー、びっくりした……」

自室のベッドで目覚めた私は、右胸を押さえながらほっと息を吐く。いやあ、あつちの世界から直接、人形のまま行つててよかつたわ。じゃなかつたら、今頃、私死んでた。いや、死なないと判つているからこそ油断していた部分もあるんだけど。フェイルも、殺<sup>や</sup>つたと思つただろう。

……あ。もしかしてルナさんも誤解していたりして？

でも、人形だから血は出ないし、大丈夫かな？ いや、ルナさんだしな……不安だ。さっさと無事を知らせよう。

ということ、今度は生身のまま、あちらの世界へと向かうことにする。ただし、今度は防御魔法を何重にも重ねがけして、だ。

人形にかかっている筈の防御魔法があっさり破られたことを考えると、魔法を破るための何かをもっていると考えたほうがいいのだが、これだけ重ねがけすれば流石に平気だろう。ここまでやると、魔法ノ書を使ってすら破るのがキツイ程だ。あ、ついでに透明化の魔法も使っておこうと。

そして再び、異世界。生身でこの地を踏むのは久しぶりだ。そんなことを思いながら、集中する。目指すは城だ。

気合を入れてレポートすれば、そこは既に戦場だった。ルナさんが鬼気迫る表情で白髪の男 キースと打ち合っている。やはり私を貫いたのは彼だったのだろう。

私は透明なまま、魔法を発動させる。その瞬間、何かを感じたのかフェイルがこちらを見たが、もう遅い。数十もの水の槍は、宙を舞い始めた。

狙われた二人は、いつかのようにそれを避けはじめる。とりあえず、そうやって踊っていればいいと思うよ。

「っ！？ チハルか！？」

飛び交うそれを見たルナさんが驚き、人形の倒れている部屋の入り口に視線をやる。しかし何かに気付いたように、透明になっている私の方へと視線を向けた。……あ、そういえばルナさん、気配でわかるんだっけ。

私は透明化の魔法を解除し、姿を現す。

「ルナさん、ただいま戻りました」

「チハル、一体どうやって……チハルが二人いるのか？ そっちのチハルは誰だ？」

「そっちのチハル……」

思わず吹き出してしまった。状況は緊迫としているはずなのに、何だろこの緊張感のなさは。

私は誤魔化すように咳払いして、彼女に説明する。

「ええと、そこで倒れている私は人形です。ほら、前に教えましたよね。『人形を操り、その人形と視界を共有する魔法を開発中』だって」

「ああ、そういえば言っていたな。もう出来ていたのか」

「はい、結構前に」

そう言えば、ルナさんは拗ねたように呟いた。

「……教えてくれても良かったらうに。本気で死んだと思ったぞ」  
無然とした表情で言う彼女は、本当に心配してくれたらしい。私は妙に嬉しくなって、だけどそれ以上に照れくさくて、彼女をからかうことにした。

「ごめんなさい。でも、血が出てないから判るかなって思ったんですけど、よっぽど心配してくれたんですね」

私の言葉に、ルナさんがハツとした表情を浮かべる。その後気まぐげに、部屋の入り口で倒れている人形に視線をやり、そうしてま

た私に視線を戻した。

「確かに、そうだな」

彼女は照れくさそうに言って、頬を掻いた。

……さて、雑談はこのくらいにしておこう。

私は魔法を消し去る。槍と踊っていた二人は、肩で息しながらこちらを睨みつけてきた。

「ご苦労様です」

「……いい運動ができたよ、ありがとう」

「どういたしまして」

につきり言えば、フェイルは一度顔を伏せ、息を吐く。そして、作り上げた穏やかな表情で私に向き直った。

「本当、君が姉さまのところにいるのが、悔しいね。もっと早く出会っていれば、君は僕のところに来たのかな」

「どうでしょうね。王座を奪おうなんて思っている人間に、私は懐かなかったと思いますよ」

異世界に辿り着いた当初の私は、とにかく面倒ごとには巻き込まれたくないと思っていた。あと、力は隠すべきと思っていた。いつの間にかフル活用する羽目になってたけど。

まあ、言いたいのは、物騒な人間には近付かなかっただろう、ということ。

そんな私に、フェイルは笑顔で言った。

「うーん、残念。でも、無いものねだりしてもしょうがないか。負けたよ。不意打ちで君を殺せなかったんだから、僕らの完敗」

「やけにあっけらかんとしてますね……」

「まあね。君がいる以上、抗つてもしょうがないし。で、魔法使いの君は、僕たちをどうするのかな。殺す？」

言われて、止まった。彼とそろそろ決着をつけたいとは、ずっと思っていた。フェイルには会うたびにガチで殺されかかっているので、赦すつもりはない。魔法ノ書が無かったら、普通に二回ほど死んでいる。私はそんな目にあつてまで全てを水に流せるほど、寛大な人間ではなかった。

かと言って、殺すのかと問われると、頷くことは出来なかった。人を殺す勇氣など、私にはない。

「チハルツ！」

私がそうやって迷っていると、フェイルが素早く切りかかってきた。ルナさんが動くも反応は間に合わず、彼の剣は私を襲う。

しかし防御魔法が発動し、私から1センチほどのところで剣は止まった。目の前でギリギリと動く刃に心臓をばくばくと鳴らしながら、彼を魔法で吹っ飛ばす。綺麗に着地されたが。

「今度は準備万端つてわけか。本当、厄介だなあ」

「……殊勝な態度を取ってたくせに、酷くないですか？」

「隙は突くためにあるんだよ」

腑には落ちないが非常にごもつともな言葉なので、私は文句も言えず口籠った。

「で、どうするの？ 僕たちを殺す？ 捕まえる？ …… まあ捕まったら、結局死罪になるだろうけど。それとも逃がしてくれるのかな？ それでもいいけれど、恩赦をかけられたところで、僕は絶対に諦めないよ？」

逃がすなんてもつてのほかだ。彼の言うとおり、きっと何度でも二人は何かを引き起こす。その度に、ルナさんや、もしかしたらクオくんが巻き込まれることになる。そんなのは、許してはいけない。

つまり彼の提示する選択肢は、結局のところ「死」しかなかった。続けるように、ルナさんに視線を向ける。彼女は苦しげな表情で、口を開く。

「……私は、あいつに死を与えることしか出来ない」  
ルナさんの言葉に、益々胸が重くなった。つまり、彼の言う選択肢しか、もはや残っていないということだ。

……ん？ いや？

不意に、そうとも限らないか、と思う。

この世界にいるから問題なのであって、別の世界にばーいと飛ばせばいつぱい解決な気がする。「臭いものには蓋をする」みたいな方針ではあるのだが、今後の平穩の方が大事だ。

「あの、ルナさん」

「何だ？」

「フェイルをどうするか、私が決めていいですか？」



私の言葉に、ルナさんが虚をつかれたような表情を浮かべた。彼女はああ、ええ、と言葉を探し、ぽつりと言う。

「ま、任せても良いのか？」

「あ、はい」

こっくり頷く。するとルナさんは、どこか苦々しい表情を作った。

「……押し付けるような形になって申し訳ないが、頼む」

気に病む彼女に、私はいいえーと首を横に振った。

……これで私の自由出来る。

思わず緩みそうになる頬を、無理矢理に押さえつけた。

「ねえフェイル。」

1、『服従効果のある召喚魔法に飛び込む』

2、『魔王的な存在に滅ぼされそう』

3、『ただのハムスターになってヘケツ　とかカワイイコぶらなきやいけない』

4、『人も何もいない世界で独り静かに暮らす』

5、……えー、『\*かべのなかにいる\*』

どれがいい？」

さすがに後半ネタが尽きた。自分なら断然3を選ぶが、フェイルならどうだろう。飼われるのなんて、絶対嫌だろうと予想。だからこそ嬉しいんだけど。

私の提示した選択肢に、彼はぼかんとした表情を浮かべる。

「……ねえ、話がまるで見えないんだけど」

「見えないままでいいんじゃない？　ってことではい時間切れ、残念でした！　『我求む、更なる魔法を。我願う、更なる力を。我望む、異なる世界を。』……」

私は詠唱を始める。フェイルたちは何が何だかわからない、といった表情のまま、抵抗もなく私の呪文を聞いていた。

さて、どれにしようかな。神さまのー……まあいいや、1～4の中からランダムで。5は流石に即死なので止めるとして、他のどの世界でも嫌がらせには十分だろう。フェイルたちの場合、殺しても死にそうにないから、心安らかに飛ばせるしね。

でも個人的には2が好きかも。フェイルが魔王と相対するとか最高なのに。同士討ちっぽくて。

そんな風に色々と（えげつないことを）考えながら、条件指定に組み込んでいく。

「『繋がり鏡よ、我が言霊をもってそれを成せ』！」

詠唱と共に、彼らの目の前に鏡が現れる。私は動こうとしない彼らの背に、魔法で風をぶち当てて、鏡の中に押し込んだ。

「じゃ、もう会うことはないと思うけど、頑張ってねー。いろいろと！」

二人に向かって小さく手を振る。彼らは何か言いたげな表情を浮かべていたが、何も言えぬまま鏡に呑みこまれて消えていった。

「ふう、終わった」

静寂の戻った部屋。私はわざとらしいイイ笑顔で、額の汗を拭う仕草をする。

「……よくわからんが、相変わらず滅茶苦茶だな」

ルナさんは言って、少しだけ安堵の混じったような息をついていた。殺さずに済んだ、とでも思っているのだろう。

……ある意味で死んだ方がマシな目に合うかもしれないけどね。そんなこと口にはしないが。

緊張感があつという間に霧散して、私は息を吐く。あー、やっと決着つけられた。すっきり。

「……相変わらずじゃのう」

そんなことを思っていたら、いきなり足下から声が聞こえてきて、私は小さな悲鳴と共に肩を揺らす。いつの間にか、私のすぐ近くにフェンリルがいた。

ルナさんも警戒心を露にしながら、私と、私の足下にいるフェンリルと距離を取った。

「あれ、フェンリルどうしたの？　というか、どうやってここまで？」

「ワシは書の守護獣じゃからの。書のある場所には一瞬で転移できるよつになつとる」

「へえ、初めて知ったよ。……んで、どうしたわけ？」

私が問うと、いきなりフェンリルから光が溢れ出す。眩しさに目を閉じて、次に目を開いたときには、大きな白い獣がそこにいた。いつか、夢の中で見た姿だった。

「……フェン、リル？」

「チハル、お主は書の主として認められた。じゃから、今から天界へと案内しよう」

「は？ え？ なに？」

意味がわからず、フェンリルに短く問いかける。が、その問いなど無視するかのようになり、腕につけた魔法ノ書から発せられた強烈な白の光が、私を包み込んだ。

「チハル！」

ルナさんの叫びに近い呼びかけに応える間もなく、私はその場から消え去った。

「……ここ、どこ」

そこは、白い世界だった。どこまでも白が広がる世界だった。床が黒いだけ、亜空間の方がまじだと思える、そんな世界だった。私は地平線すらないその場所で、呆然と佇む。

「天界じゃよ」

後ろから声がした。振り向くと、そこにいたのはフェンリル（大）だった。私はとりあえずもふもふの毛を堪能すべく、その巨体に抱きつく。ああ、もふもふだ。こんな感触のベッドが実にほしい。

「……一番最初にやるのがそれかの」

フェンリルから呆れた声が降ってきた。しかし、そうは言われても、この白い世界で何をすれば良いのかなど、皆目見当つかない。なので、とりあえず抱きついてみたまでだ。欲望のままに。

私は十分に毛を堪能した後に抱きつきを止め、フェンリルに問いかけた。

「で、天界ってどういうことさ？」

この真っ白で何もない空間が天界なの？ というかそもそも天界って何？ あと書の主って今更どういうこと？ 所有者とは何が違うの？

そんな疑問たちを、湧き上がるままに次々とフェンリルにぶつけていく。

「それを説明することは、ワシには出来ん」

「何で？」

問いかける私に、フェンリルは短く一言、「乗れ」と言った。私が背に乗りやすいようにか、フェンリルは足を折って地に伏せる。しかし私は、ぽかんと間抜けな表情を浮かべるしかできなかった。そんな私に、フェンリルはじれったそうに再度「乗れ」と言う。私は仕方なくよじのぼるようにして、その巨体に跨った。

フェンリルは、のっそのっそと歩き出す。思った以上の揺れに、私はぎゅっとしがみついた。

「どこ行くの？」

「神のところじゃよ」

「……神さまあ？」

思わず変な声が出たのは、何というか不可抗力だと思う。だっていきなり神さまとか、どういうことよ。随分ファンタジーな話じゃないか。……いや、魔法ノ書とかいう時点で、だいぶファンタジーではあるのだが。

「ねえ、神さまってどういうこと？」

問いかけるが、フェンリルは口を開かず、何も無い白い世界をただ進んでいく。何一つ応える気がないと知って、私も口を噤んだ。

「着いたぞ」

暇になり、フェンリルの上でうとうととしていた私は、その声ではっと覚醒する。身体を起こして見ると、そこには真っ白なドア」

だけ」があつた。えーと、何これ？

「フェンリル？」

「神の居る部屋に繋がつとる。チハル、行つてくるといい」

……ど でもドアみたいなものだろうか？

フェンリルから降り、私はそのドアの前に立つ。一度後ろにいるフェンリルを振り返つてから、意を決してドアノブを捻つた。

そこは、一見して執務室のような部屋だつた。壁際には本棚がずらりと並び、部屋の奥には大きな黒い机がある。……ずらりと本棚に並んでいるのが多種多様な漫画だつたのは、見て見ぬフリをした。

机の奥には、一人の眼鏡をかけた細身の男が座っていた。その男は短い黒髪で、何というか、どこにでもいそうな男性だと思つた。とてもではないけれど、フェンリルの言つたような、神様とか、そんな大それた称号を持つような人だとは思えない。

「あのー……？」

「よく来たね、相模千春さん。えと、こっちに来てくれるかな？」

柔らかな声だつた。何で私の名前を知つてるんだとか、本当に貴方は神さまなんですとか、色々と言いたいことはあつたのだが、私は言われるままに机の前まで歩み寄る。

「初めまして、千春さん。僕は神様をやっている太郎と言います」  
申し訳ないことに、私は思いつきり吹き出した。いやだつて、神さまとか言つてる癖に太郎って……！ 太郎って……！

口を押さえながら肩を揺らす私に、神さまと名乗つた彼 太郎

さんは恥ずかしそうに頬を掻く。

「うーん、この名前、やっぱり変かなあ？　ここに呼ばれた人は、みんな笑うんだよね。これを言っと」

「あ、ごめんなさい！　その、変ではないと思います。……ただ、“神様”には似合わない名前だなあって」

「うーん、やっぱりそうかな？」

彼はそう言って穏やかに笑った。

個人的に、神Ⅱ自分勝手好き放題とか、神Ⅱクトゥルフとか、そんなイメージだったんだけど、こんな神様もいるのか。いやそもそも、神様って本当に居るのかってところからなんだけど。

「まあ、自己紹介はこれくらいにしようか。今回、千春さんと呼んだのは、君が魔法ノ書の主として、認められたからだよ」

「えっと、それってどういうことなんでしょう？」

私はずっと疑問に思っていたそれを、彼にぶつける。彼は微笑んで、ぱちん、と指を鳴らした。その途端、私のすぐ後ろに座り心地の良さそうな、一人がけのソファが現れる。

「そうだね、まずは『魔法ノ書』がどういうものかっていう説明から始めようか」

彼は「話が長くなるから」と、ソファを私に勧めた。私はありがたくその言葉を受け取る。

そして彼が語るそれに、耳を傾けた。



魔法ノ書は、“神様”の素質がある人間を探すためのものなんだ。彼は唐突にそう切り出した。今更ながらに、随分とぶつとんだ話である。神様という存在が出てきた時点で、何となく察してはいたのだが。

魔法ノ書の所有権を得た時点で、その所有者は神様候補として認められるらしい。そもそも魔法ノ書は、ほんの少しでも神様としての素質がないと、絶対に見つけられないようになっていたのか。

神様候補たちは、魔法ノ書によって、力の使い方や心のあり方などを測られる。上下巻をいつまでも揃えられなかったとか、書の持つ力にあまりにも溺れたり恐れたりするようであれば、神としての素質はないとされて、神様候補からは外される。

そうになると、魔法ノ書が異世界に転移するようないろんなことが起きるらしい。……つまりは、「所有者の死」だ。えげつないな！。

そして、色々な側面から見られ、魔法ノ書の主として認められると、その人間は神様見習いとして天界に召し上げられるという。つまり、それが現在の自分らしかつた。

……えー？

一体自分のどの点が神様に相応しいのか、全くもって謎だった。

「元々は、神様用の素体を作り上げて、それで運用していたらしいんだけどね。そういつた素体たちは、大抵が人間の強い感情に心を

やられて、暴走してしまうんだって。その点、元々人間な僕らは、そうだったことも少ない。僕らは、人の心ってやつを身をもって知っているし、そもそも一人一人に深入りしようなんて思わないでしよう?」

太郎さんも元は人間だったらしい。彼も魔法ノ書を得て、そして神様になったのだという。ちなみに地球によく似た世界の出身らしい。そして漫画好き。……最後のは全く要らない情報だと思った。というか見れば判る。

「ちなみに神様って、何をやってるんですか?」

「そんなにやることはないよ。その世界が減びないように、生命が絶えないように、ずっと見守るだけ。まあ三千世界くらい割当てがあるから、面倒ではあるけど」

本当に三千という数なのか、それとも仏教用語の方なのか判断がつかなかったが、どちらにしる途方もない数だと思った。減びないように、って程度なら、毎日見なくてもいいだろうから、一日十ずつくらい見ればいいのかな。

「あ、たまに新しい世界を作ることもあるかな。漫画をモチーフにして作っても怒られないから、僕としては楽しい作業だね。千春さんも判るんじゃないかな。世界を作るのは、楽しいって」

「それは、まあ……」

彼の言う通り、私たちの世界を作るのは、すごく楽しかった。

あ、だから神様としての素質有りとして認められたのかも。何となく、そう考える。

「さて、千春さん。ここまで説明したけど、君はどうする? 神様

になるかい？」

「……拒否権はあるんですか？」

私が問うと、太郎さんは苦笑した。

「別に強要はしないよ。……ただ、書の主として認められたにも関わらず、地上ですっと燻っていけば、いつか『魔法ノ書が異世界に転移するようなこと』が起きるだろうね」

「うわー……」

つまり、選択肢はないに等しい、と。

うーむと低く唸りながら、頭を抱えた。

「ちなみに、魔法ノ書の所有権を譲渡するか放棄するかすれば、普通の人に戻ることも出来るよ」

「……それはそれで、嫌だなあ」

ようやく、テストまで漕ぎつけたあの世界を、今更「無」にするのは、嫌だった。折角、みんなが楽しむ世界が出来上がったのに。ファンタジーな世界のおすそ分けが、出来たと思ったのに。

今更、何もかもなかったことにするなんて、嫌だ。

「もし、神様見習いになったとして、私は何をすればいいんですか？」

「そうだなあ。しばらく僕の下について、職務の勉強かな。一、三週間に一度くらい、天界に来てくれればそれでいいよ」

見習いとして生きる限り、私はこの力を手放すこともなく、今のまま生きられるらしい。二、三週間に一度は、天界に来なくてはならないが、その程度の頻度であればそれほど苦にはならないだろう。

いやでも神様とか……何か、微妙だよね。  
うんうんと俯いて思い悩む私に、太郎さんが言った。

「いきなり決めろって言われても難しいだろうから、地球時間で一ヶ月後。そのときに、答えを聞こうと思う。どうかな？」

「……はい、わかりました」  
気が進まないものの、こくりと頷く。猶予が出来たのは、正直ありがたかった。

優しい口調で、太郎さんが言う。

「千春さん。そんなに悩まなくても、軽い気持ちでいいと思うよ？  
判りやすいから神様って言ってるけど、実情は公務員みたいなものだから」

「こっ、公務員っ……」

どうしよう。一気に神様という存在がチープになってしまった。  
そう言われれば、確かに目の前の太郎さんは、すごく公務員っぽい町役場とかに居そうだ、こっという人。

そう思うと、少しだけ気が楽になる。神様なんて仰々しいものは気がちつとも進まないけれど、『天界の公務員』なら、やってみてもいいかって気が、ほんの少しはわいてくる。ほんの少しね。

「少しは、やるって方に傾いてくれたかな？ 一ヶ月後の答えを、楽しみにしているよ」

「……はい。じっくり、考えてみます」  
私は彼に一礼して、部屋を後にした。

フェンリルの背に乗って、白い世界をゆっさゆっさと進んでいく。……進むというか、戻っていく、と言った方が正しいのかもしれない。いやでもこの真っ白で何も無い世界に、奥とか手前とかあるのだろうか。そんなことを、とりとめもなく、ぼんやりと考えていた。

……いや、なんていうかさ。神さまとか魔法ノ書の正体とか色々ありすぎて、思考回路はショート寸前。っていうか内心「ええええええ!？」なわけで。「ミコミコの神ならバツチ来いだけど、本物の神さま、かつこわらい、とかないわー」とか思ってるわけではあ、と軽くない溜息が口から漏れた。

まあ、思い悩んでいても、今すぐにどうにかなるようなものでもなし。私はいったん、それを頭の中から捨て置く。

私は、無言でのそのそと歩くフェンリルに、声を掛けた。

「ねー、フェンリル」

「……何じゃ?」

「何でさ、このタイミングで天界に来ることになったの?」

太郎さんは、“魔法ノ書の主として認められた”と言っていた。神さまとしての素質ありなのは、皆でゲーム作りに没頭してたから判るとしても、このタイミングで主として認められた意味がわからなかった。だから、フェンリルに聞いてみる。

フェンリルは、歩くペースを保ったまま答えてくれた。

「認められたキツカケは、フェイルの処遇に関する選択じゃの」  
「選択？ …… って、『汚物は島流しだー！』って感じの外れしかないロシアンルーレット的なアレが？ ええー？」  
私の言葉に、フェンリルが喉の奥でくつくつと笑う。

「むしろそれにしたから、とは考えないんじゃないかな。 …… まあ、たとえ普通に奴の死を選んでいたらところで、お主がお主である限りは、認められていたと思うがの」

「私が私である限り？」

「そうじゃ。重大な選択というのは、どんなものであれ自身の心を変質させる。成長でも、閉ざすでも、傷つくでも、腐らせるでもな。そういうのは人としては正しいかもしれんが、神には向かん」

「ふーん」

納得しかけて、「ん？」と首を傾げる。

「それって私が成長しないって言いたい？」

「 …… チハル、それは被害妄想というものじゃ」

「ああ、うん …… まあいいや」

最初の間が気になるとか、どう聞いても誤魔化しだとか、色々突っ込みたくもあつたのだが、深入りしてダメージを負うのは自分なので、これ以上の追求はやめた。いや、あんまり成長してないのは自覚してるけどさ ……。

「と、こんな話をしておつたら、ようやく入り口に着いたぞ」

「えっ？」

立ち止まるフェンリルに、私は辺りを見回す。広がる白に、まっ

たくの変化はない。太郎さんの部屋はまだ目の前に白いドアがあったから、違いは目に見えたのだけれど。

首をしきりに傾げる私に、フェンリルが笑う。

「まあ、判らんだろうの。チハル、潰されたくなければ、目をつむっておれ」

「あ、うん」

フェンリルに言われて、目をつむる。

ここに来る時と同じように、瞼越しにも感じる強烈な光に私は包まれた。

天界から帰ってきて一番最初に目に入ったのは、ルナさんの鬼気迫る表情だった。思わず、ひいひいと後ずさってしまう。ルナさんは、ずずい、と私に詰め寄ってきた。

「チハル！」

「は、はい！」

「どうしてチハルは、いつも、いつも……!!」

それ以上、言葉にならない様子の彼女に、がしりと両肩を掴まれた。必死さが滲む表情に、私は思わずバツが悪くなって、目を背ける。

考えてみれば、彼女にはいつも心配をかけている気がする。倒れたり刺されたり消えたり。そんなことばかりしていれば、心配をか

けるのも当然だった。

慣れるという選択肢もあるが、ルナさんにそれを求めるのは酷だろう。奈津たちなら「あ、おかえりー」とか言ってくれそうだが。

「心配させないでくれ……」

「ええと……善処します」

今回のようなのは不可抗力なので何とも言えないが、今度からは気をつけようと思う。そもそも次の機会があるかどうか謎だが。

ルナさんは私の言葉を聞き冷静になったのか、すつと肩から手を放す。そして、ぼつりと言った。

「……そもそも、怒る権利は私には無かったな。遠因は私にあるのだから」

「いや、そんなことは……」

ぶつちやけ無いとは言い切れなかった。

「ま、まあ、それはともかく。そろそろ城下に戻りませんか？　みんなに、魔物の処理を任せてきちゃったし」

「いや、私はその前に父上たちを助けてこよう。それに、城の者たちも起こしてやらねばならんしな」

「あ、そっか。じゃあここでいったん別れましょうか……っていや、ちよつとその前に聞いておきます」

「何だ？」

ルナさんが首を傾げた。私は真剣な表情で言う。

「どこまで、やっておいてほしいですか？」



私の問いかけに、ルナさんが私と同じようにすつと表情を引き締めた。一度瞼を閉じて息を吐いたかと思うと、数秒の後に目を開く。

「いや、何もしくなくていい。そのまま弟子たちを連れて、帰ってくれ。今回は本当に助かった」

「……わかりました」

私は薄い笑みを浮かべて、こくりと頷いた。

流石に、そこまで何もかもを任されていたら、友情よりも面倒という単語が頭に浮かぶ気がしたから。ルナさんがそう答えてくれて、私は妙にホッとしてしまった。

……ってというか弟子って何の話だ？ クオくん？

「なら、私達はもう帰りますね。あ、判っているかもしれないませんが、魔物の死体は早めに片付けた方が。放っておけば、そこから疫病が発生するかもしれませんし」

「ああ、そうだな。最優先事項にする」

「じゃあ、ルナさん。私たちはこれで。またその内、会いましょう」「チハル、本当に助かった。ありがとう」

ルナさんの言葉を聞くか聞かないかのタイミングで、私はそこから転移した。

さて、とりあえず皆に連絡して、クォーターに帰りますか。

数百人の精霊を連れて、私たちは城に帰還する。色々あって疲れ  
たー！ と身体を伸ばしていたら、私が名前を付けた精霊の一人で  
あるモノがこちらに近付いてきた。彼は、妙に生き生きと輝いた目  
をしている。

「なあ、チハル！ チハル！ 今日のすっげー楽しかったんだぜ！  
またやる！？」

またやる、とかそんなキラキラした瞳で言われても。今日みたい  
なのは、もうこれきりだと思っただ。

……っっていうか精霊、ずいぶんとタフだな。私は慣れたこととは  
言え、あっちこっち血まみれだったのに。

あの冬香でさえ、遠目からでもグロッキー気味なのが見て取れる。  
亜紀は自分で言ったとおり、平気そうだ。奈津はと言えば、魔物に  
は絶対に近付かない指揮官役を貫いていたらしく、存外に平気そう  
だった。それでも顔は青いが。

半ば精霊の言葉に呆れていると、少し青ざめた奈津がこちらに寄  
ってくる。

「でも確かに、襲撃イベントみたいのだったら面白そう。それなら  
私でも普通に楽しめるし」

「襲撃イベント？」

「うん。襲撃イベント」

個人的にはあまり聞き覚えのない言葉だったが、恐らく字面の通  
りなのだろう。大量、もしくは強い魔物が街を襲って、プレイヤー  
が街を防衛するとか、たぶんそんなイベント。

「んー、じゃあさ、今日のお詫びってことで、やってみよっか？」  
「あれ、出来るの？ この世界の魔物って街に入れないよね？ あと、街も壊れそうだし」

「魔物はどうにでもなるよ。でも、街は確かに壊れるなあ」  
元から、この世界の魔物は私が作ったわけだし。しかし後者はどうしたのか。保護魔法をかけてもいいのだが、破壊されない街というのもつまらない。そんな街では、防衛する意味がなくなってしまう。

「イベント用の都市でも作るっか？ どの国にも属していない中立都市みたいな位置づけで」

言えば、奈津はぱつと表情を輝かせる。

「え、本当！？ 面白そうだし、ちい、やろうよー！ 今日から告知して、んーっと、街を作らなきゃいけないから……一ヶ月後とか！ その頃にはテスター後期組も落ち着いているだろうしさー」

「うんうん、いいよー！ って、ん？ 一ヶ月後？」

何かあったような、と頭の隅で何か引掛かり、一瞬停止する。が、そのことにメモリを回す前に、後ろから声が聞こえてきた。

「と、二人は私達のいないところでとんでもなく仕事を増やすのよねえ、亜紀」

「二人とも酷いよねー、冬香ちゃん」

私と奈津は揃って振り向く。

満面の笑顔の二人が、そこには居た。

その後、私たちの姿を見たものは大勢いましたが、正直見て見ぬふりをしてほしかったです。

【世界初VRMMO】クォーターズ・オンラインスレpart7  
【テスト】

558 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 00:48:02 ID: Taz19ce

トラブルとか初めてだよな  
なんか正直びつくりした  
負担かけたくないから落ちたわ

559 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 00:50:53 ID: X209axe

うん、俺もビックリしたわ  
お気に住人が居なくなっただから、ログアウトしてきた

561 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 00:53:12 ID: mtdzkzXJ

おい四季早く復活させるよksg!!!!!  
俺はフィーナちゃんとキャッキャウフフすんだ!!!!

563 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 00:57:58 ID: moaj99yh

落ち着けよ...

564 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(±) 00:59:21 ID: Ejce3Sc1

こういう基地の相手もしくちやいけないんだから大変だよな

565 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(±) 01:01:34 ID: Il1Oex2m  
ファイナって？

566 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(±) 01:04:58 ID: Taz19ce  
<<565

夏国の酒場で働いてる出稼ぎ妖精だな  
たしか男の娘

567 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(±) 01:06:00 ID: mtdzkzXJ  
e?

568 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(±) 01:06:19 ID: mtdzkzXJ  
<<566

ちよ、ちよttまで、男とかそんあwけねえだろ

569 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01

(土) 01:13:48 ID: Taz19cee  
<<568  
いや、ガチ。本人言っただし

570 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 01:14:20 ID: mtdzkzXJ  
<<569  
ちよえ?ええ?ええええ  
は、ちよくあ wse drftgyふじこIrp:,:@:

571 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 01:16:47 ID: Ejce3ScI  
<<570  
ぢまあ wwww

572 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 01:19:51 ID: Taz19cee  
<<570  
ドンマイw

573 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 01:21:53 ID: mtdzkzXJ  
包丁持ってうわああああああのAA

580 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01

(土) 01:40:31 ID: A99ce21h

結構長くかかるなーって思ってログアウトしてきた

でもよくよく考えたら、トラブル発生してからまだそんなに全然時間経ってねえな

時間差あるからすげー麻痺する

582 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01

(土) 01:45:28 ID: Iuce0t5x

<<580

わかるわ

なんか時間の有効活用感がばない

583 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01

(土) 01:52:31 ID: Xy12ab09

<<582

参考書とか持っていきたい

そういうサービス初めてくれればいいのに

スキャンデータ持込みたいな

585 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01

(土) 01:54:49 ID: 7Gd2ialx

<<583

いいなーそれ

月額高くて、それならいくらでも人きそうだし

儲かってるうちは続くだろうから、利益考えて長く続けてほしい



591 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 02:11:48 ID: 3C9dkawe  
あ、HP更新されてる。

593 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 02:13:11 ID: C39uikK0  
ホントだ。今日のトラブルのお詫びだな

594 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 02:14:22 ID: 3C9dkawe  
今日のお詫びに襲撃イベント開催だって。

597 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 02:17:41 ID: I11Oex2m  
律儀だな四季

600 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 02:22:19 ID: U5yawww  
よっしゃ俺も参加する  
火事場泥棒で！

601 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 02:25:16 ID: Taz19ce  
またお前か  
戦えwwww

602 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 02:28:02 ID: U s y a w w w w  
俺の戦場はそこじゃないんだ・・・

604 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 02:31:27 ID: 3 c O p k i k i  
<<602

そこだよwww間違いないそこだよwww  
救えよクォーターの勇者(笑)だろ

606 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 02:38:46 ID: U s y a w w w w  
巢食ってるじゃないか(キリッ)

609 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 02:43:20 ID: T a z 1 9 c e e  
うげえwww

612 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 02:48:31 ID: 1 O u 4 c j e 2  
また牢屋ぶちこまれればいいのにw

618 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01

(土) 03:00:53 ID: X209axe  
土曜日なら俺も参加できる  
参加するぜー

622 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 03:05:42 ID: Xy12abo9  
平日でも参加するぜー

625 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 03:11:08 ID: xlettuce  
<<622

にくいわー俺平日とかマジ無理だ  
あーもう仕事やめてええええええ明日も出勤だよばーか  
ほんと、ブラック乙って感じ  
休みをおくれええええええんだあああああ  
つ

628 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 03:14:21 ID: X209axe  
<<625

そこまでやったなら最後まで頑張ってくれw

629 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 03:15:25 ID: Pi3Ewmxu  
<<625  
?わからん

631 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 03:18:38 ID: X209axe  
<<629

な

な

め

632 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 03:22:11 ID: Pi3Ewmxu  
<<631

ああ、なるほど

635 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 03:31:57 ID: FUYUMOE S  
イベントとかいらね

お詫びは「冬の太股ぺろぺろしていい権」でいいよ

637 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 03:37:42 ID: Ax5eum80  
<<635

つまり野郎と関節キスがしたいと

638 : ななしはもうしんでいる : 201X/XX/01  
(土) 03:39:25 ID: FUYUMOE S



とはいえ性的なものが含まれた話になると、親しくなったハルの顔がちらついて、素直に楽しめないのだが。

「よし、時間経ったし行くかな」

青年はPCを休止させると、ヘッドセットを身に着ける。

今日は襲撃イベントのためにレベル上げに集中するか、などと考えながら、ベッドに身を沈めた。

一ヶ月というのは、本当にあっという間で。テスター後期組の対応や、イベントのための街づくり、その他雑多な諸々をひいこら言いつつ今日までやってきた。

まあ、問題はまだまだ多いけれど、何だかんだみんな楽しそうに嬉しい。

テスター後期組と前期組の間で、リソースの奪い合い等で軋轢なんかも生まれるかな、って思ったんだけど、思ったよりそうでもなかった。確かに、険悪なムードになることもあるのだが、むしろ精霊が仲を取り持って、プレイヤー同士で仲良くなることも多いみたいだ。

…… エルフさんと触手さんが出会った時は、正直この世界はもう駄目だと思った。なんなのあの二人。なんでエルフと触手の純愛という題材で半日語れるの？

あ、ちなみに触手さんは、水棲系の海人族という種族をプレイヤーキャラクターに選んだ女性だ。何でその種族かって？ …… イソギンチャクになりたかったそうだし、触手的な意味で。好みは人それぞれとは言え、予想外すぎだった。

「さて、そろそろ準備は終わりかしら」

フユの言葉に、みんなで頷く。今日は襲撃イベント実施の日なので、さつきまで色々準備していたのだった。とはいえ、襲撃イベントは事前準備の方が多く、本日準備することは殆どなかったと言

っていいのだけど。

中立都市・クォーフエン。それがイベント用に作った都市の名前だ。とはいえ、イベント時だけでなく、常時、プレイヤー同士の交流のために解放している。今まで国を越えた交流を行う場は殆どなかったから、逆に丁度良かったとも言える。

ちなみに、見れば判ると思うのだが、名前はクオくんとフェンリルから取った。彼ら二人のキャラが、この都市を治めているという設定である。

でも、本日のプレイヤーの頑張りによっては、“崩壊都市”とかに名前が変わるかもしれない。どうなるか、今から楽しみだ。

「あとはイベントの開始を告知して、始めればいいだけかな」  
彼女の言葉に、私が代表して答える。

各地のテレポーターから中立都市へ転移出来るようにしてあるし、精霊たちにイベントへの誘導の手順も伝えた。あとはノリに任せて突っ走るだけ。

と、いうわけで。

私は本日最後の大仕事に行こうかな。

「じゃあ、ちょっと天界に行ってくるね。イベント開始時刻までには戻ってくるよ」

ひよい、と手を上げて三人に言う。みんなは真剣な表情で頷いた。

彼女たちには、魔法ノ書がどうたらこうたら、という話を包み隠さず言っていた。ゲーム作りに関わることは報告しあうことにな



っているし、私一人じゃ結論なんか出せないと思ったから。

ちなみにそのときの反応は、『超展開乙』『わー、神さまって本当に居るんだ』『また良く判らないところに飛んだわね……』と言った感じ。すみません良く判らない天界（展開）に巻き込まれて。

「じゃあフェンリル、連れてって」  
「わかったぞ」

私の足元にいたフェンリルが応え、フェンリル（大）に変化する。そういえば何でいちいち変身するの？ と聞いたら、大きい方は正装、小さい方は略装みたいなものと返された。へー。

「行つてきます！」

「ちい頑張れー」

「行つてらっしゃい！」

「いい結果を期待してるわ」

三人が見送ってくれて、私は手をぶんぶんと振りながら白い光に包まれる。

そうして、予想対集（冬香製作）をポケットに、天界へと転移した。

太郎さんの執務室。私と彼は、机を挟んで向き合っている。彼は優しい表情で口を開いた。

「じゃあ、答えを聞こうかな。千春さん」

「あの、その前に……みんなと相談して、いくつか疑問が出てきたので、聞いてもいいですか？」

「ん、いいよ。納得してから決めてほしいしね」

彼の言葉に、ホッとする。私はポケットの辺りに手を当てて、一度深呼吸した。

「じゃあ、まずは。魔法ノ書の権利を放棄、もしくは譲渡したとき、書で作ったマジックアイテムはどうなりますか？」

「効果はなくならないよ。ただ、魔法ノ書がなくなれば、何かあった時に修理も改造も出来なくなるだろうけどね」

正直、その答えに心から安心した。

最悪でも、今の世界を維持し続けることは可能らしい。皆で考えた結論は、この条件が必須だったのでこっそり安堵する。

最終的に、皆で話し合っ出て出した答えは、「書の力を半分ほど移すことに成功したマジックアイテムを持って帰る」だ。半分の力があれば、あれ以上の改造は難しくとも、修理と増産くらいは出来る。書の守護獣であるフェンリルも、次に召喚されるまではどこにいてもいらしいので、しばらくは（もしかしたら私が生きている内はずっと）一緒に居られる、ということも確認してあった。

なので、ここから先の問いは、これ以上の最善を求められないか、という問いかけになる。

「じゃあ次。魔法ノ書を誰かに譲渡したら、前の持ち主の情報はどう

「うなりますか？」

「消えてしまつよ、記録にも残らない」

「じゃあ、権利を誰かに移してすぐに戻す、を繰り返せば、とりあえずは所持し続けていられる、ということでもいいんでしょうか？」

この案に対して、粉飾決算みたいね、と冬香は呟いていたっけ。

最近、ゲーム関係で会計にも詳しくなってきた彼女である。すみません任せっきりで。

「出来ないことはないよ。でも、神様の素質がない人間には譲渡できないし、それに、別の誰かの手に渡った時点で、上巻と下巻は分離して、下巻がどこかに行ってしまうんだ。一々探しにいくならそれでもいいけど、それは難しいんじゃないかな」

「あー、確かに面倒ですな……」

太郎さんはこれまた真面目に答えてくれる。義務を放棄して権利だけ使いますよ、と言っているに等しいのに、ずいぶん寛大だと思つた。とことん神さまらしくない太郎さんである。

私はそれから、彼に質問を続けていった。『神様はすぐに辞められますか』『神様の仕事ってやらなきゃ駄目ですか』『等々、自らに都合の良い問いかけは続いていく。』

問が十を越えた辺りで、最初はただ微笑んでいた太郎さんも、苦笑以外の表情を取らなくなつていった。

「ほんつとくに神様やりたくないんだねえ、千春さんってば」

呆れたように言われ、気まずくなつて頬を掻く。

「いや、やりたくないというか……いや、取り繕うのはやめます。なりたくありません。神様とかまっぴらごめんです。“天界の公務員”という間抜けな響きには正直ちょっと惹かれましたが、でもやっぱり嫌です」

「どうして？ 神様みたいなことしてたのに」

ゲームのことを言われていると悟り、口籠る。確かに、クォーター世界作りは神様みただって思ったけど。でも、それとこれとは、違う。

「何が違うのかな。ゲームを作るのと、世界を作るの。やっていることは、同じじゃない？」

彼の言うとおり、似ている。とても似てはいるのだが、確実に違うと思う。……でも、何が違うのだろうか？

みんなで考えた「予想対集」には無かった質問に、私はぐちゃぐちゃと整理できない心情のまま、口を開いた。

「ええと……あ、友達がいません。それに、目標がありません。つまりまとめると、……楽しくありません！」

口にしてみて、自分自身、気付く。確かに、そうだと思った。

ゲーム作りは、四季のみんなで作っているからこそ、みんなに楽しんで貰うという目標があるからこそ、楽しいし、面白いのだ。

「世界を作ること」が楽しいんじゃないかって、“みんなで作ること”が楽しいんです！」

確かに世界を作るのは楽しいと思ったけど、そうじゃなくて、みんなゲームで1つのことをやり遂げようとするのが楽しいんだ。

だから自分は、神様になど向いていないと思う。世界を作ること自体を、きつと心から面白いとは思えないから。

「……ああ、そうか。なるほどね。僕とはそこが違うのか」  
太郎さんは、得心がいったように頷く。うんうんと首肯を繰り返す彼に、私は首を傾げた。

「僕の際は、拒否権なんてなかったんだけどね。それでも、神様になつてよかつたって思ってる。だって、世界を作るのって本当に楽しいんだもの。作った世界はどんどんと変化して、人の数だけドラマが増えていって、広がって、絡まって、大きくなって……ああ、話していたら、またやりたくなってきた」

太郎さんは、うっとりしたような笑みを浮かべたが、すぐにその表情を変化させる。彼の表情は、どこか寂しそうに見えた。

「だから、千春さんもすぐ食いつくと思った。君も、世界を作るのが楽しいって言っていたから。……でも、僕のそれとは、全然違うんだね」

その言葉に、しっかりと頷く。私のこたえに、仕方がないと諦めているような、そんな苦笑を彼は浮かべた。

「うん、それだったら、千春さんは神様になんか、ならない方がいいのかもね」

「『神様になんか』なんて、そんなこと言っていいいんですか？ 太郎さんも神様なんですよね？」

「あはは、僕はただの雇われ下級神だからね。下っ端もいいところだから、無理矢理勧誘なんてしないよ」

神様にも位があるんだ、と私はそのとき初めて知った。なんか冴

えない公務員つぷりに磨きがかかったな……。  
苦笑していると、太郎さんがこほん、と1つ咳払いする。

「千春さん。そろそろ、質問は終わりでいいかな？」

「あ、えつと……はい」

「ならそろそろ、結論を出してもらおう」

太郎さんが言う。私は一度頷いて、口を開いた。

「私、神様なんかにはなりたくないんです」

「うん、じゃあ、魔法ノ書は手放すってことでいいのかな？」

その問いに、一瞬、止まる。

作つてあるマジックアイテムもあるし、神さまになりたくない以上は、そうするのが一番だって皆で決めた。

だから、問いかけに頷こうとして、しかし私は不意に思いついてしまった。

「あの……魔法ノ書の力って、貰えませんか？」

「え？ ……ぶはっ！ あはっ、ははははははっ……げほっ、ごほっ  
！」

吹き出された。大笑いされて、しかもむせられた。

「げほっ……待って待って、千春さん、もう一回言つて？」

「だから、魔法ノ書の手だけ、下さい。別に、魔法ノ書を持ち続けるのに、神さまになるのって必須じゃないんですよね？ 現に、小細工はアリみたいです。だから、義務はまったく要らないので、力だけほしいなーって」

「くっ、あははっ、僕そんなこと言われたの初めてだよ、初めて！  
聞き間違いじゃなかったよ！」

ひたすらに笑う彼。お腹を抱えて机をバンバンと叩く彼に、私は視線を逸らした。いや、そこまで笑わなくても……。

「大抵は、素直に書を返したり、力を手放したくないから神様になつたり、マジックアイテム作ってそれで我慢したり、譲渡を繰り返して頑張ったり裏切られたり、俺は大丈夫だって言って結局死んじやつたり、そんなのばっかりなのに……！ 普通、そんな直接聞く！？ あはははっ！」

彼曰く、この場において、魔法ノ書の主となった者たちの反応は大体三つに分かれるらしい。

1つ目は、神様になるのを受け入れること。

2つ目は、魔法ノ書を返却すること。

3つ目は、小細工でどうにか魔法ノ書を、もしくはそれに準じた力を持ち続けようとする。皆で考えたのはこれだ。

私のように、ここまで直接的に聞かれたのは初めて、だとか。

ひーひーと息を切らす彼は、机に伏せて顔を隠しながら言う。

「いや、ある意味すごいよ、千春さん……ぶっ……良くそんなこと言えたねえ？ 普通なら、選択肢にすら挙がらないと思うよ、それ。だって何の代償もなく、力だけを貰えると思わないでしょう」

「いや、それはそうですね……でも、太郎さんなら意外とOKしてくれそうだって。神様の職務を心から全うしているわけでも無さそうでしたから、こんなこと言っても怒らないだろうとも思いました。だから、駄目元で言ってみるだけ言ってみようかと」

「駄目元……！ 曲がりなりに神様に駄目元……！」

またしてもむせて咳き込む彼に、私は居た堪れなくなつた。  
そこまで変な選択肢でも無いような気がするけどなあ。だって一番素直で我欲的な答えじゃないか。力だけくださーい、なんて。だからこそ、誰も言わないのかもしれないけど。

「あー、何かもう楽しくなってきた。魔法でゲームって聞いた時也大笑いしたものだけど……千春さんってさ、変わってるって言われ  
ない？」

「ああ、よく言われます……」

色んな人に言われすぎて、もう既に諦めの境地だった。うーん、  
そこまで変じゃない、というか普通だと思っただけだなあ。

「千春さんがどこまで行くのか、僕としても非常に楽しみになって  
きた。うん、あげるよ、力だけ。勿論、神様になんてならなくてい  
い」

「え、本当ですか？　というか、そんなぼんぼんと与えていいもん  
なんですか？」

まさか了承されるとは思わなかった。普通に言うだけ言ってみただけなので、私は驚く。太郎さんはようやく笑いがおさまったのか、  
椅子の上で姿勢を正した。

「魔法ノ書くらいのは、加護として与えてもいいことになってる  
んだ。まあ、与える相手は選ばないと世界の管理が面倒になってしま  
うけど、千春さんなら大丈夫でしょ。あ、そうだ。その代わりに、  
1つ頼んでもいいかな？」

「え、私に出来ることなら」

神様関係の話だと本末転倒なので、そう予防線を張っておく。



彼はにっこりと笑った。

「僕も、千春さんの世界で遊んでいいかな？ 君の作った世界は、すごく楽しそうだ」

予想外の言葉に一瞬戸惑って、すぐに笑顔で頷く。

「本当なら1000円かかるんですけど、友情料金で口八でいいですよー？」

「あつははは、それは嬉しいね」

冗談めかした言葉に、太郎さんも和やかに笑った。

「千春さん、ちょっと魔法ノ書を貸して？」

「あ、はい」

プレスレットに変化させていた魔法ノ書を、彼に手渡す。途端、ふわ、と彼の手から浮き上がったと思うと、元の本の姿に戻っていた。

「うん、流石に良く使われてるみたいだね」

太郎さんは言いながら、ぱちんと指を鳴らす。一瞬、魔法ノ書が眩い光を放ったのだが、光が収まったとき、特に変化らしい変化は見られなかった。

「はい、これで大丈夫だよ。余計な機能はなくなったから、持ち続けていても大丈夫。千春さんにあげるね」

「あ、どうも……」

ふわ、と手の内に収まる。何が変わったのかは判らなかったが、とりあえずいつものようにブレスレットに変形させて身につけた。

「よし、じゃあそろそろ時間だし、行こうか？」

「え、どこにですか？」

その言葉に、私は首を傾げながら聞く。

「どこについて、今日はイベントでしょう？」

「えっ、太郎さん今日から参加するつもりですか！？」

「だって、イベントなんて楽しそうなもの、参加しなきゃ駄目ですよ」

そう言って執務室を出る彼の背を、私は絶句しながら追うのだった。

「ちょっと、左側弾幕薄いよ、何やってんの！」

「うつせえミコ厨、黙って魔法撃ってる！」

「ここにいる八割くらいはミコ厨だろ、募集的に考え……って、うぎゃあああああ！？」

「うわあああ衛生兵っ、衛生へええええいっ！」

「ああもう崩れたじゃねえか、誰かそっち支えてやれ！」

あちこちから聞こえてくるそんな混乱した騒ぎに、青年は大笑いしながら剣を振るう。イベント開始から30分、中立都市は色んな意味で大賑わいだっただ。悲鳴に罵倒に咆哮に。時たま助けを求める声がぶちつと魔物に潰されつつも、イベントは進んでいく。

ちなみに今回のイベントでは、デスペナルティがかなり緩和されている。いつもは「ファンタジーなもう1つの世界で楽しもう」がコンセプトなために、あえて厳しく設定されているのだが、本日のイベントはどう考えても死に戻り前提だからだ。

「たああああッ！」

青年や、近接系のプレイヤーたちは守りの隙間をぬって、敵に突っ込んでいく。武器を振り回し、何体かの魔物をワンキルしたものの、焼け石に水といった表現がピッタリな様相だった。

それでも、諦めるとか、絶望とか、そんなものの前に、楽しさがある。今まで、住民とのやり取りが殆どだった青年だが、プレイヤー同士でこういうのもいいなあ、なんて頭の端で思うのだった。

「おおい、今から大型魔法ぶっ放すぞー！ 巻き込まれないように

なー！」

遠くからそんな声が聞こえてきて、青年はぎよつと肩を揺らす。慌てて近くの店に避難した。とは言え、店も破壊可能なので、ここにいっても巻き込まれる可能性はゼロではないが、流石に建物を巻き込むほどの魔法は使用しないはずだ。守る対象をぶっ壊してどうする、という話になってしまう。

次の瞬間、店の外から聞こえてきた爆発音に、派手だなあと苦笑する青年。外をうかがうと、魔物だらけだった一画が空白になっていて、思わず「おおお」と感嘆の声を上げた。

「もう大型魔法は無理！ 回復アイテム切れた。つか、やっぱ詠唱時間なげーし、めんどい」

「そうか、ならお前はもう用済みだ」

「おお、すまん、俺が守れるのは二人までなんだ」

「安らかに逝ってくれ。恨むならこいつら恨めよ。な？」

「ひでえ！ ほんツとひでえお前ら！」

種族混成でじゃれ合うプレイヤーたちのやり取りに、青年は堪えきれない笑いで頬を緩めつつ剣を振るう。三体目を屠ったところで、右方から声が聞こえてきた。

「シユンおにーさん、後ろっす！」

青年はぎよつとして振り返り、そのまま横薙ぎに剣を振るう。タミングが良かったのか、後ろから襲ってきていた魔物にクリティカルヒットし、事なきを得る青年だった。

青年はほつと息を吐いてから、声の方へと向き直る。そこにはペンタがいた。

「おにーさん、危なかったすねー」

「あれ、ペンタも来たんだ？」

「『旅人さんだけにあの街を守らせるなんて駄目だ、俺たちも頑張

って対抗するぞ！」……ってというのが表向きっすね。実際を言うと、魔物数を考えると、旅人さんだけじゃ到底無理っすから、ウチらも順次投入されてるっただけっす」

実も蓋も無い言葉に、青年は思わず笑った。

「でもペンタって戦えないんじゃないかなかったか？」

「戦えないっすよー。でも……」

ひよい、と手の上にアイテムが現れる。回復薬だった。渡されたので、素直に受け取る青年。

「ウチは薬屋っすからね、協力くらいは出来るっす。あと……」

再び、手の上にアイテムが現れる。初めて見る物体に、青年は首を傾げる。

ペンタは青年のしている前で、それを思い切り投げた。少しして辺りに響く、ぱーん、という破裂音。

「こつこつなのでサポート出来るっす」

「おおっ……」

爆弾か。そついえばそんなアイテムもあったような、なんて青年は思い出す。アイテムを使うより自分で殴ったほうが早いし強いので、使う機会もなく忘れていた。

「とつことつで、とりあえずMP切れの旅人さんのとつこ、回つてくるっす。シュンおにーさんも頑張るっすよー！」

「おーっ。ペンタもなー」

手を振つて別れる。

この辺りも魔物が少なくなつてきたようだし、別の区画に行つてみるか。青年は内心でひとりごちて、移動を始めた。

「俺、シーフなんだって！ 盗賊なんだって！ ちょ、むりむりむりむり」

「うっせー、名前を『どろぼう』にされたくなきゃ、キリキリ働け！ つーかオメー、こんな時に火事場泥棒とか恥ずかしくねえのかっ！」

「いや、別に、ってうおっ、やべ、掠っただけなのにHP減りまくりいうおおおおあああ！？」

「っだー、役にたたねえ奴！ 盾にもなんねーの！」

住人とプレイヤーのそんなやり取りを背に、青年は魔物の近くへと向かう。この辺りの区画は手が足りないのか、まだまだ魔物に溢れていた。

青年は、魔物に突撃するか、補助に回るか一瞬迷った後、崩れそうになっていたプレイヤーの補助に回ることにした。ちくちくと守りの隙間から魔物を倒していれば、敵の頭上に魔法が降り注ぐ。どうやら魔法使いの集団が到着したらしい。これでこの辺りもじきに制圧が完了するだろう。ほっと息を吐く青年だった。

「ありがとうございます」

補助に回った男性プレイヤーに礼を言われ、青年は照れながらも頷く。そのままそこから去ろうと踵を返した瞬間、声をかけられた。

「あの、お願いがあるんですけど」

「ん、何ですか？」

「僕と一緒に回って貰えませんか？ 実は、色々あって今日初めてこっちに来たので、この都市の地理が良く判ってないんですよ」

意外な言葉に、青年は目を丸くする。テスター後期組のログインから二週間ほどが経っている今、イベントがあるということもあっ

て、大抵のプレイヤーがこの都市に足を運んでいるはずなのだが。そんな疑問を感じたものの、初心者には優しくしなければ、と青年は笑う。

「いいですよ。俺はシュンって言います」  
男に、手を差し出す。

「僕はタローです。よろしくお願いしますね、シュン」  
タローと名乗った黒髪の男は、そう言って嬉しそうに青年の手を取った。

都市内を回る、二人のプレイヤー。二人は、補助に回ったり、敵を倒したり、精霊が回復アイテムを配る手伝いをしたり、その場その場での最善を尽くしていく。

「ふふふ……！ やるわねアナタたち！」  
そんな中、不意に女の声が響いた。何かかと思い、声の方へと視線を向けると、そこには白い狼のような大きい魔物と、その上に仁王立ちする少女がいた。

「我が名はスプリンガー！」  
仮面舞踏会のような、ド派手な蝶々の仮面をつけた少女　スプリンガーは高らかな声で言う。

しかしどう見てもハルだった。青年は思わず、ぶほつと吹き出す。隣にいたタローも、一目見た瞬間に吹き出し、ひくひくと肩を揺らした。

周囲にいたプレイヤーたちも、一目で誰だか判ったのか、にやに

やと締まりのない表情をしている。一瞬の間に、空気が緩みきつたものの、彼女はそれを引き締めるように宣言した。

「ふふふ、ちびちびと魔物を差し向けるのはもう飽きたわ！ 今からこの子がアナタたちのお相手よ！」

イベント最後のラスボス戦ということか。その場にいた全員がそう悟る。スプリンガー（どう見てもハル）は白い獣からひょいと飛び降りると、高笑いしながら空を飛んで去っていった。

「あー、面白い……」

いまだ肩を揺らし続けるタローに、青年は同意して頷く。相変わらずハルはハルだなあ、なんて妙にほのぼのした青年だった。

「シユン、行きますか？」

暴れ出した白い獣を指差して、タローが言う。これで最後というならば、目一杯暴れるしかないだろう。

「行こう！」

二人は、無邪気な、満面の笑顔で駆け出すのだった。



## エピソード

「お疲れー！」

イベントを終えた私たちは、いつものように城の一室に集まっていた。元の世界から持ち込んだ、打ち上げ用のジュースで乾杯を交わす。

「ふふ、お疲れ」

「いやあ、盛り上がったねー」

「そうだね。面白かった！」

口々に言うみんなに、私もうんうんと頷く。私は黒幕役だったのだが、かなり楽しかった。というか、未だにテンション高すぎてやばい。口元にやにやすする。

ちなみにナツとアキ、それにクオくんはプレイヤーに混ざって戦いながらこっそり誘導する役、フユはプレイヤーの分散具合や動きを見て三人に指示を出す裏方役、フェンリルは最後の大ボス役だった。

「こういうイベント、定期的にやれたらいいねー」

ナツの言葉に、ねー、と同意する。準備は大変だが、やっぱりいつもと熱気が違うと思う。精霊たちも、いつも以上に騒がしく、楽しそうだった。

また何か企画しようね、とみんなで言い合う。「仕事が増える一方ね」なんてフユはぼやいていたけれど、満更でもない様子だった。

「ねえねえ、ちい？」

「おー？」

にやにやがおさまらず、一人ポテチをつまんでいれば、奈津に後ろからのしかかられた。首元に回された腕に、身を竦めながら「なに？」と応える。

「魔法ノ書、良かったねー」

言われて、笑顔で頷いた。そつとブレスレットになっている魔法ノ書に手を重ねる。いやまさか、この瞬間も保持し続けていられるとは、自分自身思っていなかった。太郎さんに感謝である。

「うん、本当良かった」

「一ヶ月、皆で一生懸命考えたけど、あんまりいい案は思いつかなかったもんね」

「そうね、思いついたのは小細工くらい。まさか素直に言って、素直に貰えるなんて、誰が思うのよ」

「ちいは思ったみたいだよ？」

奈津の言葉に、あははは、と上っ面な笑いを返す。咄嗟の思いつきというか、何というか。言ってみたら何とかかなっちゃった、みたいな。

……だいたいそんなノリでいつも生きてます。魔法ノ書を手に入れたときも、ゲームをやるうと言った時も、大体そんな感じ。いつまでもコレは変わらないだろうと、自分自身思う。

何げなく、魔法ノ書を本の姿に戻す。その表紙を見て、私は「あつ」と声を上げていた。

「どしたの？」

「いや、太郎さんに貰う時に光ってたから、何か変わったのかな？  
とは思ってたんだけど……」

奈津に表紙を見せる。そこには『魔法“の”書』の文字が。

「うっわ、地味っ！」

「なになに？ あ、ほんとだ。地味だけど変わってる！」

「地味ね……」

地味地味と容赦ない三人に、フェンリルがひっそりと「今頃泣いてそうじゃの……」とか呟いていた。太郎さんらしいと言えばらしいんだけど、確かに物凄く地味。

どうでもよかった  
閑話休題。

「都市の破壊具合は、それほどでもなかったわよね。攻めの手が緩かったかしら？」

「復興クエストもたくさん用意したんだけどね？ あんまり意味が無かったかも」

「勿体ないから、いくつかは精霊に通達しておきましょう。次はもう少し厳しくしなくちゃ」

「あはは、そうだね」

ジューズをちびちびと飲みながら、アキとフユの会話を聞く。どうやら中立都市は崩壊都市と名前を改めなくて済むようだ。

あと、別に攻めの手は緩くなかったと思います。みんな超必死だったし。秋冬コンビが相変わらず厳しすぎて生きるのが楽しい。

「次があつたらさ、今度はナツが黒幕役やろうよー？」

「えー、黒幕はいいけど、流石にハルみたいなのは恥ずかしくて無理」

「……ノリノリでやってた自分がいるんだけど」

「そこが君のいいところさ」

棒読みで肩ぽんぽんされた。しまいには泣くぞ。

「チハル。わしは、ちょっと恥ずかしかったぞ……」

フェンリルに追撃されて、正直ちよつと泣いた。

「でも、次のイベントはどうしようかしらね？ さすがに二度同じ

イベントは飽きちゃうんじゃない？」

「うん、そうだよね。……というより、次のイベントってやる暇あるかな？」

「あー、半月後には テスト終わりかー」

言いながら、ぼんやりとこれから先の予定を思い浮かべる。

テストが終わった後のことは、正直言つと、まだちゃんとは決めていない。

いや、会社興すつもりだし、本格稼働するつもりではいるのだけど、誰がそれを管理するのかとか、いつまで続けるのかとか、むしろ本格稼働などせずに、今のゆったりまったりのままでもいいんじゃないのか、とかとか。色々、皆の中で意見はあるわけで。

そんな感じで、考えなきゃいけないことは、あるにはあるのだが、とりあえずは。

「ね、ね、次のイベントやるとしたら、テスト最終日にドドンと行

「こつよ！」

「じゃあ、最後だし、闘技大会とか、魔法大会とか、そんなのどうかな？」

「あら、面白そうじゃない。強さを競ったり、魔法の美しさを競ったり……魔法で乗り越える障害競走もいいわね」

「あ、それいい！ 障害競走とか超面白そう！ 壁を壊すか飛ぶか掘るかはその人次第、みたいない！」

そんな話し合いが始まったのを横目に、ほう、と息を吐く。

しばらくは、こつやって友人同士でわいわい、騒いでやってけたらいいなあ。

魔法ノ書、あらため、魔法の書を腕に、私は想いを馳せるのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4058j/>

---

四季と魔法ノ書

2012年1月14日01時12分発行